

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第133集

弓
削
ノ
庄
遺
跡
他

東大阪市

弓削ノ庄遺跡他

大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇五年八月

財団法人

大阪府文化財センター

2005年 8 月

財団法人 大阪府文化財センター

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第133集

東大阪市

弓削ノ庄遺跡他

大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター



北から調査地をのぞむ 2004年8月撮影

巻頭図版2



亀田遺跡5調査区（北から）



出土突帯文土器深鉢

序 文

今回、財団法人大阪府文化財センターでは、大阪市の東側を南北に連絡する大阪外環状線建設予定地内で発掘調査を実施しました。大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業は、JR片町支線（現在の城東貨物線）のJR新大阪駅からJR久宝寺駅までの延長20.4kmを連続立体交差化し、複線電化・旅客線化する計画です。

本報告書の調査対象地である弓削ノ庄遺跡・亀田遺跡は、当センターが平成15年度に実施した確認調査によって新規発見された遺跡です。調査は、東大阪市南西部遺跡群（03-1）確認調査として、近鉄大阪線俊徳道駅以南の東大阪市内に合計9ヶ所のトレンチを設定し実施しました。この結果、弥生時代後期・中期の遺物が比較的集中して出土しました。

本書で報告する成果で特筆されるものは、以下のものがあります。亀田遺跡の調査では、弥生時代後期の遺構・遺物が確認され、調査区の北側では弥生時代後期から古墳時代前期と推定される水田も検出されました。この調査区では「龍」と思われる線刻が施された土器（絵画土器）が出土しております。また、弓削ノ庄遺跡の調査では、主に縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構・遺物が多数確認されました。多くのサヌカイトが出土したため周辺で石器製作を行っていた可能性も考えられます。また、弥生時代中期の方形周溝墓が1基検出されたことも新知見です。

調査地周辺では、これまで発掘調査があまりなされておらず、周知の遺跡が少ない空白地帯でした。しかし、今回の調査によって、縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代後期の集落が周辺に存在する可能性は非常に高いと考えられます。また、弥生時代中期の方形周溝墓が1基検出されたことは貴重な発見であります。今後、周辺地域の歴史的環境や性格を考察していく上で、貴重な資料を提供することができたと考えます。

最後に、調査にあたって御助力、御支援を賜った関係諸機関ならびに地元関係各位に深く謝意を表したいと思います。併せて今後とも当センターの事業に御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年8月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に伴って実施された弓削ノ庄遺跡他の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査地は大阪府東大阪市に所在し、平成15年度に当センターが実施した東大阪市南西部遺跡群（03-1）確認調査で新規に発見された弓削ノ庄遺跡（柏田本町・柏田西3丁目所在）・亀田遺跡（衣摺5・6丁目所在）の発掘調査である。その他、東大阪市南西部遺跡群（04-1）（俊徳町3丁目）で確認調査を行った。
3. 調査・遺物整理は、大阪外環状鉄道株式会社より大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる弓削ノ庄遺跡他発掘調査として平成16年4月1日～平成17年3月31日まで、大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる弓削ノ庄遺跡他遺物整理事業として平成17年4月1日～同年8月31日まで委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財センター中部調査事務所池島支所が実施した。
4. 現地での発掘調査は、平成16年4月8日～同年11月17日まで実施した。引き続き整理作業を池島支所で行い、平成17年8月31日本書の刊行をもって終了した。発掘調査および整理事業は以下の体制で実施した。

調査部長玉井 功（平成17年3月まで）、同赤木克視（平成17年4月から）、調整課長赤木克視（平成17年3月まで）、同田中和弘（平成17年4月から）、調整係長森屋直樹（平成17年3月まで）、同芝野圭之助（平成17年4月から）、主査山上 弘、中部調査事務所長小野久隆、池島支所長國乗和雄、調査係長広瀬雅信（平成17年4月から）、主任技師田中龍男、技師島崎久恵、専門調査員瀧口洋美（平成17年3月まで）・鬼頭 彰

〔写真〕中部調査事務所主査片山彰一、調査補助員水取康人、米子千智
5. 現地調査の実施および整理作業にあたっては、関係諸機関、地元関係各位をはじめ、多くの方々から御指導ならびに御協力を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）

山下廣義・藤田鉄司（大阪外環状鉄道株式会社）、橋本高明・大野 薫（大阪府教育委員会）、松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）、奥田 尚（橿原考古学研究所共同研究員）、安在皓（国立歴史民俗博物館）、千 羨幸（立命館大学大学院）
6. 現地調査の実施および整理作業にあたっては、当センター職員の多くの協力、教示を得た。

秋山浩三、三好孝一、本間元樹、亀井 聡、新海正博、廣瀬時習、市村慎太郎（当センター職員）、玉西康人、植村弘子、山本由紀子、松本章子、谷川妙子、田中麻衣、尾越操子、松下知代（当センター非常勤職員）
7. 今回の調査では、花粉・珪藻化石分析を実施した。分析はパリノ・サーヴェイ株式会社が実施した。その結果は本書第4章に掲載した。
8. 本書の執筆・編集は島崎・田中（龍）・鬼頭が共同で担当した。
9. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

- 1、本書に掲載した遺構図、その他すべての図の座標は世界測地系（測地成果2000）の国土座標の第VI系に準拠する。図中の座標値はmをすべて省略した。また、方位はすべて座標北である。
- 2、本書で用いる標高は全て東京湾平均海面である。
- 3、土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
- 4、調査や遺物整理については、当センターの『遺跡調査基本マニュアル〔暫定版〕』（2003）に準拠して行った。地区割りの第I区画・第II区画はG6-13、H6-1になる。
- 5、本書では、本文、挿図、写真図版の遺構番号・遺物番号は全て一致する。
- 6、遺構番号は、各調査区で遺構の種類にかかわらず、1から付しており、番号の前に調査区番号をハイフンで結んで表している。遺構の種類については番号の後ろに記載した。ただし、掘立柱建物など複数の遺構の集合体である場合は、遺構種類ごとに通し番号を付し、番号の前に遺構の種類を記載した。
- 7、各遺構図の縮尺は各図にスケールを付しているが、全体図は1/250、遺構図は1/20、掘立柱建物は1/50、遺物出土状況図は1/10を基本としている。
- 8、出土遺物図の縮尺は各図にスケールを付しているが、原則として、土器は1/4、石器1/2、木製品は1/4、1/6とした。ただし、図64～90に関しては、断面図と拓本のための遺物は1/3で掲載している。
- 9、遺物番号は各図に対して1から付しており、番号の前に図番号をハイフンで結んで表している。また、写真図版のみに掲載した遺物に関してはaからアルファベットを付して表している。
- 10、弓削ノ庄遺跡では、コンクリートの基礎杭の位置は全体図以外、原則図中から省略している。

目 次

巻頭図版 1

巻頭図版 2

序文

例言

凡例

第 1 章 調査に至る経緯と過程

第 1 節 調査に至る経緯と過程…………… 1

第 2 節 東大阪市南西部遺跡群 03-1 確認調査 …… 3

第 2 章 位置と環境

第 1 節 調査地の位置…………… 5

第 2 節 地理的環境…………… 5

第 3 節 歴史的環境…………… 8

第 3 章 調査の成果

第 1 節 調査の方法…………… 11

第 2 節 亀田遺跡…………… 13

第 1 項 基本層序…………… 13

第 2 項 調査成果…………… 18

第 3 節 弓削ノ庄遺跡…………… 53

第 1 項 基本層序…………… 53

第 2 項 調査成果…………… 57

第 4 節 東大阪市南西部遺跡群 04-1 確認調査 …… 117

第 1 項 基本層序・調査成果…………… 117

第 4 章 自然科学分析…………… 119

第 5 章 まとめ …… 131

挿図目次

第1章		
図1	調査地位置図	1
図2	亀田・弓削ノ庄遺跡・東大阪市南西部遺跡群調査地周辺図	2
図3	平成15年度東大阪市南西部遺跡群03-1確認調査区位置図	3
図4	東大阪市南西部遺跡群03-1確認調査出土遺物	4
第2章		
図5	調査地周辺の現在の地形図	6
図6	調査地周辺遺跡分布図	7
第3章		
図7	亀田・弓削ノ庄遺跡・東大阪市南西部遺跡群調査区配置図	11
図8	亀田遺跡土層断面模式図	15
図9	1～3調査区 土層断面図	16
図10	4・5調査区 土層断面図	17
図11	第1-1・3面 遺構分布図	19
図12	第4面 遺構分布図(1)	20
図13	第4面 遺構分布図(2)	21
図14	5-2土坑 平・断面図	22
図15	第4-2面 遺構分布図	23
図16	第4-2・5面 遺構分布図	24
図17	4-1流路 断面図	25
図18	杭列1 平・立面図	25
図19	杭列2、3 平・立面図	26
図20	1～6層、第4～5面 出土遺物	27
図21	出土木製品(1)	28
図22	第6面 遺構分布図(1)	30
図23	第6面 遺構分布図(2)	31
図24	4-6落込み 遺物出土状況図	32
図25	4-5溝 遺物出土状況図	32
図26	4-5溝 断面図	32
図27	第6面 ピット、溝 断面図	32
図28	第6面、8層 出土遺物	33
図29	第6-2・7面 遺構分布図	35
図30	土器群1 遺物出土状況図	36
図31	第6-2面 ピット 断面図	37
図32	3-9土坑 平・断面図	37
図33	3-10土坑 断面図	37
図34	第6-2面 溝 遺物出土状況・断面図	38
図35	第7面 ピット列1 平・断面図	39
図36	第7面 土坑、溝 断面図	39
図37	第7面 ピット、溝 断面図	40
図38	第8面 遺構分布図	41
図39	第8面 遺構断面図	42
図40	第9面 遺構分布図	43
図41	第9面 遺構断面図	44
図42	第6-2～7面 出土遺物(1)	45
図43	第6-2～7面 出土遺物(2)	46
図44	9層 出土遺物(1)	48
図45	9層 出土遺物(2)	49
図46	9層 出土遺物(3)	51
図47	出土木製品(2)	52
図48	出土石器	52
図49	弓削ノ庄遺跡 1・2調査区 土層断面図	54
図50	第1・2面 遺構分布図	56
図51	2-1流路 断面図	57
図52	1層 出土遺物	58
図53	2-1流路 出土木製品	59
図54	第3面 遺構分布図	60
図55	第5面 遺構分布図	61
図56	第5面 溝、土坑 断面図	62
図57	方形周溝墓1 平・断面図	64
図58	方形周溝墓1 遺物出土状況図	66
図59	方形周溝墓1 主体部1 平・立面図	67
図60	方形周溝墓1 主体部2、3 平・断面図	67

図61	2-2溝 断面図	68
図62	第5面 木製品出土状況図	68
図63	第5面 出土木製品	68
図64	第5面 出土遺物(1)	69
図65	第5面 出土遺物(2)	70
図66	第6面 出土遺物(3)	71
図67	第7面 遺構分布図	73
図68	掘立柱建物1、2 平・断面図	74
図69	掘立柱建物3、4 平・断面図	75
図70	1調査区北側 第7面 遺構分布図・遺構断面図	76
図71	1調査区中央 第7面 遺構分布図・遺構断面図	78
図72	1-123土坑 平・断面図	79
図73	1調査区南側 第7面 遺構分布図・遺構断面図	80
図74	1-16土坑 平・断面図	81
図75	1調査区 遺物出土状況図	82
図76	1-60サヌカイト集積遺構、1-245土坑 遺物出土状況図	83
図77	2調査区北側 第7面 遺構分布図・遺構断面図	84
図78	2調査区中央 第7面 遺構分布図・遺構断面図	85
図79	2-89サヌカイト集積遺構 出土状況図	86
図80	第7面 ピット 出土遺物	87
図81	第7面 土坑 出土遺物(1)	88
図82	第7面 土坑 出土遺物(2)、溝 出土遺物	91
図83	第7面 出土遺物	92
図84	8層 出土遺物(1)	94
図85	8層 出土遺物(2)	96
図86	8層 出土遺物(3)	97
図87	8層 出土遺物(4)	99
図88	8層 出土遺物(5)	100
図89	第5面遺構他 出土縄文晩期・弥生前期遺物(1)	101
図90	第5面遺構他 出土縄文晩期・弥生前期遺物(2)	102
図91	出土石棒(1)	106
図92	出土石棒(2)	107
図93	出土石製品(1)	108
図94	出土石製品(2)	109
図95	出土サヌカイト(1)	111
図96	出土サヌカイト(2)	112
図97	出土サヌカイト(3)	113
図98	出土サヌカイト(4)	114
図99	出土サヌカイト(5)	115
図100	東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査 土層断面図	117
図101	東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査 遺構分布図	118
第4章		
図1	調査地点の層序および試料採取層準	119
図2	主要珪藻化石群集の層位分布	124
図3	主要花粉化石群集の層位分布	126
表1	珪藻分析結果	123
表2	花粉分析結果	125

挿入写真目次

写真1	出土石器(図48-1)	52
写真2	出土木製品(図53)	59
写真3	籾殻圧痕土器(図80-20)	87

図版目次

- 図版1 亀田遺跡調査区断面
1. 2調査区断面 4～10層 (北東から)
2. 4調査区断面 4～7層 (東から)
3. 5調査区断面 11～16層 (東から)
- 図版2 亀田遺跡4調査区 第4-2面
1. 杭列2、3 検出状況 (北から)
2. 杭列3 検出状況 (南から)
3. 杭列1 検出状況 (南から)
- 図版3 亀田遺跡1・2調査区 第6面
1. 1調査区 遺構検出状況 (南から)
2. 2調査区 遺構検出状況 (北から)
- 図版4 亀田遺跡4調査区 第6面
1. 遺構検出状況 (北から)
2. 4-5溝 断面 (西から)
3. 4-5溝 遺物出土状況 (西から)
4. 4-6落込み 遺物出土状況 (北西から)
- 図版5 亀田遺跡5調査区 第6面
1. 遺構検出状況 (南から)
2. 5-5溝 検出状況 (南から)
3. 5-5溝 遺物出土状況 (西から)
- 図版6 亀田遺跡2調査区 第7面
1. 遺構検出状況 (南から)
2. ピット列1 検出状況 (北から)
3. 2-12ピット 断面 (西から)
4. 2-6溝 断面 (北東から)
- 図版7 亀田遺跡3調査区 第6-2面
1. 遺構検出状況 (北から)
2. 3-18溝 遺物出土状況 (北東から)
3. 3-9土坑 遺物出土状況 (南西から)
- 図版8 亀田遺跡3～5調査区
1. 3調査区 第7面 遺構検出状況 (北から)
2. 4調査区 第8面 遺構検出状況 (南から)
3. 5調査区 第8面 5-12流路 検出状況 (西から)
- 図版9 弓削ノ庄遺跡1・2調査区断面
1. 1調査区 断面 (南東から)
2. 2調査区 断面 (南東から)
3. 2調査区 断面 (東から)
- 図版10 弓削ノ庄遺跡2調査区
1. 第1面 2-1流路 検出状況 (南から)
2. 第1面 2-1流路 断面 (東から)
3. 第5面 木製品出土状況 (東から)
- 図版11 弓削ノ庄遺跡2調査区 第5面 方形周溝墓1
1. 検出状況 (北から)
2. 遺物出土状況 (北東から)
3. 遺物B 出土状況 (北東から)
4. 遺物D 出土状況 (南西から)
5. 遺物A 出土状況 (北から)
6. 主体部1 検出状況 (南から)
7. 主体部1 検出状況 (南東から)
- 図版12 弓削ノ庄遺跡2調査区 第5面 方形周溝墓1
1. 主体部 検出状況 (北西から)
2. 主体部2 検出状況 (北西から)
3. 主体部3 検出状況 (南西から)
4. (主体部)4 検出状況 (南西から)
5. 主体部3 断面 (南東から)
6. 主体部3 丸玉出土状況 (北西から)
- 図版13 弓削ノ庄遺跡1・2調査区 第5面
1. 2調査区 方形周溝墓1 断面 (北西から)
2. 2調査区 方形周溝墓1 北側周溝 断面 (西から)
3. 2調査区 方形周溝墓1 南側周溝 断面 (北西から)
4. 1調査区 1-13溝 検出状況 (南から)
5. 1調査区 1-11溝 検出状況 (南から)
6. 1調査区 1-13溝 断面 (南から)
7. 1調査区 1-1溝 断面 (西から)
- 図版14 弓削ノ庄遺跡1調査区 第7面
1. 調査区北側 遺構検出状況 (南から)
2. 調査区中央 遺構検出状況 (南西から)
3. 調査区南側 遺構検出状況 (南西から)
- 図版15 弓削ノ庄遺跡2調査区 第7面
1. 調査区北側 遺構検出状況 (南西から)
2. 調査区中央 遺構検出状況 (西から)
3. 調査区中央 遺構検出状況 (南西から)
- 図版16 弓削ノ庄遺跡1調査区 第7面
1. 1-123土坑 検出状況 (西から)
2. 1-123土坑 断面 (西から)
3. 1-16土坑(土器棺) 検出状況 (南から)
4. 1-16土坑(土器棺) 検出状況 土器が被さった状況 (北から)
5. 1-16土坑(土器棺)上部土器除去後(南西から)
- 図版17 弓削ノ庄遺跡1調査区 第7面
1. 掘立柱建物周辺ピット集中部 検出状況 (南東から)
2. 1-62ピット 石棒 出土状況 (北東から)
3. 1-70ピット 柱材 検出状況 (北から)
4. 1-92ピット 柱材 検出状況 (北東から)
5. 1-155ピット 柱材 検出状況 (北から)
- 図版18 弓削ノ庄遺跡1・2調査区 第7面
1. 1調査区 1-238ピット 根石検出状況 (北東から)
2. 1調査区 1-18土坑 断面 (北から)
3. 1調査区 1-47土器 出土状況 (南から)
4. 1調査区 1-46ピット 遺物出土状況 (南西から)
5. 1調査区 1-60サヌカイト集積遺構 検出状況 (南西から)
6. 2調査区 2-89サヌカイト集積遺構 検出状況 (南から)
7. 1調査区 土製紡錘車 出土状況 (南東から)
8. 2調査区 第12面 検出状況 (南から)
- 図版19 亀田遺跡出土遺物 (1)
図版20 亀田遺跡出土遺物 (2)
図版21 亀田遺跡出土遺物 (3)
図版22 亀田遺跡出土遺物 (4)
図版23 亀田遺跡出土遺物 (5)
図版24 亀田遺跡出土遺物 (6)
図版25 亀田遺跡出土遺物 (7)
図版26 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (1)
図版27 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (2)
図版28 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (3)
図版29 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (4)
図版30 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (5)
図版31 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (6)
図版32 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (7)
図版33 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (8)
図版34 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (9)
図版35 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (10)
図版36 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (11)
図版37 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (12)
図版38 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (13)
図版39 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (14)
図版40 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (15)
図版41 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (16)
図版42 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (17)
図版43 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (18)
図版44 弓削ノ庄遺跡出土遺物 (19)

第1章 調査に至る経緯と過程

第1節 調査に至る経緯と過程（図1・2）

本調査は、大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に伴うものである。大阪外環状線は、JR城東貨物線を連続立体交差化し、JR新大阪駅とJR久宝寺駅間の20.4kmを複線電化・旅客線化する事業である。この鉄道計画は、1950年代からJR城東貨物線の旅客線化を要望する運動が沿線で始まったことによる。1981年4月に旧日本国有鉄道が電化・複線化の認可を受けるが、財政難から着手できず、1987年4月に、旧日本国有鉄道から西日本旅客鉄道株式会社に引き継がれた。この路線が本格的に整備されることとなったのは、1989年に『運輸政策審議会』で決定された事による。この答申を受けて1996年度に「幹線鉄道等活性化事業費補助」が政府予算で認められ、同年11月、第三セクター会社として大阪外環状鉄道株式会社が設立され、工事に着手することとなった。

路線予定地の東側には多くの遺跡が周知されているが、当予定地周辺ではこれまで発掘調査があまりなされておらず、周知の遺跡が少ない空白地帯であった。今回、事業が本格的に着手されたことから、大阪府教育委員会と大阪外環状鉄道株式会社が協議した結果、埋蔵文化財の有無の資料を得るため、計画路線内で確認調査を行うこととなった。調査は、当センターが平成15年度（2003年度）に東大阪市南西部遺跡群（03-1）確認調査として、9ヶ所の調査区を設定し実施した。その結果、弥生時代中・後期の遺物が調査区内で多く出土した。

その調査結果を受けて、弓削ノ庄遺跡（柏田本町・柏田西2・3丁目）・亀田遺跡（衣摺6丁目）が新規発見の遺跡として登録された。



図1 調査地位置図 (S=1/50,000) (国土地理院平成10年3月「大阪東南部」1:25,000を使用)

第1章 調査に至る経緯と過程

確認調査の結果を受けて、大阪府教育委員会と大阪外環状鉄道株式会社が再度協議を行い、大阪府教育委員会が本格的な発掘調査を必要とする部分を判断した。そして、大阪府教育委員会の指導のもと当センターが翌平成16年度（2004年度）に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、亀田遺跡5ヶ所、弓削ノ庄遺跡2ヶ所で橋脚部の調査を実施した。

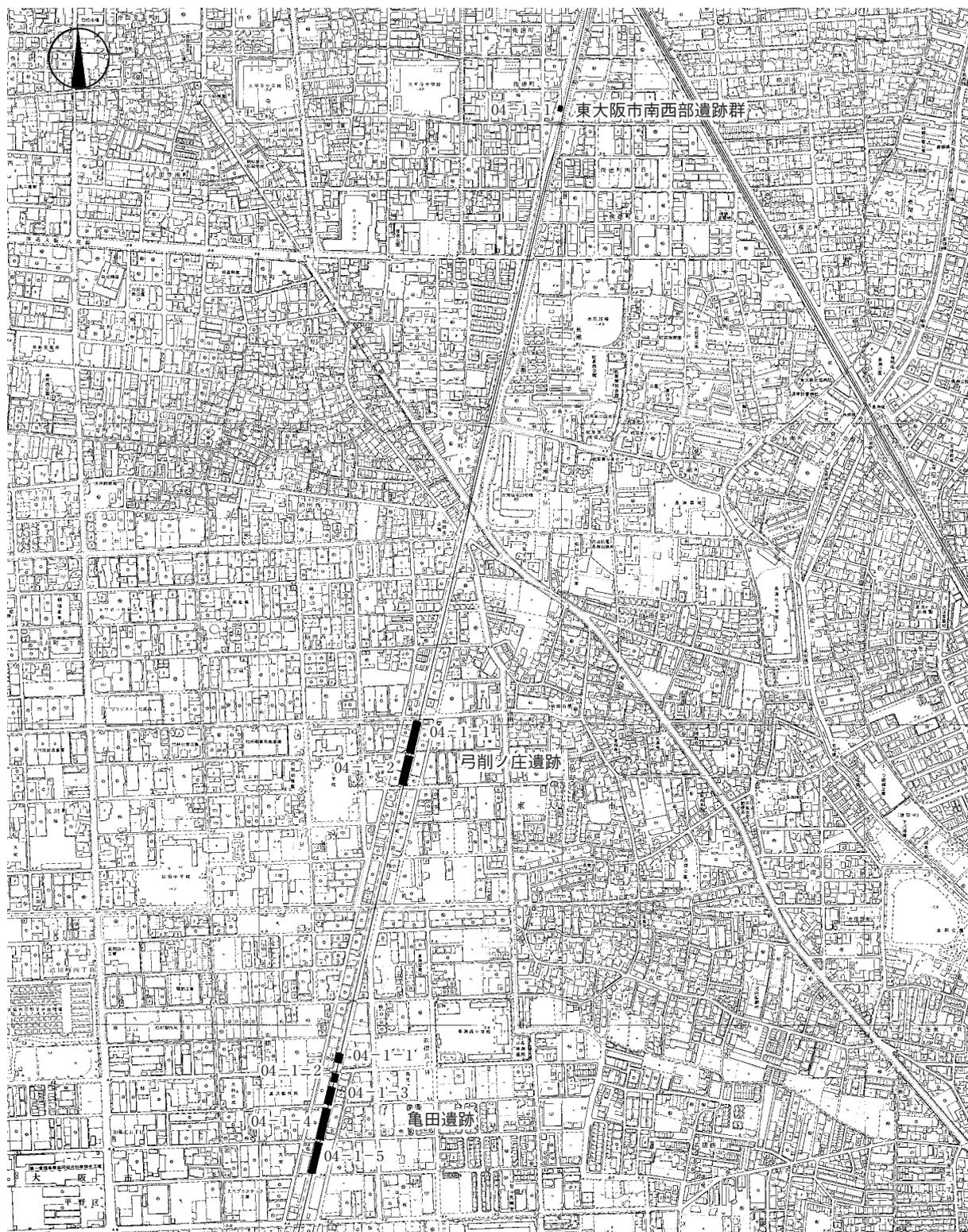


図2 亀田・弓削ノ庄遺跡・東大阪市南西部遺跡群調査地周辺図 (S=1/10,000)

また、確認調査03-1に引き続き、確認調査〔東大阪市南西部遺跡群（確認）04-1〕を1ヶ所で実施した。

今回の調査区は遺構面が深く埋没しており、鋼矢板の打設を行っての調査となった。現地調査は、鋼矢板がすでに打設されていた東大阪市南西部遺跡群（確認）から実施した。鋼矢板の打設は亀田遺跡の北側の調査区から行き、順次、調査を行った。弓削ノ庄遺跡では、コンクリートの基礎杭および、鋼矢板を打設、その後調査に取りかかった。調査地は、鉄道に近接していることと、調査も本体の工事と平行して行っており、作業ヤードの確保、掘削土の搬出、埋め戻し土の搬入など、非常に困難を極めた。当初、調査地全体に覆鋼板を敷いて、調査区の上を通路、作業ヤードとし、調査を行う計画がなされていた。しかし、実際の調査を行うに当たっては、明かりが取れず、写真の撮影ができないなど、色々な問題点がでてきた。本体の工事の進捗にも大きく関わる点であったため、本体工事との数度にわたる調整を行った。その結果、覆鋼板を一部開けて、明かりをとれるよう御協力をいただき、また、明かりの取りにくい部分については水銀灯をとりつけるなどの方法がとられた。また、亀田遺跡では、当初地表面から3mを掘削深度として調査を実施したが、遺構面に達せず、安全確保のため、周囲1mを残してより下層の調査を行った。また、鋼矢板打設が未着工であった5調査区では設計変更を行い、遺構面までの掘削が可能となるように、2段梁の施工による調査を行った。最終的には地表面から約3.3mで遺構面を検出し、更に下層の堆積状況を、サブトレンチを設けて確認した。

現地調査は平成16年10月31日まで行き、多くの成果を得ることができた。その後、整理作業を行い、平成17年8月31日、本書の刊行をもって事業は終了した。

第2節 東大阪市南西部遺跡群03-1 確認調査（図3・4）

平成15年度（2003年度）に実施された東大阪市南西部遺跡03-1 確認調査は、近鉄大阪線俊徳道駅以南の東大阪市域（路線延長約2.2km）で実施した。以下は調査の概要である。

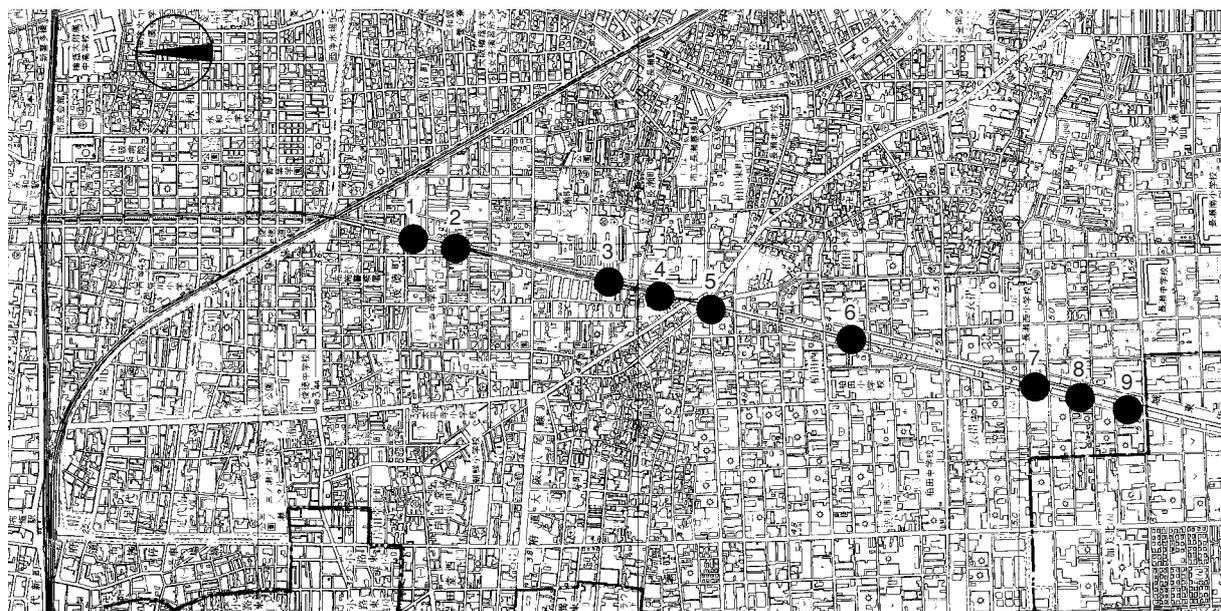


図3 平成15年度東大阪市南西部遺跡群03-1 確認調査区位置図 (S=1/20,000)

調査は、JR城東貨物線の中に9ヶ所の調査区を設定した(図3)。各調査区の規模はNo.1・2が3.2×7.2m、No.3・4が5.2×5.2m、No.5が3.2×8.0m、No.6～9が2.8×8.4mで、深さは現状地盤から5mを掘削した。

調査の結果、上部では近世の耕作層や鳥壘を検出し、その下は洪水砂層が厚く堆積していた。洪水砂層以下は、暗色の粘土層が堆積し、湿地帯であったことがうかがえる。

下層では、一時期地表化し土壌化を受けたと考えられる複数の黒色土層が確認された。複数検出された黒色土層は、出土遺物などから古墳時代中期、弥生時代後期、弥生時代中期、縄文時代後期末～晩期初頭の4時期が考えられる。中でも6調査区では弥生時代中期、8調査区では弥生時代後期の相当層から、比較的集中して土器の出土が認められた。

確認調査で出土した遺物は、以下のものがある(図4)。

1は須恵器鉢である。2は弥生時代中期末の甕である。体部外面はタタキのちハケメ、内面はハケメを施す。1・2は4調査区(Tr)で出土した。

3は古墳時代前期の大型の直口壺である。口縁部外面はハケメ、内面はナデを施す。体部外面はナデを施し、部分的にタタキが残る。8調査区から出土した。

4は弥生時代後期甕である。体部外面の調整はタタキ、肩部付近にハケメ。内面はハケメ。口縁端部は外側にやや肥厚する。5調査区から出土した。

5は弥生時代前期壺蓋である。外面はミガキ、内面は指頭痕が残る。6は弥生時代中期長頸壺である。頸部に5帯の櫛描き直線文、その下に櫛描き波状文を施す。5・6は6調査区で出土した。

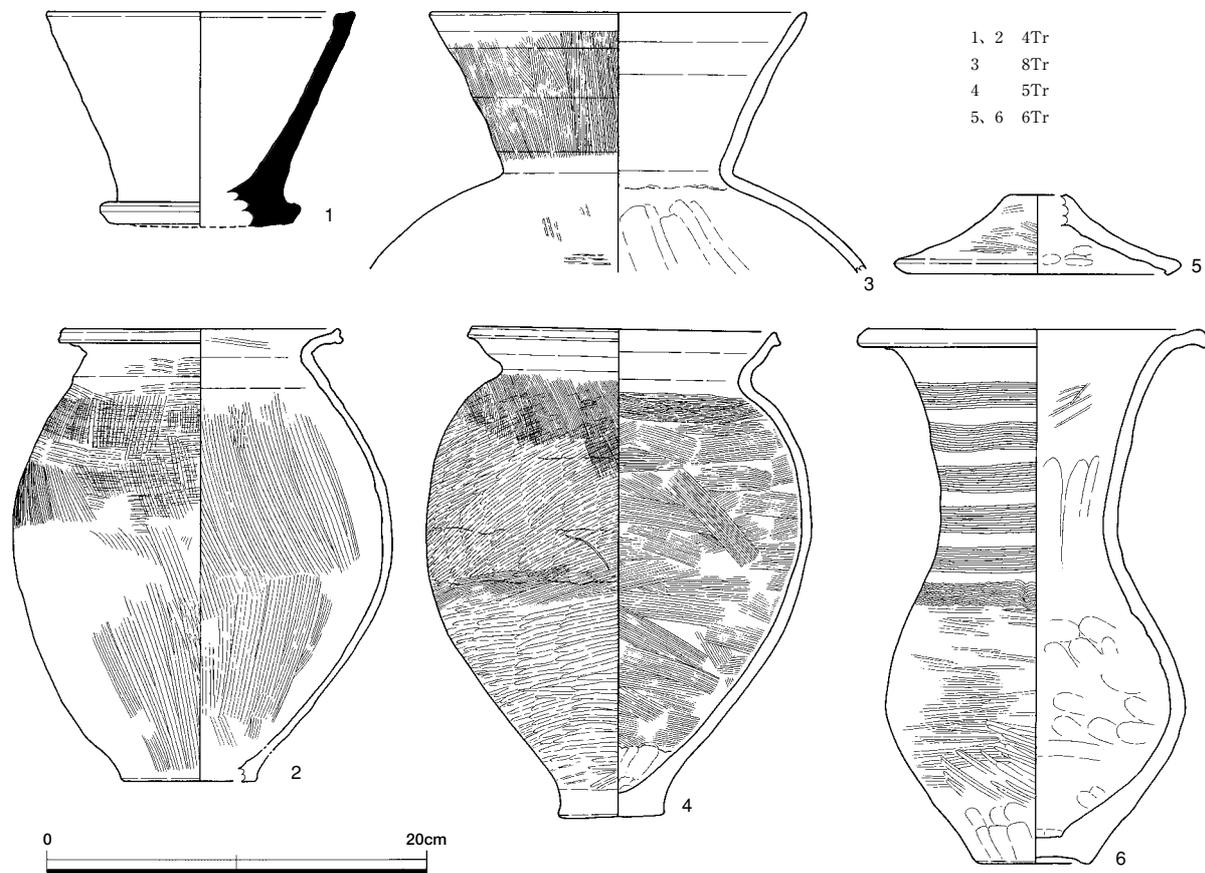


図4 東大阪市南西部遺跡群03-1 確認調査出土遺物

第2章 位置と環境

第1節 調査地の位置

今回、調査対象となった、弓削ノ庄遺跡、亀田遺跡は、東大阪市南西部に位置する柏田本町、柏田西、衣摺に所在する。JR城東貨物線が近鉄大阪線と交差し南西方向に向かい、やがて関西本線と接続する区間上、その路線に沿うように、約500mの距離を隔てて両遺跡は立地している。遺跡の所在する一帯は、ものづくりの町として知られる東大阪市の中でも、中小の町工場が林立する地域で、大阪市境にも近いことから、戦後、急激に宅地開発が進んだ地域である。

亀田遺跡周辺に存在する「衣摺」の地名は古く、『日本書紀』崇峻天皇即位前紀七月条に、物部守屋が蘇我馬子と戦った際、稲城を築いて「衣摺」にあった朴の木の枝に登って矢を射たとの記述があり〔吉田1900〕、また、四天王寺に伝わる『四天王寺御手印縁起』にも、物部守屋滅亡後、その子孫らを寺奴婢とし、「河内国弓削、鞍作、祖父間、衣摺、蛇草、足代」などにあった守屋の領地を没収して寺領としたという記載がある〔井上1922〕。なお、この地は古代より現在の大阪市生野区、八尾市の一部とともに河内国渋川郡に属し、明治22年の市町村制施行により長瀬村、昭和12年に布施市となり、昭和42年に布施市・河内市・枚岡市が合併して東大阪市となった〔布施市史編纂委員会1962〕。

第2節 地理的環境（図5）

大阪の中央部、生駒山地の山裾に広がる大阪平野の変遷については、市原・梶山両氏ほかの地道な地質調査にもとづく古地理研究や、周辺各市での発掘調査の成果も加わって、大きく古代における地形と環境の変遷が明らかにされつつある〔梶山・市原1986〕。最終氷期の終了後、縄文時代のはじまりとはほぼ同時期に、海水面が上昇、現在の大阪湾から生駒山麓の懐深くまで海水が侵入し、大阪平野は河内湾と呼ばれる広大な入海がひろがる時代が続くこととなった。縄文時代後期に入ると河内湾は、北は淀川、南は旧大和川水系の河口から吐きだされる多量の土砂により、沖積作用を受け、沼沢地化が進み、とくに縄文時代晩期以降は、上町台地と千里丘陵との間に発達した砂堆が、狭い湾口を形成する状態となり、海水が侵入していた河内湾は、そこに注ぐ河川の水とが混じった汽水の河内潟の時代を経て、外海とはほとんど切り離された淡水の河内湖に変わっていった〔地学団体研究会大阪支部編1999〕。

弓削ノ庄遺跡、亀田遺跡は河内平野のほぼ中央部に位置し、現在の長瀬川左岸、自然堤防を緩やかに下る、現標高約T.P.+5m付近に立地している。長瀬川は付け替え以前の大和川水系の有力河川として知られ、現在では市街地を細々と流れる水路となってしまったが、往時には川幅約200mにもおよび、大和から大坂への水運経路として重要な役割を果たしていた。今日でも、長瀬川沿いには自然堤防の痕跡として微高地が存在している。弓削ノ庄遺跡、亀田遺跡のみならず、長瀬川の両岸の発達した自然堤防上には、横沼遺跡、弥刀遺跡、小若江遺跡、佐堂遺跡、宮町遺跡などの遺跡が立地しており、古くから人間の営みが活発な環境であったようである。特に、長瀬川の右岸、佐堂遺跡においては、中世に築堤工事や灌漑、排水施設に関連する土木工事がたびたび行われていることが知られ〔阪田1987〕、いったん雨が続けば暴れ川となった大和川とともに暮らした人々の苦心を髣髴とさせるのである。

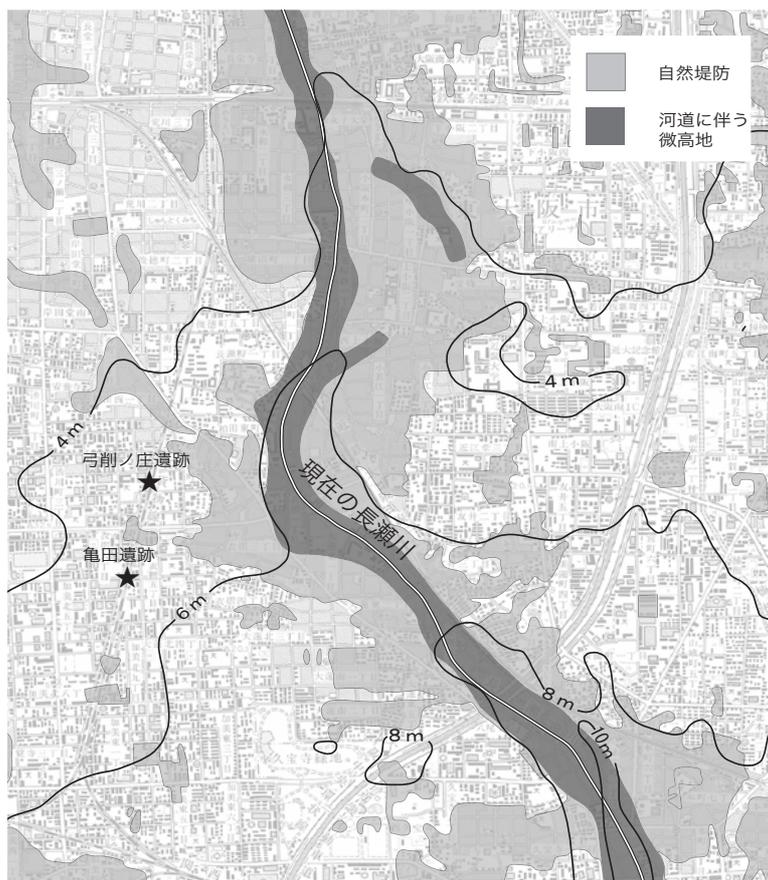


図5 調査地周辺の現在の地形図

弥生時代から古墳時代にかけて、河内湖にそそぐ旧大和川水系の河川の変遷過程が一带の遺跡の発掘調査や、それに伴って行われた自然地理学的研究によって徐々に明らかにされつつある〔松田2001〕。その結果、現在の楠根川とほぼ同じ位置を流れ、河内湖に注ぐ旧河道の存在が知られるようになった。一般に「小阪合分流路」と呼ばれるこの河道は他の河内湖に注ぐ河川同様、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、自然堤防を急速に発達させており、その高まりの上に庄内～布留式期に至る主要な集落が立地する。小阪合分流路周辺に立地する遺跡は、上流域から下流域へ中田遺跡、小阪合遺跡、成法寺遺跡、東郷遺跡、萱振遺跡などで、ほぼ連続して分布しており、これらを総称し中田遺跡群として知られている。

『続日本紀』の記述の中に、天平寶字六年に長瀬堤が決壊し、延べ二万二千人により改修が行われたとの記述がある。長瀬堤は、現在の東大阪市長瀬～衣摺周辺にあった河堤を指していると考えられており〔梶山・市原1986〕、今回の調査地周辺においても、古くから沖積地での生活に伴う困難と苦闘してきた先人の足跡を垣間見ることができる。



- | | | | |
|---------------|-----------|-----------|----------|
| 1 弓削ノ庄遺跡 | 11 長楽廃寺 | 21 上小阪遺跡 | 31 佐堂遺跡 |
| 2 亀田遺跡 | 12 横沼遺跡 | 22 小若江遺跡 | 32 宮町遺跡 |
| 3 宮ノ下遺跡 | 13 弥刀遺跡 | 23 新上小阪遺跡 | 33 穴太廃寺 |
| 4 長楽寺跡 | 14 久宝寺遺跡 | 24 若江遺跡 | 34 八尾寺内町 |
| 5 西郷遺跡 | 15 久宝寺遺跡 | 25 山賀遺跡 | 35 東郷遺跡 |
| 6 衣摺遺跡 | 16 久宝寺寺内町 | 26 山賀遺跡 | |
| 7 加美北遺跡 | 17 西岩田遺跡 | 27 友井東遺跡 | |
| 8 加美遺跡 | 18 瓜生堂遺跡 | 28 美園遺跡 | |
| 9 加美遺跡 | 19 巨摩廃寺遺跡 | 29 美園遺跡 | |
| 10 加美西1丁目所在遺跡 | 20 若江北遺跡 | 30 佐堂遺跡 | |

図6 調査地周辺遺跡分布図

第3節 歴史的環境（図6）

弓削ノ庄遺跡、亀田遺跡に隣接する遺跡として、衣摺遺跡（6）が存在する。両遺跡の東、ほぼ等距離上に位置し、弥生時代の遺跡として周知されているものの、明確な遺構等は確認されておらず、その性格に関しては不明な点が多い。また、西に目を向けると、大阪市との市境に西郷遺跡（5）が知られ、出土遺物などから古墳時代から中世の集落跡であると考えられている。

弓削ノ庄遺跡では、その年代が縄文時代晩期まで遡ることが確認されたが、周辺の当該期の遺跡としては、宮ノ下遺跡（3）が知られる。縄文時代晩期末から近代までの複合遺跡であるが、貝塚や突帯文土器の良好な資料が得られており〔中西1998〕、河内潟に近い場所での人間活動の一端を窺うことができる。弥刀遺跡（13）、若江北遺跡（20）などからも縄文時代晩期の遺物が出土している〔石神・陣内編1991〕が、いずれも遺構に関する詳細は不明である。

弥生時代前期の遺跡として、若江北遺跡で前期前半段階の居住域の検出とともに、近畿地方最古段階に位置づけられる前期土器の一括資料が出土した〔三好・市本1996〕。これに続く前期後半は山賀遺跡（25・26）、美園遺跡（28・29）で大量の遺構・遺物が検出されている他、近年では瓜生堂遺跡（18）でも当該期の集落が検出されている。特に山賀遺跡では、居住域と大規模な水田域が近接し、その間に8条の平行に掘削された大溝と、その掘削土を用いた9条の土手が造営されるなど、活発な土木活動の痕跡が見られる〔西口ほか1984〕。溝の埋土はブロック土であり、短期間の間に人為的に埋め戻された可能性が考えられているが、その行為にどういった背景が伴うのかも含めて、評価は定まっていない。なお同様の溝は友井東遺跡（27）や美園遺跡でも見られ〔本間・鹿野編2002〕、やや時期は下るが、久宝寺遺跡（14・15）や、亀井北遺跡でも確認されている〔石神・陣内編1991〕。

弥生時代中期では、若江遺跡（24）、若江北遺跡、美園遺跡、瓜生堂遺跡、萱振遺跡で居住域が、山賀遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩廢寺遺跡（19）などから多数の方形周溝墓がそれぞれ検出されている。瓜生堂遺跡は拠点集落として著名であり、集落域とともに方形周溝墓を主体とする墓域も検出され、大阪湾形戈、鋳型、鳥形木製品などの特殊な遺物も出土している。山賀遺跡では中期初頭の方形周溝墓10基や水田跡が検出され、中期後半には居住域、墓域、生産域が確認されているが、いずれの段階の居住域も東側に展開するようである〔西口ほか1984〕。弥生時代後期では、巨摩廢寺遺跡で方形周溝墓が検出され、主体部より碧玉製管玉や、ガラス勾玉が出土し、自然流路内より貨泉も出土している。〔三好・亀井ほか1995、三好・市本1996、畑編1998〕。また、上小阪遺跡（21）では周溝をもつ住居跡のほか、壺棺墓が検出されている〔亀井ほか編1996〕。

古墳時代前期になると、河川の氾濫によって形成された微高地に多くの居住域が、それよりやや低い箇所には水田跡が検出されるようになる。この中で、東郷遺跡（35）小阪合遺跡、成法寺遺跡などの諸遺跡は中田遺跡群と称され、当該期の河内湖の南、三角州地帯における中心地と目される地域であり、いずれも庄内式初頭に一齐に出現し、布留式前半に一齐に消滅する〔山田1994〕。若干、北に外れた地域に存在する遺跡では西岩田遺跡（17）、瓜生堂遺跡などはこの動きに呼応するが、美園遺跡では出現時期は同様ながら、布留式の後半まで継続する。なお、山賀遺跡でも前期の居住域と考えられる遺構が検出されているが小規模なものである。この他、弥刀遺跡においても、庄内～布留式の土器とともに、井戸や柱穴が検出されており、一帯が生活域であったと考えられている〔上野1999、別所ほか2002〕。なお、巨摩遺跡や若江北遺跡などからは水田跡が検出されており、当該期には生産域が広がっていたよう

である。この時期の墓域としては、布留式後半において、壺形埴輪と2点の精巧な家形埴輪が出土した美園古墳、直弧文が施された靱型埴輪や鱗付円筒埴輪が出土した萱振1号墳などが存在する。長瀬川の左岸に目を向けると、久宝寺遺跡では、古墳時代初頭の総数60基をこえる墳墓群が検出されている。また、その北西2kmの加美遺跡(8・9)でも舶載鏡などの副葬品をもつ、46基の墳墓群が検出されているほか、墳丘は完全に削平されているものの、前方後方形の周溝墓が確認されており〔田中1986〕、この地域において大きな求心力をもった集団が居住していた可能性が指摘されている〔山田1994〕。

古墳時代中期になると西岩田遺跡や瓜生堂遺跡、美園遺跡で掘立柱建物、土坑、溝などが見られる。美園遺跡では河川から7世紀代の遺物が多量に出土しており、祭祀に関連した様相も見受けられる〔畑編1998〕。古墳時代後期におけるこの地域の様相は、当該時期の遺構の検出が少なく、未知の部分が多い。

穴太廃寺(33)は聖徳太子の生母、間人穴太部皇女の生誕の地とされる。この周辺は古代、物部氏の河内における拠点であり、物部氏と関連の深い跡部神社、弓削神社や聖徳太子が守屋を破った際に建立したとされる大聖勝軍寺、また守屋の墓所とされている塚も存在する〔八尾市史編集委員会編1977〕。この時期の遺跡では、佐堂遺跡から大阪府下では希少な奈良時代の本簡が発見されているほか、加美遺跡からは、流路から人面墨書土器をはじめとする多量の祭祀遺物が出土した。また、瓜生堂遺跡では8世紀の掘立柱建物群や落込みが検出され、官衙などの公的施設の存在が推定されている。〔藤沢ほか1980〕。今回の調査地付近には、長楽寺跡(4)があり、詳細は不明であるが、奈良時代創建の寺跡とされている。8世紀には萱振遺跡でも掘立柱建物が検出されており、長楽廃寺(11)などでも奈良時代から平安時代前期にかけての瓦や土器の出土が見られる。友井東遺跡からは、奈良・平安時代におよぶ集落の一部も検出された。小若江遺跡(22)でも黒色土器、銭貨、曲げ物などが出土し、平安時代の井戸が検出されている。

中世はじめ頃の集落域は瓜生堂遺跡や岩田遺跡で検出されている。この時期については生駒山西麓の水走遺跡、西ノ辻遺跡などにも大規模な中世集落をみることができる。室町時代になると、14世紀末に畠山基国によって若江城が築城され、若江遺跡周辺は高野街道や十三街道の通る河内国の中心として栄える。16世紀になると、久宝寺寺内町(16)が、蓮如上人創建の西証寺を中心に寺内町として成立する。町は碁盤の目のように整然と区画され、周囲に二重の堀と土塁をめぐらせた堅牢な造りで、今も町割りなどに当時の面影をとどめている。このほか、中世の遺跡としては横沼遺跡(12)が遺物の包蔵地として知られている。久宝寺寺内町は、江戸時代、河内木綿の集積地として繁栄した。慶長年間に本願寺の東西分派に端を発して、慶長11年、久宝寺の森本七郎兵衛ら一部の住人は、八尾の長瀬川沿いの荒地を開発し、八尾御坊大信寺と慈願寺を中心に八尾寺内町(34)を形成した〔津田1990〕。

18世紀はじめに行われた大和川付替え後は、陸化した旧の川筋において大規模な新田開発が行われた。19世紀はじめ、大蔵永常によって『綿圃要務』が著されるなど、農学の進展、大衆への普及により、長瀬川・玉串川流域では綿作が前代にもまして盛んに行われ、国内における綿花の一大生産地となった〔柏原市役所1985〕。新上小阪遺跡(23)では、中世から近世にかけての島畠、畦畔が検出されており、往時の農耕の様相を窺うことができる。

第2章 調査に至る経緯と過程

<参考文献>

- 赤木克視・村上生編1987『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
阿部嗣治・岡村多美子・浪江由美1982『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財)東大阪市文化財協会
石神幸子・陣内暢子編1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
井上正雄1922『大阪府全志』大阪府全志発行所
上野利明1999「弥刀遺跡第6次調査」『埋蔵文化財発掘調査概報集－1998年度(2)－』(財)東大阪市文化財協会
太田亮1925『日本国誌資料叢書 河内』講談社
柏原市役所1985『大和川物語』柏原市役所
梶山彦太郎・市原 実1972「大阪平野の発達史－14C年代のデータからみた－」『地質学論集第7号』日本地質学会
梶山彦太郎・市原 実1986『大阪平野のおいたち』青木書店
金光正裕・川瀬貴子2004『岩田遺跡』(財)大阪府文化財センター
金村浩一1997「若江遺跡第59次調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査(2)－』(財)東大阪市文化財協会
亀井 聡・溝川陽子・堀 智美編1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
川瀬貴子・秋山浩三編2004『瓜生堂遺跡Ⅰ』(財)大阪府文化財センター
駒井正明2000『小阪合遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
阪田育功1987「佐堂遺跡」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
田中清美1986「加美遺跡発掘調査の成果」『古代を考える43 加美遺跡の検討』古代を考える会
地学団体研究会大阪支部編著1999『大地のおいたち』築地書館
津田秀夫編1990『図説 大阪府の歴史』河出書房
中西克広1998『宮ノ下遺跡第8次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会
西口陽一ほか1984『山賀 その3』(財)大阪文化財センター
西村歩・奥村茂輝・辻本裕也2004『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅵ』(財)大阪府文化財センター
畑 暢子編1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター
廣瀬時習・市村慎太郎・野口舞2003『新上小阪遺跡』(財)大阪府文化財センター
布施市史編集委員会1962『布施市史 第1巻』布施市役所
別所秀高2002『宮ノ下遺跡第11次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財センター
別所秀高・パリオサーヴェイ株式会社1996『宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会
別所秀高・パリオサーヴェイ株式会社2002『弥刀遺跡第8次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会
松田順一郎2001「河内平野沖積平野南部における完新世後半の旧大和川分流量発達と人間活動」『環境と人間社会』埋蔵文化財研究会
三好孝一・市本芳三1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書－第5次－』(財)大阪府文化財調査研究センター
三好孝一・亀井 聡ほか1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告書－第4次－』(財)大阪文化財センター
八尾市史編集委員会編1977『八尾市史 文化財編』八尾市役所
安田喜憲1987「河内平野の古環境復原に関する諸問題」『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告3』大阪府立弥生文化博物館
吉田東伍1900『大日本地名辞書』富山房

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法 (図7)

今回の調査区はJR城東貨物線の路線内に位置する。現在でも貨物線は機能しており、日に何本かの貨物列車が通過する。列車を通すためには一定の空間が必要で、「建築限界」と呼ばれる列車との距離が必要である。今回は、JR西日本が定めた「営業線近接工事保安関係標準指示方書」に添って調査を実施した。

調査は亀田遺跡04-1-1～5、弓削ノ庄遺跡04-1-1・2の計7ヶ所の調査区で実施した。また、確認調査を、東大阪市南西部遺跡群確認調査04-1-1調査区で実施した。

亀田遺跡は北から順に04-1-1と番号を付け、5調査区を調査した。各調査区の規模は04-1-1は東西6.8m×南北15.8m、04-1-2は東西6.4m×南北13.6m、04-1-3は東西6.8m×南北32.4m、04-1-4・5は東西6.8m×南北52.8mである。

弓削ノ庄遺跡も北から順に04-1-1と番号を付け、2ヶ所の調査区を調査した。各調査区の規模は04-1-1・2とも東西6.8m×南北52.8mである。

各遺跡の調査面積は、亀田遺跡が1,134㎡、弓削ノ庄遺跡が720㎡、調査区全体で1,854㎡となった。

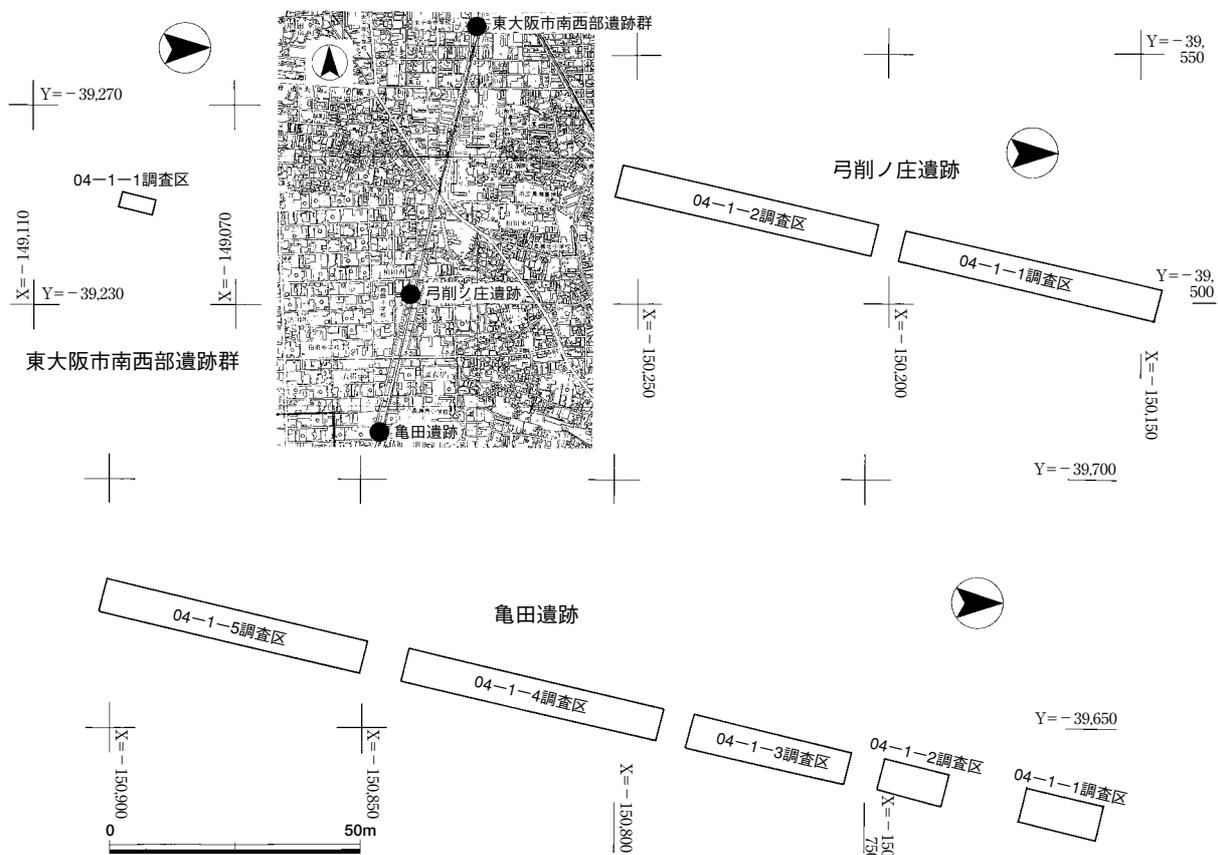


図7 亀田・弓削ノ庄遺跡・東大阪市南西部遺跡群調査区配置図

第3章 調査の成果

東大阪市南西部遺跡群04-1-1の確認調査は前年度の1調査区の南東側に近接して設定された。規模は東西3.2m×南北7.2mの範囲で矢板を打設して実施した。約1.4mの機械掘削後に人力でT.P.+0.8m前後まで掘削した。調査面積は23㎡である。

亀田・弓削ノ庄遺跡は「建築限界」があるため、東西方向が調査範囲ギリギリに設定されていた。したがって、両遺跡とも北側からしか進入路が確保できなかった。また、矢板の打設が北側より行われたため、反対側からの調査も実施できなかった。以上のことからまず亀田遺跡04-1-1調査区から調査を開始し、矢板の打設が終了するのをまって、南に調査を展開していった。当初、調査の待ち時間をなくすために、反転で作業を実施しようとしたが、進入路の確保や本体工事の規制などから実現しなかった。

発掘調査は、まず盛土およびバラス（鉄道線路内の石）を機械掘削によって除去し、以下を人力掘削面として実施した。人力掘削の掘り下げにあたっては、各層の下面で遺構の検出を行った。

調査の記録方法については、財団法人大阪府文化財センターが定めた「遺跡調査基本マニュアル」に沿って行った。しかし、一部マニュアルに添えなかった部分もあり、記録方法について明示したい。

出土遺物の取り上げについては、本来は、マニュアルの地区割り（国土座標を基準とした地区割り）に沿って行うべきではあったが、今回の調査区は幅が狭く、また、北東-南西方向に長いトレンチ状を呈しており、この地区割りを使用することは適当ではないと判断し、各調査区を2～5分割して遺物の取り上げを行っている。

各遺構面の記録は、平板測量によって行った。特に弓削ノ庄遺跡ではコンクリート基礎杭、2段の梁があり、測量作業は非常に困難であったが、杭間5ヶ所に基準点を設け、測量を行った。また、各遺構平面図、断面図、遺物出土状況図は状況にあわせて作成した。また、土層断面は調査区の西側に設定し各調査区との繋がりを持たせるようにした。

写真撮影については、梁、覆鋼板やその桁、コンクリート杭によって、調査区全体が分かるような撮影は行うことができなかったが、できる限り遺構の検出状況を把握できる撮影を工夫した。また、調査区は暗く、明かりが充分ではないところでは、フラッシュを用いて撮影を行った。

また、遺跡周辺の古環境を復元することを目的に、花粉・珪藻分析を行った。分析結果については第4章を参照いただきたい。

遺構番号は調査区ごとに1から付しており、本書では番号の前にハイフンで調査区番号を結んで示している。また、遺構の種類については、番号の後ろに付した。ただし、掘立柱建物・方形周溝墓・杭列は別に番号を振りなおし、後ろに番号を付している。

なお、各種台帳はマニュアルに沿って、遺跡単位で作成している。

以下調査の成果では遺跡ごとに、第2節亀田遺跡、第3節弓削ノ庄遺跡、そして、第4節東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査と南から順に記述を進めることとする。

第2節 亀田遺跡

第1項 基本層序（図8～10）

GLから約1.6mは盛土で、機械による掘削を行った。調査区は南西から北東方向に長いトレンチを呈しており、北の1調査区から、最も南端の5調査区まで、総延長200mと長い。全体的に北に下降している。周辺は旧大和川の主流のひとつである長瀬川が北流し、大和川付け替え以前は、河川から多量の土砂が供給されていたと考えられ、今回の調査区でも複数の洪水砂が確認された。

以下、基本層序について上層から記述する。調査区は非常に長く、調査区間が5～15mあいているが、標準断面図（図8）で全体の層序を示すとともに、各調査区の西側の断面図（図9、10）を掲載した。土色に関しては、対応する層であっても、場所によって土色、土質、混合物が違っている場合もあったが、1～9層については2調査区、10～16層については5調査区の土色の注記を代表させ、各調査区で土色の注記は割愛した。

1層 耕作土である。非常にグライ化が著しい。中世までの遺物を含む。

2層 細～中砂を主体とする洪水堆積層である。層厚30～40cmを測る。ラミナがみられ、植物遺体を層状に含む。下層は粘性のあるシルトがみられる。調査区全域にみることができる。

3層 灰色細砂混じりシルトである。カルシウムを非常に多く含む。層厚5cmと非常に薄く、調査区によっては確認できなかった。

4層 暗オリーブ灰色細砂混じりシルトである。植物遺体、カルシウムを多く含む。特にヒシの実を非常に多く含んでいる。湿地状の環境であったと考えられる。層厚10～20cm前後を測る。4層上面を第1面として遺構検出を行った。

5層 灰色シルト～細砂混じりシルトである。カルシウムを多く含む。5層上面を第2面とした。

6層 暗紫灰色細砂混じりシルトである。カルシウムを多く含む。6層上面を第3面とした。

5、6層は耕作土と考えられ、それぞれ2層に細分できる箇所もある。層厚はそれぞれ10～30cmを測る。5層と6層の間には砂の薄層が確認され、それを境に2層に大分した。5調査区ではこの砂層が厚く堆積しており、層厚15～30cmを測る。ここでは、洪水砂の上面を第3-1面、下面を第3-2面とする。また、5、6層上面は非常に乱れており、平面でも、マーブル状に上層が残る。このような痕跡は地震によるものと考えられる（図版1-2）。5、6層内からは遺物の出土が少ないものの、7～8世紀の土師器、須恵器片が出土している。

7層 灰色細砂混じりシルトである。植物遺体を含み、自然堆積層である。層厚5～10cm前後を測る。7層上面を第4面とした。

1、4、5調査区では6層と7層の間に洪水砂がみられる。特に4、5調査区では非常に厚く、層厚40cmを測る部分もある。5調査区では調査区の南側で洪水砂の間に、植物遺体や、細砂をラミナ状に含んだシルト層がみられ、上下2層に分けることができる。洪水砂上面を第4-1面、下面を第4-2面とする。洪水砂からは遺物の出土は少ないものの、同じ洪水砂で埋没した流路からは古墳時代前期の遺物が少量出土している。

8層 灰色シルトである。下層の遺物包含層である9層の窪んだ部分に堆積している自然堆積層である。

層厚5～10cmを測る。布留式土器が出土している。

7層、8層とともに自然堆積層であるが、間に植物遺体を非常に多く含む薄い黒色土がみられ、それを境に2層に分けている。植物遺体層の下面を第5面とした。また、植物遺体層と8層の間に、2、3調査区では砂層がみられる。

9層 暗青灰色細砂混じりシルトである。9層上面を第6面とした。層内からは2、3調査区を中心に弥生時代後期の土器が非常に多く出土している。1～4調査区中央では9-1層、9-2層に細分できる。9-2層は9-1層に比べて土壌化が弱く、暗色が弱い。9-1層上面を第6-1面、9-2層上面を第6-2面とした。また、4調査区南側から5調査区では土壌化が弱く、遺物の出土も非常に少ない。層厚は2、3調査区では20～30cmと厚い部分もみられたが、全体的には10cm前後を測る。

7～9層上面も乱れており、地震によるものと考えられる。また、9層上面は起伏に富んでおり、結果、7、8層もそれに対応した堆積状況を呈している。

1～3調査区北半は9層除去面で、緑灰色細砂～シルト混じり細砂の自然堆積層に達し、この上面で調査を終了した(第7面)。第3調査区南半から南側は9層より下層で、最大で4枚の土壌化層が確認された。

10層 灰色の粘性のシルト層で、植物遺体を筋状に含む自然堆積層である。カルシウムを含む。3調査区および、4調査区北側では薄く、層厚5cm程度で上下の土壌化層が接する部分もみられる。4調査区南側、5調査区北側では厚く、細分することができ、9層との間に洪水砂がみられた。10層上面を第7面とした。

11層 暗青灰色の細～中砂混じりシルト～シルトの土壌化層である。層厚10cm前後を測る。4調査区南側で僅かに弥生時代後期の遺物が出土している。上面を第8面とした。

12層 青灰～明オリーブ灰色の粗砂～細砂混じりシルト～シルトである。非常に粘性の高い自然堆積層である。層厚20cm前後を測る。上面を第9面とした。

これより下層については5調査区のみでサブトレンチをもうけて調査を行った。

13層 青灰～暗青灰色のシルトである。非常に粘性が高く、炭を粒子状に含む。層厚20cmを測る。土壌化層である。カルシウムを含む。13層は基本的に調査区北側のみで確認できる。層厚10cm以下である。

14層 緑灰色の細砂混じりシルトの自然堆積層である。層厚10cmを測る。

15層 暗灰色の中細砂である。5調査区の北半のみで確認された。層厚10cm以下である。

16層 青灰色の細砂である。

12層以下では遺物の出土はみられない。

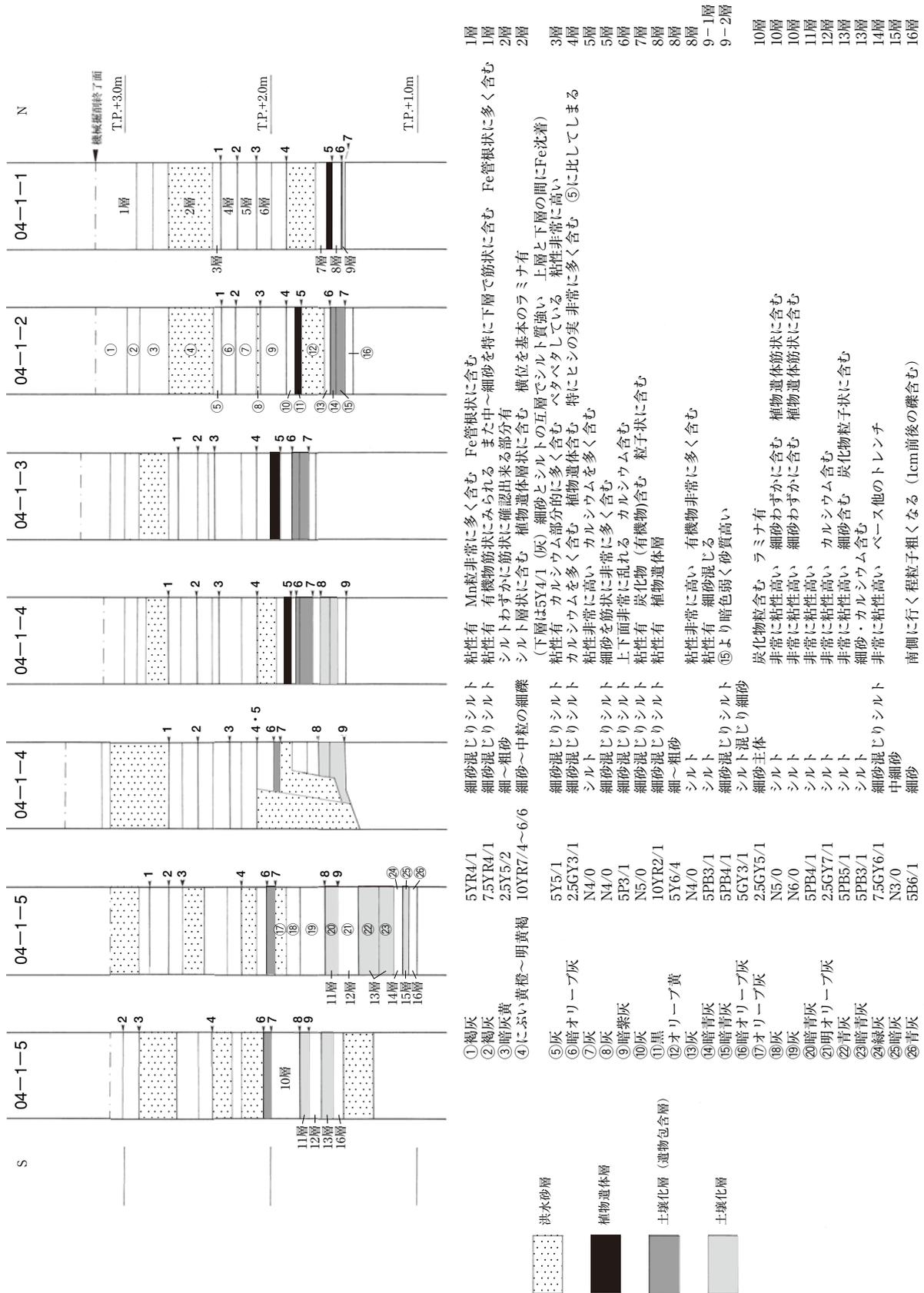


図8 亀田遺跡土層断面模式図

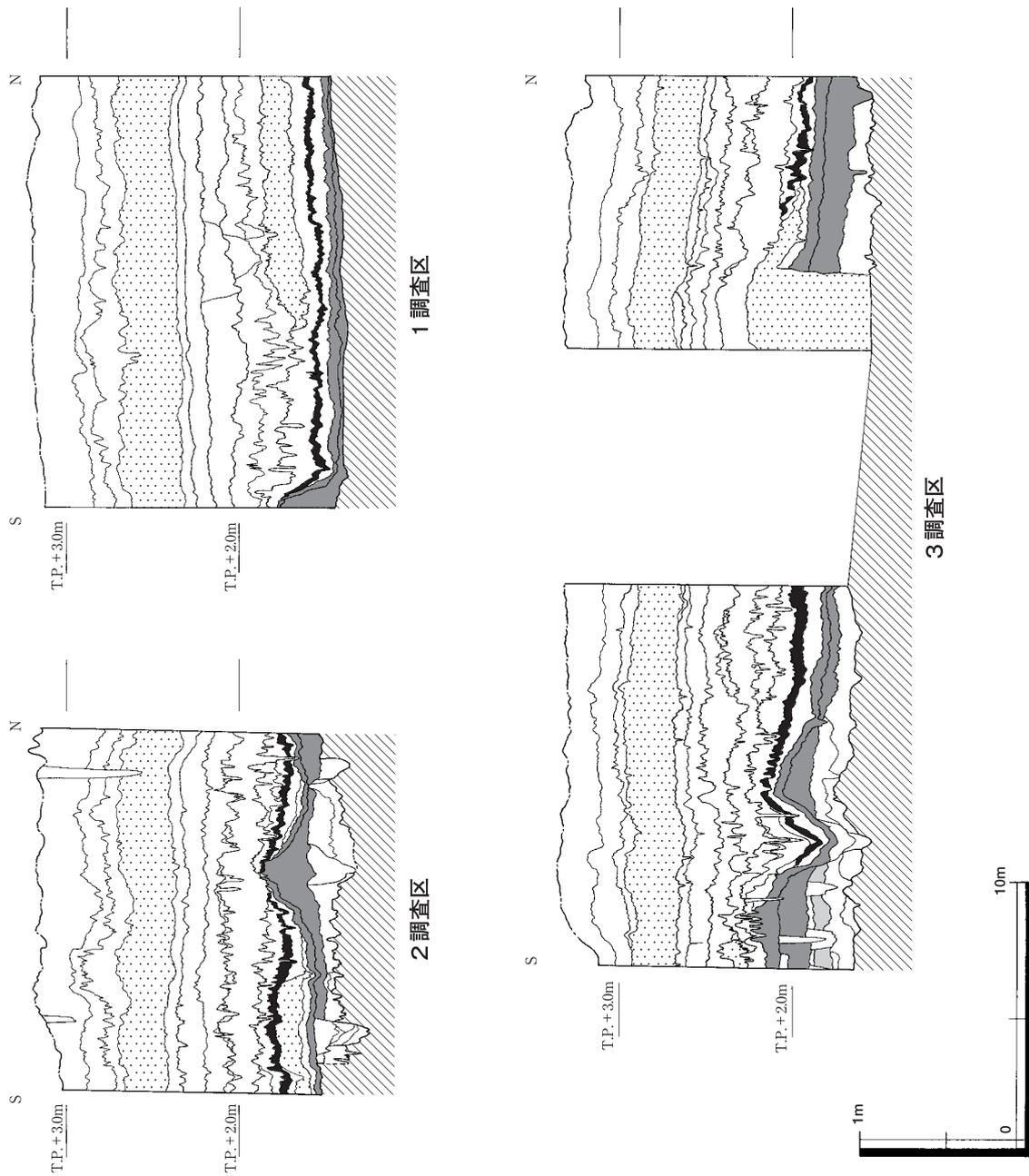


図9 1～3調査区 土層断面図

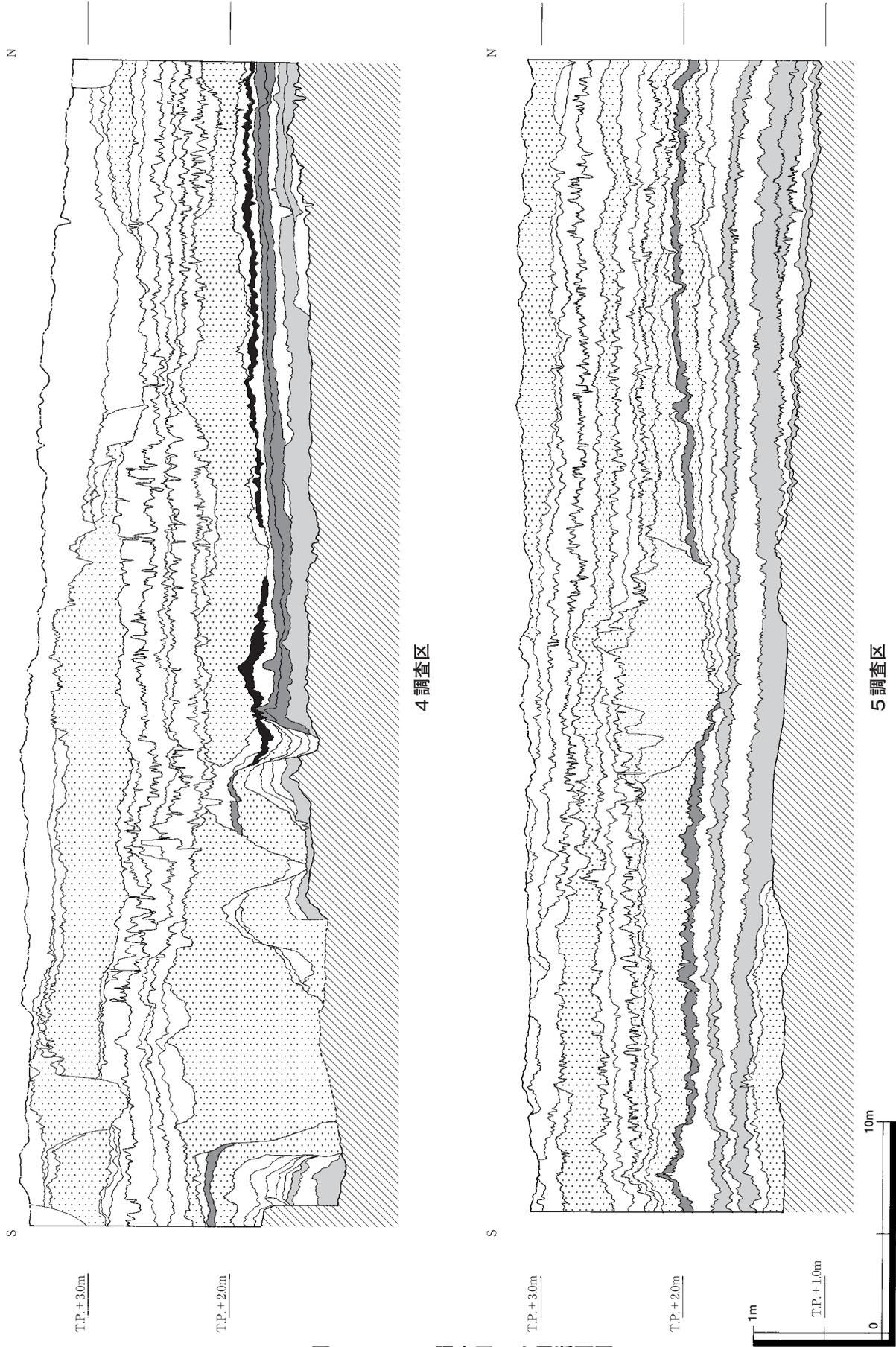


図10 4・5調査区 土層断面図

第2項 調査成果

ここでは各遺構面について、上面から成果の記述を行う。整理の方法で述べたように、各遺構については遺構番号の前に調査区番号を付している。また、出土遺物については、煩雑になるため、大きく第1～5面（～古墳時代前期）、第6面（古墳時代前期）、第6-2面～第9面（弥生時代後期）に分けて、記述を行っている。

第1面 4層上面を第1面として、遺構検出を行った。3～5調査区では足跡を検出した他は、明瞭な遺構を検出していない。最も南の5調査区で約T.P.+2.8m、第1調査区では約T.P.+2.4mを測り、北に向かって下降する。

なお、第1面より上層については、4調査区では2層上面（第1-1面）で遺構が検出されたが、他の調査区では明瞭な遺構はなく、特に遺構面としていない。4調査区第1-1面では東西方向の4-1溝を検出した。幅約2.5m、埋土は砂を主体としており、一度に埋没したと考えられる。

各層の時期を判断するため、1層と一連の洪水堆積層である2、3層に分けて掘削を行ったが、遺物の出土は非常に少なく時期を特定することはできなかった。1層からは平瓦、土師質の羽釜・すり鉢等が出土しており、3層からは平瓦が出土している（図20）。

第2面 5層上面を第2面として、遺構検出を行った。5調査区で約T.P.+3.0m、1調査区でT.P.+2.2mを測り、第1面同様に北に向かって下降する。5層は耕作土の可能性が考えられたが、畝溝、畦畔等の検出はできなかった。

第3面 6層上面を第3面として遺構の検出を行った。5調査区南端でT.P.+2.5m、1調査区北端でT.P.+2.1mを測り、上面同様北に向かって下降する。第2面と同様、耕作土の可能性が考えられたが、畝溝、畦畔等は検出できなかった。3調査区では調査区南西端で溝の肩を検出した。埋土は砂である。

基本層序で述べたように、5層と6層の間には砂の薄層がみられるが、5調査区ではその洪水砂が他の調査区に比べて厚く、約10～30cmを測る。その上下面で遺構検出を行ったが明瞭な遺構は検出していない。

第2、3面では遺物の出土も見られなかったが、5、6層から飛鳥～奈良時代の土師器杯身片が数点出土している（図20）。

第4面 6層下面、自然堆積である7層の上面を第4面として遺構の検出を行った。4、5調査区では6層の下層に洪水砂がみられ、この洪水砂上面を第4-1面（第4面）、洪水砂除去面を第4-2面とした。第4面は5調査区南側ではT.P.+2.3m、1調査区ではT.P.+1.7mを測り、北に向かって下降する。

1調査区では調査区の北側が落込んでおり、細砂が約20cmの厚さでみられた。4、5調査区でみられた洪水砂に対応するものと考えられる。また、4調査区では調査区の南側で南北方向に浅い溝状の落込みを検出した。この部分は、下面の第4-2面で流路が検出されており、第4面段階には若干の窪みとして残ったものと考えられる。また、調査区は平坦ではなく、3～5調査区では下層の砂層が高まり

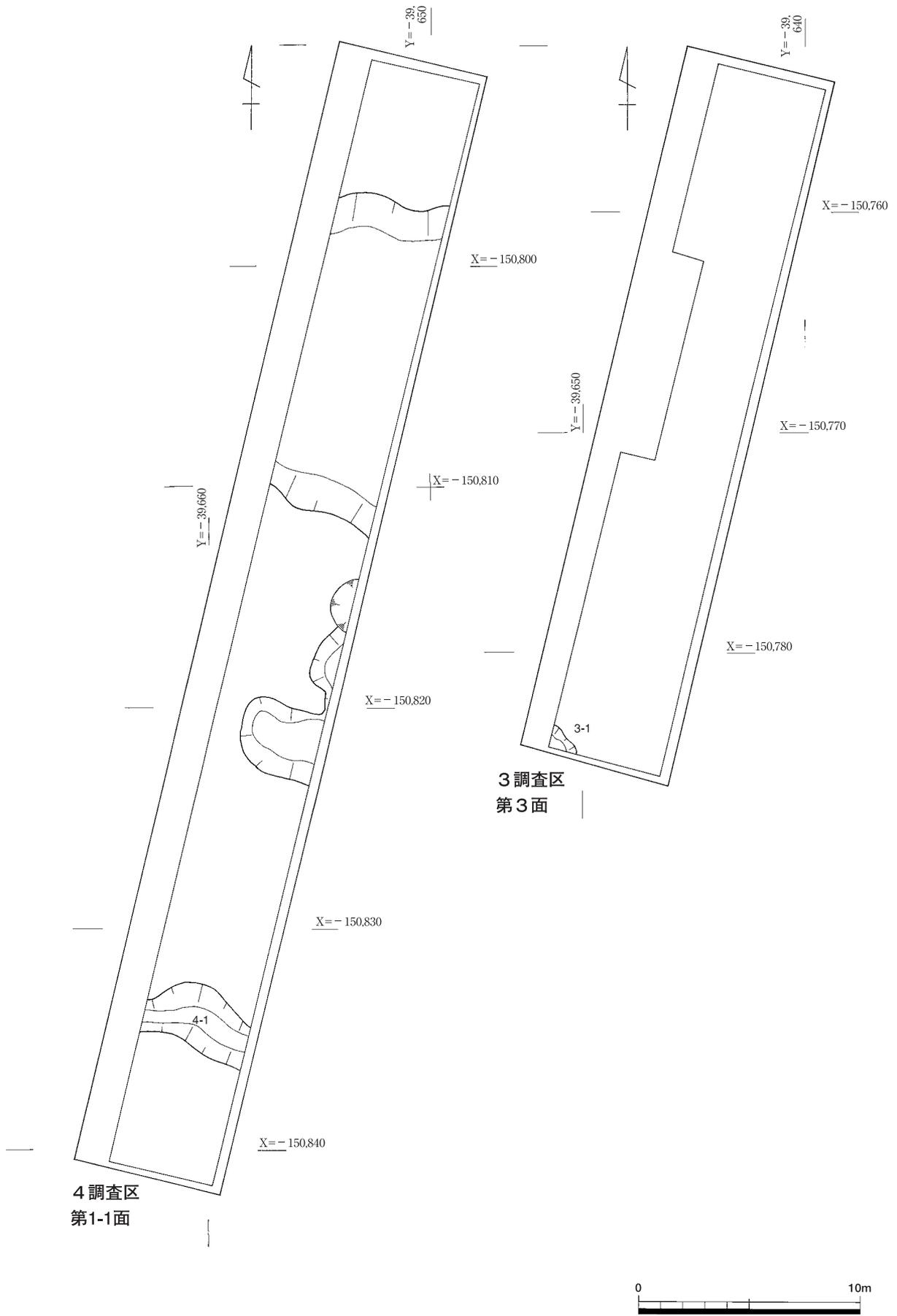


図11 第1-1・3面 遺構分布図

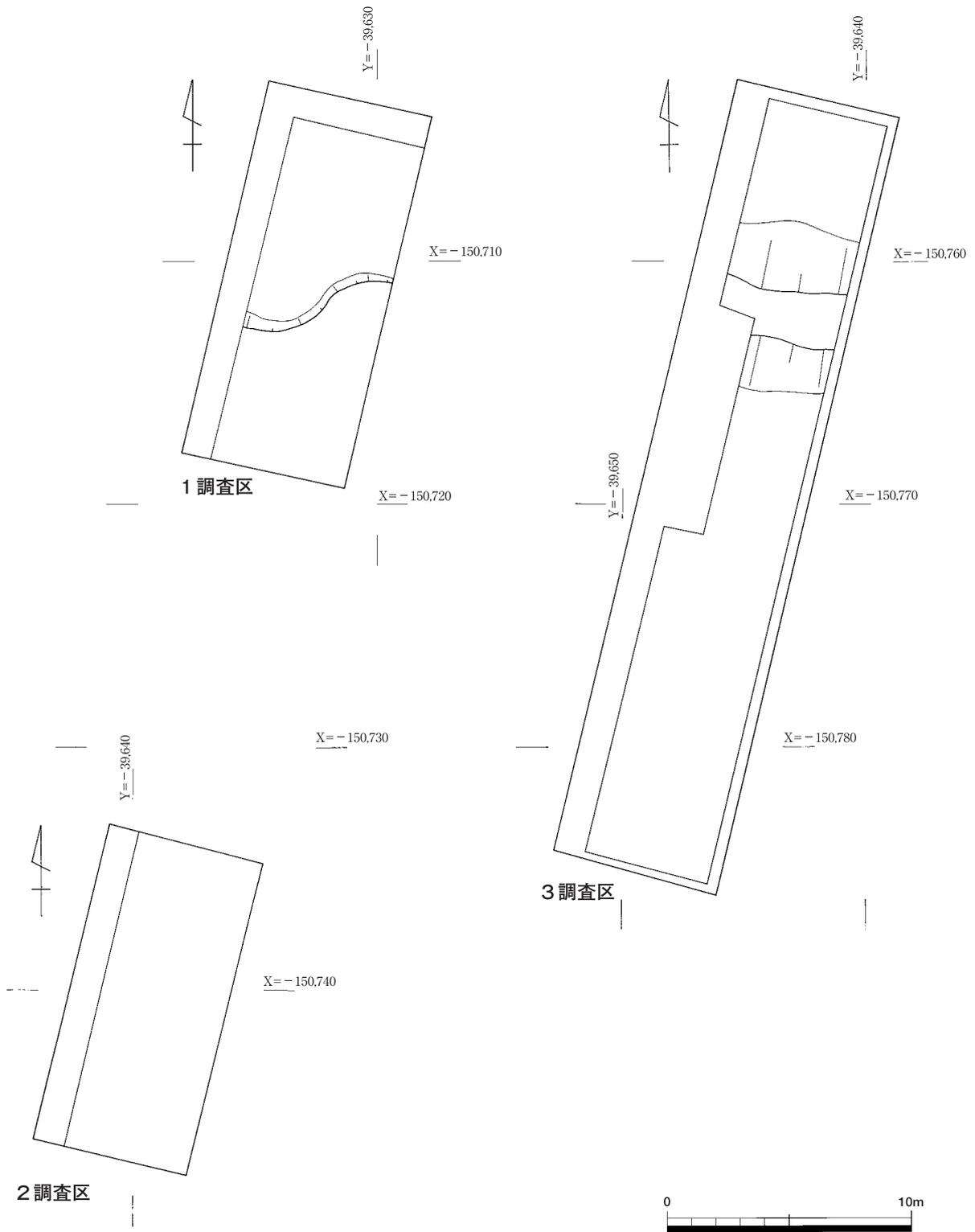


図12 第4面 遺構分布図(1)

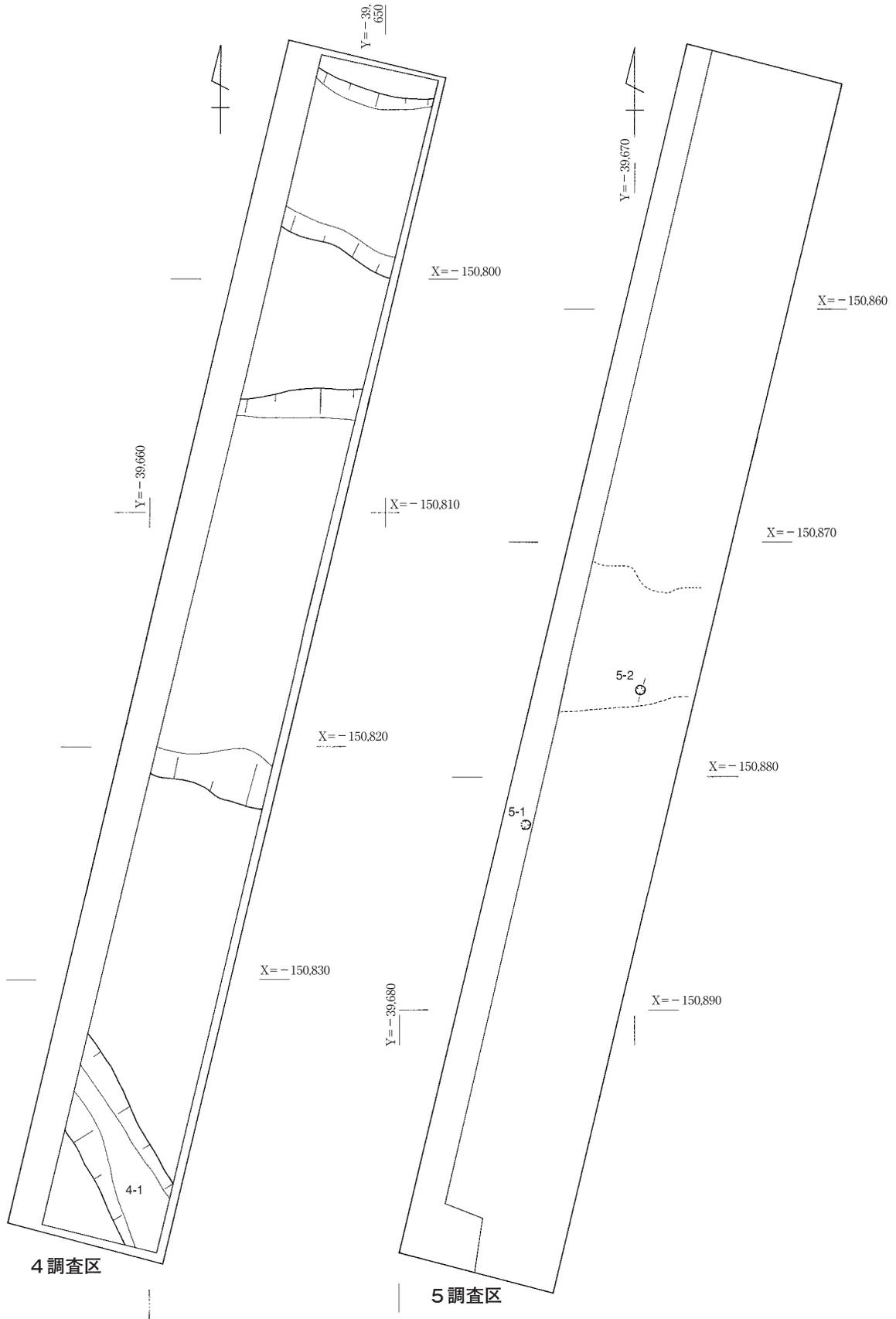


図13 第4面 遺構分布図(2)

状を呈する部分のみがみられた。遺構は全体に希薄であったが、5調査区では土坑を検出した。

5-2土坑 (図14) 5調査区中央で検出した。この部分は、下層の洪水砂が高まり状を呈しており、露出している。土坑は直径約40cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。須恵器杯身が1点出土した。杯身は伏せた状態で、土坑の底近くで出土しており、ほぼ完形である (図20-18)。

他にピットを1基検出した (5-1ピット)。

第4-2面 第4-2面は、5調査区南側でT.P.+2.2m、4調査区北側でT.P.+2.0mを測り、北に向かって下降している。4調査区では洪水砂除去面が、起伏に富んだ地形となる。調査区南半ではいくつかの高まりがあり、この高まりを挟むように並行する杭列2、3を検出した。調査区の北側でも東西方向に杭列1がみられる。その他に4-1流路を検出した。

杭列1 (図18) (図版2-3) 杭列を検出した部分はやや周囲に比べて、落込んでおり、植物遺体や自然木片などが非常に多くみられた。2本一組にして前後2列に交互に配置する。杭の間に板などを設置し、それを留めていたことも考えられる。約3mの長さが確認できた。杭は基本的に割り材を用いており、長さは50~60cmを測る。

杭列2、3 (図19) (図版2-1、2) 杭列2は、他の杭列に比べて遺存状況が悪く、杭の先端が遺存していないものも多い。杭列1と同様に、前後2列を基本としていると考えられる。ただし、南側に2本の杭があり、これを含めると3列と考えることもできる。この南側の2本の杭は先端が残っておらず、長さは不明であるが、割り材ではなく、丸太材である。他の杭は割り材を使用しており、杭長10~60cmを測る。杭列は約2.8mの長さが確認できた。杭列3は最も遺存状況がよく、また、杭もほかの2つに比べて、太く、長い。長さ約1mを測るものもあり、第6面に深く突きささっている。しかし、先端は加工しているものの、第6面に達していないものもあった。丸太材の先端を尖らせるのみのものが多い。この点でも杭列1、2とは異なる。また、杭に挟まれて横たわった状態の材が出土している。横木の可能性も考えられるが、遺存状況は悪い。杭列は約3mの長さが確認できた。

この2本の杭列は西側の高まりに達したところで途切れる。高まりの北側には4-5溝が位置しているが、この溝は下面の第6面で掘削された溝であり、第4-2面、第5面では溝状に窪んでいる。限られた範囲であり、杭列の性格は判断できないが、高まりと関連した機能をもつものと考えられる。

杭の打設された時期についても判断は難しい。洪水砂の上面である第4面検出時に、杭の頭部を検出している。杭列1については、上層の洪水砂が杭列付近で盛り上がり、また、ラミナも乱れる。自然木や植物遺体が杭列北側に比較的多く見られた点から、最終的に洪水砂で埋まったと考えられる。一方、杭列2、3についてはその先端が第6面に達せず、上層の洪水砂の途中で杭先がとまっているものが、わずかだがあり、洪水砂堆積後 (第4-1面) に打設された可能性も考えられる。ここでは、やはり杭列付近で上層の洪水砂が盛り上がっていたこと、第4-2面で検出された高まりを挟むように検出していることから、杭列1と同様に洪水砂で埋没したと考え、第4-2面に対応する遺構と判断した。

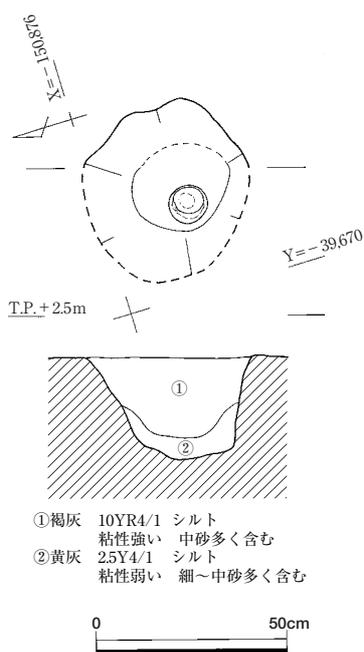


図14 5-2土坑 平・断面図

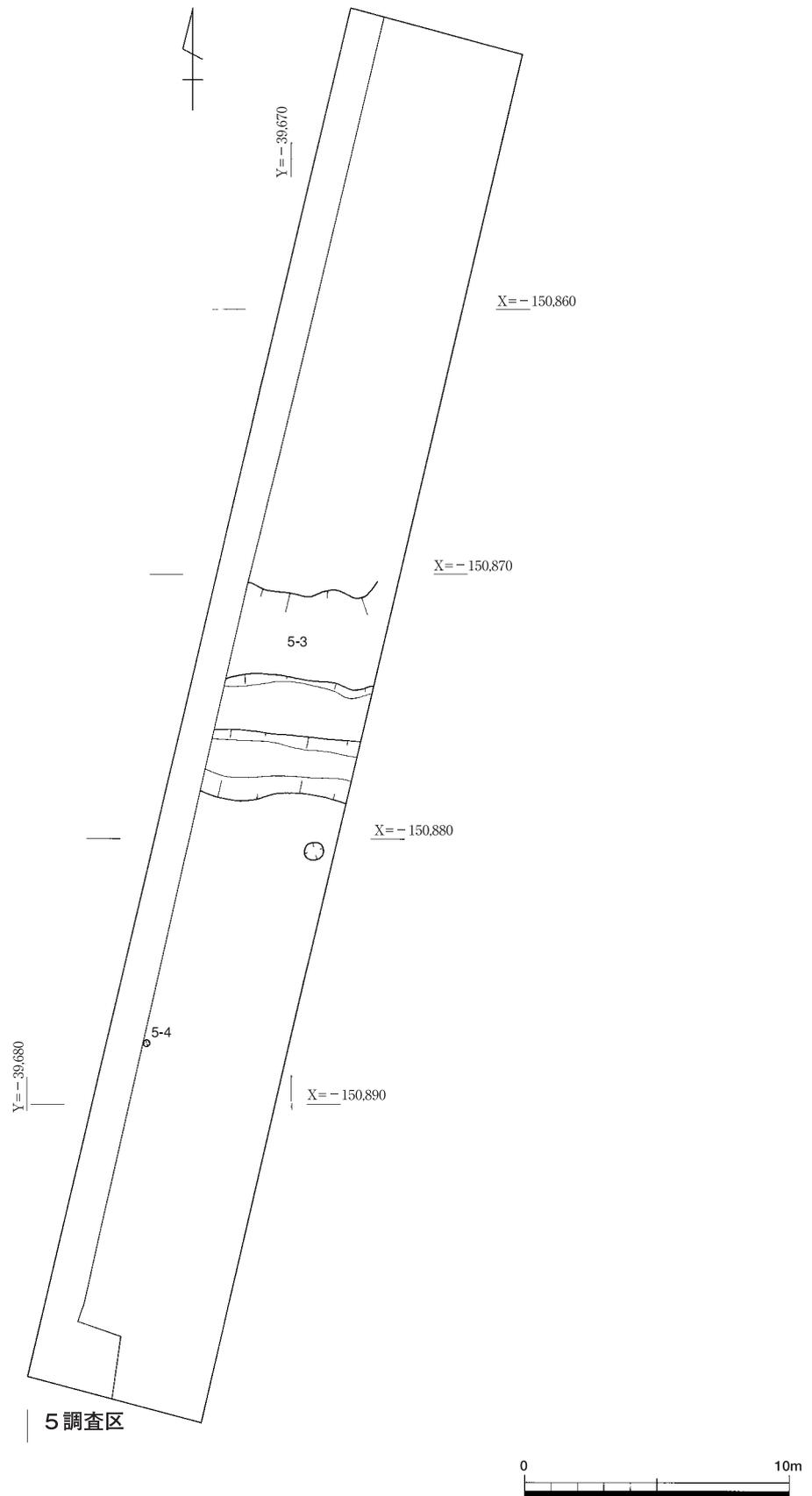


図15 第4-2面 遺構分布図

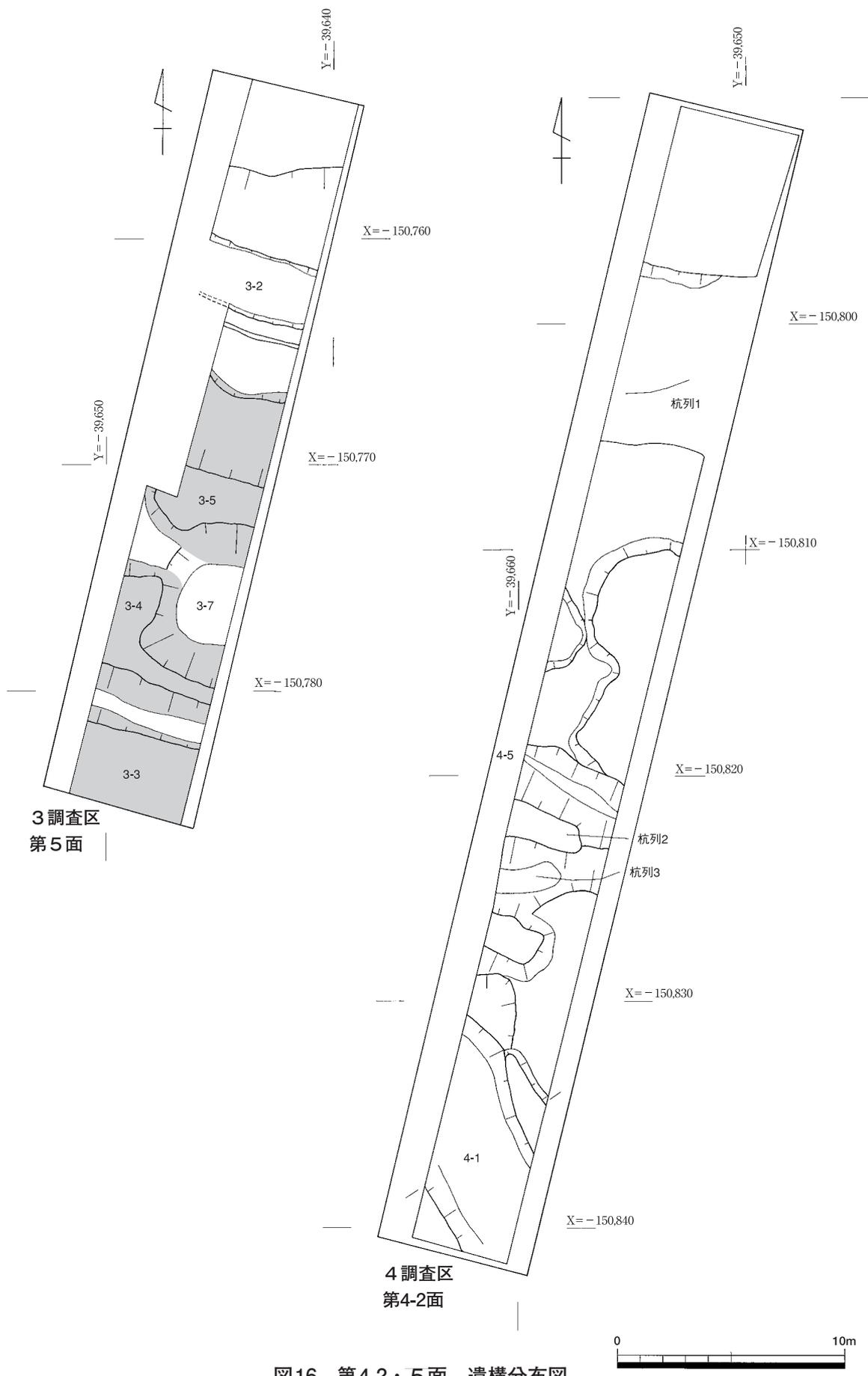


図16 第4-2・5面 遺構分布図

4-1流路 (図17) 4調査区南端で北東-南西方向の流路を検出した。幅5m、深さ0.9m以上を測る。掘削限界のため完掘することはできなかった。埋土は砂を主体とし、ラミナがみられる。

遺物の出土は少ないが、ローリングを受けた土師器片が出土している他、古墳時代前期の小型丸底壺が出土している (図20-19、20)。

5-3流路 5調査区中央で東西方向の流路を検出した。幅8m、深さ0.6mを測る。この流路は上層の洪水砂で埋まっている。3溝および周辺の洪水砂からは木製品が出土している (図21-1~4)。調査では6層洪水砂と下層の7層洪水砂が接している部分であり、調査区北側では、一部同時に掘削している。

全体に遺物の出土が非常に少なく、時期の判断は難しいが、5-2土坑から出土した須恵器より、第4面は7世紀中頃、また第4-2面はこれより以前と考えられる。

第5面 自然堆積層である8層上面を第5面として遺構の検出を行った。1調査区北側でT.P.+1.6m、5調査区南側では第4-2面と同様T.P.+2.2mを測る。下層の9層が盛り上がっている部分では、9層が露出しており、高まり状になる箇所もみられる。

3調査区では落込み、流路を検出した。

3-2流路 調査区北半で検出した。幅3m、深さは0.6m以上を測る。掘削限界に達したため、完掘できなかった。埋土は砂を主体とし、洪水によって埋没したと考えられる。溝の南北に砂層の広がり確認できた。遺物の出土は少ないが、磨滅した土師器が出土している (図20-21、22)。

2調査区でも、調査区南半で砂層が見られる。層厚20cmを測り、3調査区の3-2流路、および周辺でみられた洪水砂と同時期のものと考えられる。

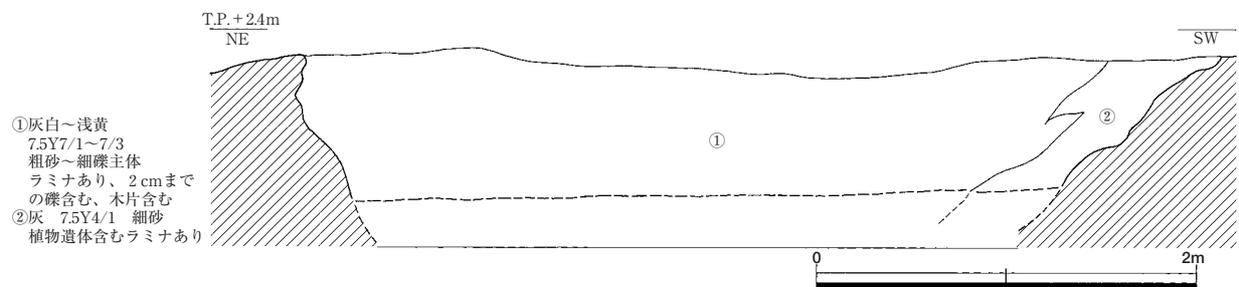


図17 4-1流路 断面図

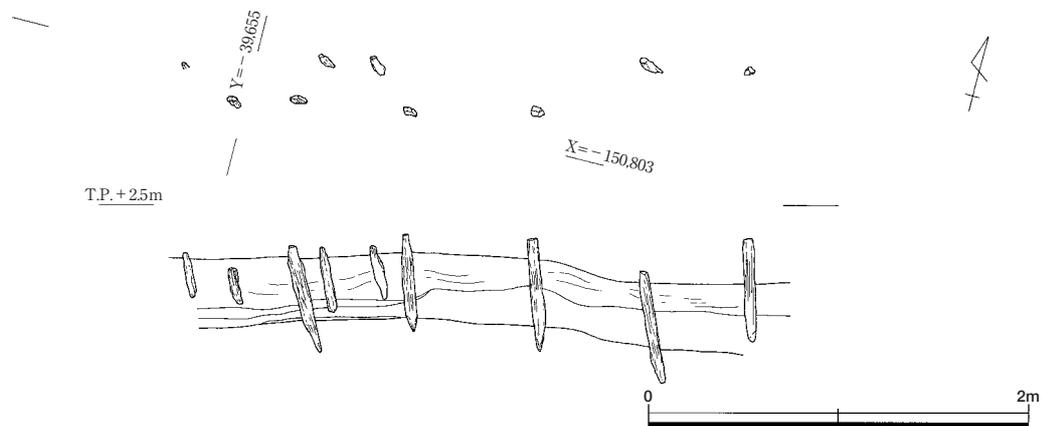


図18 杭列1 平・立面図

1～6層、第4～5面出土遺物（図20）（図版19）

1～5は1層出土遺物である。1は播鉢である。2は土師質の甕、あるいは羽釜の口縁部である。3は土師質の羽釜である。2、3は口縁部形態が非常に似通っており、断面四角形を呈する。3は鏝より下側は煤が付着している。4、5は平瓦である。凹面に布目が残る。

6は3層から出土した平瓦である。凹面は布目が明瞭に残り、凸面は縄目タタキを施す。二次焼成を受けている。



図19 杭列2、3 平・立面図

7～17は5～6層出土遺物である。7～9は土師器杯身である。7は内面に放射状の暗文を施す。8は内面に放射状の暗文を施し、外面には横方向にヘラミガキ、下半はケズリを行う。9は内面に放射状の暗文を施し、外面は横方向にヘラミガキを疎に施し、下半は指オサエ。10は土師器皿である。内面は底部に螺旋状の暗文を、体部には放射状の暗文を施す。11～13は土師器皿、あるいは杯である。細片で、口径等は不明である。いずれも口縁端部が肥厚して玉縁状を呈する。14、15、17は須恵器杯身である。14、15は口縁部が短くやや内側に立ち上がる。17は口縁部が上方へ立ち上がる。下層遺物

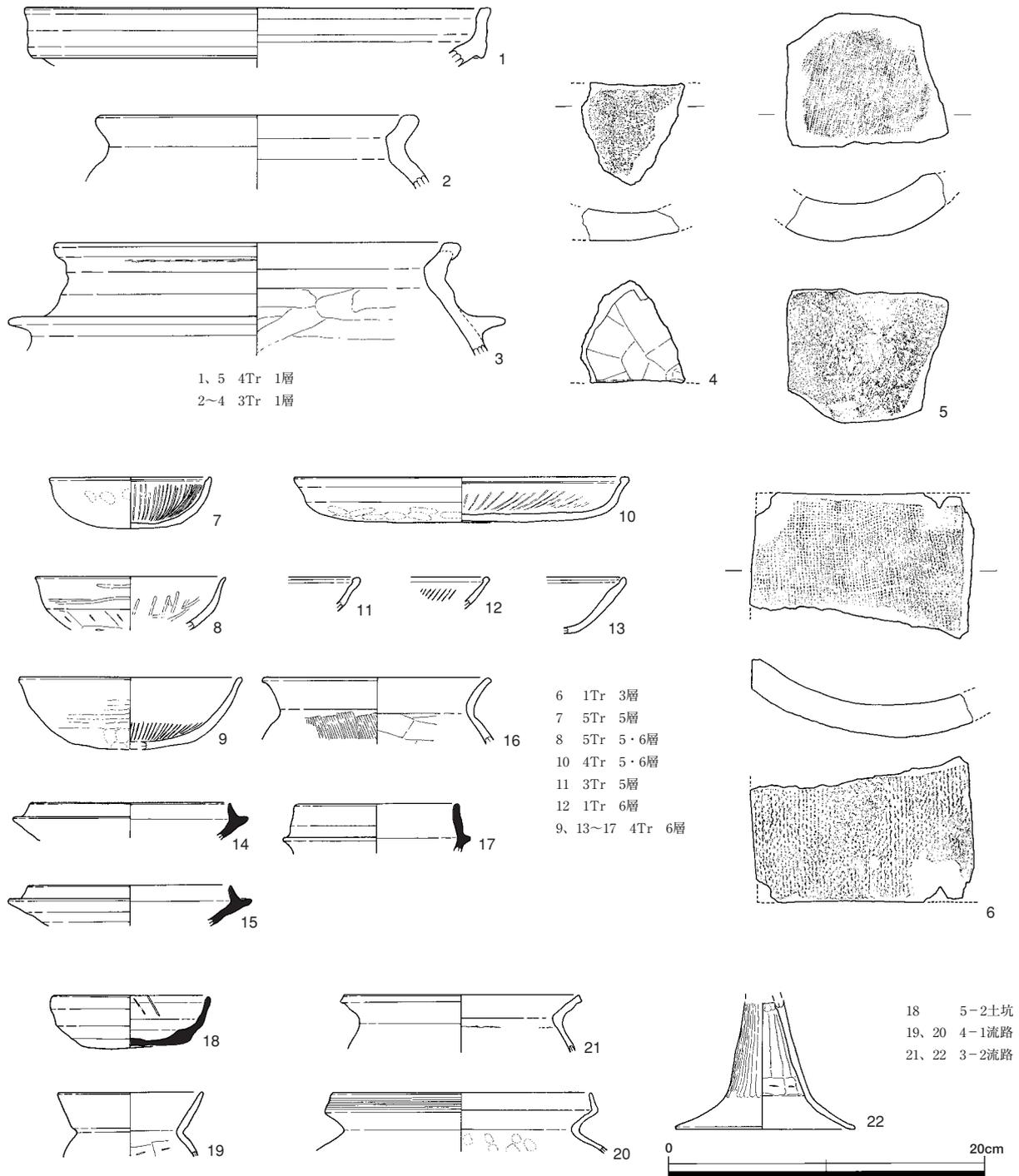


図20 1～6層、第4～5面 出土遺物

の混入と考えられる。16は土師器甕である。調整は体部外面がハケメ、内面はケズリである。

18～22は遺構出土遺物である。18は5-2土坑から出土した須恵器杯身である。口縁部付近にヘラ記号がある。底部はヘラオコシ後未調整である。19、20は4-1流路から出土した。19は小型丸底壺である。体部下半は欠損しているが、口縁部は長く、大きく上外方に開く。20は甕である。

21、22は3-2流路から出土した。21は土師器甕である。磨滅が著しく調整は不明。22は土師器高杯である。脚柱部内面は絞り痕が残り、外面はミガキを施す。

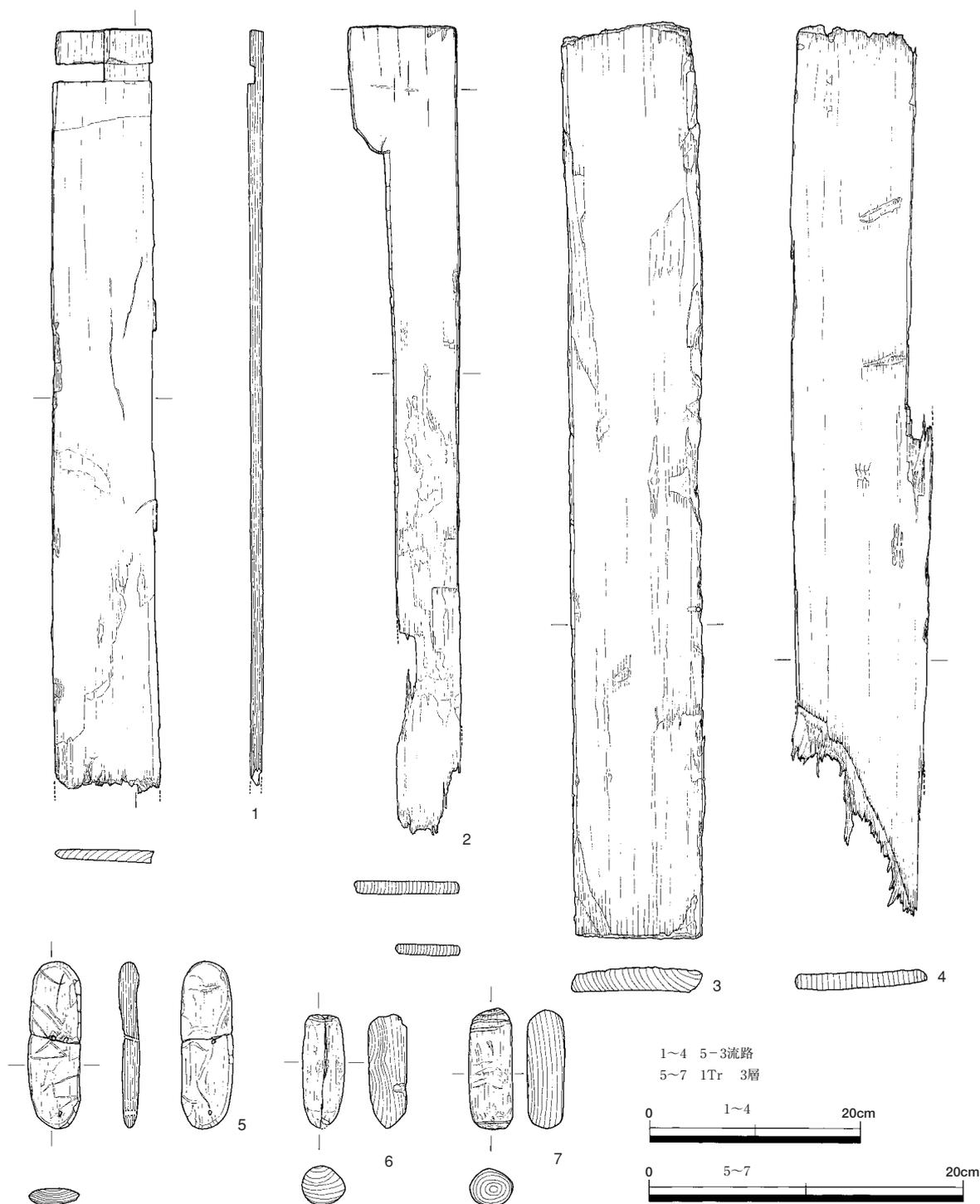


図21 出土木製品 (1)

遺構、遺物とも希薄であったが、5、6層は飛鳥～奈良時代の遺物を含み、下面の第4面は5-2土坑出土の須恵器杯身から飛鳥Ⅱ段階の時期が与えられる。第4-2面、第5面は流路からではあるが古墳時代前期の遺物が出土している。また第7層洪水砂から古墳時代後期の遺物がわずかに出土している。

出土木製品（図21）（図版25）

調査では流路、洪水砂から木製品が出土している。

1～4は5-3流路から出土した。いずれも幅10cm程度の板状を呈し、細部の加工が異なっている。用途は不明であるが、いずれも製品というより、部材の一部と考えられる。1は幅9.9cm、残存長72.4cm、厚さ1.1cmの板状を呈する。上部は仕口の加工を施す。2は中央付近の幅が6cm、厚さ約1cmを測る。長さは欠損しているため不明であるが76.9cm遺存している。頭部は片側が張り出した形状を呈する。下約1/4の部分に四角くくりこみがみられる。3、4も板状の木製品である。3は幅12.3cm、残存長87.2cm、厚さ2.3cmを測る。右側縁際に釘孔と考えられる直径0.4cm前後の孔が4ヶ所確認できる。孔は裏面に向かってやや斜めにあく。4は幅12.3cm、残存長84.5cm、厚さ1.5cmを測る。

5～7は1調査区3層から出土した。長楕円を呈し、6、7は断面円形を呈する。5は断面楕円形を呈する。長さは5が大きく10.6cm、6は7.2cm、7は7.7cmを測る。5には直径0.2cmの小さな孔が穿たれる。木製品の用途は不明であるが、浮きとして使用されていたのであろうか。

第6面 遺物を多く包含した土壌化層である9層上面を第6面として遺構検出を行った。1調査区北端でT.P.+1.5m、5調査区南端でT.P.+2.0mを測り、全体としては北側に下降している。ただし、状況は一樣ではなく、数ヶ所で地形の高まりが確認できる。この高まりは、9層、9-2層を母材としているが、上面の第4-2面、第5面でも高まりとして検出されている。2調査区では2-1～3の3ヶ所の高まりを検出した（図版3-2）。3調査区では3-3、5高まりの2ヶ所で高まりを検出した。比高差は約20～30cmを測る。主な遺構としては、1調査区で水田を、4調査区、5調査区で溝を検出した。

1調査区では水田を検出した。

1-1水田（図22）（図版3-1） 1調査区で検出した。畦畔はいずれも残存状況が悪く、3cmほどの盛り上がりとして認識できるのみである。北東-南西方向の畦畔の残りが比較的良好であった。1調査区は調査の方法で述べたように、掘削深度の問題から第6面は約1m周囲を残しての検出となっている。そのため、平面では確認できていないが、調査区南端は30cmの高まり状を呈しており、この高まりより北側に、水田が広がっている。2調査区北端は2-2高まりがあるが、1調査区とは約15m離れており、これにつながるかは不明である。

4調査区では溝、落込みを検出した。

4-5溝（図25、26）（図版4-1～3） 4調査区の中央付近で検出した。北西-南東方向の溝である。幅約2.5m、深さ約0.5mを測る。溝の南西側は、高まり状になっており、高まり上部からは、約0.7mの深さを測る。溝の埋土は、上層は暗灰黄色細砂混じりシルトでカルシウムを多く含む。下層は灰色シルトで粘性が高い。特に埋土⑦は非常に植物遺体を多く含んでいる。このような堆積状況から、溝は随時流水していたというより、帯水した状況が考えられる。溝からは、古墳時代前期の直口壺（図28-6）がほぼ1個体、潰れた状態で出土した（図25）。

4-6落込み (図24) (図版4-4) 4調査区北半で検出した幅9 m前後の落込みである。布留式甕 (図28-1) 1個体が潰れた状態で、落込みの南肩付近で出土した。

5調査区北半では複数の溝を検出した。

5-6~10溝 (図27) (図版5-1) 各溝は幅30~50cm、深さは5cm以下と非常に浅い。いずれも上層の洪水砂を埋土としており、切り合いは確認できない。埋没直前まで機能していたと考えられる。調

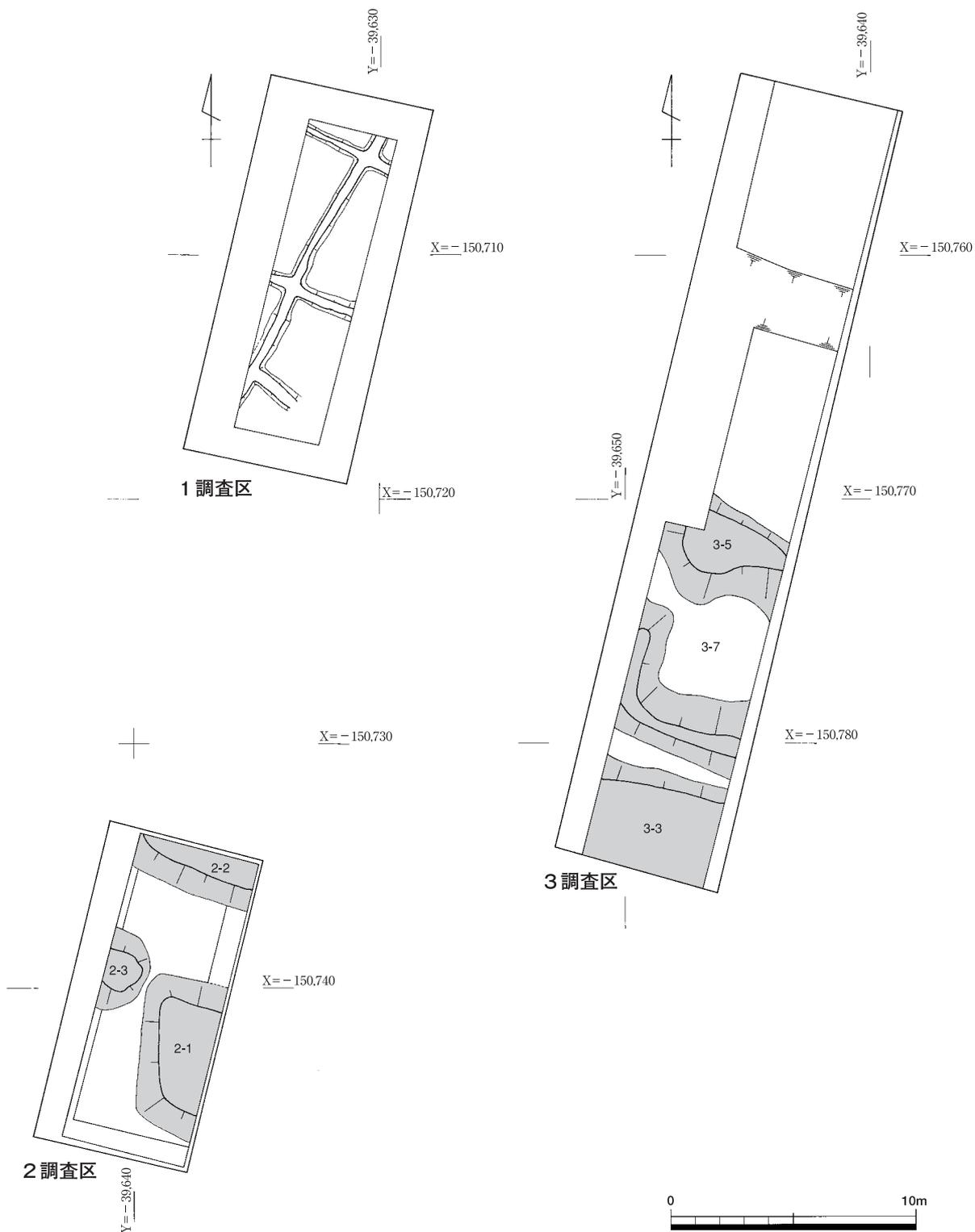


図22 第6面 遺構分布図 (1)

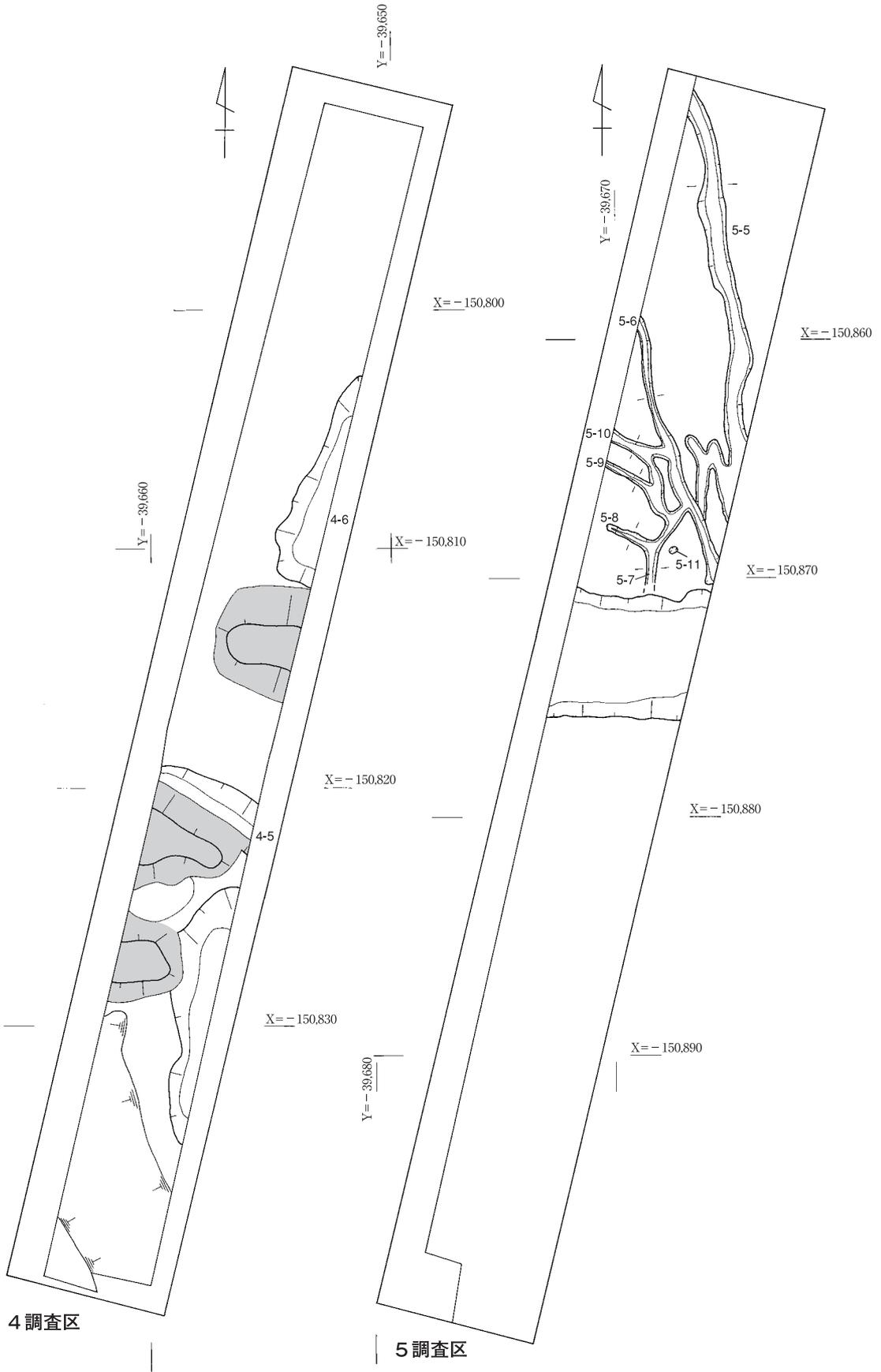


図23 第6面 遺構分布図 (2)

第3章 調査の成果

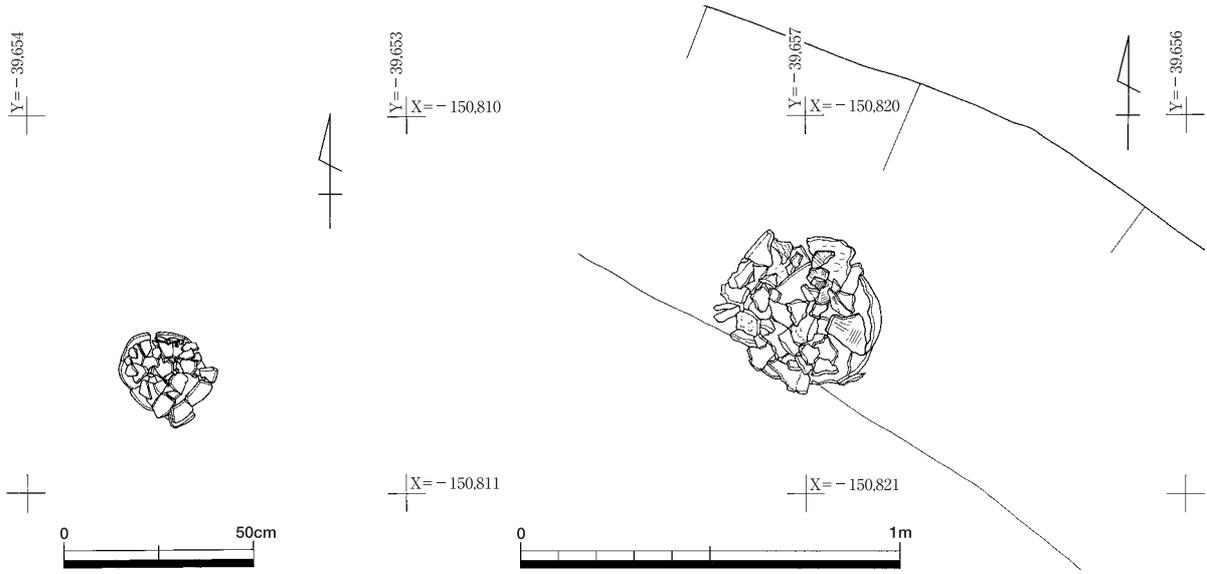


図24 4-6落込み 遺物出土状況図

図25 4-5溝 遺物出土状況図

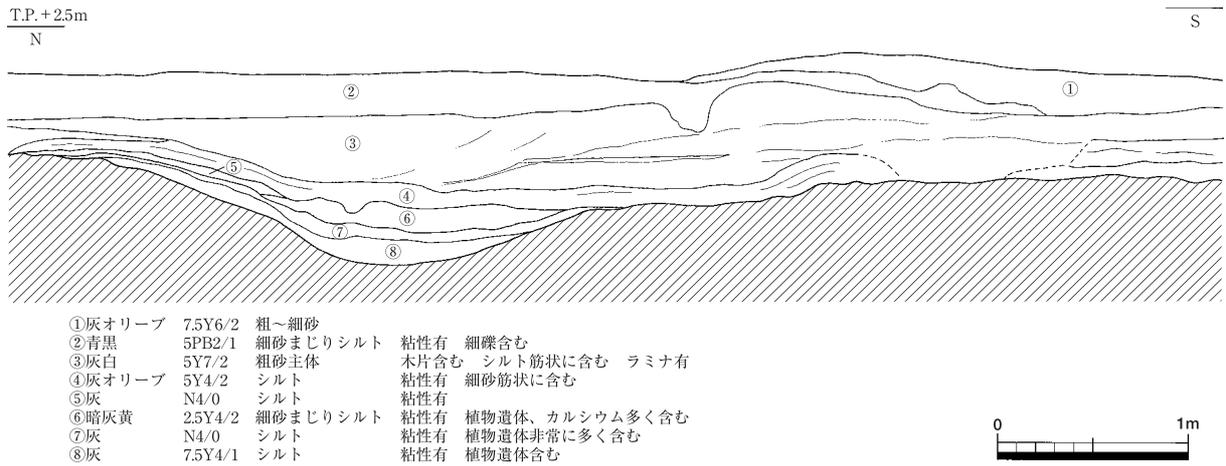


図26 4-5溝 断面図

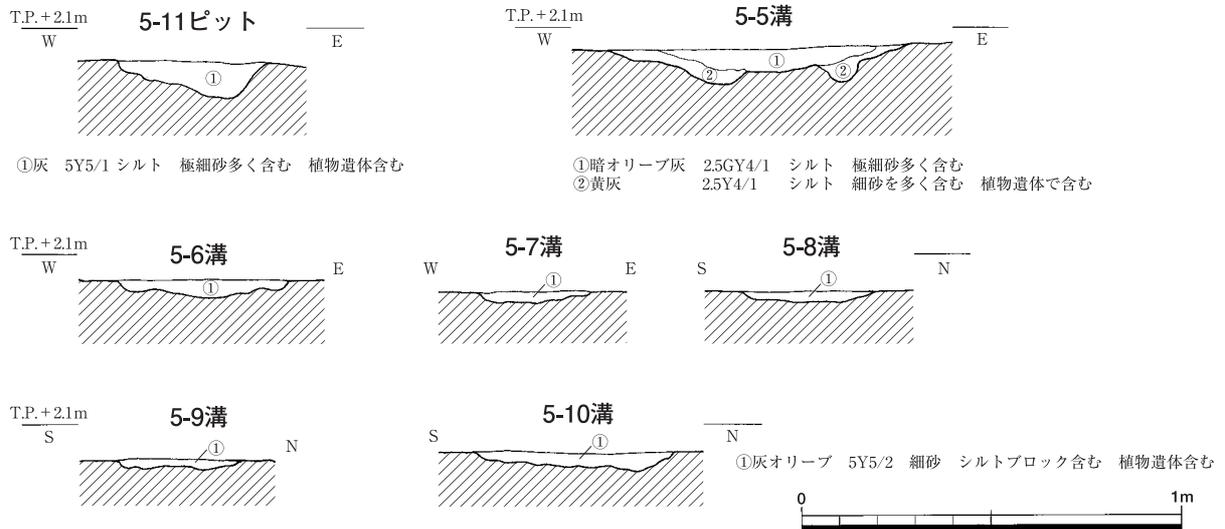


図27 第6面 ピット、溝 断面図

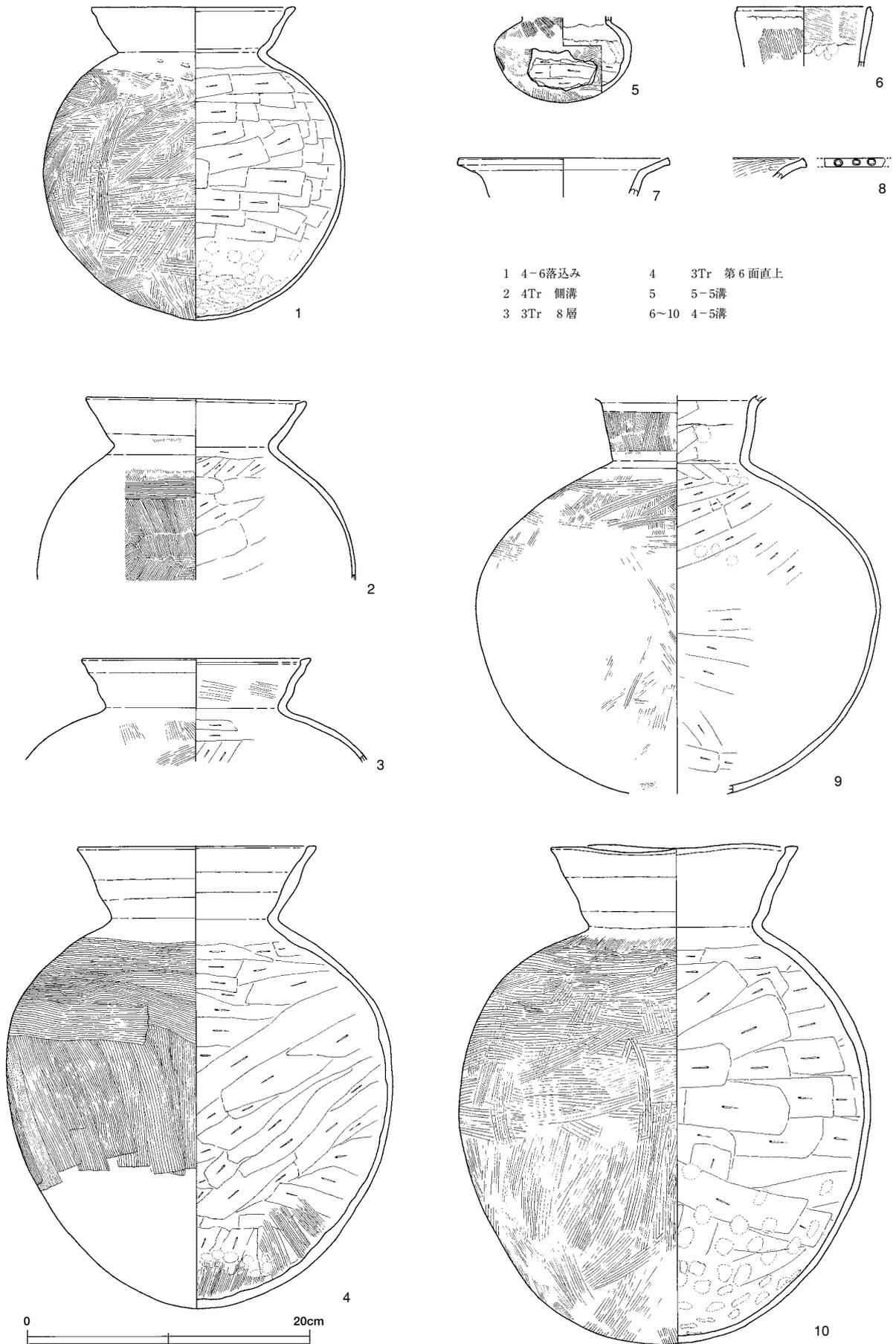


图28 第6面、8層 出土遺物

第3章 調査の成果

査区の幅が狭く、詳細は不明であるが、5-6溝および5-7溝に5-8～10溝が取り付く状況が考えられる。耕作に伴う溝と考える。遺物の出土はみられない。

5-5溝（図27）（図版5-2、3）南北方向の溝である。幅約80cm、深さは10cm以下と浅い。暗オリーブ灰色シルトで、細砂を多く含む。5-6～10溝とは埋土が異なっており、これより先出するものと考えられる。また、5-6溝とはほぼ平行しており、同様の機能をもつ溝と考えられる。

溝の南側で、口縁部がなく、体部に大きな穿孔を施した小型丸底壺が出土した（図28-5）。土器出土地点周辺では溝が二股に分かれたような状況を呈している。

3調査区では明瞭な遺構は検出できなかったが、第6面上面で古墳時代前期の遺物が出土している（図28-4）。

第6面、8層出土遺物（図28）（図版19、20）

1～3は布留式甕である。口縁部は1、2はやや内湾し、端部は内傾する面をもつ。3は直立気味で端部は内傾する面をもつ。1はほぼ完形で体部は球形を呈する。調整はいずれも体部外面はハケメ、内面はケズリである。1は体部内面下半に指頭圧痕が残る。1は4-6落込み、2は4調査区側溝から、3は3調査区8層から出土した。

4は直口壺である。口縁部はまっすぐ上外方に開き、端部はやや内傾して面をもつ。体部外面の調整は縦方向のハケメで、肩部は横方向にハケメ。内面はケズリである。ケズリは深く、凹凸が著しい。底部付近にはハケメ、指頭圧痕が残る。体部外面下半には煤が著しく付着する。3調査区第6面上面で出土した。

5は小型丸底壺である。口縁部は欠損しており、調整は体部外面はハケメ、内面は上半をナデ、下半はケズリである。体部下半に大きく約5cmの穿孔を施す。5-5溝から出土した。

6～10は4-5溝の出土遺物である。6は直口壺である。口縁部内外面にハケメがみられる。7、8は広口壺である。7は口縁部が屈曲して端部に面をもつ。8は口縁端部に面をもち、円形竹管文を施す。

9は口縁部が欠損しているが、二重口縁壺と考えられる。頸部は直線状に立ち上がり、縦方向のハケメがみられる。体部は中央に最大径をもち、球形に近い。体部外面の調整はハケメ、肩部には横方向のハケメがみられる。内面はケズリである。10は直口壺である。口縁部は直立して上外方に開き、口縁端部は内傾し、内側に肥厚して面をもつ。体部外面の調整は縦方向のハケメのち、肩部に横方向のハケメを施す。内面はケズリ、底部付近は指頭圧痕が残る。

これらの遺物は布留式期前葉の時期が与えられる。

第6面では落込み、溝以外に明瞭な遺構はなかったが、第6面および8層からは上記の古墳時代前期の遺物が出土した。出土数は少なかったものの、比較的完形率が高く、ローリングも少ないことから、近接して当概期の集落があった可能性が高い。また1調査区で水田が検出されており、水田の広がりも今後の調査で期待される。

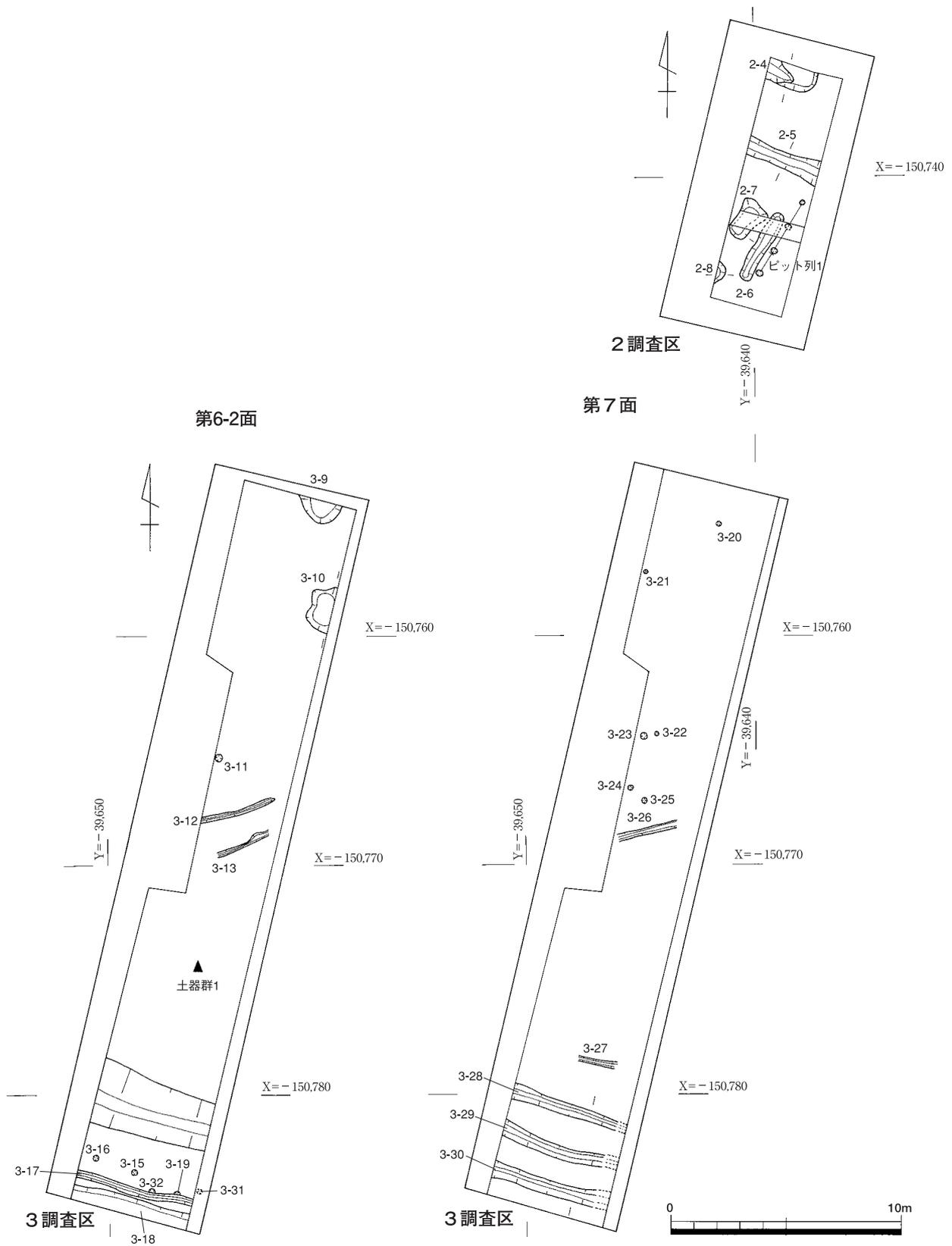


図29 第6-2・7面 遺構分布図

第6-2面 遺物包含層である9層を細分したうち下層の9-2層上面を第6-2面として遺構検出を行った。第6-2面でも第6面同様に高まりを確認している。なお、1、2調査区では2層に細分できたものの、遺構面としては検出していない。1調査区北側ではT.P.+1.5m、4調査区中央でT.P.+1.6mを測る。上面に比して、高低差は少ない。

3調査区で、溝、ピット、土坑を検出した。9層および、遺構内からは弥生時代後期の遺物が出土しており、当概期の遺構面と考えられる。

土器群1 (図30) 調査区中央で弥生時代後期の甕が3点まとまって出土した(図42-1~3)。この部分は、第6面段階に3-7落込みとした部分で、第6-2面でも南端に比べて低く落込み状を呈する。

3-15、16、19、31、32ピット(図31) 調査区の南側ではピットを5基検出した。ピットは直径20cm前後、深さ20~35cmを測る。3-15、16、19はピット間1.8~2mを測り、直線上には並んでおらず、ここでは柱列としていないが、ピットの規模も共通しており、柱列である可能性も考えられる。いずれのピットからも柱材などは検出していない。また、遺物も出土しなかった。

3-11ピット(図31) 調査区中央で3-11ピットを検出した。直径約25cm、深さ35cmを測る。柱材などは出土していない。ピットから土器片がわずかに出土した。

3-9土坑(井戸)(図32)(図版7-3) 調査区北端で検出した。土坑の北端が調査区外に伸びるため、全体は不明であるが円形を呈すると考えられる。東西約1.8m、深さ約0.5mを測る。断面台形を呈しているが、中程にわずかに段をもつ。土坑は砂礫層に達しており、湧水が著しく、井戸の可能性が考えられる。

特に中層は炭、遺物を多く含む。弥生時代後期の土器の他、板材が出土している(図43-3~10、図47-1)。

3-10土坑(図33) 3-9土坑の南に位置する。土坑の東側は調査区外になり、全体は不明であるが、南北1.2mを測り、深さは5cmと浅い皿状を呈する。埋土は炭を含む。遺物の出土は少なく、上層から鉢が出土している(図43-1)。

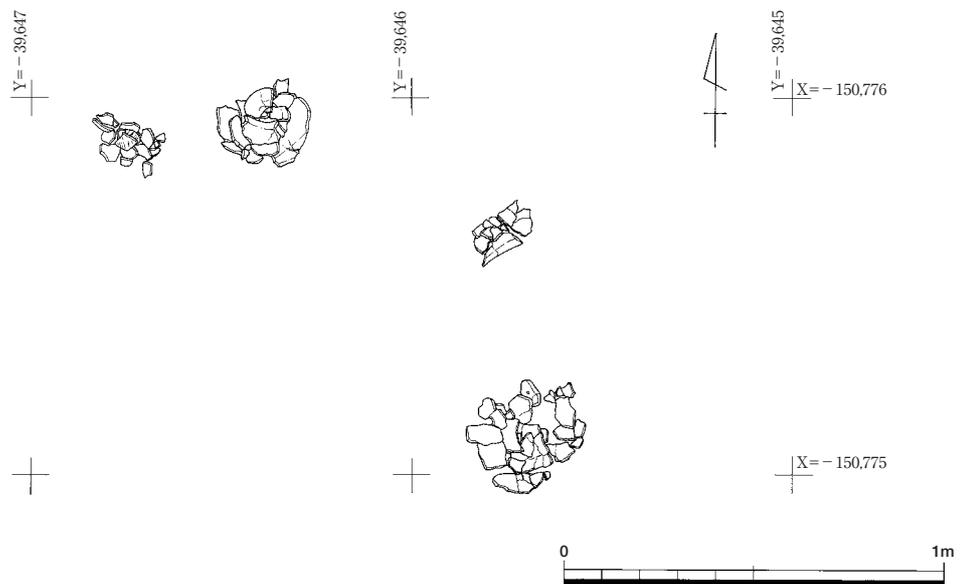


図30 土器群1 遺物出土状況図

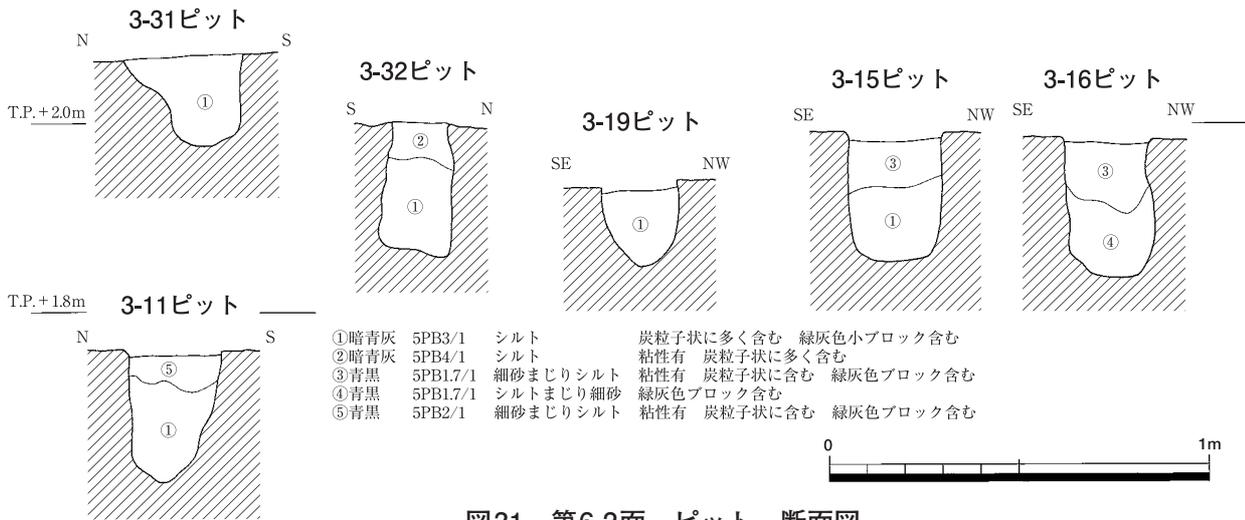


図31 第6-2面 ピット 断面図

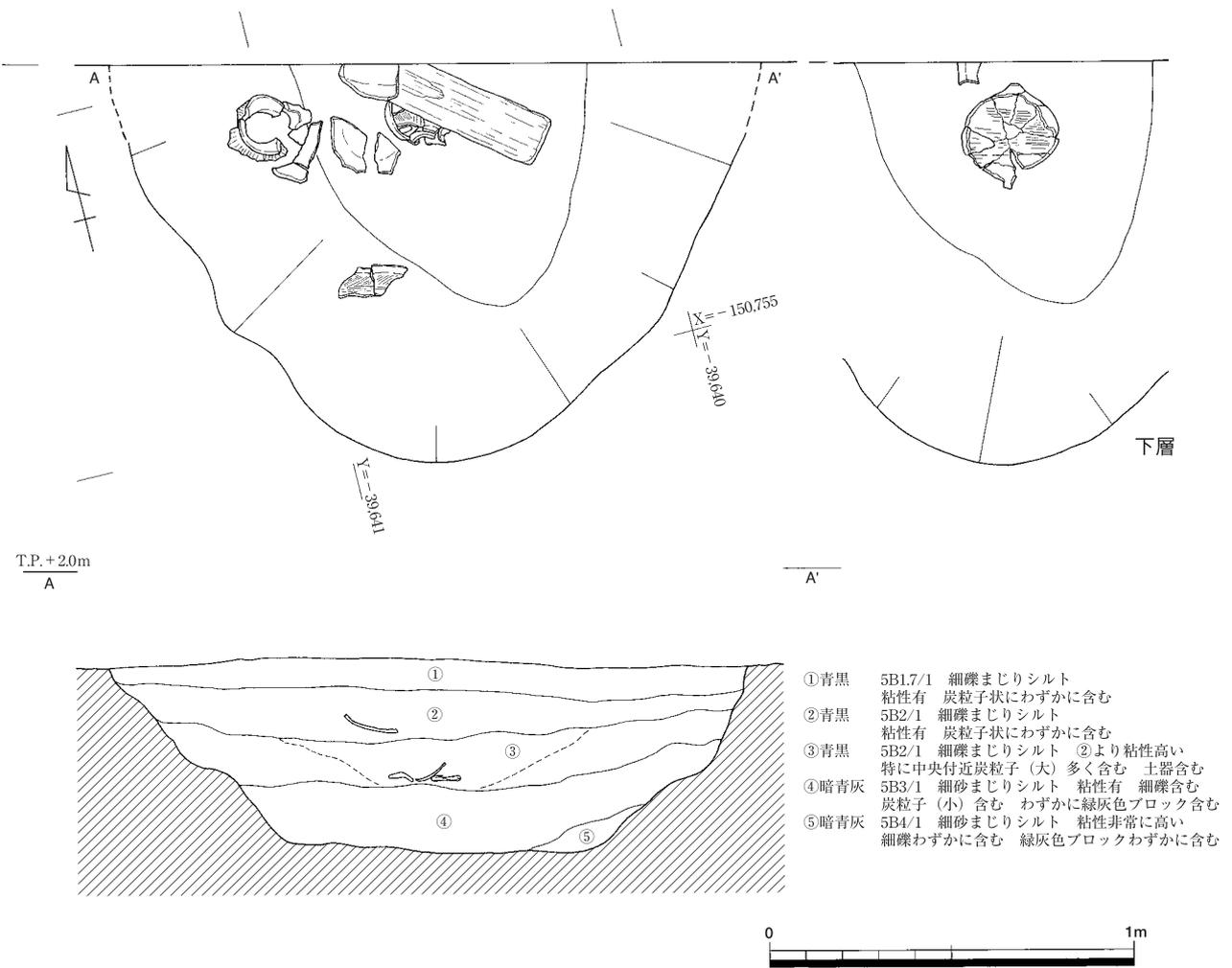


図32 3-9土坑 平・断面図

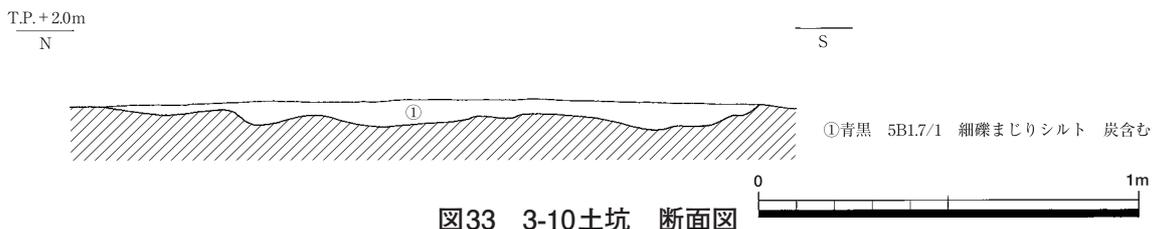


図33 3-10土坑 断面図

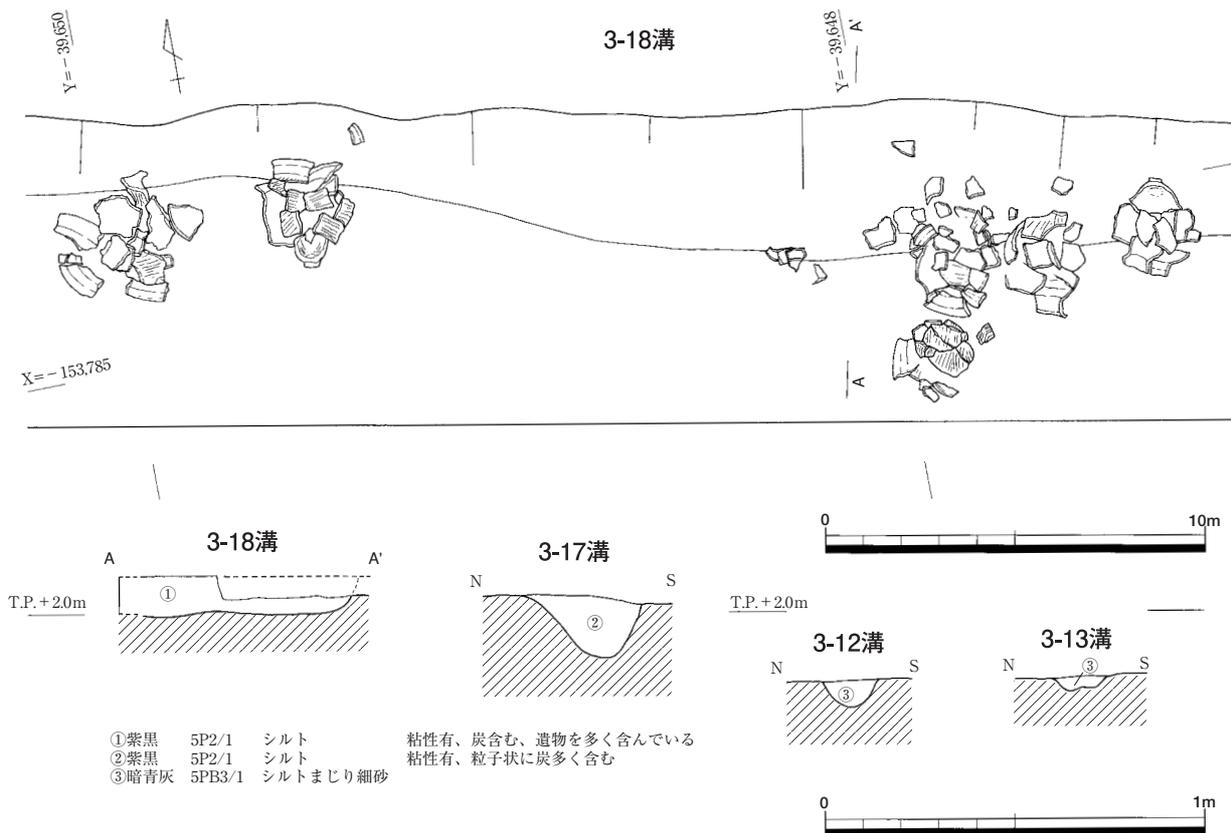


図34 第6-2面 溝 遺物出土状況・断面図

3-18、17溝 (図34) (図版7-2) 調査区南端で北西-南東方向の2条の平行する溝を検出した。3-18溝は南肩が調査区外となる。残存幅0.6mを測る。深さは10cmと浅い。溝からは弥生時代後期の遺物が多く出土しており、図化できたもので高杯、広口壺、甕の6点を数える (図43-11~16)。遺物の遺存状況は良好である。3-17溝は3-18溝の北側に非常に近接して位置する。溝は幅30cm、深さ20cmを測る。遺物の出土は少なく、細片を数点数えるのみであり、3-18溝とは対照的である。

3-12、13溝 (図34) 調査区中央付近で平行する溝を2本検出した。溝は北東-南西方向に伸びる。いずれも幅15cm、深さ5cm未満と浅い。土器の細片が出土している。

第7面 9-2層除去面を第7面として遺構の検出を行った。9層、遺構からは弥生時代後期の遺物が出土しており、当概期の遺構面と考えられる。

2調査区では柱穴、溝、土坑を検出した。第6-2面で遺構面の検出を行っておらず、第6-2面に対応する遺構も第7面で検出している。第7面は上面とは異なり平坦である。

ピット列1 (図35) (図版6-2) 調査区中央で検出した。北からピット2-12、11、10、9と柵列状に検出したが、南東側の調査区外に展開する掘立柱建物の可能性も考えられる。ピット間の距離は約1.2mを測る。各ピットは直径20~25cm、深さは20~35cm前後を測る。

2-9、12ピットでは柱が遺存しており、特に2-12ピットは柱の遺存状況が良い (図版6-3)。柱の底部は工具の痕跡が残っているが、それ以外は、加工の痕跡は残らない。2-11ピットでも木材が見られたが、ピットの底近くで横に倒れており、直径も非常に小さく、柱材というより、柱を固定させていた可能性が考えられる。2-10ピットは柱が遺存しておらず、柱痕跡が断面中程までしかない。上方は

ブロック土がみられ、柱が抜き取られたと考えられる。

2-6溝 (図36) (図版6-4) ピット列1に平行して、西側で検出した。幅60cm、深さ約6cmと浅い。長さは約3.2mを測る。ピット列1に関連した溝である可能性が高い。埋土は青黒色シルトで、粘性が高い。遺物の出土はない。

2-4溝 (図36) 調査区北側で東西方向に検出した。幅80cmを測る。溝は断面2段落ちで、深い部分では約15cmを測る。第6面の2-2高まりの裾部分に位置している。埋土は暗青灰色の細砂混じりシルトで、炭を多く含む。溝からは、弥生時代後期の土器および石器が出土している (図43-17・18、図48-1)。周辺の側溝からまとまって遺物が出土しており、本来はこの溝に伴う可能性が考えられる。

2-5溝 (図36) 調査区中央付近で検出した東西方向の溝である。幅約1m、深さ12cmを測る。埋土は青黒色のシルト混じり細砂である。遺物の出土はない。

2-8土坑 (図36) 調査区の南西で検出した。側溝で半分以上を掘削してしまい、平面形状は不明であるが、調査区の断面でも土坑の続きが確認できる。幅1m以上、深さ15cmを測る。埋土は2層に分

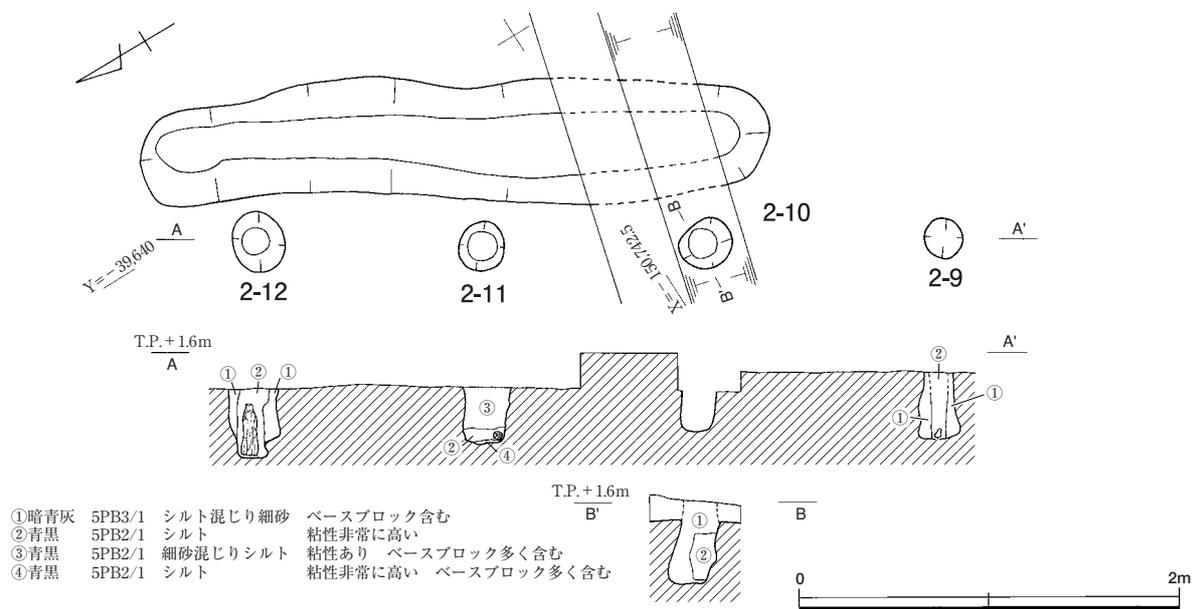


図35 第7面 ピット列1 平・断面図

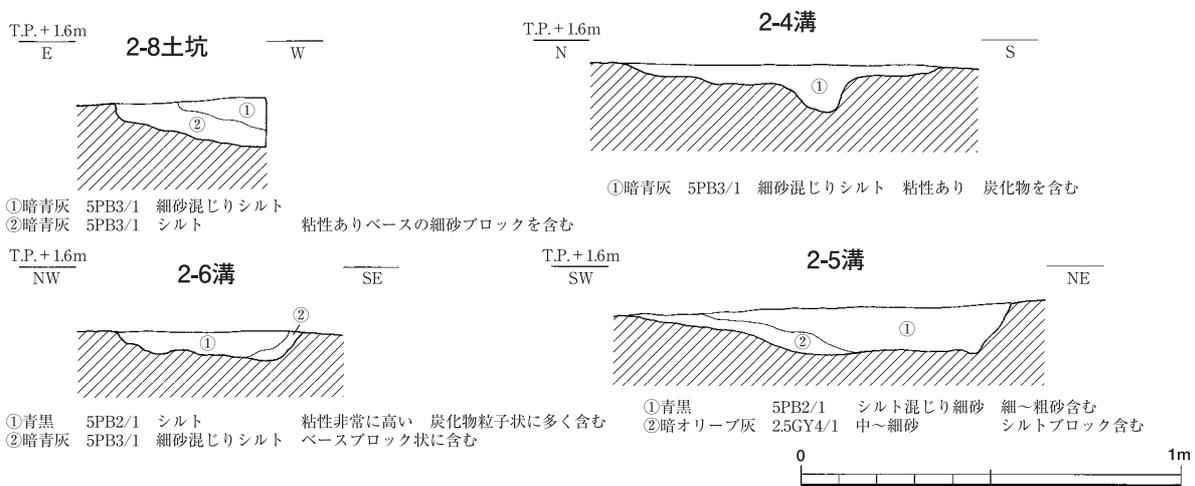


図36 第7面 土坑、溝 断面図

けられ、上層は暗青灰色の細砂混じりシルト、下層はベース土をブロック状に含む。遺物の出土はない。

3調査区ではピット、溝を検出した。3調査区も第7面は上面に比べて、起伏が小さく、全体に北に下降しており、北端と南端で約30cmの比高差がみられる。

3-20、21ピット（図37） 調査区北側でピットを2基検出した。直径15～20cmを測る。3-20ピットは深さ約20cmを測り、3-21ピットは約10cmと浅い。3-20ピットから土器片が出土した。

3-22～25ピット（図37） 調査区中央でピットを4基検出した。ピットは直径15～20cmを測り、深さは約20～25cm、2調査区でみられたような柱の遺存するものもなく、柱痕跡も明瞭ではない。柱が抜き取られた可能性が考えられる。遺物は出土していない。

3-26、27溝（図37） 3-26溝は調査区中央で検出した。上面の3-12、13と同様の方向を示し、その間に位置している。本来は上面である第6-2面の遺構である可能性が高い。3-27溝も同様の規模を有し、同様の性格を有するものと考えられる。

3-28～30溝（図37） 調査区北側で、並行する3本の溝を検出した。溝は3-3高まり部分に位置し、3-28溝は高まりの境目にあたり、第4-2面段階では、幅の広い落込み状を呈していた。溝間の距離は1.8mを測る。溝は東西の方向にはしり、幅50～70cm、深さ約15cmを測る。埋土は暗青灰色のシルトで粘性が非常に高く、炭を粒子状に含んでいる。遺物の出土は少なく、3-28溝からはわずかに弥生時代後期の土器が出土した（図43-19）。

弥生時代後期の遺構面である第6-2面および第7面では、2、3調査区でまとめて遺構を検出したが、4調査区には遺構は広がらない。3調査区で最も遺構が検出された南側は、第6-2面でT.P.+2.1mを測り、第7面でもT.P.+1.9mを測る。一方、4調査区は3調査区に近い北端は第7面でT.P.+1.7mと低い。調査地は全体としては北側に下降する地形であるが、2、3調査区は微高地状を呈しており、この部分に遺構が集中していることが分かる。低地部の4調査区は水田面の可能性が高いと考えたが、畦畔等は検出できなかった。

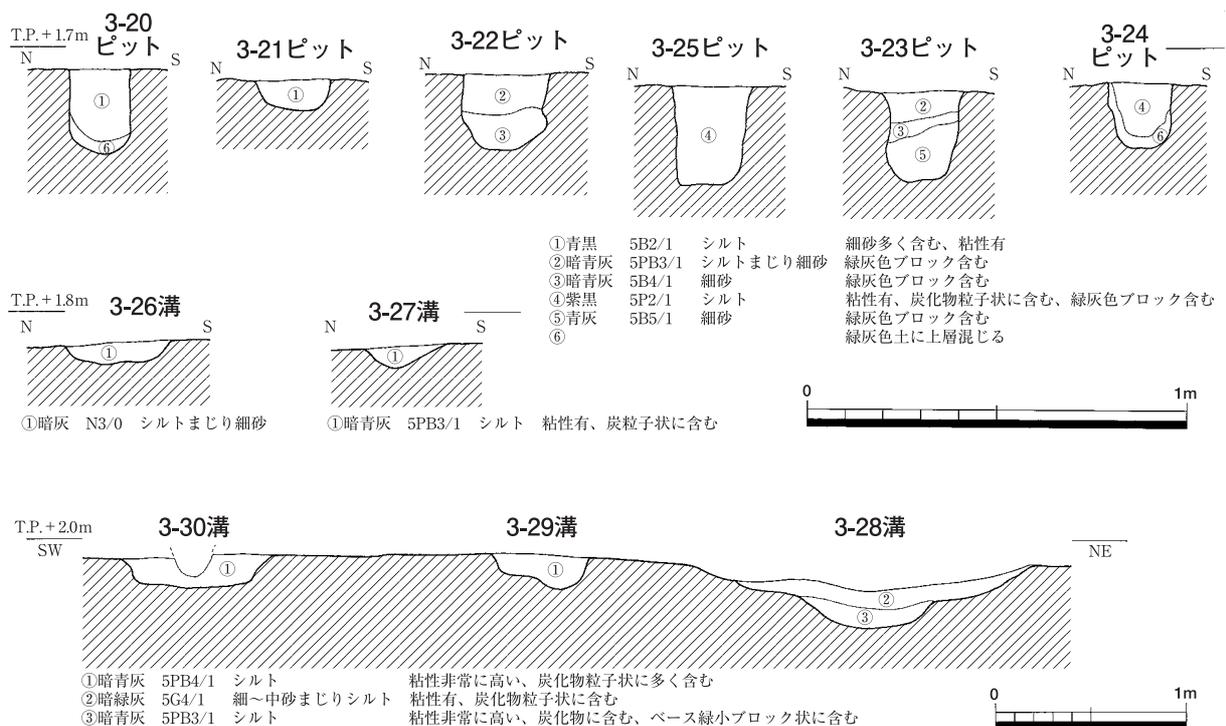


図37 第7面 ピット、溝 断面図

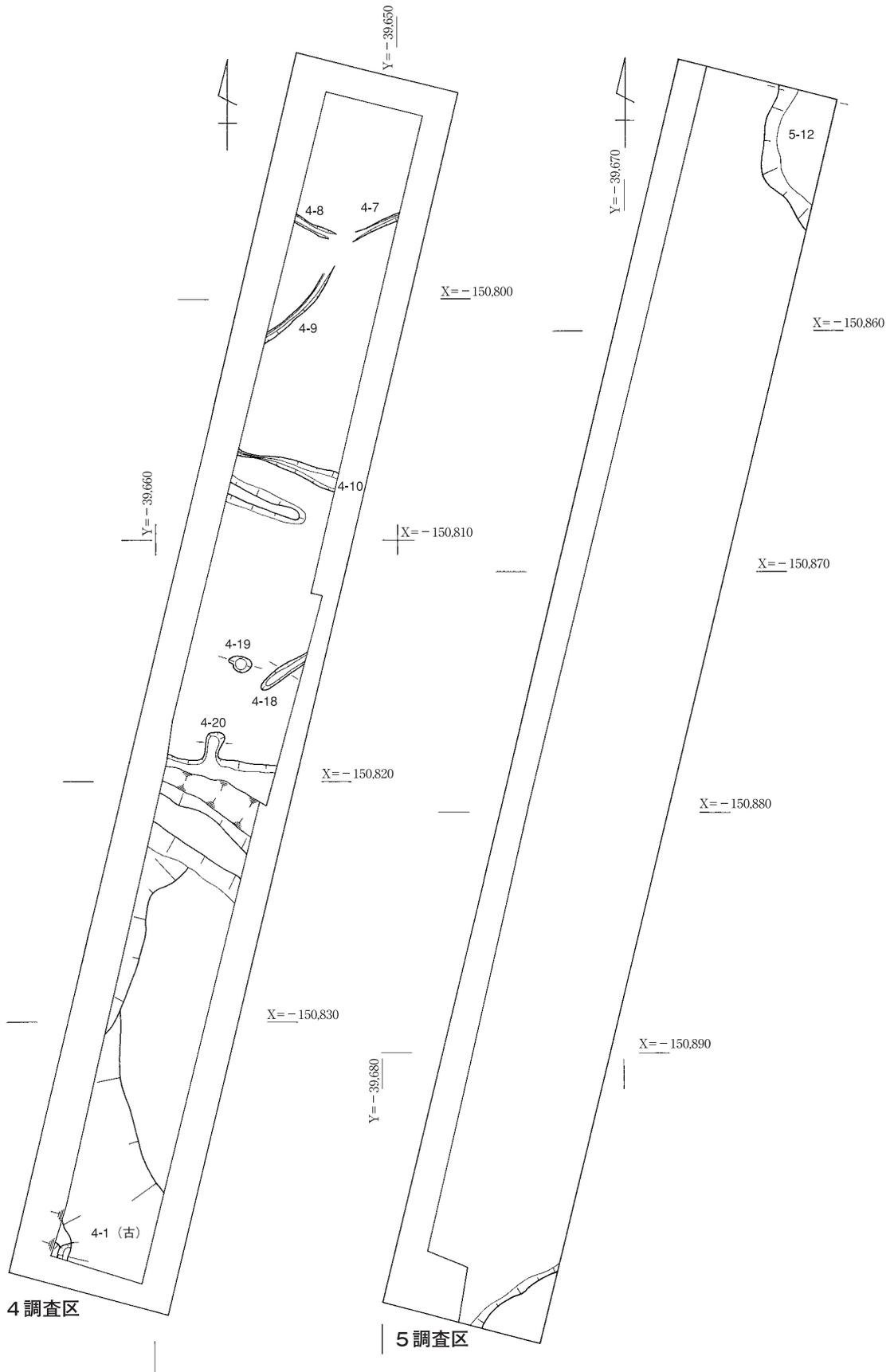


図38 第8面 遺構分布図

第3章 調査の成果

1～3調査区北半までは第7面で遺構面の調査を終えている。

3調査区南半～5調査区では更に下層に土壌化層が存在しており、第8、9面の調査を行った。

第8面 土壌化層である11層上面を第8面として遺構の検出を行った。

3調査区南端でT.P.+1.9m、5調査区北端でT.P.+1.8mを測る。3調査区では遺構は検出されなかった。

4調査区は水田の可能性を考えたが畦畔は確認できなかった。

4調査区では調査区の南側で4-1流路の古段階の流路を検出した他、調査区北半で溝を検出した。

4-19土坑 (図39) 調査区中央で検出した。直径60cmと大きく、深さ20cmを測る。埋土は青黒色の粗砂混じりシルトで粘性が高く、炭を多く含む。遺物の出土はみられない。

4-7～9溝 調査区北側で検出した。本来は1条の溝が枝分かれするような形状と考えられるが、溝は非常に浅く、痕跡が残る程度であった。遺物の出土はみられない。

4-10溝 東西方向の溝である。幅0.5m、長さ約4mを測る。遺物の出土はない。4-10溝の南側には幅約50cmの平行した高まりを検出している。

4-18溝 (図39) 調査区中央で検出した。南西-北東方向の溝である。幅40cm、深さ5cmを測る。遺物の出土はみられない。

4-1(古)流路 調査区南端の4-1流路の古段階を検出した。流路は掘削限界により完掘できない。流路の幅は約4.5mを測る。この流路は9層と10層の間にみられる洪水砂で埋没しており、本来は第8面より上面の遺構である。

5調査区では、調査区の北側で流路の一部を検出している。また、調査区南東隅で高まりを検出した。

5-12流路 (図39) (図版8-3) 規模は調査区外に広がるため未定である。埋土は粗～極粗砂を主体とし、ラミナが見られる。遺物の出土はみられない。

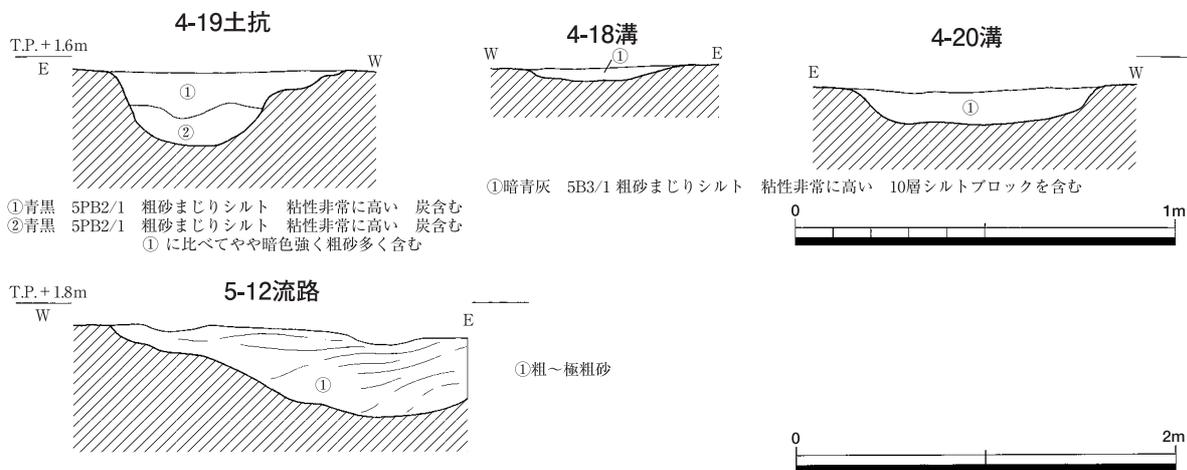


図39 第8面 遺構断面図

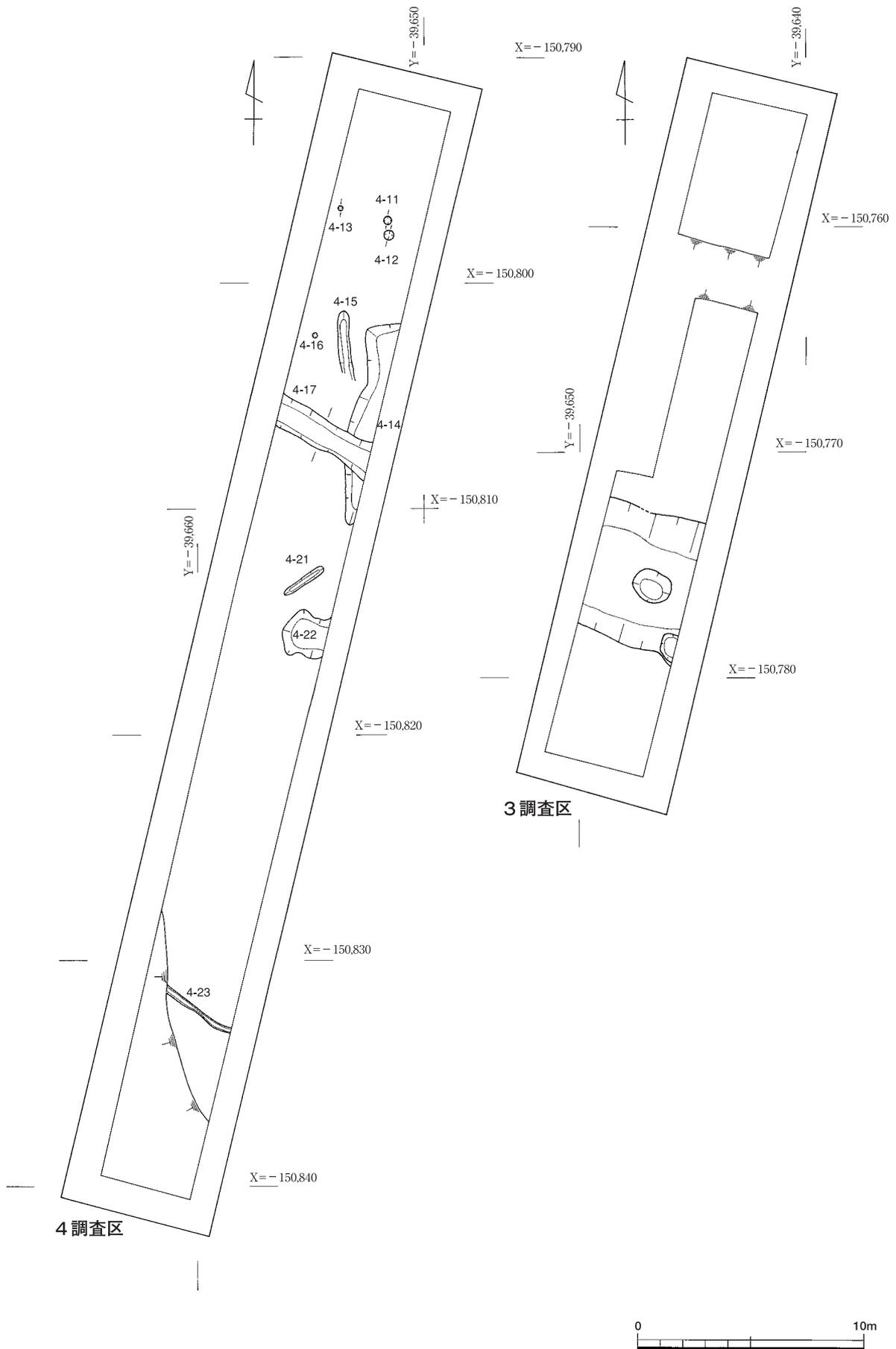


図40 第9面 遺構分布図

第9面 12層上面を第9面として遺構検出を行った。3調査区南端でT.P.+1.8m、5調査区南端でT.P.+1.7mを測る。

3調査区では落込みを検出した。4調査区では溝、ピットを検出した。ただし、遺構からの遺物の出土はみられなかった。

4-11～13ピット(図41) 調査区の北側で検出した。4-11、12ピットは直径40cmと他で検出したピットと比較して、大きく、また深さも30～40cmと深い。4-13ピットは直径25cm、深さ10cmと、上記に比べて、小さく浅い。いずれも柱や柱痕跡はみられない。

4-17溝(図41) 調査区中央で検出した。北西-南東方向の溝である。幅1.4m、深さ25cmを測る。

4-23溝 調査区南端で検出した。幅約20cmを測る。

第9面の遺構からは、遺物は出土しなかったものの、4調査区南側で、11層からわずかであるが、弥生時代後期の遺物が出土している。このことから第8、9面も弥生時代後期の遺構面と考えられる。

4-14落込み(図41) 調査区北半で検出した。約10cmと浅い。

3、4調査区は第9面で調査を終了した。5調査区では、これより、下層において、2枚の土壌化層が確認された。そのため、調査区の北東-南西辺に沿って、幅2m、長さ24mのサブトレンチをもうけて調査を行った。しかし、遺構は検出されず、遺物も出土していない。

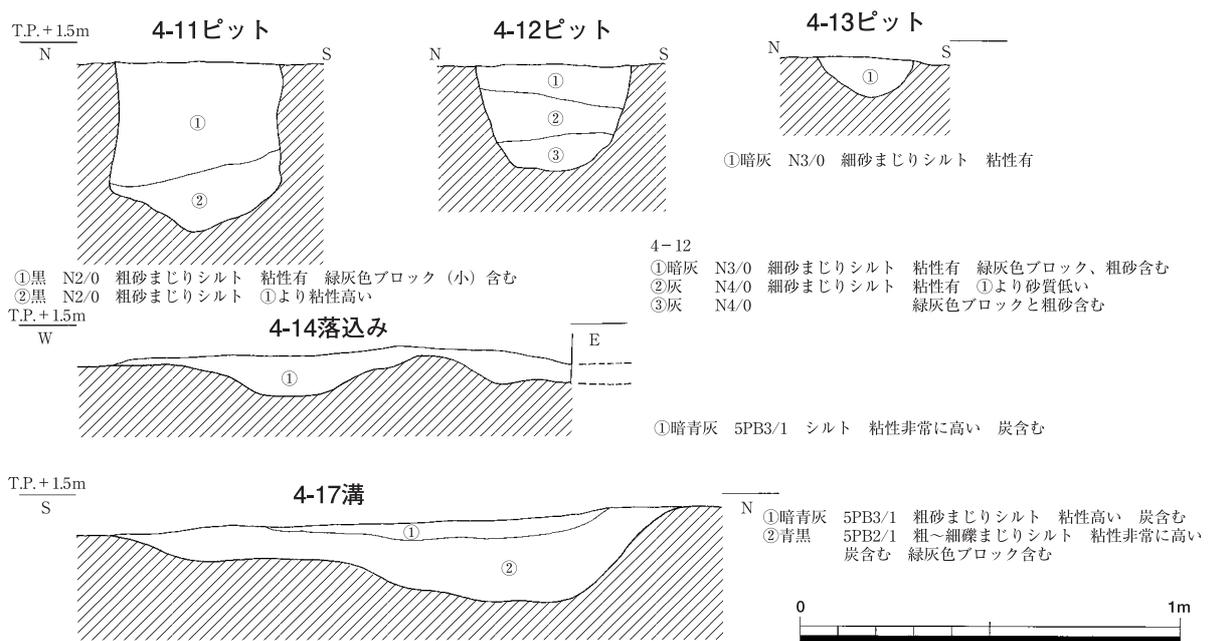


図41 第9面 遺構断面図

第6-2～7面出土遺物

2、3調査区を中心に弥生時代後期の遺物が出土した。

遺構出土遺物（図42、43）（図版20～22）

図42-1～5は3調査区土器群1から出土した。1～3は甕である。体部外面は、1、2はタタキの後、上半部は縦方向にハケメがみられる。3はタタキ。内面の調整は1が縦方向に、3は横方向にハケメである。2は上半がケズリ、下半はハケメである。いずれも外面のタタキは粗い。4は底部。5は垂下口縁をもつ広口壺である。連続渦文を口縁端部に施す。口縁部内面はミガキがみられる。

図43-1、2は3-10土坑から出土した。1は鉢である。内面にわずかにハケメが残る。2は壺の肩部である。線刻を施す。器壁はうすく、胎土は精緻である。

図43-3～10は3-9土坑から出土した。3は鉢である。口縁部は小さく外反し、体部は緩やかに丸みをもつ。体部は内外面ともにミガキを施す。胎土は精緻である。4は壺の口縁部である。複合口縁状を呈する。5は広口壺である。口縁部は内外面ともに縦方向にミガキがみられる。6は口縁部が欠損しているが広口壺である。体部は最大径が中程にある偏球形を呈する。器面の調整は体部外面がミガキ、内面は下半がハケメ、上半はナデである。底部側面に2つ並んだ竹管文を配する。胎土は精緻である。7は壺底部である。8～10は甕である。8は頸部のしまりが弱く、口縁部は大きく開く。口縁部内面に横方向のハケメがみられる。9は口縁部がくの字に屈曲し、端部は上下に肥厚し、面をもつ。10は口縁部が外反し、端部は面をもつ。体部は丸みを帯びる。いずれも体部外面は粗いタタキ、内面はナデである。

図43-11～16は3-18溝から出土した。11は高杯である。高杯の出土は少なく、全体が分かるのはこの1点のみであった。口縁部は大きく外反する。脚部には円形の透かしを4方向に配する。外面の調整はハケメのちミガキであるが、器面が剥離してミガキが残らない部分が多い。脚裾部内面はハケメを施す。12、13は広口壺である。体部は球形に近いが13は12に比べて肩がはる。体部の調整は外面がミガキ、内面はハケメ。12は外面にヘラ描きがみられる。14～16は甕である。14、15は体部外面に粗い

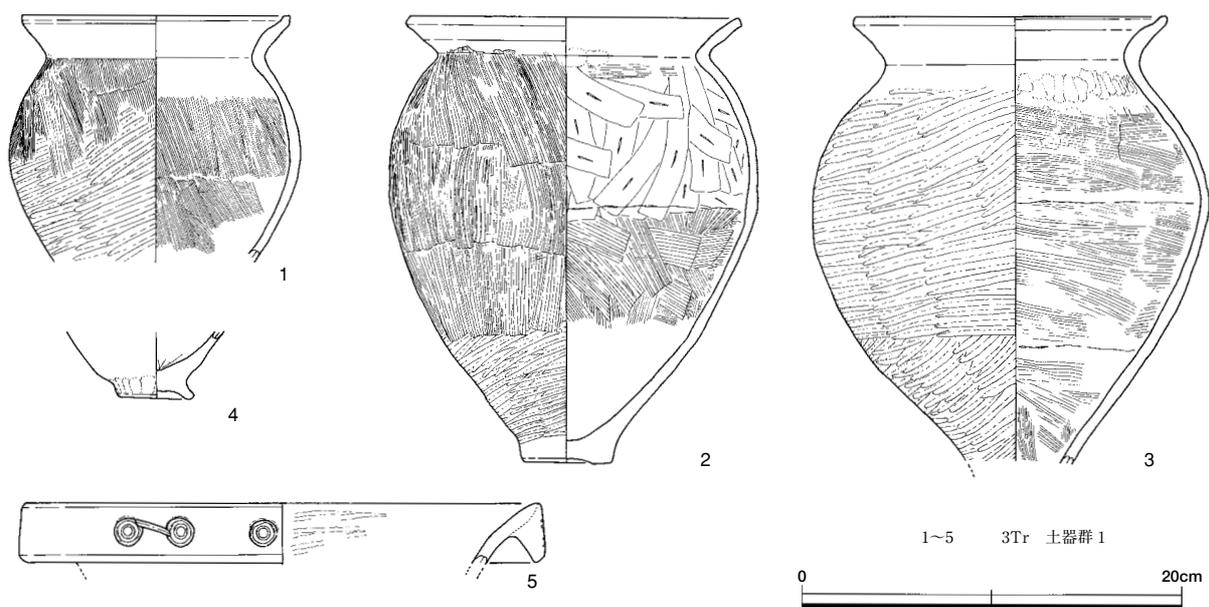


図42 第6-2～7面 出土遺物（1）

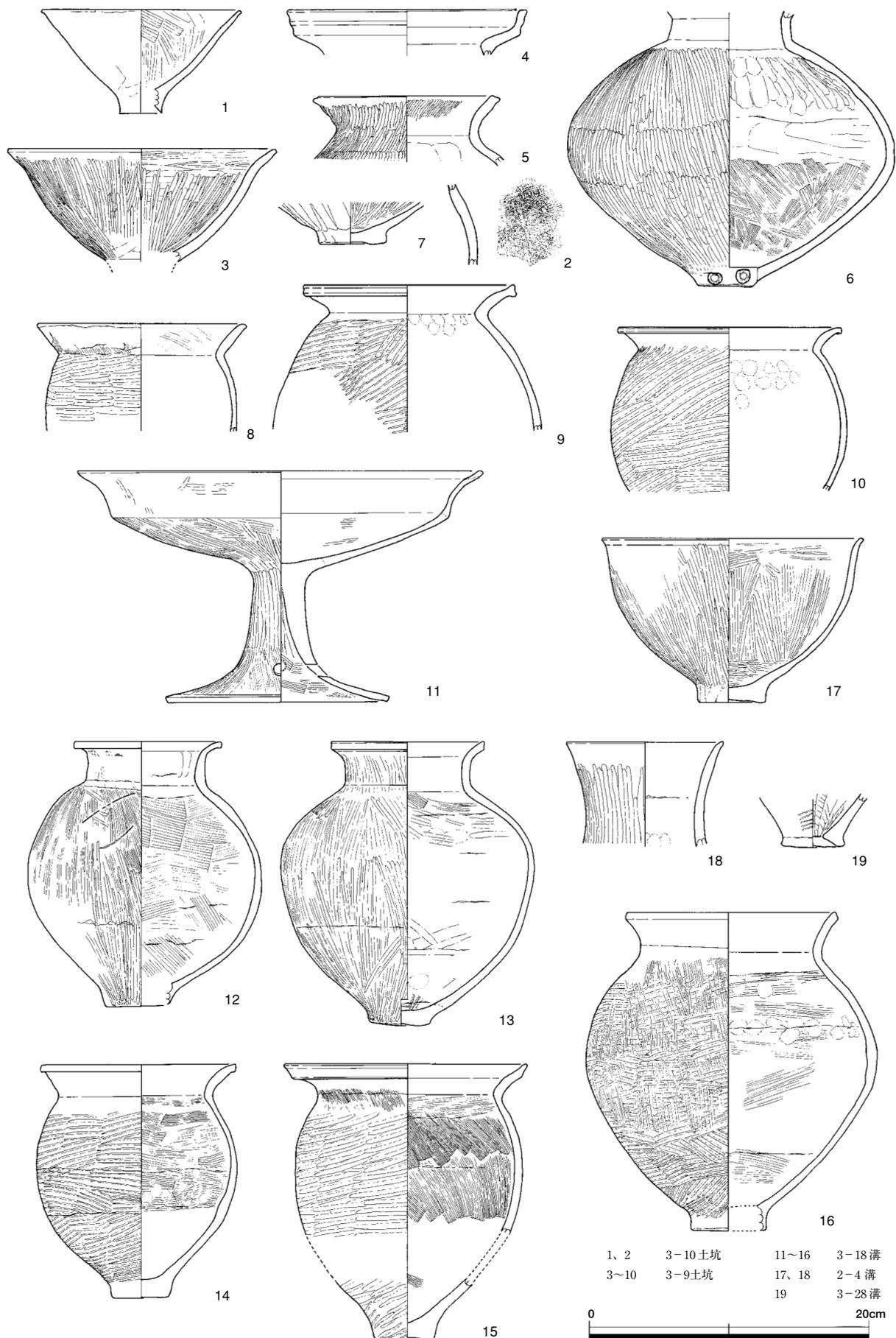


図43 第6-2～7面 出土遺物 (2)

タタキ、内面はハケメを行う。16は体部外面がタタキ後ハケメ、内面はハケメである。15は頸部にわずかにハケメがみられる。17、18は2-4溝から出土した。17は鉢である。口縁部は短く外反し、体部は丸みをもつ。内外面ともにミガキを施す。胎土は精緻である。18は長頸壺である。外面はミガキを施す。19は3-28溝から出土した有孔の底部である。外面はタタキ、内面はハケメを行う。

包含層出土遺物（図44～46）（図版20、23～24）

9層（9-1、2層）からは2、3調査区を中心に多くの弥生時代後期の遺物が出土した。それ以外の調査区では遺物の出土は非常に少ない。2調査区は狭小であったが、特に包含層が厚い高まり内から多くの遺物が出土した。

2-1高まり出土遺物（図44） 1～28は2-1高まりから出土した。1は高杯である。図43-11に比して、口縁部の外反度は低く、受部に比して口縁部は短い。杯部は内外面ともに細かいミガキを施す。2は大型の鉢である。口縁部は外反し、端部に面をもつ。内外面ともミガキを施す。3は高杯脚部である。調整は脚柱部外面がミガキ、裾部外面はハケメである。円形の透かしを4方向に配する。

4～10は壺である。4は長頸壺である。やや外傾して直立し、端部は丸くおさめる。5～7、9、10は広口壺である。6は口縁部が受け口状を呈する。7は短い頸部から屈曲して口縁部が大きく開き、肥厚した端部に凹線を配する。9は口縁部が上外方に開き、端部には凹線を配する。体部は最大径が胴部中央にあり、球形に近く、器面の調整は上半部が磨滅しているが、外面はミガキ、内面にはハケメがみられる。5は9と同様の口縁部である。10は短く直立した頸部から口縁部が開き、端部に面をもつ。体部は無花果形を呈し、肩部に列点文を施す。器面調整は、頸部および体部外面にハケメ、下半にはわずかにミガキがみられる。内面は板ナデである。8は広口長頸壺。肥厚した口縁端部に擬凹線を施し円形竹管浮文を配する。

11～23は甕である。口縁部は、11は短く、大きく屈曲し、13～15はやや外反気味に屈曲し、端部をつまみ上げる。16、17、20は端部を丸くおさめ、16は口縁部の屈曲が弱い。18、21～23は外反気味に屈曲し、端部に面をもつ。19は口縁部が内湾し、端部は丸く収める。体部は12、13は外面がハケメ、内面はナデである。13は口縁部外面にタタキが残る。11、14～23は体部外面がタタキ、内面はハケメを施すものとナデのものがある。21は頸部外面にハケメがみられる。16、20は器壁が非常に薄い。

24は有孔の底部であるが、粘土で底部外側から孔を塞ぐ。外面はタタキで疎にミガキを施す。25～28は底部である。26、27は壺の底部で、27は平底で体部外面にハケメがみられる。28は甕底部である。底部外面にタタキ痕がみられる。

2-2高まり出土遺物（図45） 1～6は2-2高まりから出土した。1は高杯である。口縁部は大きく外反する。杯部は内外面ともにミガキを施す。2は鉢である。口縁部は外反し、端部に面をもつ。器面調整は内外面ともミガキ。3は広口壺である。頸部内外面にミガキがみられる。4、5は甕である。口縁部は端部に面をもち、体部外面は4がハケメ、5はタタキのちハケメでわずかにタタキが残る。5は内面にハケメがみられる。6は高台をもつ底部である。

2-3高まり出土遺物（図45） 7～9は2-3高まりから出土した。7は絵画のある大型の広口長頸壺である。口縁部は大きく開き、端部は肥厚して、面をもつ。端面には二条の沈線状のものが確認できるが、全周せず、また、非常に乱れる。口縁部に付加した粘土紐の接合痕の可能性も考えられる。頸部外面はミガキ、内面には口縁部との境目付近に横方向のハケメがみられる。口縁部外面は非常に調整が

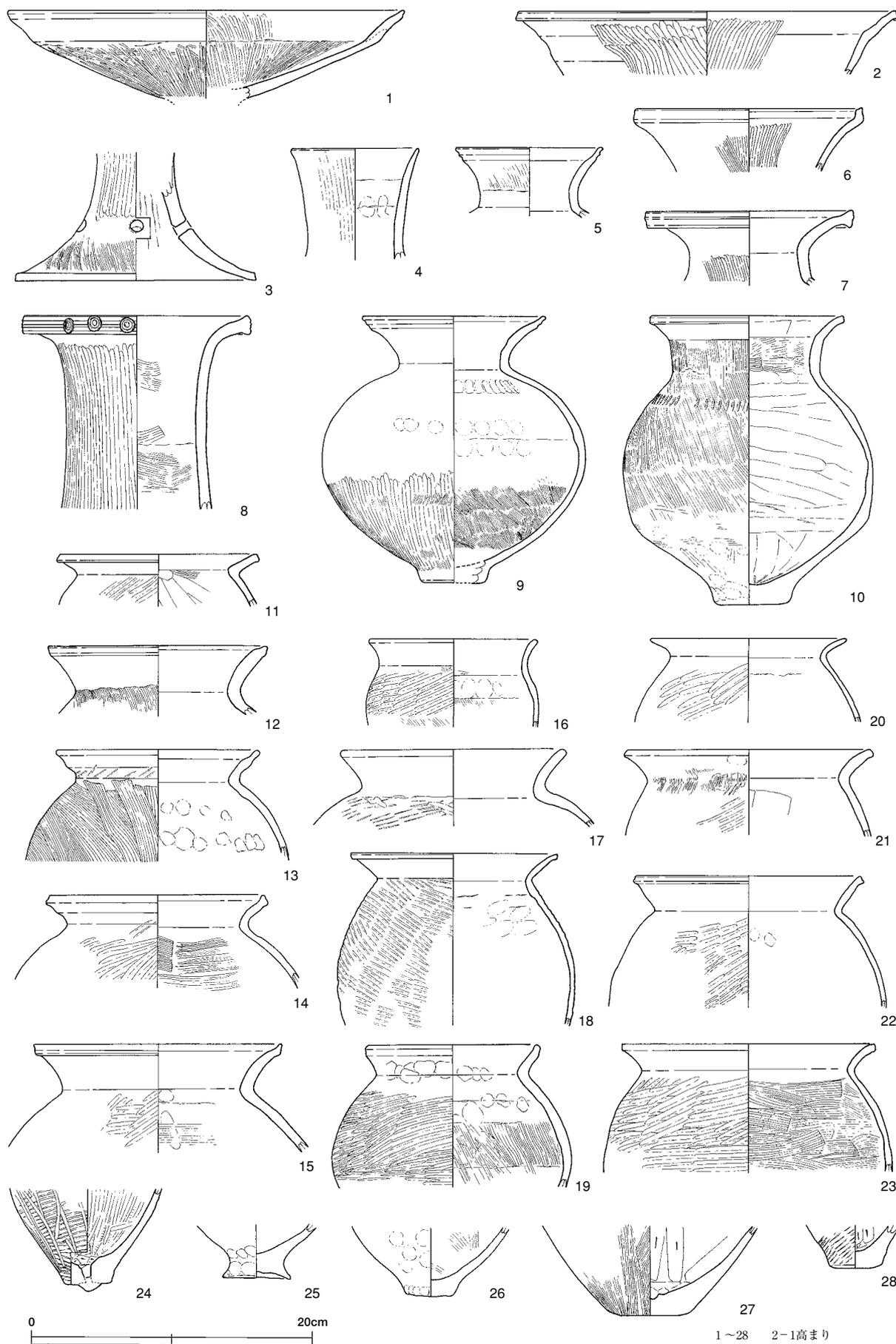


図44 9層 出土遺物 (1)

雑で指頭圧痕が明瞭に残る。胎土は精緻である。絵画は頸部に描かれており、欠損しているため、図柄の全容は不明であるが、『龍』の可能性が高い。屈曲した胴部に鱗を三角形状に表現していると考えられる。また、壺は、頸部より下はなく、打ち欠いたような痕跡が認められる。

8は長頸壺である。頸部にヘラ描きの記号がみられる。胎土は、やや粗い。外面はミガキ、内面はわずかにハケメが残る。9は壺の体部である。外面に線刻がみられる。

2調査区9層出土遺物(図45) 10~16は2調査区9層出土遺物である。10は甕である。口縁部は非常に短く外反し、端部は丸くおさめる。体部外面はタタキ、内面はハケメである。11は高杯脚部である。脚柱基部は中実である。外面はミガキ、裾部内面はハケメである。

12~14は甕である。12は口縁部の屈曲が弱く、開きが小さい。器形は甕というより、壺に近い。体部はタタキで、頸部にはハケメが残る。内面はナデ、指オサエの痕跡がよく残る。また、粘土紐の痕跡が明瞭である。頸部直下にヘラによる記号が見られる。13は口縁部が外反気味に開き、端部に面をもつ。体部外面はタタキ、内面はナデである。頸部に粘土の継ぎ目が明瞭に残り、強くなでる。14は口縁部が非常に短く、端部に面をもつ。体部は丸い。外面はタタキがわずかに残り、内面は板ナデを施す。外

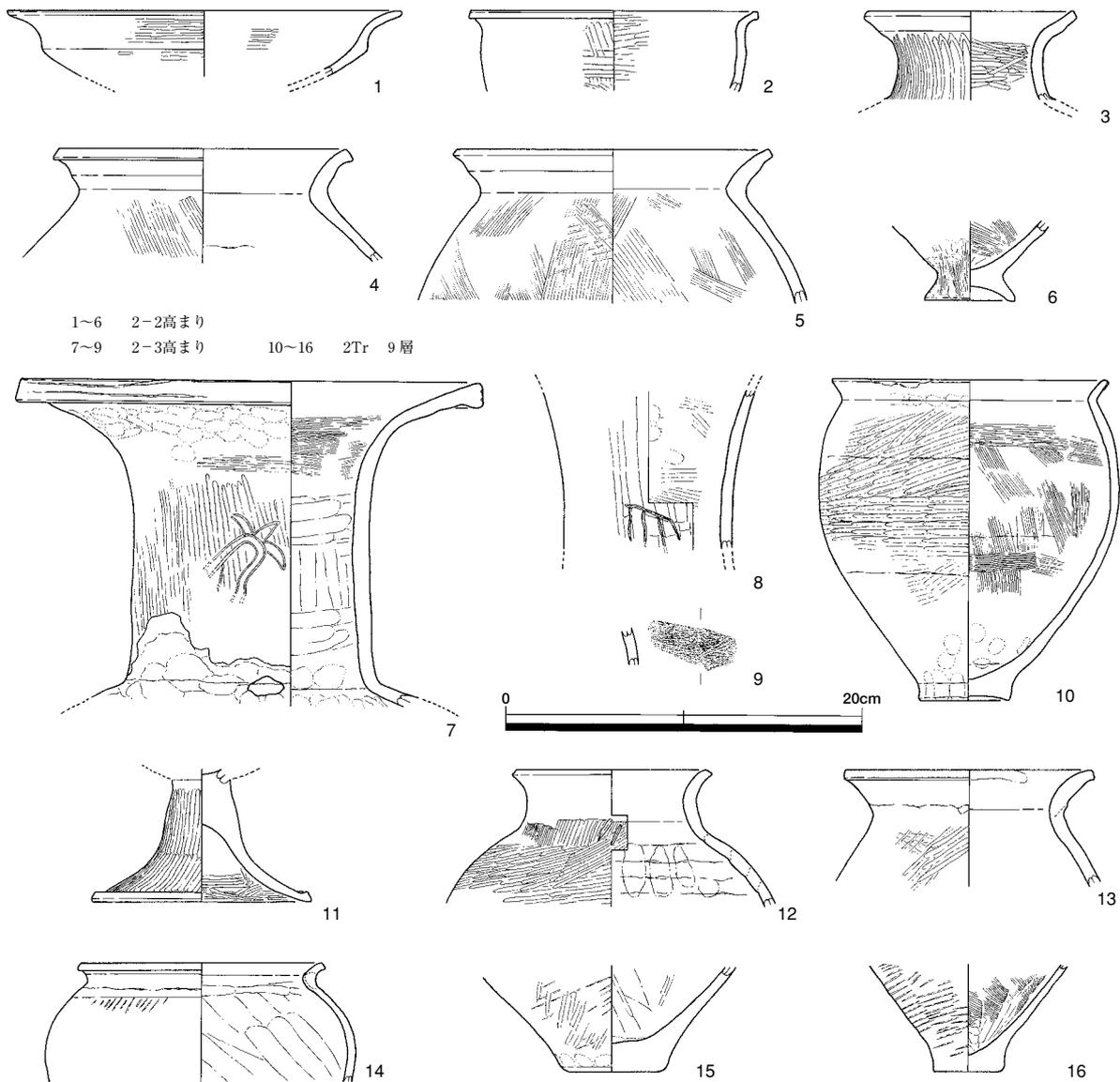


図45 9層 出土遺物(2)

面は煤の付着がみられる。頸部の粘土の継ぎ目が明瞭である。

15、16は底部である。

3調査区は2調査区同様、包含層が厚い高まりから多数の遺物が出土している。4調査区は遺物の出土は少なく、調査区南側でわずかに出土した。5調査区でも9層からわずかに遺物が出土したが、図化できるものはない。

3-3～5高まり出土遺物 (図46) 1、3～7は3-5高まりから、2は3-3高まりから、8は3-4高まりから出土した。1は高杯である。口縁部は大きく外反する。2は直口壺である。頸部が直立し、口縁部はわずかに開く。内外面にミガキを施す。3は広口壺。口縁端部に面をもち、凹線を、肩部には列点文を施す。4は口縁部が欠損。広口壺と考えられる。肩部に竹管による記号文を施す。5は大型の広口壺で、口縁端部は肥厚し面をなす。端面には竹管文を3個一組とし、配する。頸部外面の調整はハケメである。6は頸部がわずかに外反し、口縁端部は外側に肥厚、外傾する面をもつ。外面は縦方向のミガキを施す。内面は磨滅のため不明。壺と考えられる。7、8は甕である。7は口縁端部を上方につまみ上げる。8は口縁部が外反し、端部に面をもつ。いずれも体部外面はタタキ、内面はハケメである。

3調査区9層出土遺物 (図46) 9、11～19は3調査区9層から出土した。10は同調査区第7面から出土している。9は甕である。口縁部は外反し、端部に面をもつ。体部外面はタタキを施す。10、11は鉢である。10は小型の椀形を呈し、外面は磨滅、内面はハケメ。11は大型で口縁部が屈曲して開く。体部内外面に縦方向のミガキを施す。13は高杯である。脚部には3方に円形の透かしを配する。脚部外面はミガキ、内面には絞り痕がみられる。12、14～16は甕である。口縁部は12が受け口状で端部には面をもつ。14はくの字に屈曲し、端部はやや肥厚し、面をもつ。15、16は端部を丸くおさめる。体部は12が外面はタタキのちハケメ、14～16は外面がタタキであるが、14は頸部にハケメを施す。

17～19は底部である。19は製塩土器と考えられる。脚台の端部が面をなす。

4調査区11層出土遺物 (図46) 20～22は4調査区出土遺物である。20は手焙り形土器である。器面の調整は体部外面が上半はタタキのちナデ、下半はミガキ、内面はハケメである。21、22は甕である。体部外面にはタタキがみられる。21は口縁部が受け口状を呈し、端部に面をもつ。体部外面はタタキで、頸部にもタタキがおよぶ。22はやや内湾する口縁をもち、体部外面はタタキ、内面はハケメである。

今回の調査で出土したこれら弥生時代後期の土器は、高杯は口縁部が外反し、受部と口縁部の長さがほぼ等しい、脚柱部基部が中実化傾向にあること、裾部が屈曲し、大きく開くなど、新しい様相がみられる。また、全体として、長頸壺が少なく、広口壺が多い傾向がみられる。甕は圧倒的に多く、外面にタタキを施すものがほとんどで、頸部付近にタタキがおよぶものがみられた。その他、手焙り形土器が出土していることから、後期後半の時期をあてることができる。

土器以外の出土遺物としては、木製品、石製品が挙げられる。

木製品 (図47) (図版25)

調査区からは、木製品が出土している。いずれも、製品というより、部材の一部と考えられる。

1は板材で、3-9土坑から出土した。細部に加工はみられない。長さ57.2cmを測り、幅14.4cm、厚さ2.3cmと厚い。2は杭状の断面四角形の角材で、先端は片側を大きく削り、尖らせる。頭部はくりこみがみられる。長さ143.4cm、幅5.6cmを測る。5調査区第9面から出土した。

石製品 (図48)

調査区からは、わずかではあるが、石製品が出土した。

1はサヌカイト製の石槍である。基部、先端ともに折損している。2-4溝から出土した。調査区では、サヌカイトの出土は非常に少なく、製品はこの1点のみである。

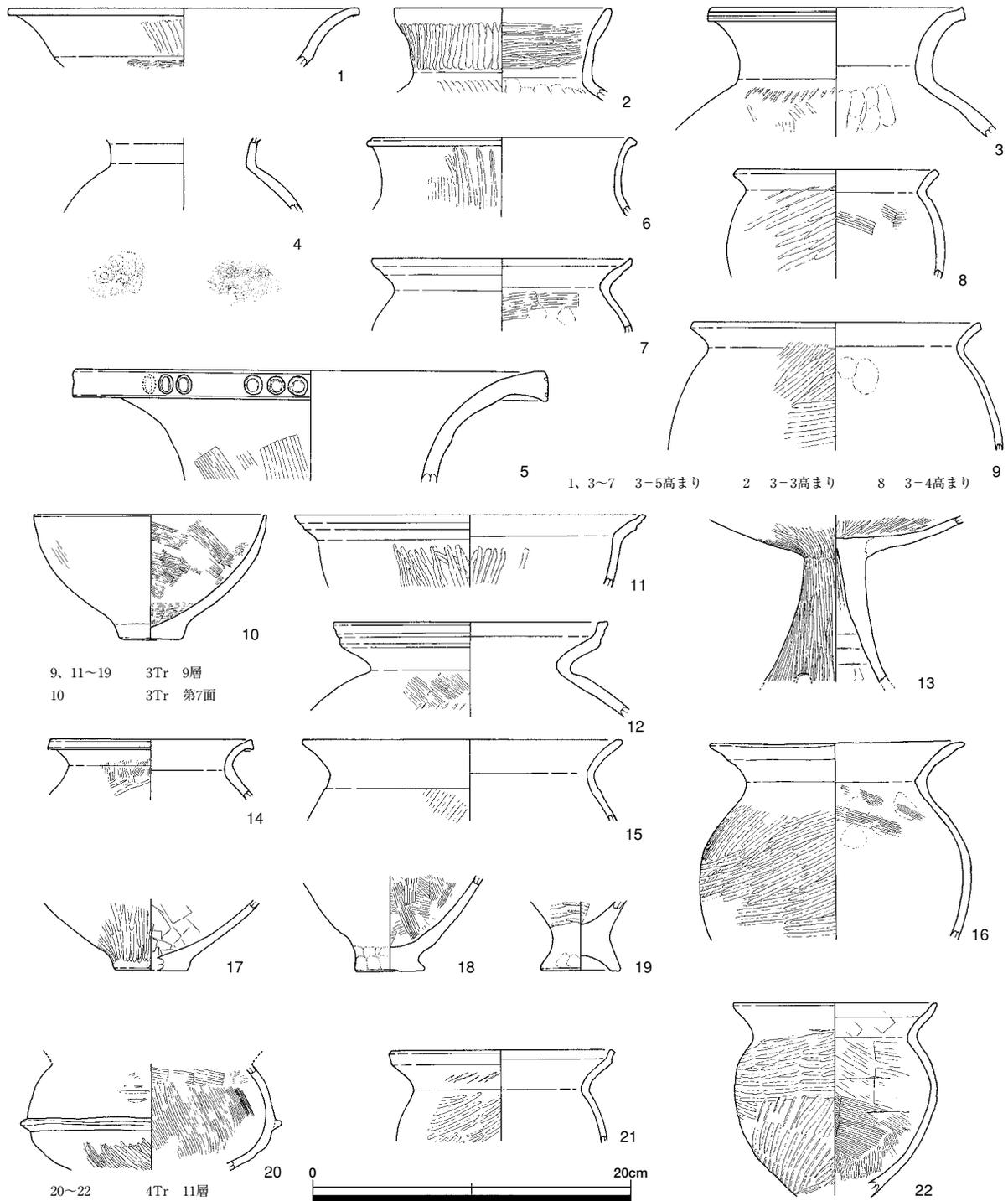


図46 9層 出土遺物 (3)

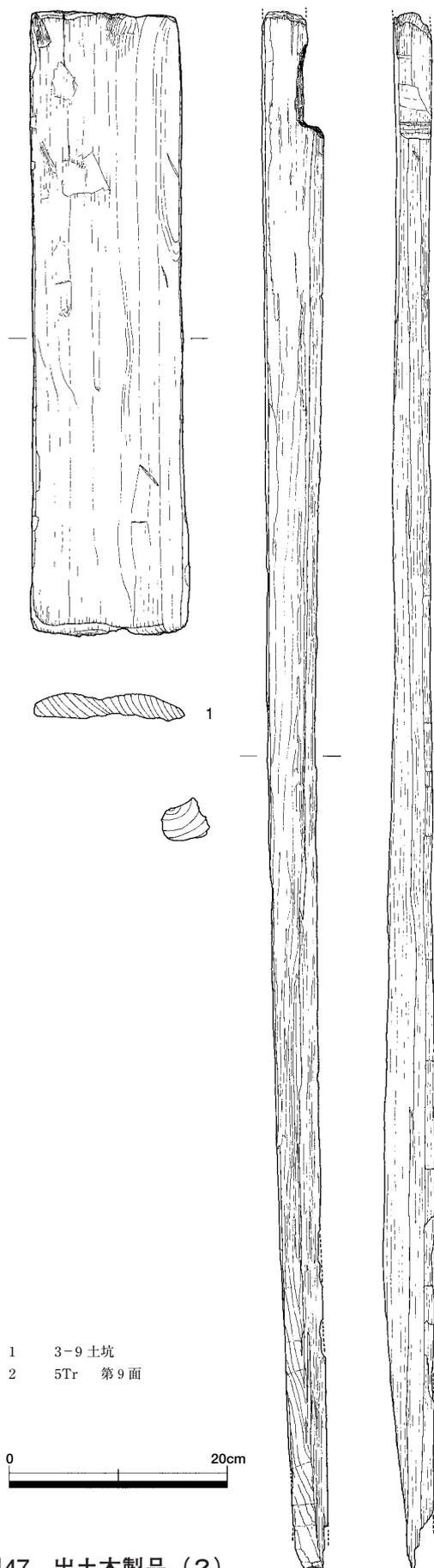


図47 出土木製品 (2)

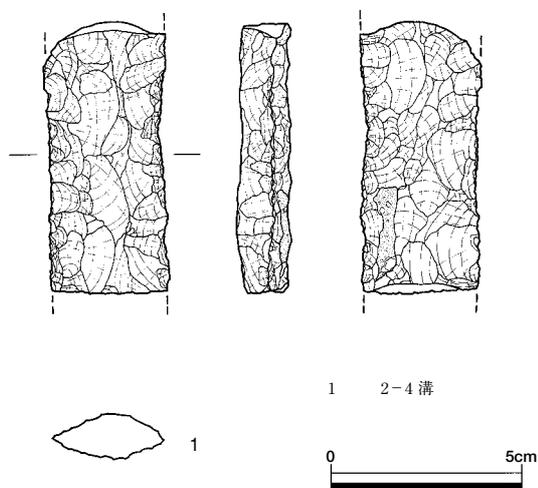


図48 出土石器

2

第3節 弓削ノ庄遺跡

第1項 基本層序 (図49)

盛土、および洪水砂の上層は機械による掘削を行った。調査区は南西から北東方向に細長く、総延長110mを測る。亀田遺跡同様に厚い洪水砂が見られた。

以下、基本層序について上層から記述する。調査区の土層の堆積状況については、調査区の西側の断面図を掲載した (図49)。

1層 洪水砂である。古墳時代前期の遺物が比較的多く出土している。しかし、磨滅しているものが多く、洪水砂の時期を直接表すものではない。

2層 洪水砂直下の黄灰色シルトである。自然堆積層で植物遺体を筋状に含む。

3層 1調査区で確認されたオリーブ灰色シルトの自然堆積層である。非常に薄く、2調査区ではほとんど確認できない。

4層 植物遺体を多く含んだ暗灰色細砂混じりシルトである。層厚5cm以下と非常に薄い調査区全域で確認できる。

5層 灰色シルトである。自然堆積層で粘性が非常に強く、植物遺体を含む。層厚は10～15cmを測る。

6層 暗灰～暗青灰色の細砂混じりシルトの土壌化層である。2層に細分でき、6-1層、6-2層とした。上層は植物遺体を多く含み、暗い色調である。遺物の出土はみられない。

7層 青灰～灰白色のシルトを主体とする自然堆積層である。粘性が非常に高い。層厚は5～10cmと薄い。1調査区北側は落込み状になっており、数枚の自然堆積層がみられる。また、1調査区の調査区中央付近では灰色砂礫混じりシルトが確認され、これを7-2層とした。7-2層はわずかではあるが、ブロック土を含んでおり、攪拌されていると考えられる。

8層 暗青灰～暗紫灰色の細砂混じりシルトを主体とする土壌化層である。層厚20～30cmを測る。1調査区南側から2調査区北側では細礫～中礫を多く含んでいる。これはベース土の違いに起因すると考えられる。縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺物を含む。また、1調査区では2層に細分することができ、8-1層、8-2層に細分した。下層は上層より砂質が強く、明るい色調である。2調査区南半は他に比べて遺物の出土が極端に少ない。

2調査区では調査区南側で、8層より下層において、土壌化層が数枚確認されたため、サブトレンチをもうけて、堆積状況を確認するとともに、遺構検出を行った。

9層 明オリーブ灰色の細砂混じりシルトの自然堆積層である。

10層 紫灰～暗紫灰色のシルトで土壌化層である。大きく2層に細分できる。

11層 オリーブ灰色のシルトの自然堆積層である。粘性が非常に高い。

12層 青黒色の中～細砂混じりシルトの土壌化層である。暗色が強い。

いずれの層からも、遺物の出土はみられず、各層の上下面ではいずれも明瞭な遺構は検出されず、生痕と考えられる小ピットが無数にみられた (図版18-8)。

これらの土壌については当時の環境を知るために、サンプリングを行い、花粉・珪藻分析を行った。結果については第4章を参照されたい。

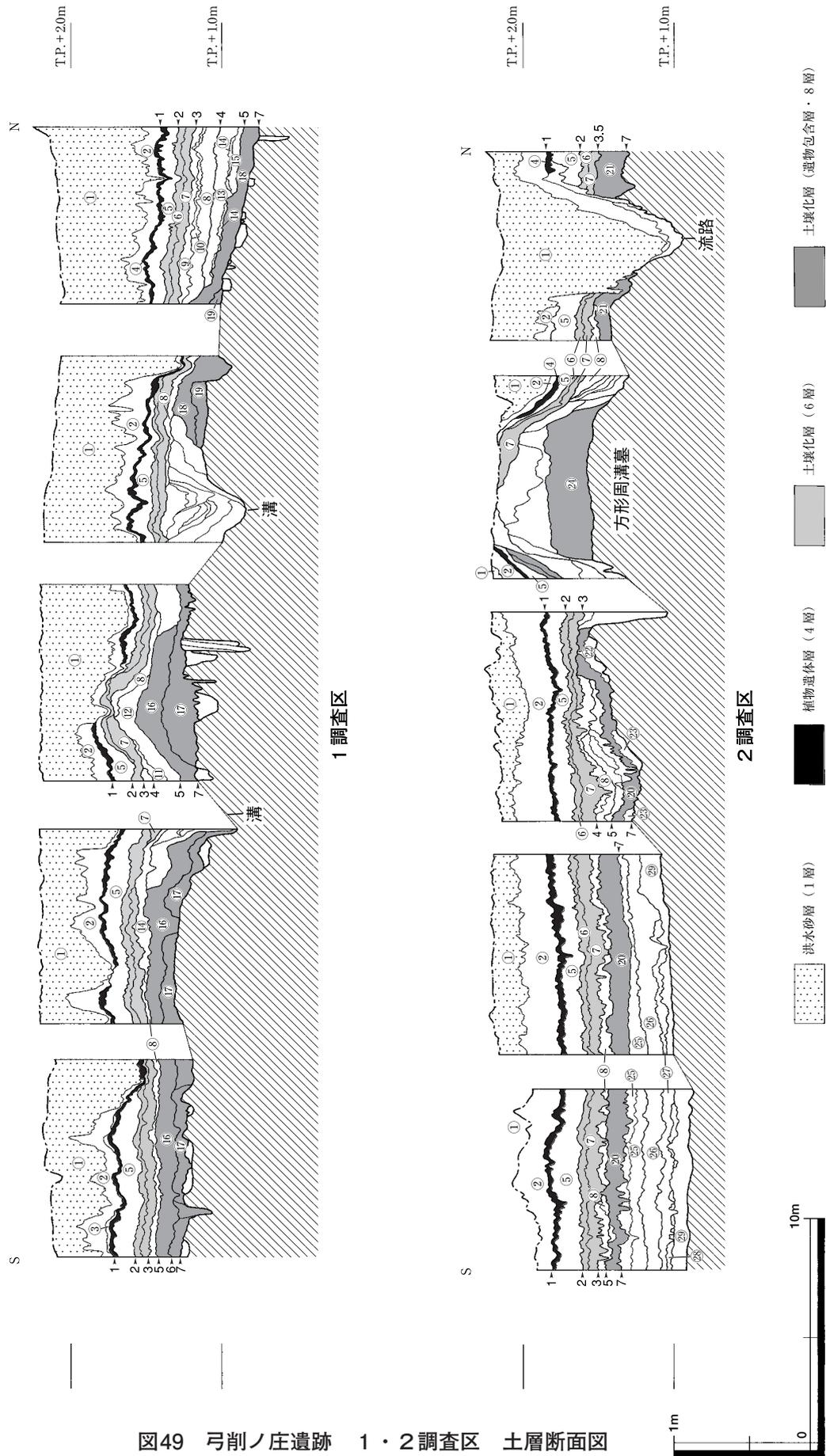


図49 弓削ノ庄遺跡 1・2調査区 土層断面図

①	淡黄～黄	2.5Y8/3～8/6	粗～細砂	ラミナ有 シルト筋状に含む	1層
②	黄灰	2.5Y5/1	シルト	非常に粘性高い 植物遺体ラミナ状に含む	2層
③	オリーブ灰	2.5GY6/1	シルト	非常に粘性高い	3層
④	暗灰	N3/0	細砂混じりシルト	植物遺体を主体とする薄層	4層
⑤	灰	N6/0	シルト	非常に粘性高い 植物遺体ラミナ状に含む	5層
⑥	暗灰	N3/0	細砂混じりシルト	植物遺体を非常に多く含む a層	6-1層
⑦	暗青灰・灰	5PB4/1・N4/0	細砂混じりシルト	非常に粘性高い a層	6-2層
⑧	灰白	N7/0	シルト	粘性有 ⑧'は⑧より植物遺体を多く含む	7層
⑨	灰	N6/0	シルト	粘性有 中細砂含む ⑧より灰色強い	7層
⑩	青灰	5PB5/1	粗～中砂混じりシルト	粘性有 粗～中砂多い	7層
⑪	灰	N4/0	細砂混じりシルト	粘性有	7-2層
⑫	灰	5Y6/1	細砂混じりシルト	粘性有 ⑧よりややや暗色で砂礫多い	7-2層
⑬	紫灰	5RP5/1	シルト	粘性有	落込み
⑭	灰白	N7/0	シルト		落込み
⑮	暗紫灰	5P3/1	シルト	非常に粘性高い ⑩と似るが暗色やや弱い	落込み
⑯	暗青灰	5PB3/1	シルト	非常に粘性高い	8-1層
⑰	暗青灰	5PB4/1	シルト	炭含む ベース土土ブロック状に含む	8-2層
⑱	紫黒	5P2/1	シルト混じり細砂	粘性有 炭含む	8-1層
⑲	暗紫灰	5P3/1	細砂混じりシルト	粘性有 炭含む ⑩より砂質高い ベースブロック含む	8-2層
⑳	暗青灰	5PB4/1	細砂混じりシルト	粘性有	8層
㉑	暗紫灰	5P4/1	細砂混じりシルト	粘性有 遺物含む	8層
㉒	暗青灰	5PB4/1	細砂混じりシルト	ベースブロック含む	8層
㉓	暗青灰	5PB4/2	細砂混じりシルト	⑫より暗色弱い	8層
㉔	暗紫灰	5P3/1	細砂混じりシルト	粘性有 炭含む 遺物多く含む	8層
㉕	明オリーブ灰	2.5GY7/1	細砂混じりシルト	粘性有 ⑫よりシルト質高く粘性強い	9層
㉖	紫灰	5P5/1	シルト	非常に粘性高い 炭小粒子状に多く含む a層	10層
㉗	暗紫灰	5P4/1	シルト	上より暗色強い a層	10層
㉘	オリーブ灰	2.5GY6/1	シルト	粘性非常に高い	11層
㉙	青黒	5PB2/1	中～粗砂混じりシルト	やや粘性有 a層	12層

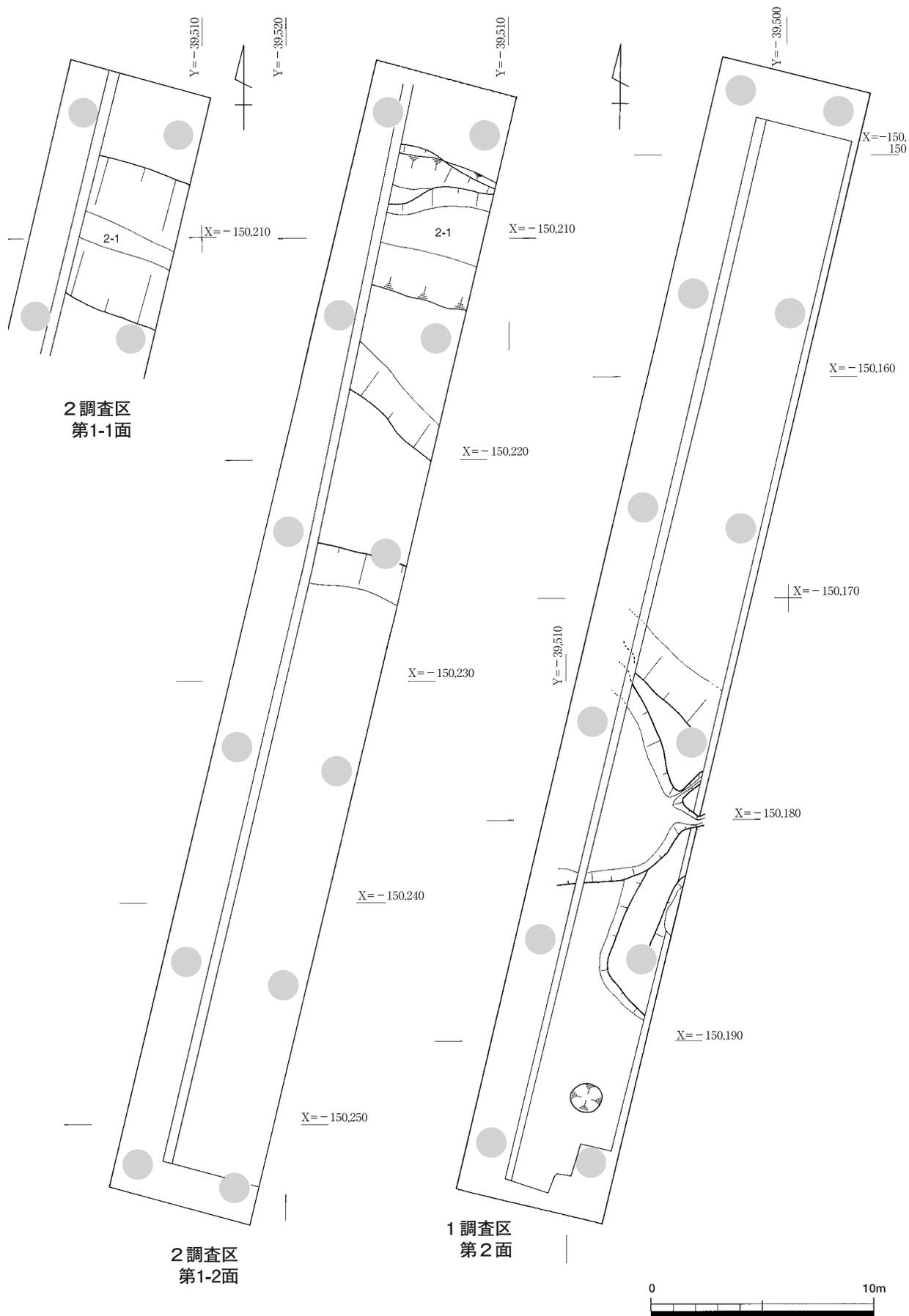


図50 第1・2面 遺構分布図

第2項 調査成果

今回の調査では主に弥生時代中期（第5面）、弥生時代前期～縄文時代晩期末（第7面）の遺構面で多くの遺構を検出した。土壌化層である6層の上面では水田の検出が期待されたが、畦畔等はみられなかった。以下、上面から記述を進めたい。

第1面 4層上面を第1面として遺構検出を行った。1調査区北側はT.P.+1.4m、2調査区南側ではT.P.+1.8mを測り、北に向かって下降する。2調査区では2-1流路（古段階）が検出された（2層上面で、2-1流路（新段階）を検出している）。また、第5面に対応する方形周溝墓は第1面ですでに高まりとして認識できる。1調査区は地形の凹凸が著しい。遺構は検出されなかった。

2-1流路（図51）（図版10-1、2） 2調査区北側で検出した。北西-南東方向の流路で、幅5m、深さは0.9mを測る。埋土は砂を主体としており、洪水砂によって埋没している。洪水砂は大きく2層に分けることができ、埋土①を新流路、埋土②～④を古流路とした。遺物の出土は非常に少ないが、埋土①から「アカ取り」とよばれる木製品が出土している（図53）。

第1面より上層については、1層の洪水砂層、および2、3層の自然堆積層とに分けて掘削を行った。

出土遺物（図52）（図版26）

1～26は1層から出土した。古墳時代前期を中心とする遺物で、ローリングを受けている個体が多い。特に1調査区から多く出土した。

1～6は小型丸底壺である。口縁部は1、2、5、6はやや内湾し、3は外反ぎみに上方に開く。体部は1～3、5は最大径が中程にあり、上下に潰れた偏球形を呈する。6は他より丸みを帯びる。器面の調整はいずれも体部外面はハケメ、内面はケズりおよびナデである。4は口縁部が直立して上にのびる。体部が口縁部の外側にとりつくため、頸部内側は段状になる。器壁が厚く、胎土もやや粗く橙色を呈する。小型丸底壺とするより、鉢というべきかもしれない。器面調整は磨滅のため、不明瞭である。

7は小型の鉢である。磨滅が著しい。8は広口壺である。口縁端部に面をもち、円形竹管浮文を配する。9～12は高杯脚部である。9は円形の3方透かしを配する。9、10は裾部が大きく屈曲し、開く。

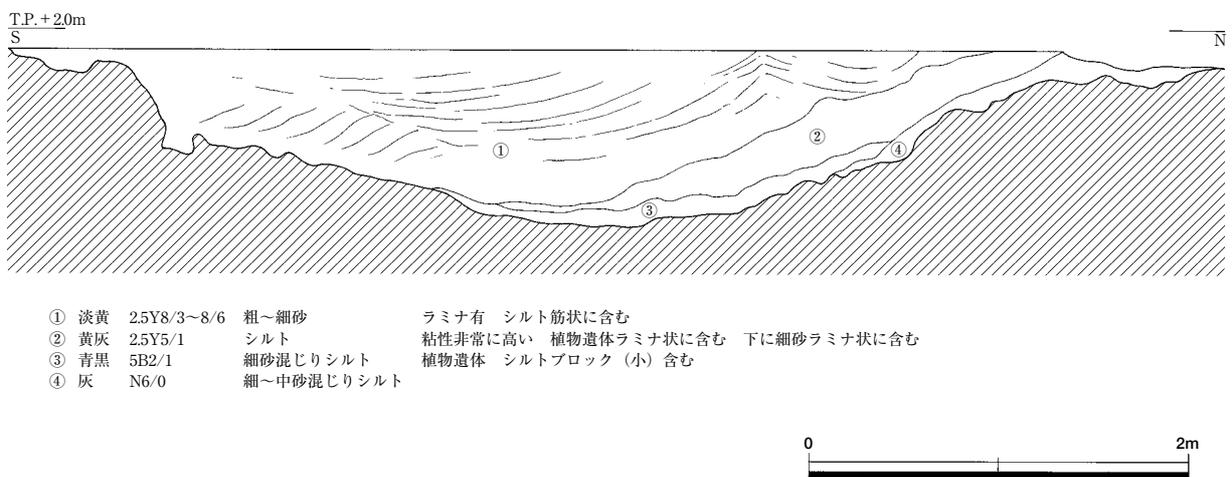


図51 2-1流路 断面図

12は更に屈曲が強く、裾部は低い。

13～22は甕である。13～16は布留式甕である。いずれも口縁端部に内傾した面をもつ。体部が遺存しているものは16のみで、器面調整は外面が粗いハケメ、内面は横方向のケズリである。17～21は庄内式甕である。いずれも口縁端部が上方に立ち上がる。体部外面は細かいタタキを、内面はケズリを施す。22は口縁端部を丸くおさめる。

23は弥生時代前期の甕である。口縁端部に刻みを施す。

24は脚台部である。体部外面はタタキである。25は有孔鉢である。26は壺底部である。

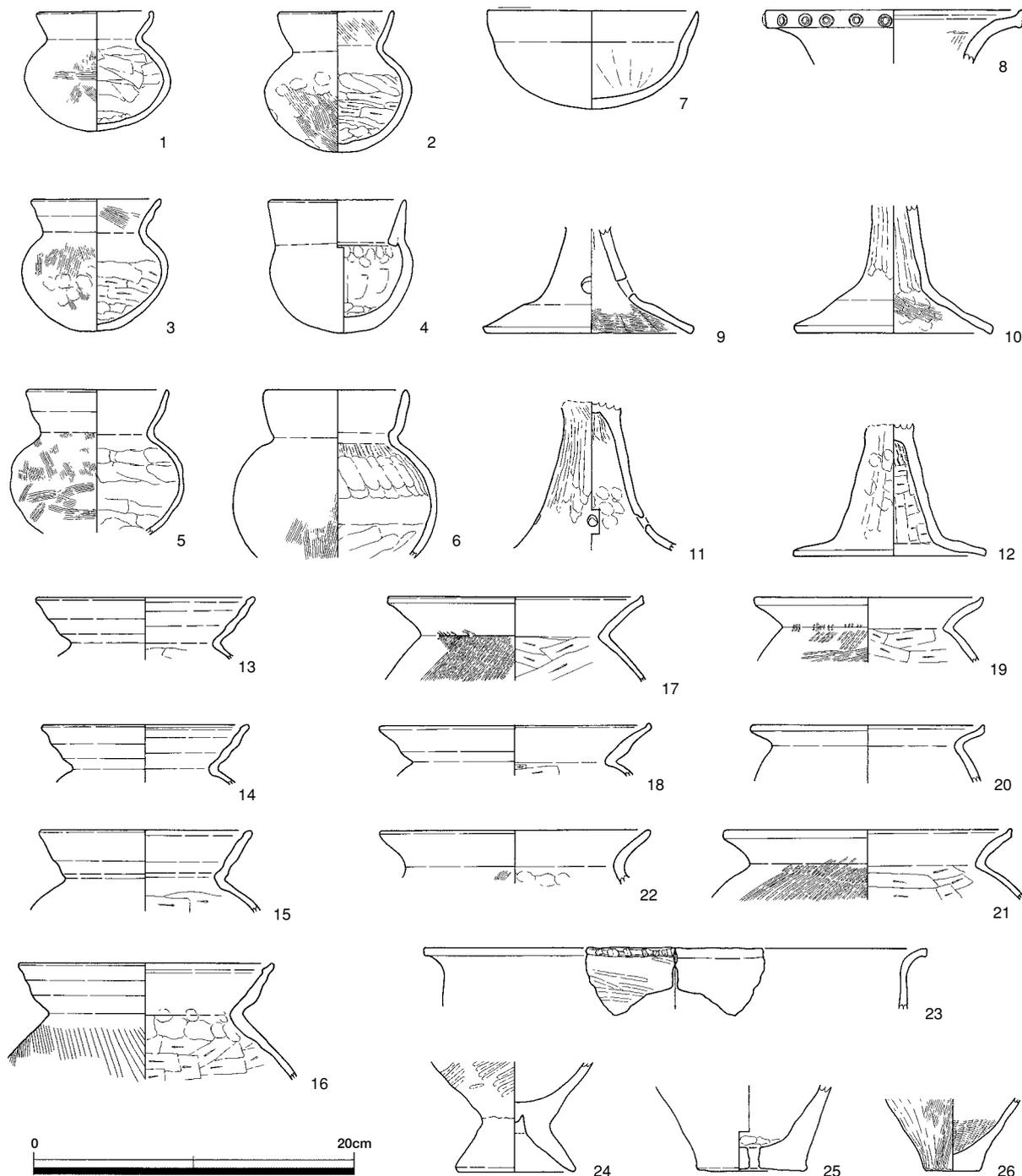


図52 1層 出土遺物

出土した遺物の多くは庄内式期末～布留式期前葉のものであるが、1層は洪水砂であり、今回の調査では古墳時代前期の遺構面は検出されていない。しかし、比較的まとまって遺物が出土していることから、周辺に当該期の集落が存在している可能性が非常に高い。

出土木製品（図53）

2-1流路から出土した「アカ取り」である。「アカ取り」とは船底に溜まる水をくみ出す道具で、塵取り状を呈している。一木を削り貫いており、側面は強く立ち上がり、後方（把手と反対側）に向かって曲線を描き収束する。底面は後方側が若干上向きである。把手にはほぞ穴が切られ、柄を差し込んで使用されたと考えられる。ほぞ穴は、やや斜めに切られており、差し込んだ柄と底面の角度が狭くなる。幅18.6cm、長さ29cm、高さ9.1cmを測る。所属時期は流路から出土しており、断定できないが、1層洪水砂から古墳時代前期の遺物がまとまって出土しており、同様の洪水砂で流路が埋没していることから、古墳時代前期の時期に所属する可能性が高い。

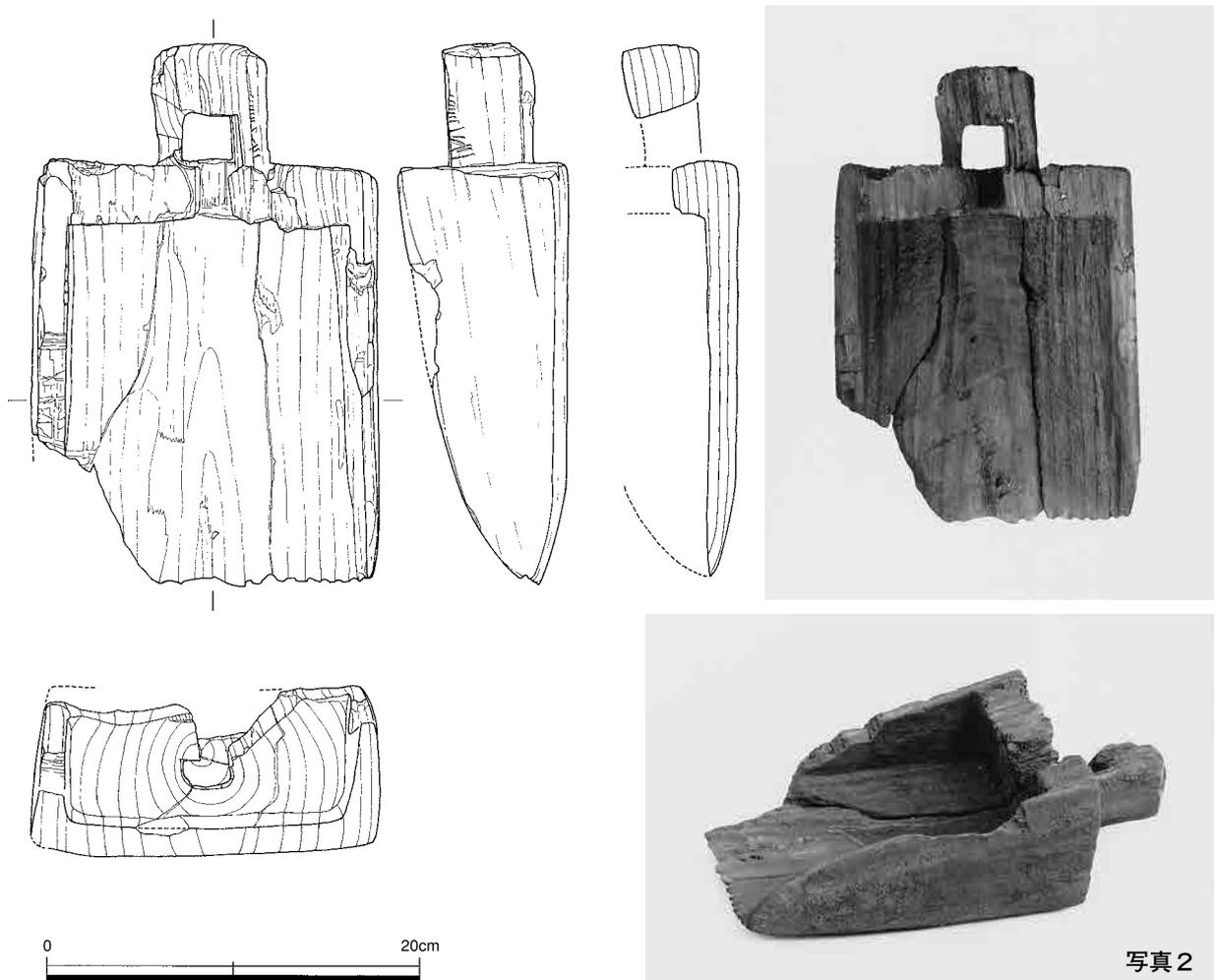


図53 2-1流路 出土木製品

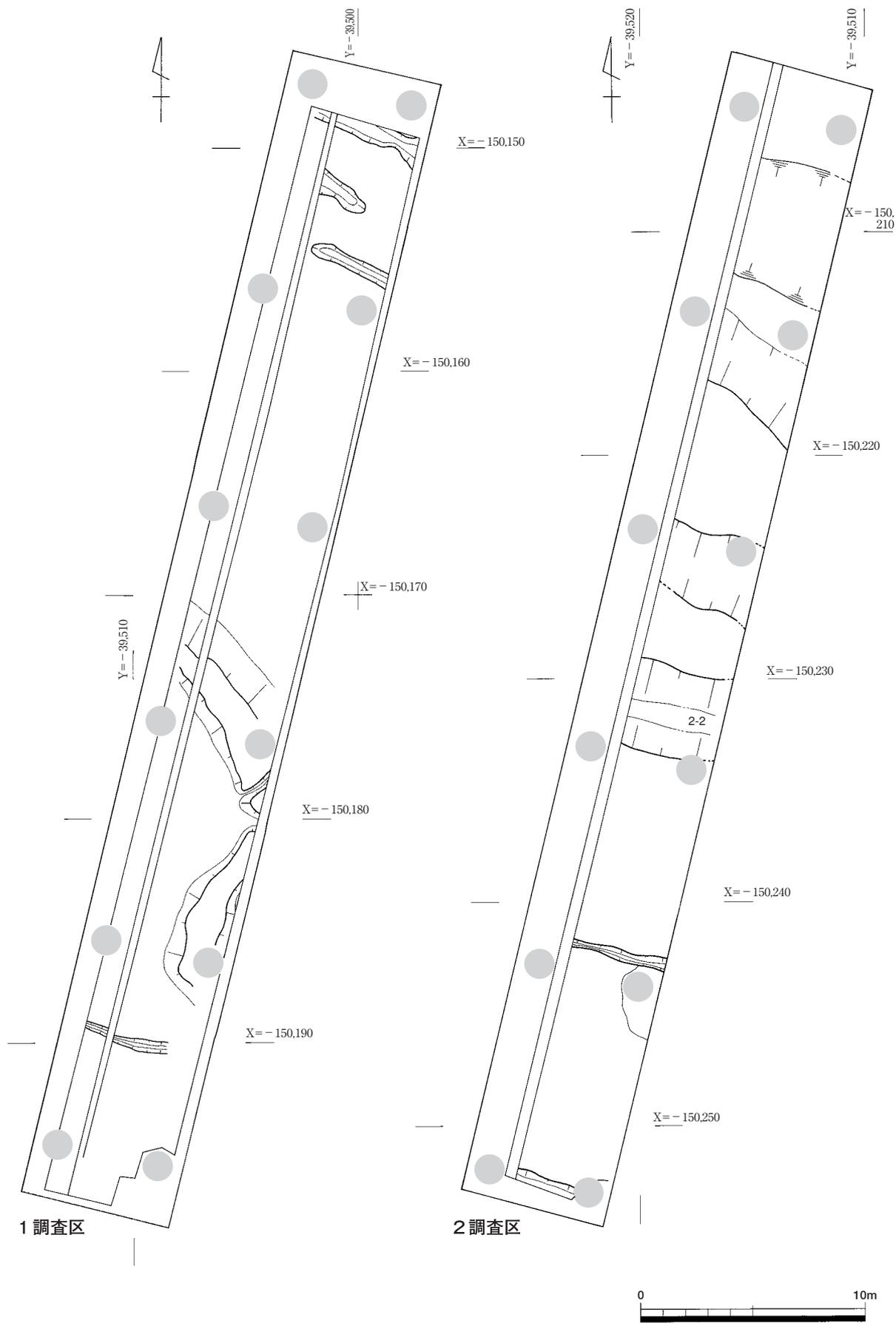


図54 第3面 遺構分布図

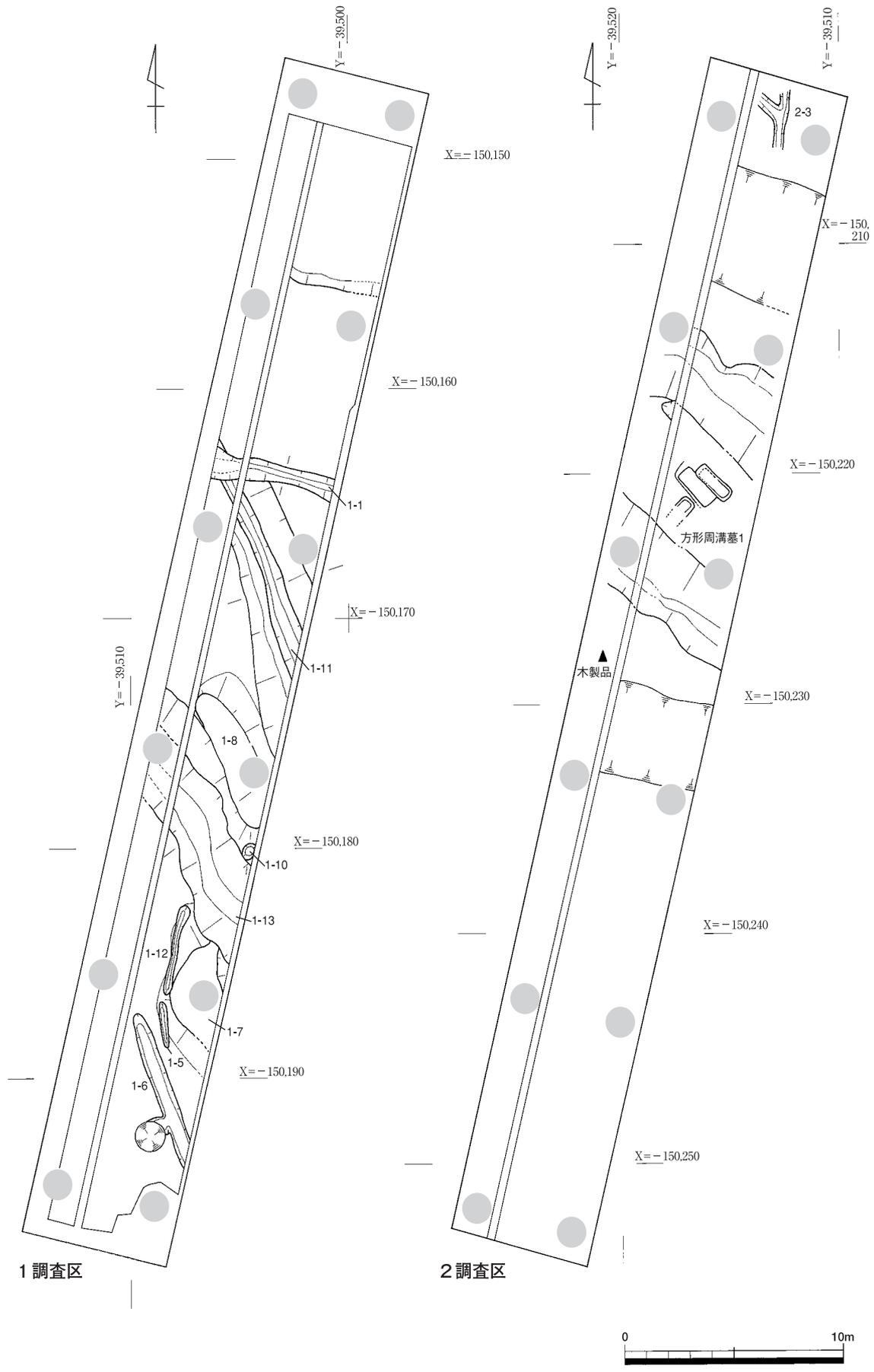


図55 第5面 遺構分布図

第3章 調査の成果

第2面 土壌化層である6層上面を第2面として遺構検出を行った。1調査区北側はT.P.+1.3m、2調査区南側はT.P.+1.6mを測る。第1面同様に北に向かって下降する。1調査区で地形の高まりを確認した。これは、下層の8層が高まり状を呈しているためで、第3～5面でも高まりとして確認できる。6層は水田土壌の可能性が考えられたが畦畔は確認できなかった。

第3面 6層除去面である7層上面を第3面として遺構検出を行った。1調査区北側はT.P.+1.2m、調査区南側はT.P.+1.4mを測る。7層が非常に薄く、8層が露出する部分も多い。1調査区では高まりの他、溝を数条検出した。やや北にふるが東西方向の溝でいずれも浅い。2調査区でも溝を検出したが1調査区同様浅い。

第4面 7-2層上面を第4面として遺構検出を行った。7-2層は1調査区中央、高まり周辺で存在し、8層が露出する部分が大部分であった。この面に対応する遺構は検出されなかった。

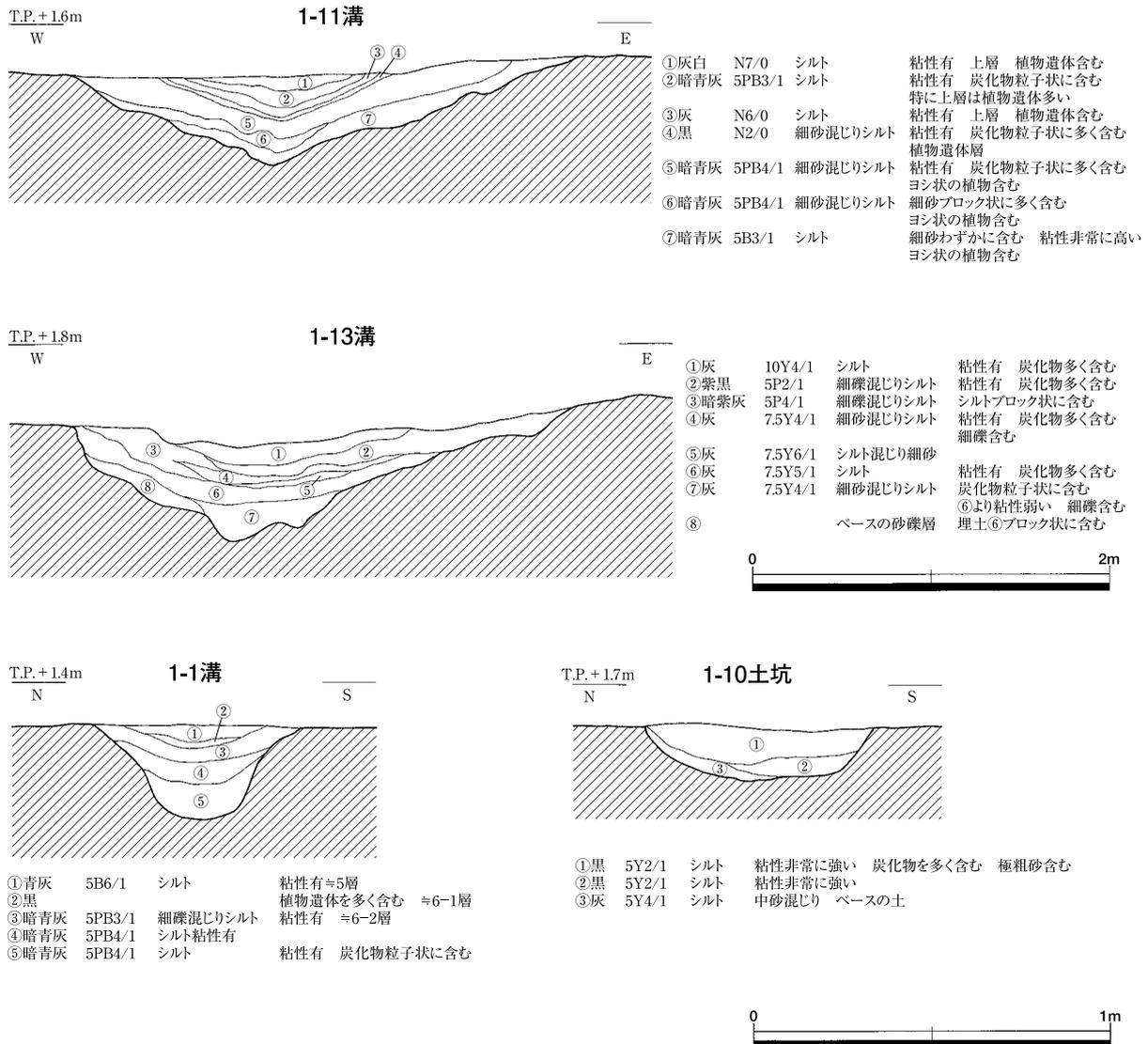


図56 第5面 溝、土坑 断面図

第5面 8層上面を第5面として遺構検出を行った。1調査区北側でT.P.+1.3m、2調査区南側でT.P.+1.4mを測る。上面に比べて、北と南の比高差は小さく、1調査区南側、2調査区北側がT.P.+1.4～1.8mと高い。

1調査区では、溝、高まりを検出した（第6面で検出した遺構のうち、断面等を検討した結果、上面の第5面からの切り込みと判断されたものに関しては、第5面の遺構配置図に追加した）。調査区の北側では落込みが見られる。2調査区では方形周溝墓を1基の他に溝を検出した。

落込み 1調査区の北側では落込みがみられる。約20cmの比高差があり、北に向かって下降する。

1-11、13溝（図56）（図版13-4～6） 1調査区中央の1-8高まりを挟んで1-11溝、1-13溝が検出された。北西-南東方向の溝である。1-11溝は幅約2.8m、深さ0.5mを測る。高まり側の肩部分では1.1mを測る。埋土はシルト、細砂混じりシルトでいずれの層も植物遺体を多く含む。特に④は植物遺体層である。1-13溝は幅2.8m、深さ0.5mを測る。高まり側の肩部分では1mを測る。埋土は②～④は細礫を多く含む。1-11溝が1-13溝に比して、ややなだらかな断面形状を呈する。いずれも遺物の出土は少なく、下層の遺物の混入が多いが、1-11溝からはわずかに弥生時代中期の遺物が出土している（図64-1～3）。

1-1溝（図56）（図版13-7） 1-11溝の北側で検出した。東西方向の溝である。幅0.6m、深さ0.3mを測る。埋土はシルトを主体とし、炭を粒子状に含む。溝からは遺物の出土は少なく、下層の遺物が混入している。1-1溝は調査区東側で1-11溝と切り合い関係にあり、これより新しい。

1-5、6、12溝 調査区南側、1-7高まりの裾に沿って1-5、12溝が検出された。溝は幅が狭く約0.3mを測る。1-6溝は高まり1の南に位置し、上述の1-11、13溝と同じく北西-南東方向の溝である。幅0.8m、深さは0.1m以下と浅い。いずれも出土遺物は少なく、下層の遺物が混入していると考えられ、縄文時代晩期末、弥生時代前期の土器が出土している。

1-10土坑（図56） 調査区中央東端で検出された。直径30cm、深さ約8cmを測る。埋土は粘性の高いシルトを主体とし、炭を多く含む。

方形周溝墓1（図57～60）（図版11～13-3） 2調査区では方形周溝墓を1基検出した。調査区北半に位置している。方形周溝墓が検出された部分は、ベースである第5面がT.P.+1.8mと最も高い。周溝墓のマウンドは第1面検出時に、すでに高まりとして現れている。墳丘規模は東西幅は調査区外になるため、不明であるが頂部で6.9m以上、南北約4.7m、盛土の厚さは約0.4mを測る。周溝は幅3～4m、深さは約0.6m（墳頂からは約1m）を測る。主体部は土器棺墓1基（主体部1）、土壙墓2基（主体部2、3）を確認した。棺材は遺存していない。また、主体部3からは石製の丸玉が出土した。

・**盛土** 盛土は大きく2層に分けることができる（盛土1、2）。いずれも基盤層である8層と8層の下層の自然堆積層（オリーブ灰色シルト～細砂）のブロック混合土であるが、後に盛られた盛土1は8層下層が大きなブロック状を呈し、主体を占め、先に盛られた盛土2は8層が主体を占める。これらは水平に盛られてはおらず、盛土2は中央が窪んだ状態で盛られ、その後、盛土1を盛る。そのため、検出面では、図57で示した点線ラインで盛土の違いが現れた。

・**周溝** 西と東の周溝は調査区外のため不明である。北側の溝は幅4～3m、深さは墳頂から約0.9m、南側の溝は幅約3.5m、深さは墳頂から約1mを測り、北の溝のほうが緩やかである。埋土はシルトおよび植物遺体を多く含むシルト層の互層になっており、一気に埋没した様子は伺われず、第3面段階で

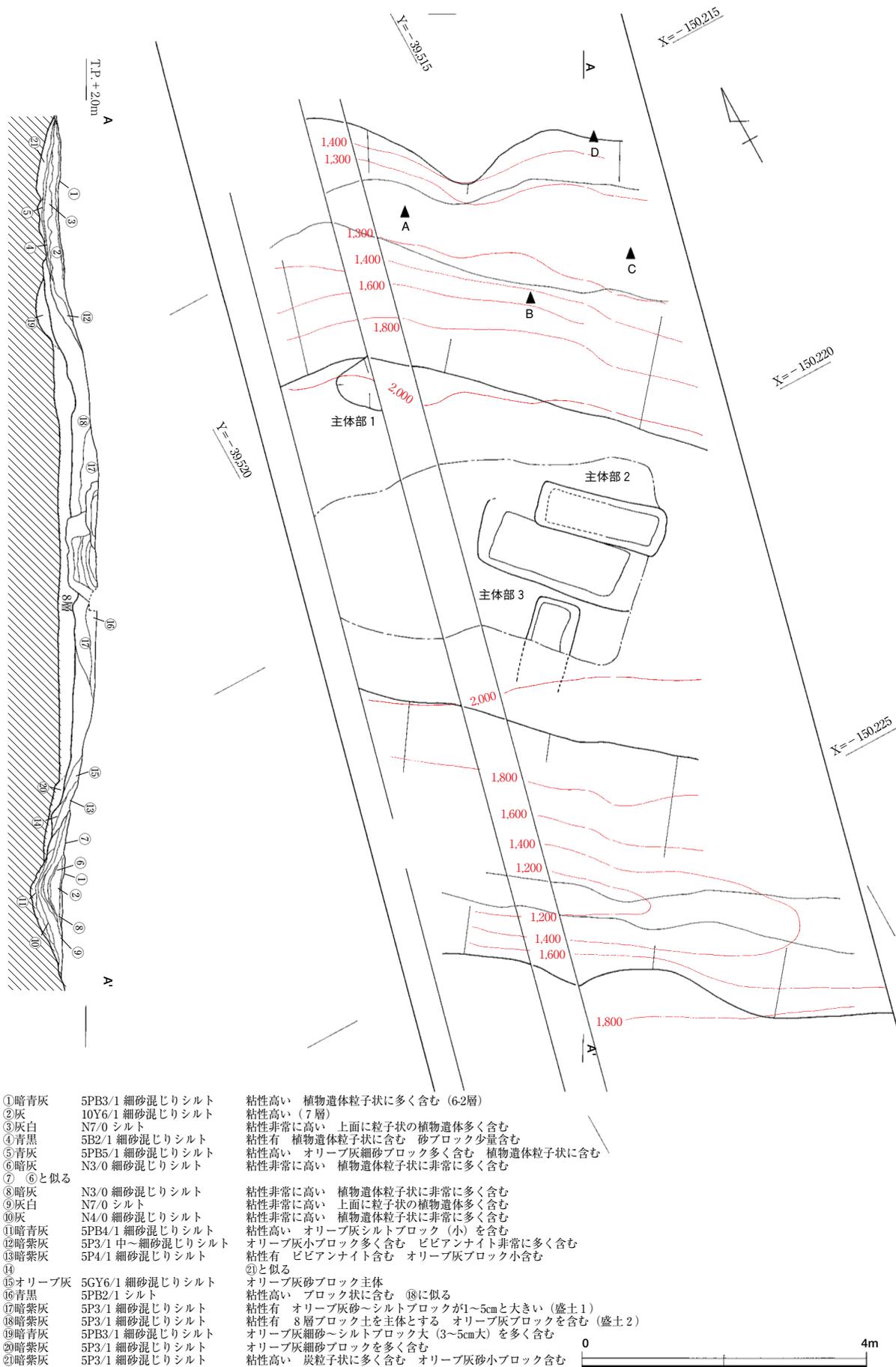


図57 方形周溝墓1 平・断面図

も窪み状に残っている。溝から出土した遺物は、下記の他は、下層の縄文晩期末～弥生時代前期のものが多く、方形周溝墓に関わる時期の遺物は非常に少ない。

・土器出土状況（図58） いずれも北側周溝内から出土している。土器A、Cは溝の底近く、土器Bはマウンド側の肩で出土した。土器A、Bは水差し形土器で土器Bには穿孔が施されている。土器Cは広口壺で、口縁部のみが出土している。土器Dは周溝墓のメイン断面内に入ってしまったっており、断面観察あぜを撤去する際に出土した。溝の北肩に位置すると考えられるが、すぐ横に基礎杭が位置しており、溝の肩が十分に検出できず、その出土位置については断言できない。この周溝墓に伴わない可能性もある。

・主体部 マウンド上で土器棺墓1基、土壙墓2基を検出した。

主体部1 土器棺墓である。マウンドの北西隅で検出した。コーナー部分に位置している可能性が高い。墓壙東側を側溝でできてしまったため、全体の形状は不明であるが南北約75cmを測る。土器棺は甕で口を北側に向けた横位である。甕は直径31.6cm、器高46.8cmを測る。この甕の下では壺の破片が出土した（図59下図、図版11-6、7）。この壺は破片が、側溝掘削土から出土している他に、北側周溝内からも出土している。壺は復元作業を行ったが、体部から底部にかけての破片のみで口縁部はない。また、出土状況は甕と同様、底部を南に向け、その底部は甕のその下に位置する。口縁部を合わせたような状況ではない。棺の蓋といったものではなく、棺を安定させるためこの場で土器を割り、破片を隙間に入れたとも考えたい。また、棺内の土壌を洗浄したが人骨等の出土はみられない。

主体部2 マウンド中央より北寄りで検出した。墓壙の規模は長軸1.85m、短軸0.6mを測る。長軸は北西-南東である。棺材、人骨は検出していない。深さはわずかに10cmを残すのみで、上面を削平されていると考えられる。

主体部3 主体部2の南東側、マウンド中央に位置している。主体部3は主体部2にわずかであるが切られており、これより先行する。主体部3はマウンド上面で検出を行ったが、十分な検出ができなかった。そこで、観察用の断面を残して、マウンドをすきとった（そのため、図60の平面図と断面図に齟齬をきたしている。平面図はT.P.+1.9m付近で再検出）。墓壙の掘り方は、盛土1と非常に似通った埋土で、8層下層のオリブ灰色シルト～細砂の大ブロックを多く含み、東側は輪郭を検出することができなかった。また、断面観察においても、立ち上がりは確認できなかった。長軸2.4m、短軸1.2mを測る。長軸は主体部2よりやや北にふるが北西-南東である。掘り方の深さは30cmを測る。木棺は遺存していないが、埋土①～③がその部分にあたると考えられる。規模は長軸1.8m、短軸0.7mを測る。埋土は青黒～紫黒細砂混じりシルトで粘性が高い。オリブ灰色シルトの小ブロックを含む。人骨等は遺存していない。

また、石製の丸玉が墓壙の南東で出土した（図版12-6）。出土レベルはT.P.+1.83mを測る。ただし、方形周溝墓盛土、周溝には下層の遺物が多く混入しており、墓壙内の埋土にもこれら、下層の遺物が含まれていた。遺物の所属時期の確定が難しく、ただちに、墓壙に伴うものとは断言できない。

主体部3の南側にもう1基、墓壙の可能性が考えられる痕跡を確認した（図版12-4）。主体部2、3とは直行する軸をもつ。ほとんど、掘り込みはなく、南西側も検出できなかったため、ここでは、主体部の可能性を指摘するに留める。

・下層溝 図57で示した周溝より内側に平行する2条の溝が存在する（図57断面図 埋土⑱、⑳）。この溝（2-56溝、2-88溝）は周溝墓の盛土上面までは立ち上がらない。調査では断面観察を行い、下

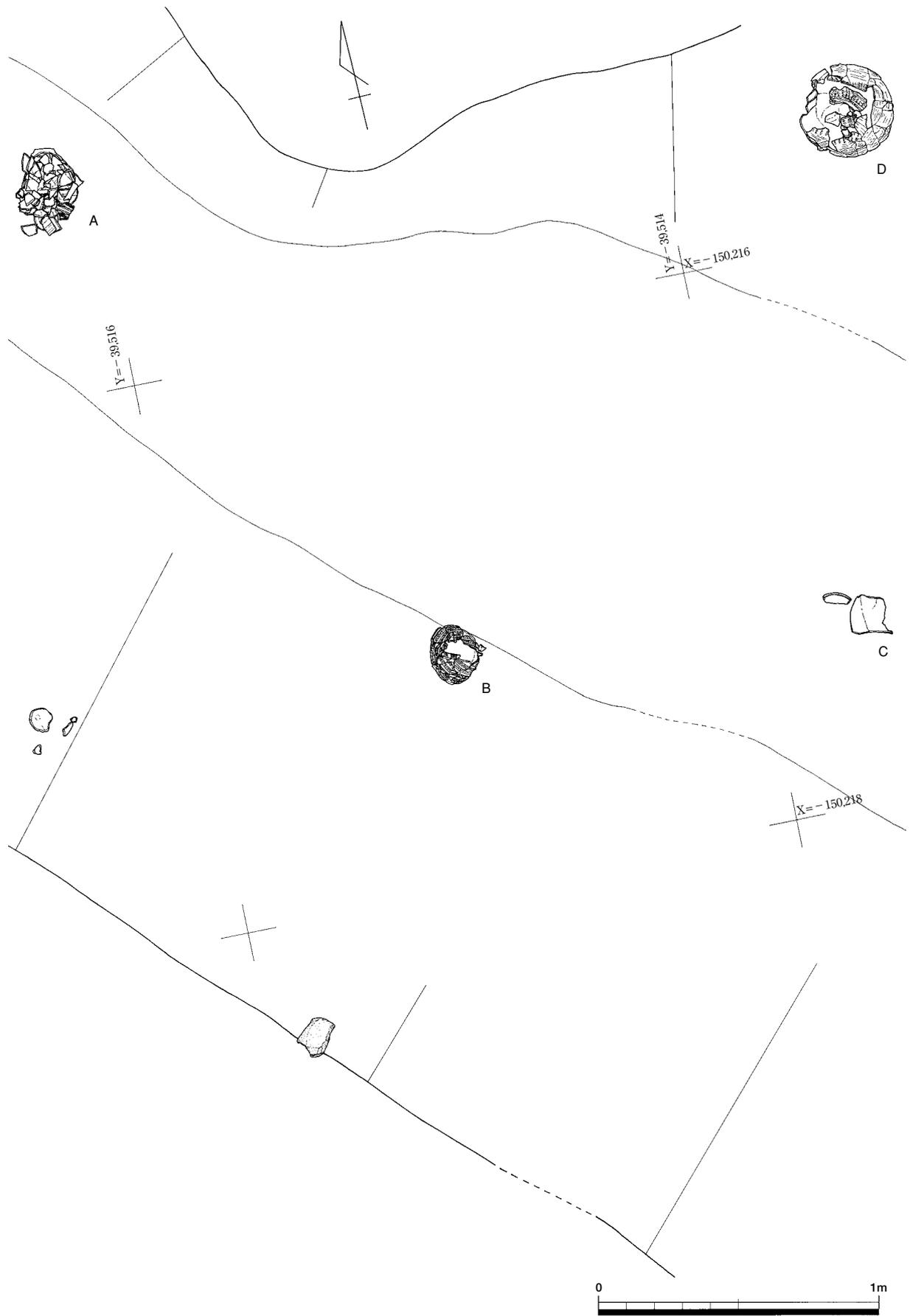


図58 方形周溝墓1 遺物出土状況図

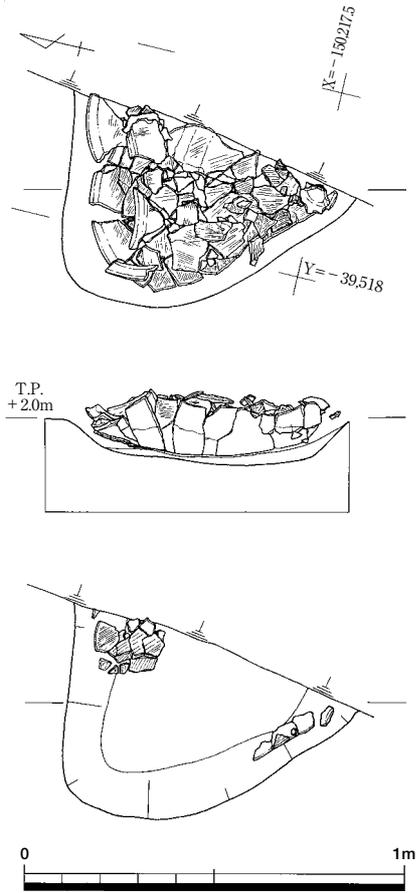


図59 方形周溝墓1 主体部1 平・立面図

層の8層に立ち上がりが確認できなかったため、土坑や溝といった下面の遺構と考え、断面を残して第7面の検出を行った。しかし、検出されたのは2本の平行する溝であった。2-56溝は幅約0.9m、深さ0.2mを測る。2-88溝は南側の肩は周溝に切れ、幅1.1m以上、深さは約0.2mを測る。埋土は暗青灰～暗紫灰色細砂混じりシルトで8層下層の細砂～シルトブロック大を多く含む。どちらの溝も、周溝より若干内よりに位置していること、周溝墓の周溝とほぼ同じ方向であることから、これに関連した溝と考えられる。しかし、溝からは遺物の出土は少なく、2-56溝からは縄文時代晩期末～弥生時代前期の遺物がわずかに出土しているのみである。なお、この溝の位置については、第7面遺構図(図67、78)を参照されたい。

方形周溝墓1は土器棺、出土遺物から弥生時代中期後半の時期が与えられる。

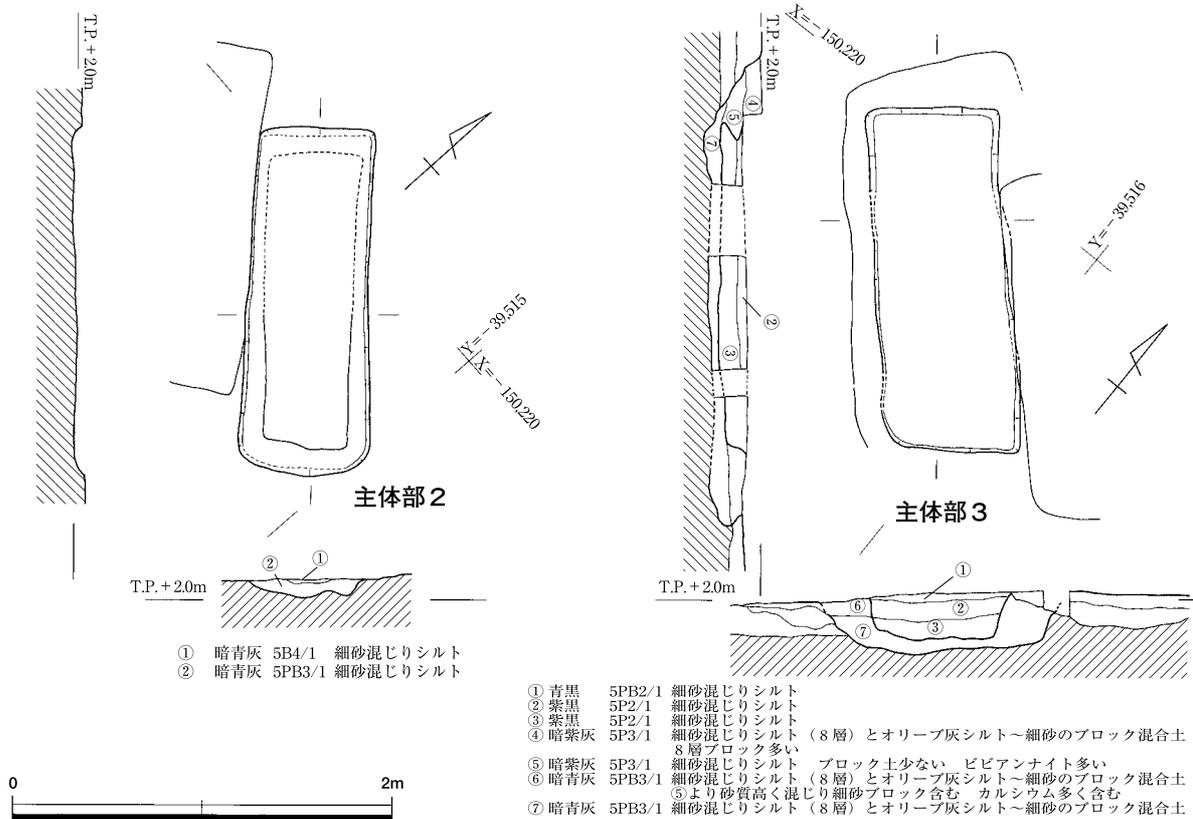


図60 方形周溝墓1 主体部2、3 平・断面図

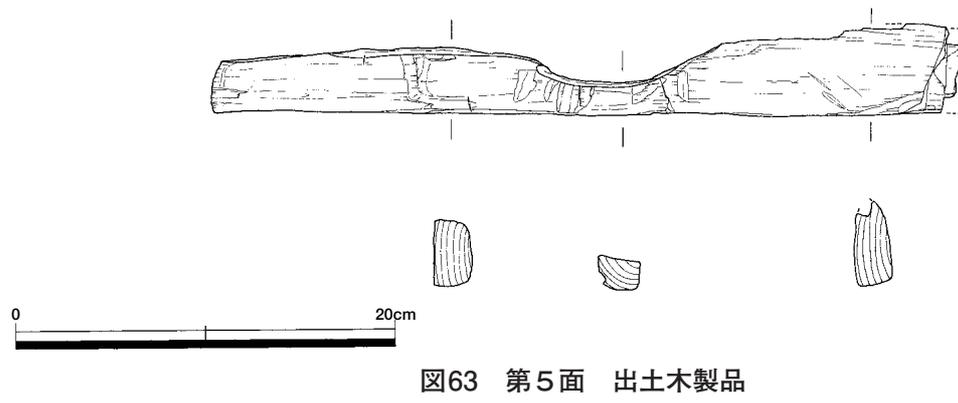
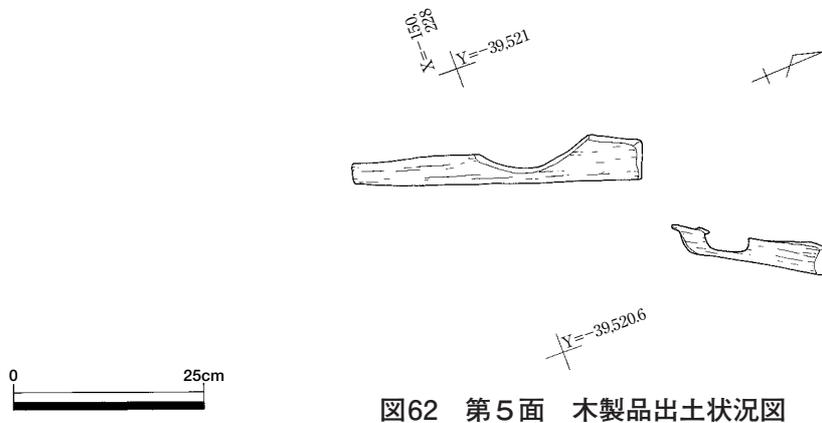
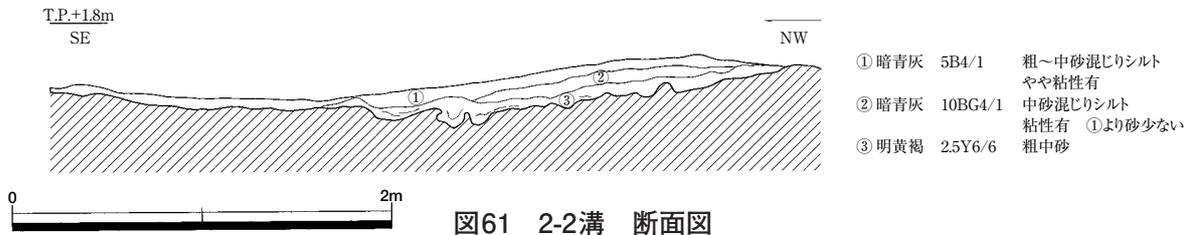
第3章 調査の成果

2-3溝 2調査区北端で検出した。南北方向の溝で、二股に分かれる。幅は約50cmを測り、深さは5cm未満と非常に浅い。

2-2溝 (図61) 方形周溝墓1の南側に位置している。幅約4m、深さ約0.3mを測る。埋土は上層では6、7層が落込んでおり、下層は細砂をラミナ状に含む。底面は凸凹している。縄文晩期末～弥生前期の遺物を含むが、この面のベースである、8層、および第7面の遺物が混入したものと考えられる。

この溝の北側で木製品が出土した (図55、62、63) (図版10-3)。同一の個体と考えられるが、接合しなかった (図64)。木製品は加工が施されているが、欠損している。残存長39.7cm、厚さ約2cmの板状を呈している。板の幅は一定ではなく、徐々に広がっており、2.8～4.6cmを測る。また、残存しているうちの、ちょうど中央付近では、片側から半円形にくりこみが入れている。何らかの製品と考えるよりは、部材の一部と考えられる。

第5面は方形周溝墓やわずかに出土した遺物から弥生時代中期の時期が与えられる。遺物の出土は非常に少なく、当概期の遺物で形の分かるものは次に示すものでほぼ全てである。



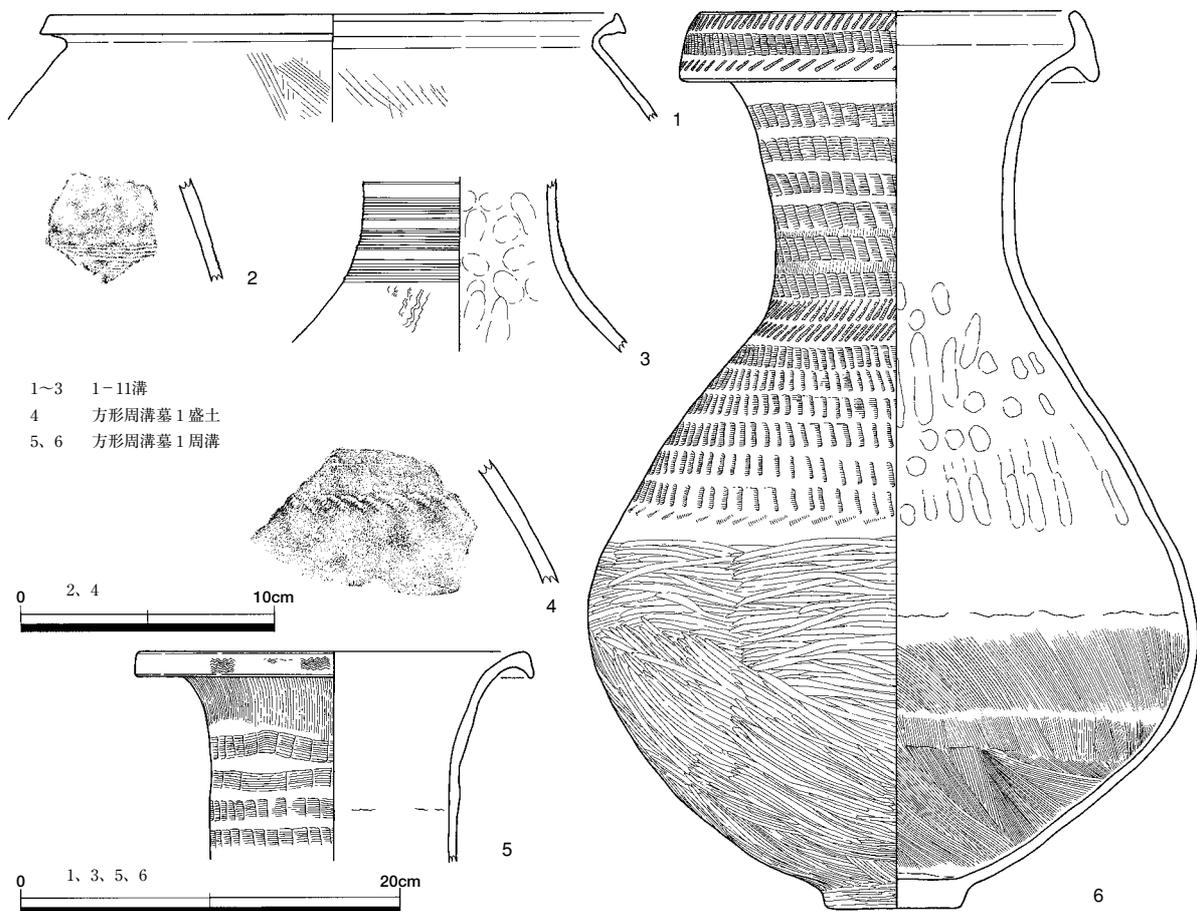
第5面出土遺物（図64～66）（図版27、39）

図64-1～3は1-11溝から出土した遺物である。1は甕である。口縁部は大きく屈曲し、端部は上下に肥厚する。体部外面は粗いハケメがみられる。2は壺の肩部の破片である。櫛描き直線文を施す。3は壺の頸部である。櫛描き直線文を3帯施し、その下方に縦方向の櫛描き波状文を施す。2、3は生駒西麓産の胎土である。

図64-4～6、図65、66は方形周溝墓および周辺で出土した遺物である。

図64-4は壺の肩部である。周溝墓の盛土内から出土した。櫛描きの列点文を施す。図64-5は広口壺の口頸部である。口縁端部を下方に拡張し、端面には櫛描きの波状文がめぐり、また、頸部には4帯の櫛描き簾状文がみられる。周溝墓周溝内土器Cである。図64-6は有段口縁の壺である。体部は最大径が体部の1/2より下半にあり、やや下膨れである。文様は櫛描きの簾状文と列点文、扇状文で構成される。上下に拡張された口縁部には簾状文がめぐり、その上下に列点文を施す。頸部には6帯の簾状文がめぐり、2帯の列点文を挟んで体部にも6帯の櫛描き簾状文がめぐり、体部最下段には扇形文を施す。胎土は生駒西麓産である。なお、頸部から口縁部にかけての遺存状況が悪く、口縁部は直接接合しないが同一個体と判断した。周溝周辺出土土器Dである。

図65-1、2は水差し形土器である。1は体部下半に最大径をもつ。口縁部は櫛描きの列点文を3帯施し、頸部から体部にかけて8帯の櫛描き簾状文がめぐり、体部外面は横方向にミガキを施す。内面は体部下半に縦方向のミガキを施す。内面は上半には指オサエ、下半にミガキがみられる。体部の下方には非常に小さい穿孔がみられる。胎土は生駒西麓産である。周溝内土器Bである。2は体部中央に最



1～3 1-11溝
4 方形周溝墓1盛土
5、6 方形周溝墓1周溝

図64 第5面 出土遺物（1）

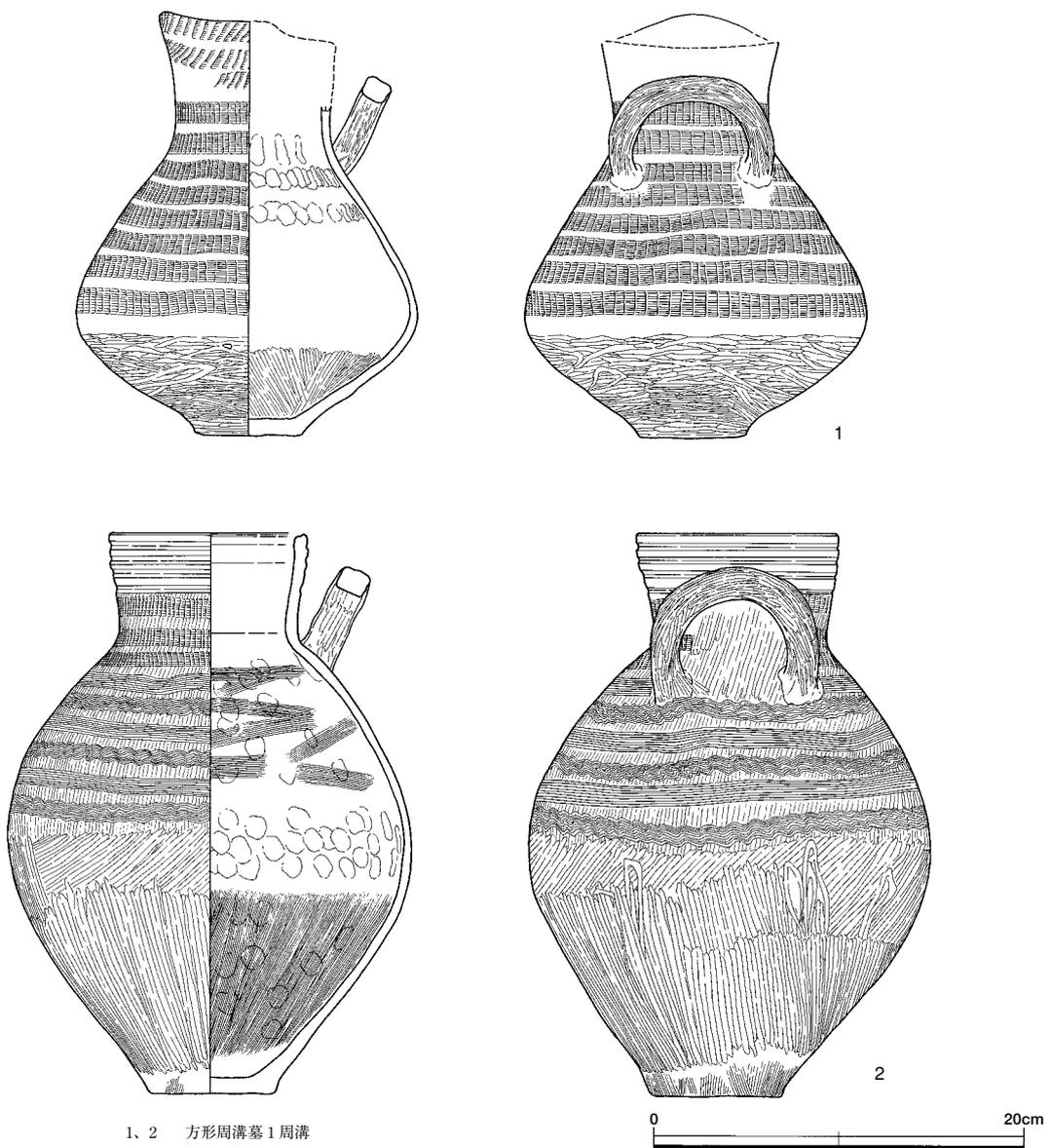
大径をもつ。口縁部は直立し、上端には面をもつ。口縁部に4条の凹線文を施し、頸部は櫛描き簾状文3帯、以下櫛描き直線文、波状文を交互に3帯施す。文様は把手の裏側には施さない。体部外面は縦方向のミガキを丁寧に施し、内面の上半は横方向のハケメ、中程は指オサエが残り、下半は縦方向にハケメを施す。胎土は精緻でにぶい黄橙色を呈し、生駒西麓産の胎土ではない。周溝内土器Aである。

図66-1、2は主体部1の土器である。1は破片として出土したもので、大型の壺である。頸部より上は欠損している。体部には櫛描き直線文が7帯めぐる。体部外面は上半はハケメがみられ、下半はミガキを、内面はハケメを施す。2は土器棺として使用された甕である。表面がやや磨滅しており、体部外面はタタキのち、ハケメであるが、タタキ痕跡がよく観察できる。体部下半はケズリを行ったのち、ミガキを施す。いずれも生駒西麓産の胎土ではない。

図66-3は石製の丸玉である。直径1.2cm、厚さ0.65cmを測る。周溝墓主体部3から出土した。

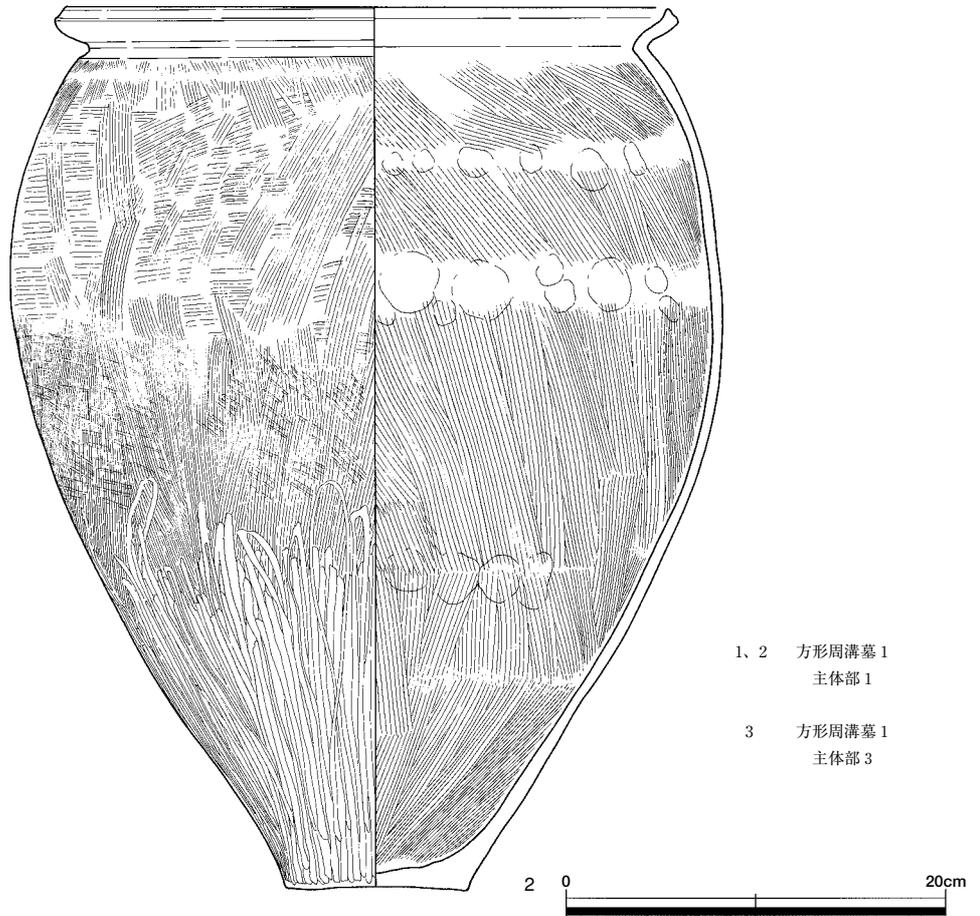
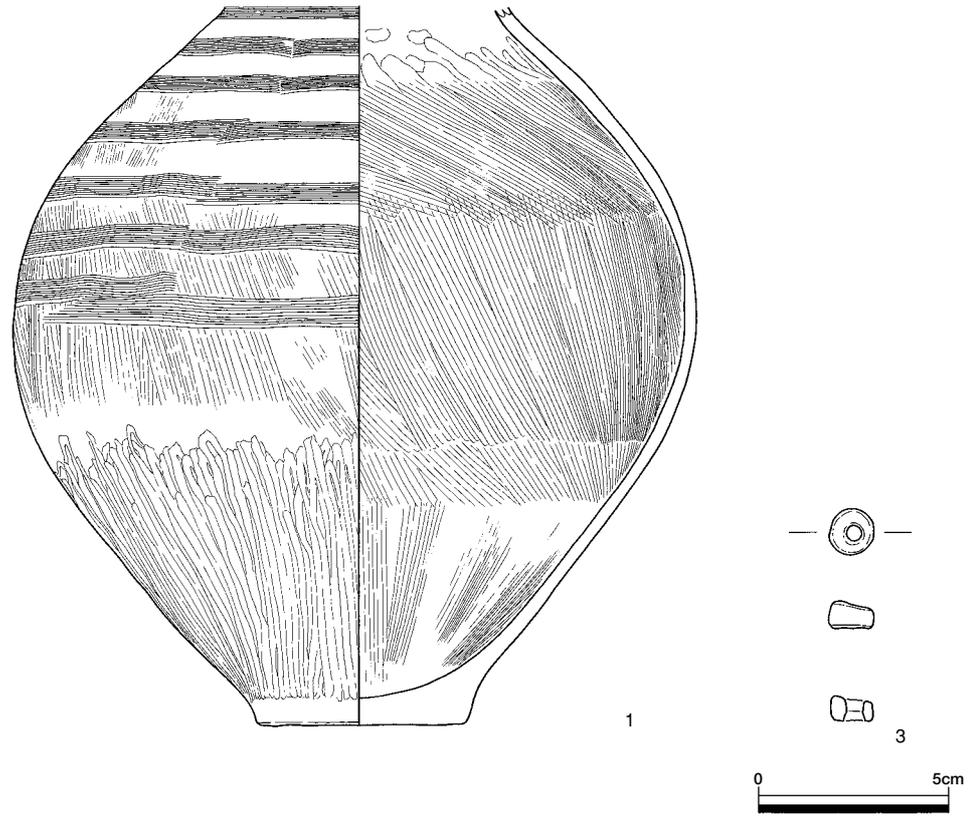
出土した土器は弥生時代中期後半（IV様式）に含まれる。

なお、方形周溝墓を中心に、下層の遺物が多く混入しており、これについては、第7面で記述する。



1、2 方形周溝墓1周溝

図65 第5面 出土遺物（2）



- 1、2 方形周溝墓1
主体部1
- 3 方形周溝墓1
主体部3

図66 第6面 出土遺物 (3)

第6面 第1調査区では8層が2枚に細分できたため、8-2層上面を第6面とした。第6面で検出した遺構は本来、上面の第5面に帰属するものと考えられ、第6面に対応する遺構は確認できなかった。

第7面 8層除去面を第7面として遺構検出を行った。第7面は1調査区の南側と2調査区の北側がT.P.+1.3～1.5mと高く、1調査区北側は、北に向かって下降し、北端はT.P.+0.8mを測る。

1調査区では掘立柱建物、柱穴、土坑、溝等多くの遺構を検出した。1調査区北側は特に柱穴が密集しており、掘立柱建物を復元することが出来る。柱穴は柱の遺存するものも多くみられた。また、石棒が出土した柱穴もみられる。調査区南側では土坑が多くみられる。1-16土坑は土器棺墓と考えられ、ほぼ完形の縄文時代晩期末の深鉢が出土した。他にサヌカイト集積遺構等を検出した。

2調査区では調査区北半の高い部分では上面の方形周溝墓や、流路によって、第7面がかく乱された部分が多いが、ピット、溝、土坑を出土している。南半は8層の遺物包含層からの遺物の出土も少なく、遺構も希薄である。

これらの遺構の出土遺物から、第7面は縄文時代晩期末～弥生時代前期の時期が与えられる。

以下調査区毎に各遺構についてみていくこととする。

1 調査区

掘立柱建物（図68、69）

調査区では約150基近くのピットが検出された。しかし、建物を復元することは非常に困難であった。ひとつには調査区が幅7mと狭く、更に、コンクリートの基礎杭が打設されており、その部分では遺構検出ができなかったことがある。また、柱間隔が一定していないこと、それぞれのピットの埋土、規模において差異が認められなかったこと、上部が削平された竪穴住居などの存在も推定できることなどの理由が挙げられる。調査では、検出時には、建物を推定することができず、ピットを掘削した段階で、柱材が遺存しているものや、深さがあるピットなどを中心に再度、建物の復元をこころみ、下記の4棟を掘立柱建物と考えた。

掘立柱建物1（図68、70） 調査区北側で検出した。1×3間と北東-南西方向に長い建物である。長辺は南東辺で4.3m、短辺は北東辺で2.1mを測る。柱間隔は短辺側が2～2.1mと長く、長辺側は1.3～1.6mと短い。1-195と1-61ピット間には建物を構成すると考えられるピットはない。ピットは直径20cm前後を測り、北側の1-53、61、218ピットは深さ30～40cmと深く、南側のピットは15～20cmと浅い。柱材が遺存しているピットはない。ピットからの遺物の出土は少なく、1-53ピットからは縄文晩期土器片の他、サヌカイトが、1-66ピットからは縄文晩期、弥生土器片がわずかに出土する。

掘立柱建物2（図68、70） 調査区北側で検出した。遺構密集部の最も北側にあたる。1×2間と北西-南東に長い建物である。長辺（南西辺）は2.8m、短辺（北西辺）は1.7mを測る。長辺の柱間隔は1.2～1.4mと短い。長辺側は中央の1-90、93ピットが外側に若干とびだした平面形になる。ピットは直径25～30cm前後を測り、深さは25～35cmを測る。1-70、91ピットでは柱材が遺存している。1-70ピットでは柱の上部にもう1本柱材があり、柱を固定するものであろうか（図版17-3）。1-91ピットの南西に1-92ピットが位置しており、柱材が遺存している（図版17-4）。柱材はピットの掘り方と大きさがさほど変わらず太い。ピットからの遺物の出土は少なく、1-90ピットからは図化していないが、弥生土器と考えられる比較的大きい破片が出土している他は、1-70ピットからは土器片が出土しているのみである。

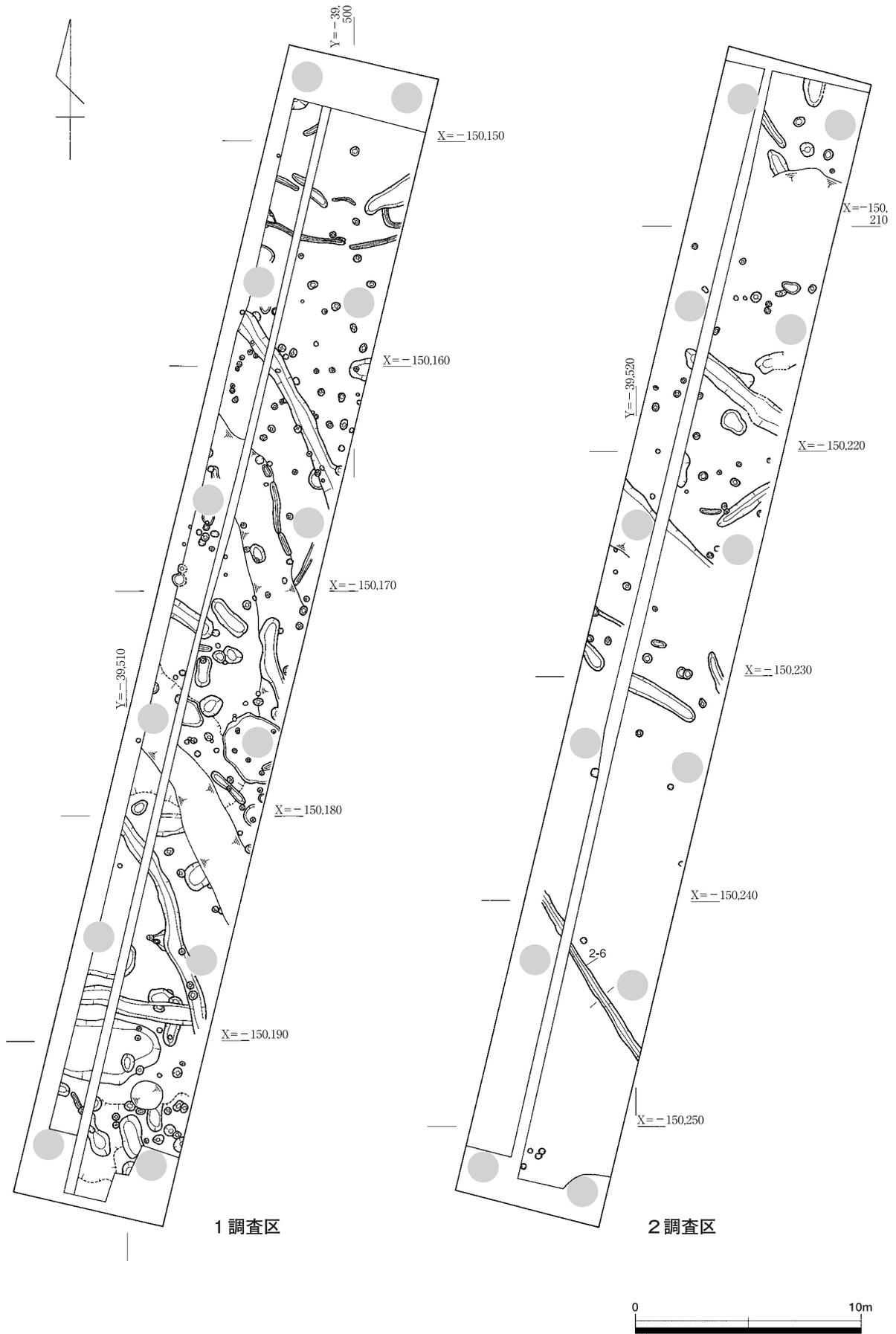


図67 第7面 遺構分布図

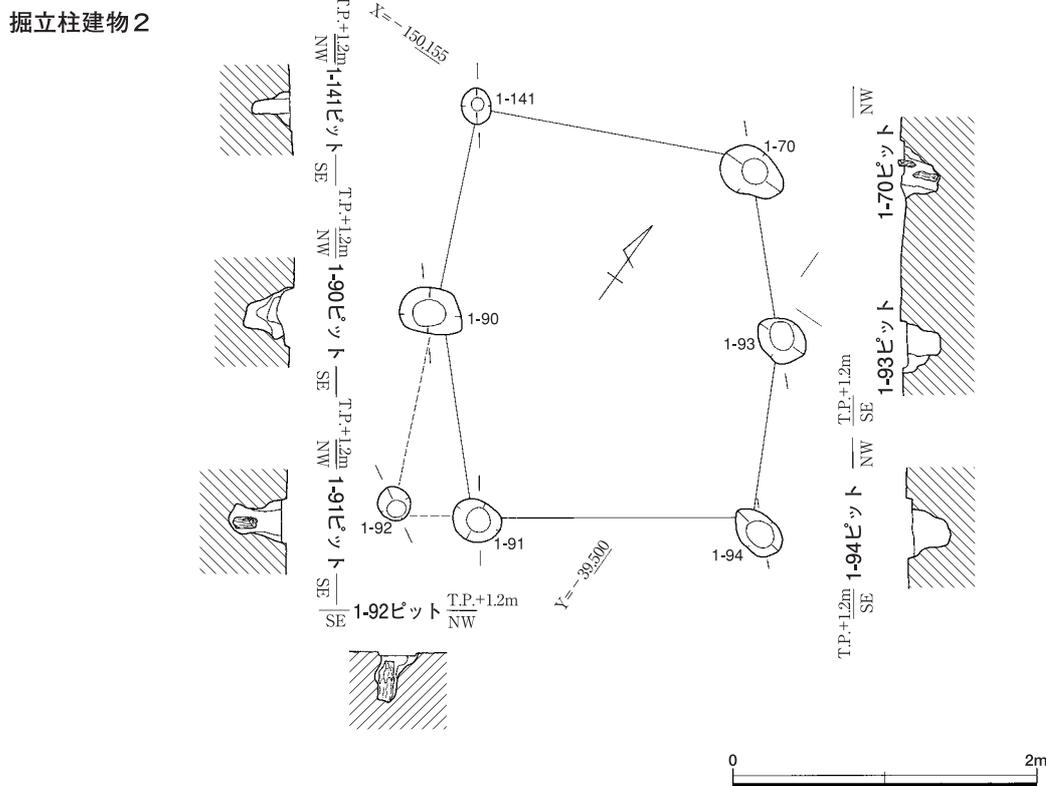
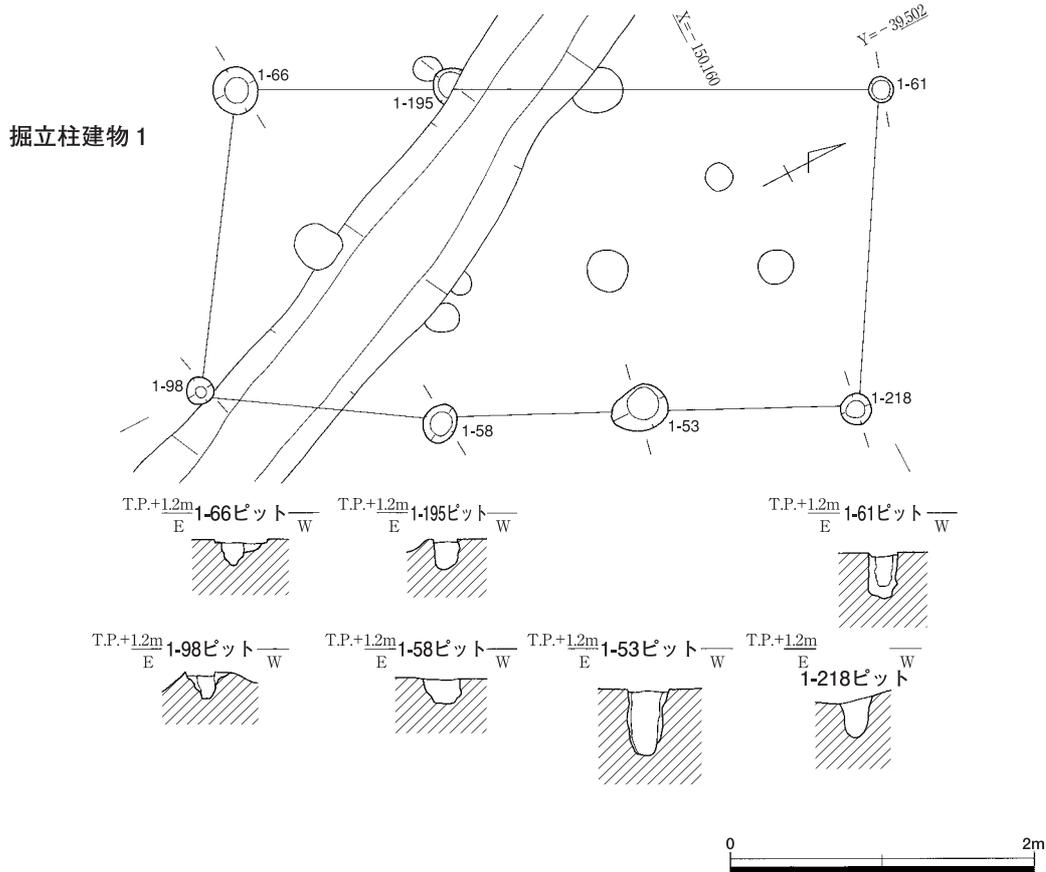
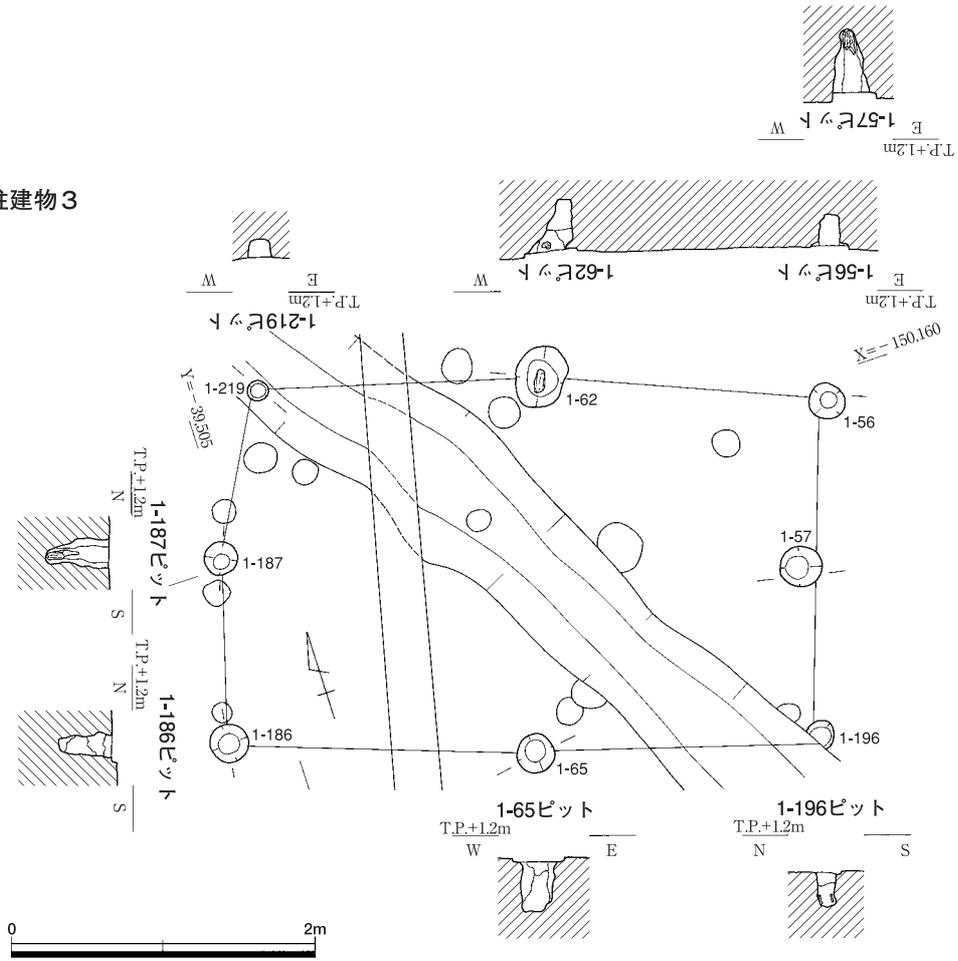


図68 掘立柱建物 1、2 平・断面図

掘立柱建物3



掘立柱建物4

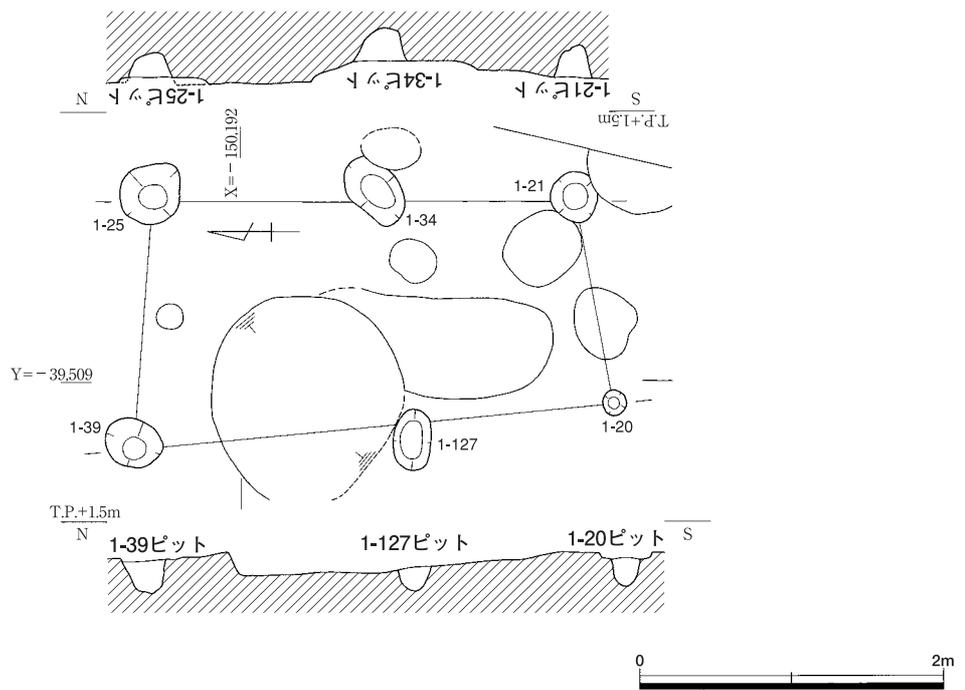


図69 掘立柱建物3、4 平・断面図

第3章 調査の成果

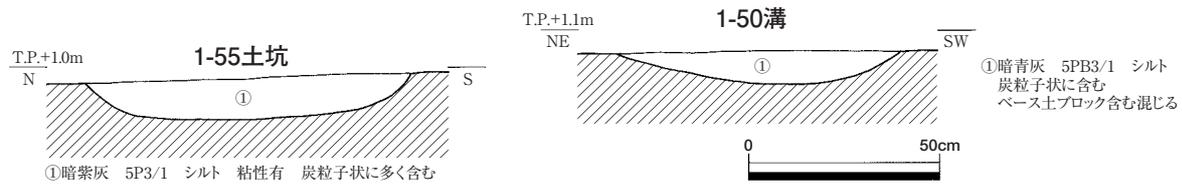
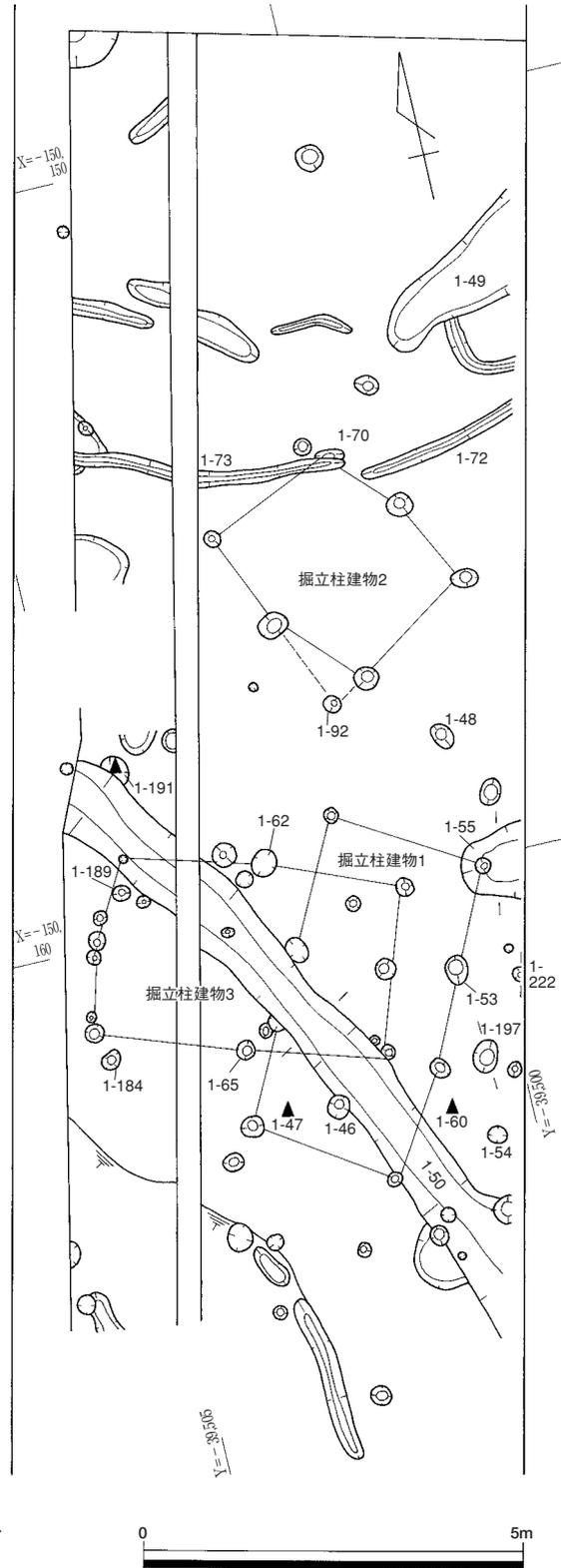
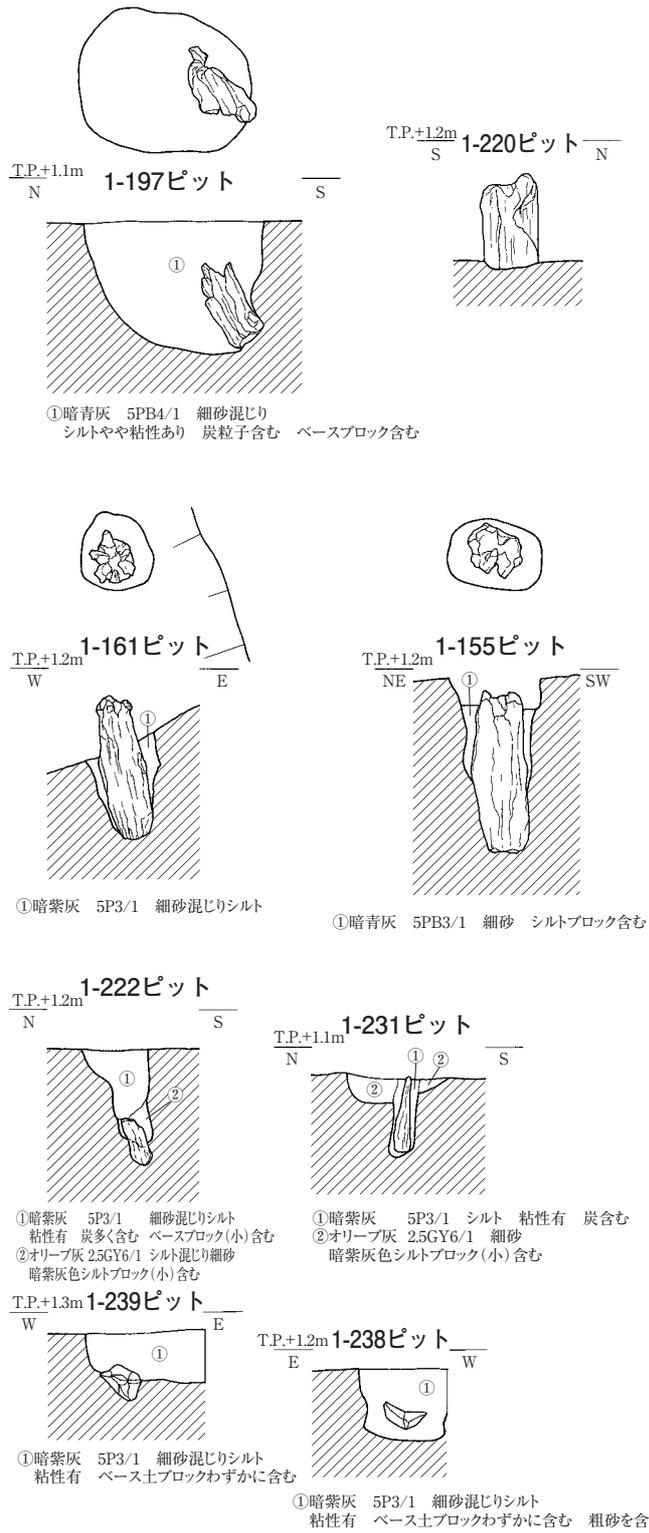


図70 1調査区北側 第7面 遺構分布図・遺構断面図

掘立柱建物3 (図69、70) 調査区北側で検出した。2×2間ではあるが、柱間隔が異なっているため、東西辺が長く、南辺が3.8m、短辺は東辺が2.3mを測る。柱間隔は短辺が1.1～1.2m、長辺が1.8～2.0mを測る。ピットは直径20～25cmと小さいが深さは40cm前後と比較的深いものが多い。1-57、187ピットは柱が遺存しており、1-62ピットからは石棒と考えられる石製品が出土した(図91-4)。石棒は横たわった状態でピット中央の上層から出土しており、根石に転用されたとは考えにくい(図版17-2)。柱を抜き取った後にピットに入れられたものと考えられる。1-196ピットは柱痕部分に炭化物が残っており、柱材の一部と考えられる。ピット内からは遺物の出土は少なかったが、1-56、57、196ピットから縄文晩期の土器片が、1-196ピットから弥生土器と考えられる破片がわずかに出土している。

掘立柱建物4 (図69、73) 調査区南側で検出した。南側で復元できた建物はこの1棟のみである。1×2間と南北に長い。長辺は東辺で2.8m、短辺は北辺で1.6mを測る。向かい合う辺が平行しておらず、平面形はいびつである。柱間隔は1.3～1.8mを測り、一定していない。ピットは直径約20～35cmを測り、深さは20cm前後と調査区北側のピットに比して浅い。埋土はベース土の違いに起因して、砂礫を多く含んでいる。1-34ピットからはサヌカイトの剥片が2点出土している他、1-21ピットからは縄文晩期土器片がわずかに出土している。

ピット (図70)

先に示した建物を構成する柱穴の他にも、多くのピットを検出した。柱材が遺存しているピットもあり、本来は更に複数の建物を復元できるものと考えられる。先に復元した建物以外で柱材を検出したピットは6基ある。特に調査区中央(図71)で検出した1-161、155、220ピットは柱材が太く、遺存状況がよい。同一の建物を構成するピットの可能性が考えられたが、復元できなかった。また、1-161、155ピットはその掘り方と柱材の直径がほぼ等しい。柱材には、加工痕はみられない(図版17-5)。

他にピット内から石が出土したのものがある。調査区中央で検出した1-239、238ピットでは底部近くから石が出土した(図版18-1)。これらの石は根石と考えられる。1-238では石が3つに割れている。

溝

調査区では北西-南東方向の溝2条を検出した他、調査区北側では弧状の溝を検出している。

1-27、50溝 (図70、73) 北西-南東方向の溝である。1-27溝は調査区南半に位置し、幅50cm、深さ約8cmを測る。1-50溝は調査区北半に位置し、幅75cm、深さ約10cmを測る。この2本の溝は平行しており、溝間15mを測る。1-50溝は調査区北側のピット集中部を横断しており、これらのピット群と同時並存は考えにくく、後出する可能性が高い。1-50溝からは、突帯文土器が出土している(図82-19、20)。

1-72、73溝 (図70) 調査区の北端で検出した。溝は直線というより、弧状を呈しており、幅10～20cmの浅い溝である。図化していないが、溝周辺には直径10cm前後の小ピットが多くみられ、溝状に並んでいた。この溝も底部では小ピットが並んだ状況を呈しており、本来は周辺の小ピット群も溝を伴っていたものと考えられる。耕作溝、あるいは柵列状のものが考えられる。

1-105、121溝 (図71) 調査区中央で検出した。幅30～35cmを呈し、深さは約10cmを測る。長さは、1-105溝は4m、1-121溝は2m前後を測る。

1-28溝 (図73) 調査区南側で検出した。幅70cm、深さは5cmと浅い。東西方向の溝で調査区を横断する。溝からは図82-27、28の突帯文土器が出土した。

土坑 1 調査区では多くの土坑を検出した。特に南半分に集中し、ピットが北半分に集中するのと対照的である。土坑は長軸2m前後の隅丸長方形を呈するものが多く、規模、形状とも似ている。他に、調査区中央で円形の大型の土坑、1-123土坑が検出された。

1-123土坑(図72)(図版16-1、2)調査区中央で検出した。土坑は調査区外に広がり、全体は検出できない。また、コンクリートの基礎杭が土坑の中央に位置しており、杭を打つ際に若干周辺もかく乱されている可能性がある。土坑はややみだれた円形を呈し、直径約3mを測る。平面形や規模から竪穴

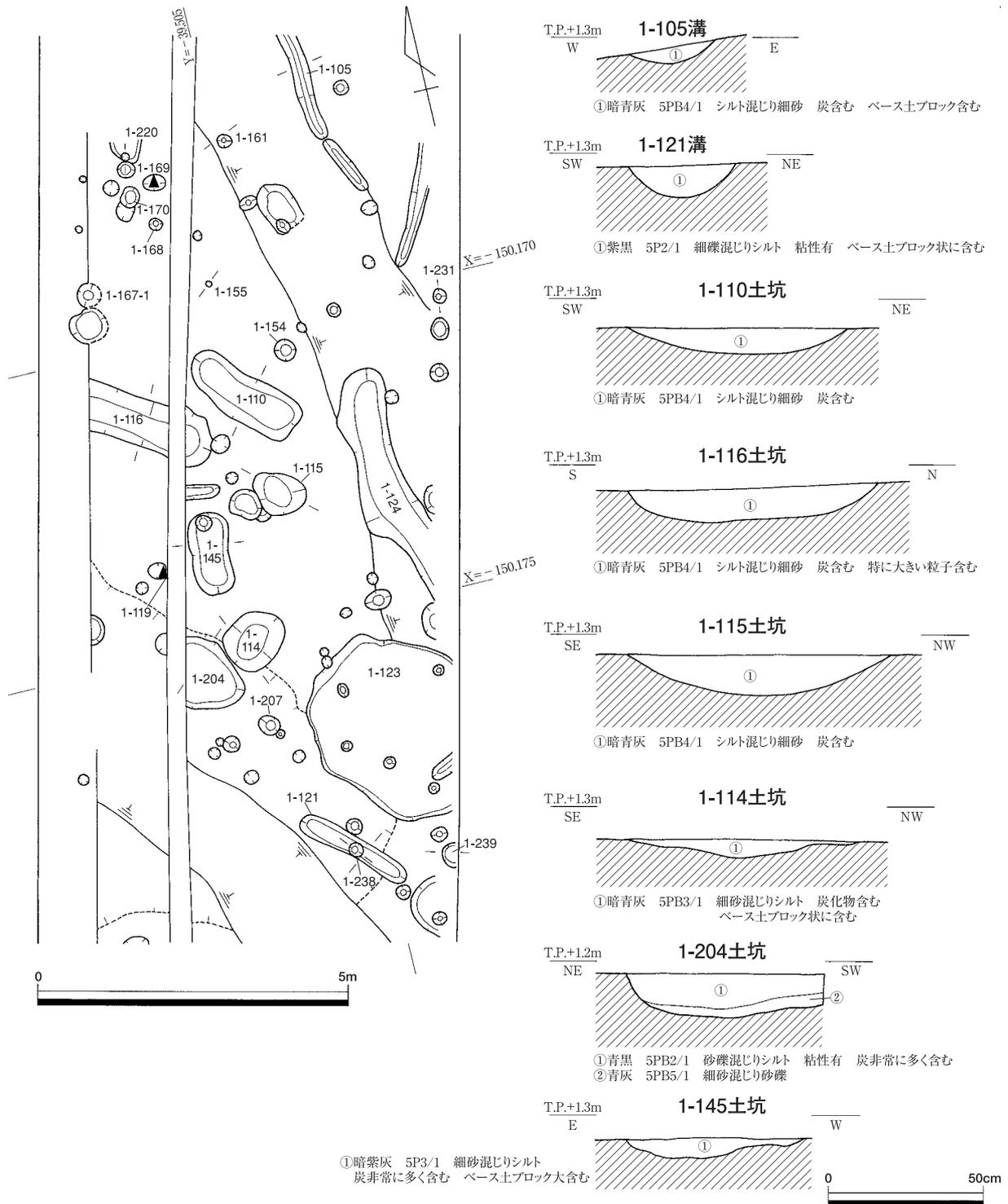


図71 1調査区中央 第7面 遺構分布図・遺構断面図

住居の可能性を考え調査を行った。

底面は平らではなく凹凸がみられる。深い部分では30cm、浅い部分で10cmを測る。埋土には炭を含み、特に中央付近は多く含まれていた。炉の可能性も考えたが、杭がちょうどその中央部分に位置しており、十分に確認できなかった。土坑の底面でピットを5基検出した。ピットは直径15～20cm、深さはいずれも浅く、1-123-1、2ピットは15cm前後と比較的深さがあった。埋土内からは破片ではあるが、弥生時代前期甕、壺、縄文時代晩期突帯文深鉢（図82-1～8）が出土している。

1-110、116、145土坑（図71） 調査区中央で検出した。1-110土坑は2×0.7m、1-116は残存長2mを測り、幅は0.8m、1-145土坑は1.4m×0.6mを測る。いずれも深さは10cm前後で浅く、断面は皿状を呈する。1-110と1-116土坑は、軸がほぼ同じで、北西-南東を呈する。1-145土坑は南北方向に軸をもつ。1-110土坑からは突帯文土器（図82-16）とサヌカイトが、1-145土坑からは縄文土器の体部片が1点出土している。

1-114、115、204土坑（図71） 上記の土坑に近接して検出したが、長方形というより、長軸、短軸がはっきりせず、隅丸方形に近い。1-114土坑は1×0.75m、1-115は1×0.8mを測る。1-204土坑は全体の形状が不明であるが、1.6×1m前後と推測できる。深さは10～20cmを測る。1-114土坑からは縄文土器体部片の他底部片が出土している。

1-18、31、33土坑（図73） 調査区南端で検出した。かく乱などのため、いずれも全体を完全には検出できていないが、長軸2m、短軸50～80cm前後の隅丸長方形の土坑である。深さは20～30cmと調査区中央のもの比べて、深い。3つの土坑は近接し、ほぼ軸の方向は同じである。1-18土坑からは浮線文土器（図82-11）が出土している。1-31土坑からは弥生時代前期壺（図82-10）の他、縄文土器の比較的大きい体部片などが出土している。1-33土坑からは縄文土器の体部片が出土している。

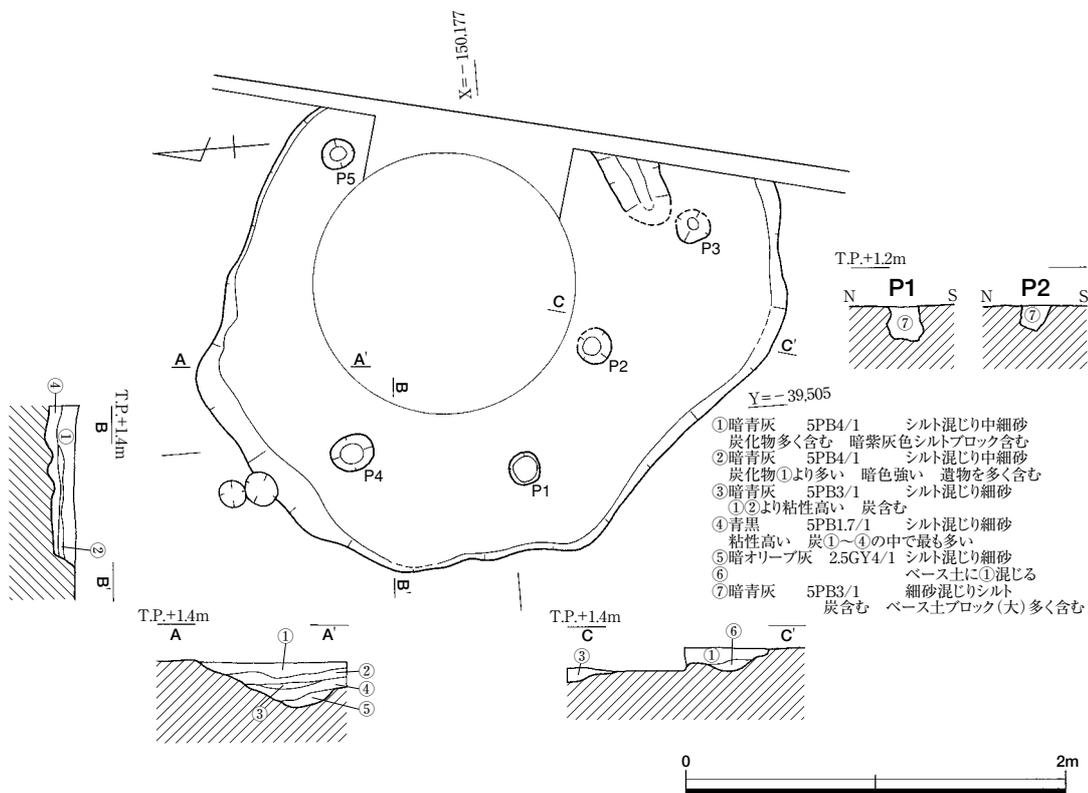


図72 1-123土坑 平・断面図

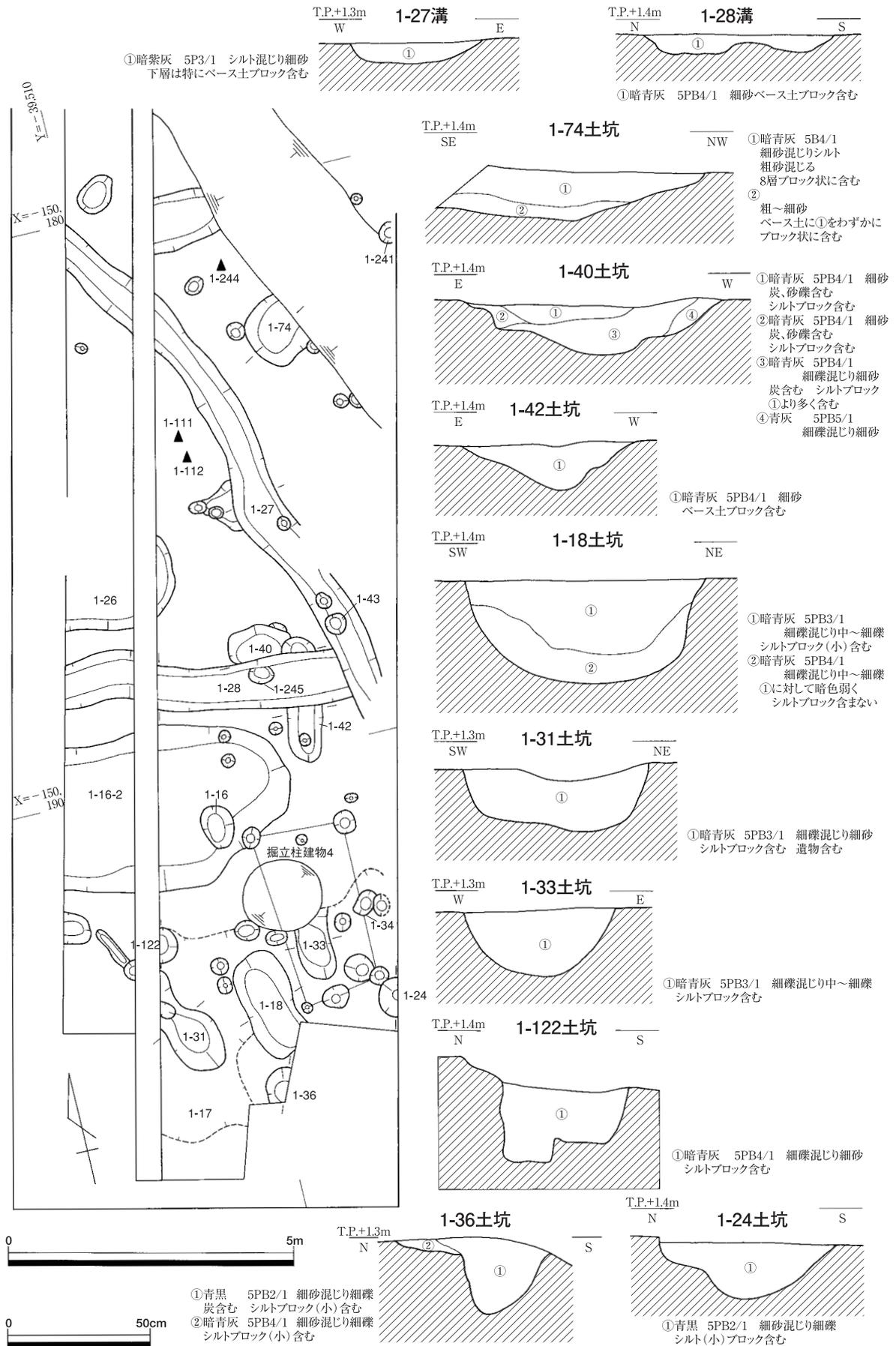


図73 1調査区南側 第7面 遺構分布図・遺構断面図

1-42土坑(図73) 上記の土坑の北側に位置している。1-28溝に切られており、北側は不明であるが、上記土坑と同様に隅丸長方形の土坑と考えられる。長軸はやや北に振る。東西60cm、深さ15cmを測る。縄文土器体部片がわずかに出土した。また、土坑底部よりピットを検出した。

1-122土坑(図73) 調査区南側で検出した。側溝で東側をきってしまい、東半分は不明である。南北50cm、深さ20cm、北側は一段落込み、25cmを測る。土坑からは、図81-5~7の突帯文土器が出土している。

1-36土坑(図73) 調査区の南端で検出した。コンクリート杭があったため、全体の形状は不明である。南北約50cm、深さ約30cmを測る。遺物の出土はみられない。

1-24土坑(図73) 調査区南側で検出した。調査区外に広がるため、全体を検出できなかった。南北60cm、深さ20cmを測る。土坑から図82-13、14の突帯文土器の他、体部片が多く出土した。

1-16土坑(土器棺)(図74)(図版16-3~5) 調査区南側で検出した。70×55cmのやや乱れた楕円形を呈する。土坑の掘り方は第7面検出段階では確認できず、土坑は落込み(1-16-2)として認識していた。この落込みを掘削する過程で、土坑の掘り方を確認することができた。落込みの観察用の断面にかかっていたため、掘り方の立ち上がりを検討したが、落込み上面では確認することはできなかった。ただし、土器が一部露出しており、落込みより土坑の掘り方が新しい可能性が非常に高い。

土坑からは突帯文土器深鉢(A)がほぼ完全な形で出土した。口を北に向けた横位で出土しており、この深鉢の上半に、別個体の深鉢(B)が被された状態で出土した。深鉢(B)は上半2/3のみで下半はなく、口縁部も全周せず、約1/3の破片である。深鉢(A)の上側のみ、深鉢(A)と同様に口縁部を北にして重なっている。深鉢(A)の下側には(B)の破片はない。深鉢(B)の口縁部は(A)の口縁部より北側にずれていて、その結果、深鉢(A)の中に一部落込んでいる。

この遺構は土器棺の可能性が高いと考え、土器内部の土壌を洗浄したが、サヌカイトのチップや土器の小片が出土しているのみである。また、深鉢(B)については、土器棺の蓋とも考えたが、口縁部が完全に覆われておらず、蓋とするには疑問が残る。

周辺の当概期の土器棺としては大阪市長原遺跡での例があり、11基の土器棺が検出されており、大きく、西と東の2群に分けられている(註¹)。弓削ノ庄遺跡では、調査区が狭小なこともあるが、同様な遺構はなく、この1基のみの検出であった。

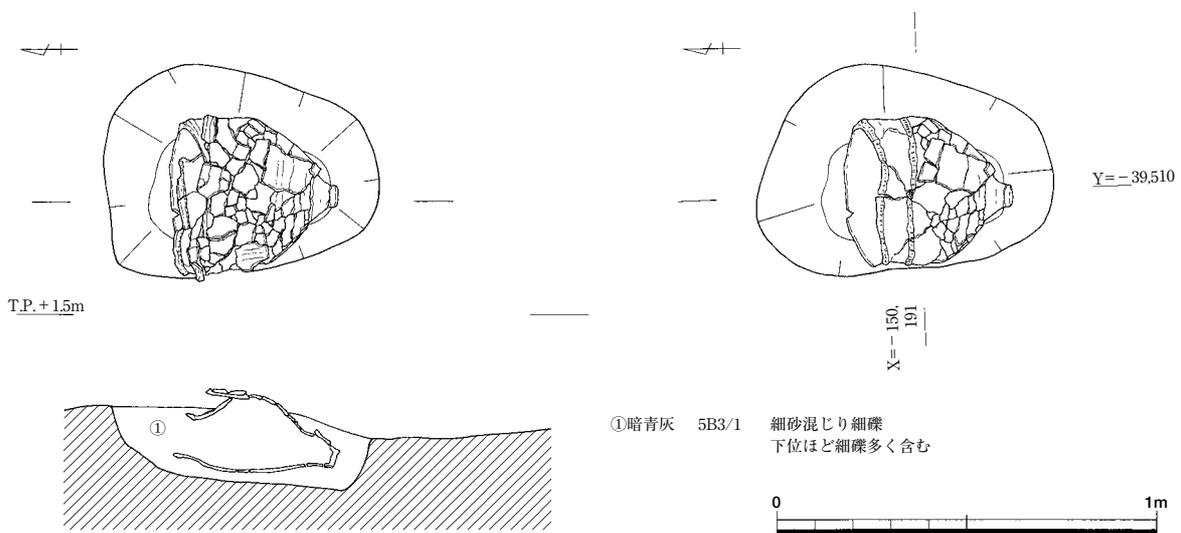


図74 1-16土坑 平・断面図

第3章 調査の成果

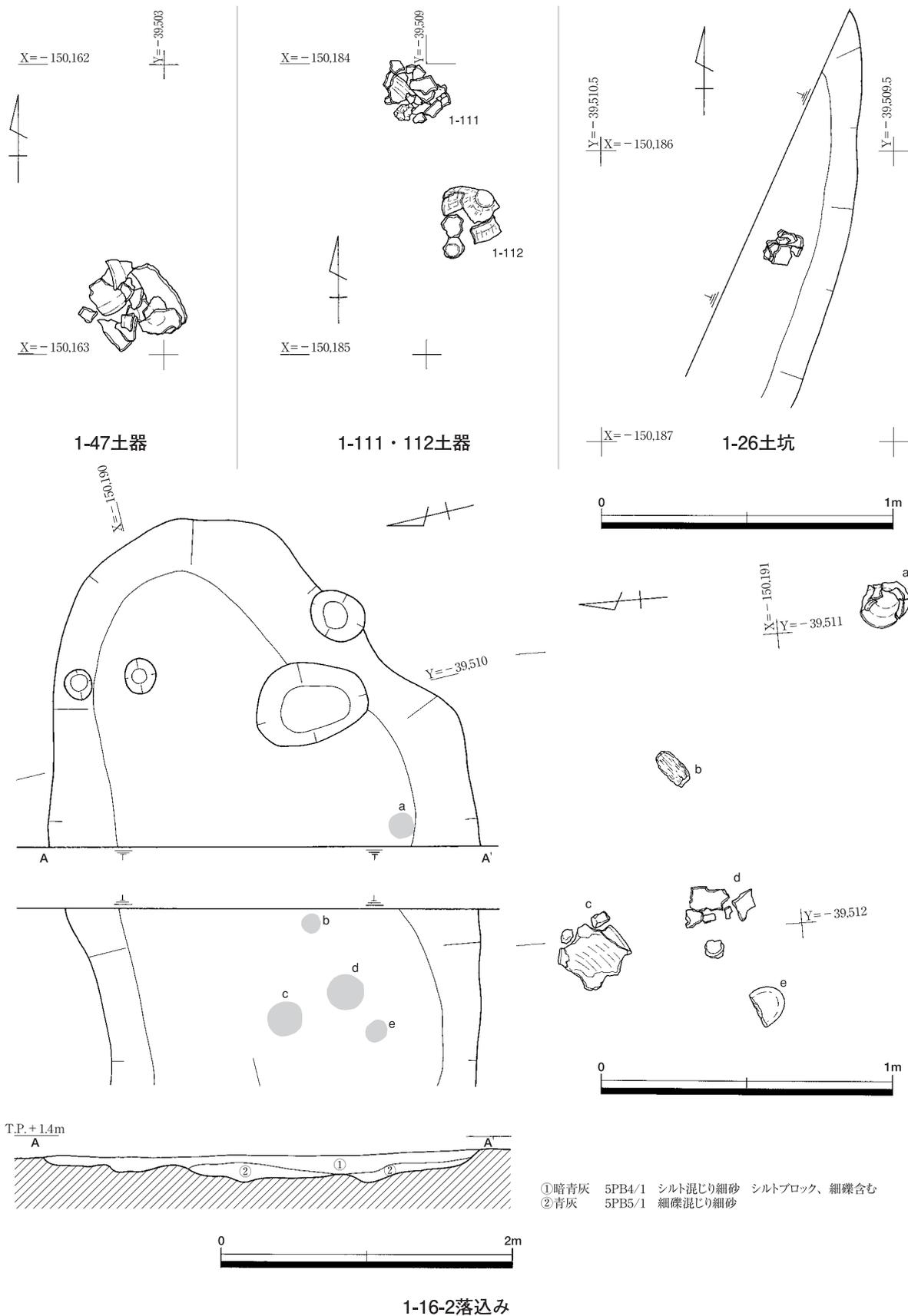


図75 1調査区 遺物出土状況図

他に遺物を出土する土坑、落込みが検出されている。

1-16-2落込み(図75) 調査区南側で検出した。2.5×4mを測り、深さは20cmと浅い。遺物は比較的多く、突帯文土器壺(a)、前期大甕底部(c)の他に石製品が出土している。(b)は石棒、(e)は叩石である。また、(d)の下からは播石が出土しており、叩石とのセット関係が考えられ、興味深い(図94-4、5)。これらの遺物は土坑の底部に接してはおらず、また、完形のもの少ない。廃棄された状況を示していると考えられる。

1-26土坑(図75) 調査区南側で検出した。コンクリート杭にきられ、全体の形状、規模は不明である。土坑からは図化できなかつたが、弥生、縄文土器片が出土している。

1-245土坑(図76) 調査区南側で検出した。1-28溝の底部で検出しており、深さ10cm未満が残る程度であった。直径40cm前後の円形を呈する。土坑からは突帯文深鉢(図82-15)、石棒(図92-1)が出土した。

1-40土坑(図73) 調査区南半、1-28溝にきられる土坑である。直径1m前後を測る。断面はわずかに2段落ちを呈する。深さは約20cmを測る。土坑内からはサヌカイトの石核1点、剥片2点(図99-3~5)の計3点が出土した。

その他、第7面上面で土器、石器が出土している。

1-111、112土器(図75) 調査区の南側、1-26土坑周辺で土器が出土した。周辺は1-27溝に平行して落込んでおり、図示していないが、1-29落込みとした。1-111は突帯文土器深鉢が破片で2個体(図83-14、15)、サヌカイトが1点、1-112は突帯文土器の底部が2個体(図83-13)出土している。1-111の深鉢のうち1個体は胎土が生駒西麓産ではない。また、1-29落込み内からも突帯文土器(図83-16~18)、弥生土器が出土している。同様に調査区南端でもわずかに落込んでいる範囲が見られ(1-17落込み)、遺物が出土している(図83-4~7、21)。

1-47土器(図75)(図版18-3) 調査区北側の1-50溝周辺で出土した弥生時代前期の甕である。ほぼ完形のもの潰れた状況で出土している(図83-1)。

1-60集石遺構(図76)(図版18-5) 調査区の北半1-50溝の南側で検出した。直径約20cmの範囲にサヌカイトが集中して出土した。掘り込みはなく、サヌカイトは重なり合って出土している。製品は含まれず、剥片および石核で、15点が出土した。遺構面検出の際に、遺構周辺で4点のサヌカイトを取り上げてしまったが、本来はこの遺構に伴うものと考えられる。出土したサヌカイトについては遺物の項で述べるが、いずれも10cmを超えるものはなく、似通った大きさを呈している。また、風化面、原礫面を一部に残すものが多い。石器の素材となる剥片と考えられる。

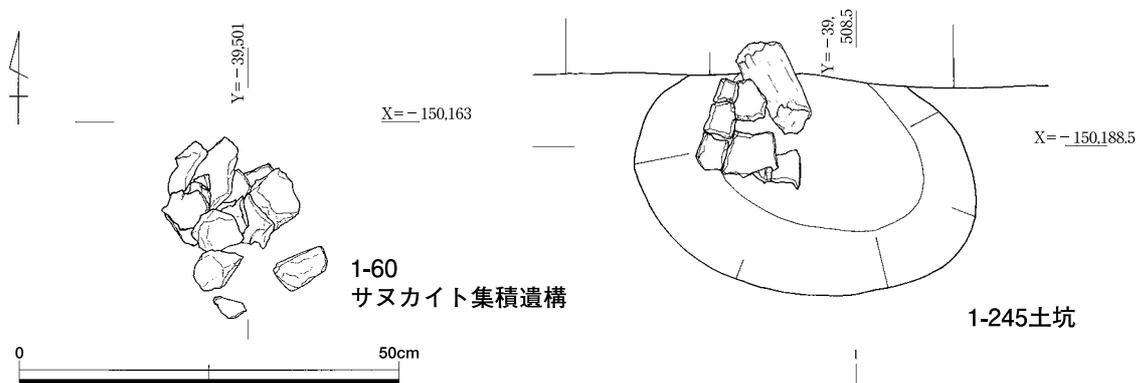


図76 1-60サヌカイト集積遺構、1-245土坑 遺物出土状況図

他に第7面では1-74土坑周辺でサヌカイト剥片が2点出土した(1-244石)(図99-1、2)。また、20cm前後の礫が3ヶ所で出土している(1-119、1-169、1-191)。台石として使用されたものと考えられる(図93-7)。

2 調査区

ピット 1 調査区でみられたような柱材が遺存しているピットや、根石状に石がみられるピットはなく、また、建物を復元することはできない。直径20～30cmを測るものが多く、深さが20～30cmと比較的深いものを図示した。

2-40、43、48、49、50ピット(図78) 調査区北側で検出した。直径約20～30cm、深さ約20cmを測る。2-43、50ピットは埋土に炭を多く含んでおり、遺物の出土がみられる。2-48、49ピットは植物遺体を多く含んでおり、他のピットとは埋土の雰囲気が大きく異なっている。2-50ピットからは図80-19の土器が出土している。2-43、48ピットからはわずかに縄文土器片が出土している。

2-20、34、67ピット(図78) 調査区の中央で検出した。2-34ピットは直径約40cmと大きく、埋土にベース土を大きなブロック状に多く含む。2-20、67ピットは直径20cm、深さ25cmと同規模のピットである。埋土も同じで、ベースのブロック土を含んでいるが2-34ピットに比して小さい。また、炭を多く含んでいる。

2-68、74ピット(図78) 調査区中央より北側で検出した。2-74ピットは直径30cm、深さ25cmを測る。埋土には炭を多く含み特に中層に多く含む。2-68ピットは直径約40cm、深さ15cmを測る。2-74ピットからは図80-18の突帯文土器が、2-68ピットからは図80-14の突帯文土器が出土した。

溝 調査区では溝が数条検出された。

2-9、63、31、35溝(図77、78) 調査区中央より北側で検出した。いずれも深さ約5cmと浅い。2-63溝からは縄文土器(図82-21)、および弥生土器片が出土している。2-31溝からは突帯文土器(図82-23～25)、弥生前期土器(図82-22)が出土している。

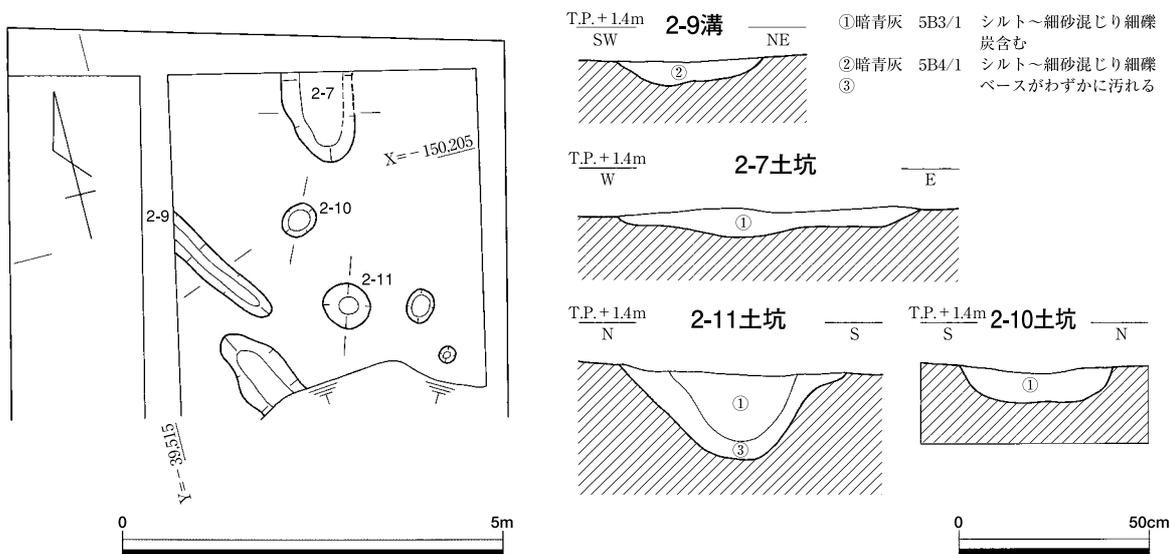
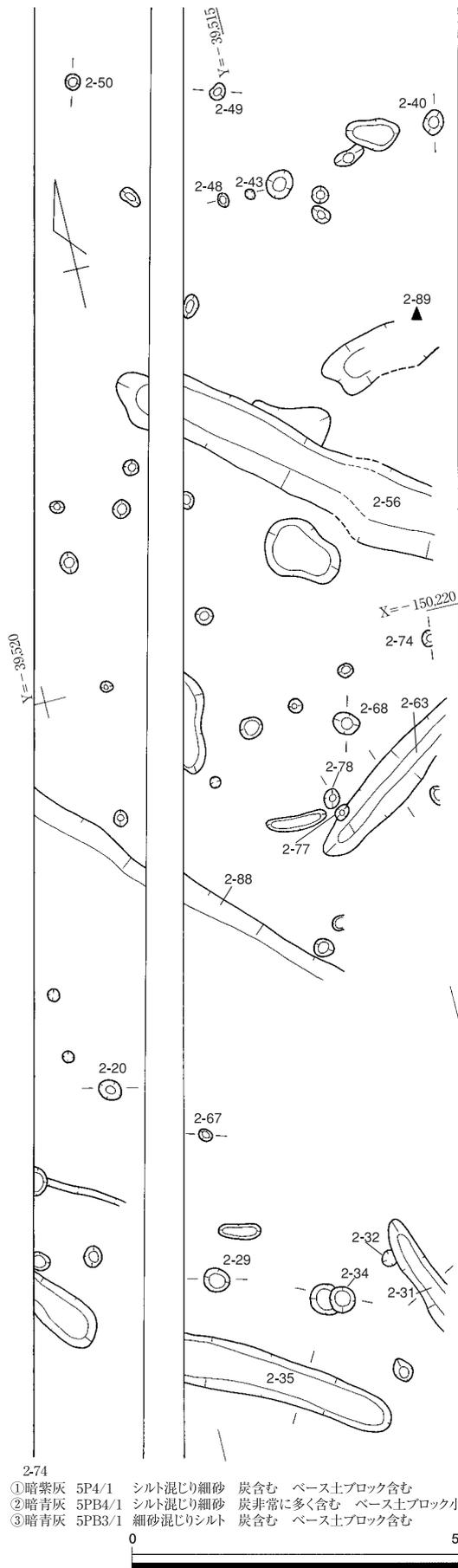


図77 2調査区北側 第7面 遺構分布図・遺構断面図

第3節 弓削ノ庄遺跡



- 2-74
 ①暗紫灰 5P4/1 シルト混じり細砂 炭含む ベース土ブロック含む
 ②暗青灰 5PB4/1 シルト混じり細砂 炭非常に多く含む ベース土ブロック小含む
 ③暗青灰 5PB3/1 細砂混じりシルト 炭含む ベース土ブロック含む

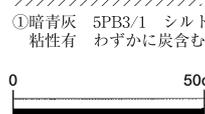
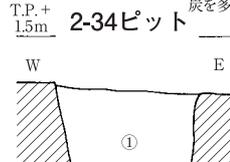
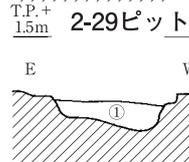
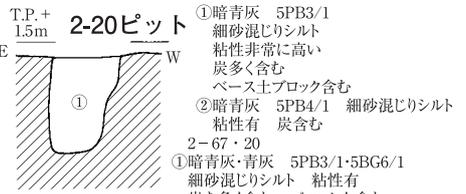
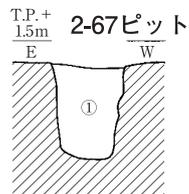
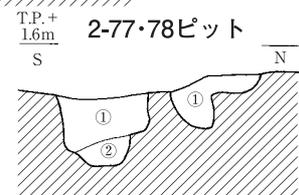
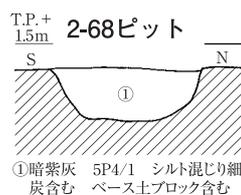
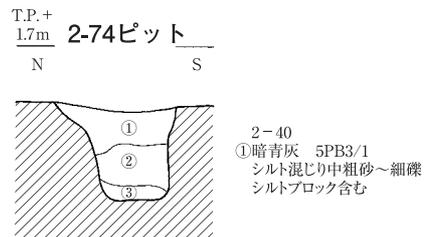
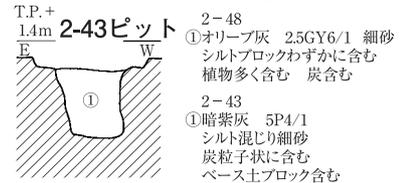
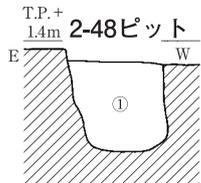
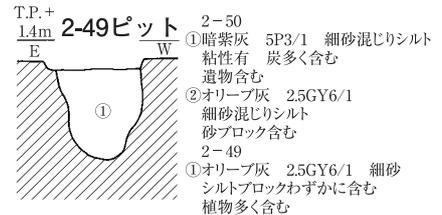
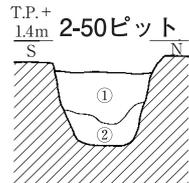
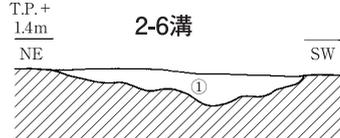
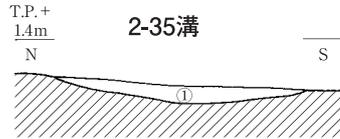
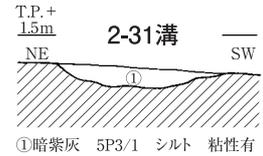
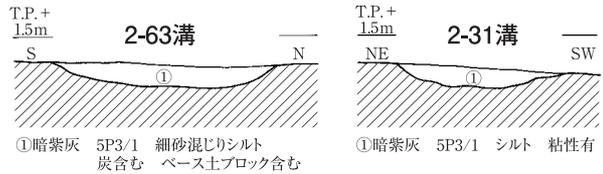


図78 2調査区中央 第7面 遺構分布図・遺構断面図

2-6溝 (図78) 調査区南半で検出した。幅約60cm、深さ約10cmを測る。北西-南東方向にはしり、1調査区で検出した1-27、50溝に方向、規模など非常に似ている。

なお、2-56、88溝は第7面で検出したが、第5面方形周溝墓1で述べたように、これに関連した溝の可能性が高く、上面に対応する遺構と考えられる。

土坑 2調査区では主に調査区北側で土坑を検出している。

2-7、10、11土坑 (図77) 調査区北側で検出した。2-7土坑は幅80cmを測り、北側は調査区外になるため、規模、平面形態は不明である。

深さは約10cmを測る。2-10土坑は直径40cmの円形を呈し、深さは約10cmを測る。2-11土坑は直径約60cmの円形を呈し、深さは約30cmを測る。いずれも遺物は出土していない。

他に、1調査区と同様にサヌカイトがまとまって出土した。

2-89集石遺構 (図79) (図版18-6) 調査区中央付近、第5面方形周溝墓1の中央観察用断面を掘削する際に出土した。サヌカイトは断面北東端で出土しており、ちょうどコンクリート杭の横に位置している。掘り込み等は確認できない。検出した高さは、第7面より若干高い。

サヌカイトは4枚重なって出土した。剥片3枚、石核1枚の計4枚である (図98)。

出土遺物

8層 (8-1層、8-2層)、第7面遺構内からは多くの縄文時代晩期末 (突帯文) ~ 弥生時代前期の遺物が出土した。遺構から出土した土器については極力、図化に努めた。2調査区では第5面で検出した方形周溝墓の盛土、周溝内に多くの当概期の遺物が混入しており、これについては、周溝墓を築造する際に下層の8層内遺物、第7面遺構遺物が混入したものと考えられるため、ここで掲載している。その他、上面の遺構から出土した当概期の遺物についても同様である。弥生土器に関しては、個体の特徴が分かるものについては極力抽出し、掲載した (細片につき、天地、傾き不明のものもある)。突帯文土器については、各調査区で遺構単位に、包含層については、調査区を5分割して遺物のとりあげを行ったので、その単位で接合作業を行った。その後、突帯が残る破片の中から、口縁部突帯については遺存状況が良いものを中心に抽出し、掲載した。肩部突帯や底部、第5面等出土のものについては、バラエティを示すものに留めている。突帯文土器は、大部分は角閃石を含む生駒西麓産の胎土をもつが、一部、異なる胎土のものがあったので、それに関しては、極力掲載を行った。よって、ここでの掲載遺物の点数と、実際の出土傾向は一致していない。全体としては、破片も含め、突帯文土器が主体を占め、前期土器は少数である。また、非生駒西麓産の胎土をもつ突帯文土器も、全体としては多くない。

また、調査区からは多くの石器が出土している。

(1) 土器・土製品 (図版28~37)

以下、第7面遺構出土、包含層出土、周溝墓など上面の遺構面から出土したものの順に記述を行う。

第7面遺構出土遺物

ピット出土遺物 (図80)

1~3、11は掘立柱建物3を構成する1-65ピットから出土した。1は弥生時代前期壺である。山形のヘラ描き沈線文 (以下、施文は特に記載がない限り、ヘラ描き沈線による) を施す。2、3、11は突帯文土器深鉢である。2、3の突帯 (口縁部突帯) は口縁端部に貼り付ける。小さい刻みを施すが、

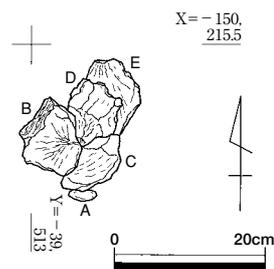


図79 2-89サヌカイト集積遺構 出土状況図

浅く、あまい。2は体部外面に煤が付着する。11の口縁部と胴部をわける突帯(肩部突帯)は、刻みが線状(刻みがかかるく、V字というより細い線に近いもの)を呈する。

4は掘立柱建物4を構成する1-34ピットから出土した。弥生時代前期の甕で、口縁端部に刻みを施し、ヘラ描き沈線(以下特に記載がない限り、沈線と表示)を2条施す。

5~15は突帯文土器の深鉢である。5~8は口縁部である。1調査区北側に位置する1-189、54、182、ピット、1調査区中央に位置する1-207ピットから出土した。5、6は口縁端部に、7、8は口縁端部よりわずかに下がって突帯を貼り付ける。突帯の刻みは6では確認できる範囲ではない。5は小さいD字、7、



写真3 靱殻圧痕土器(図80-20) ▶

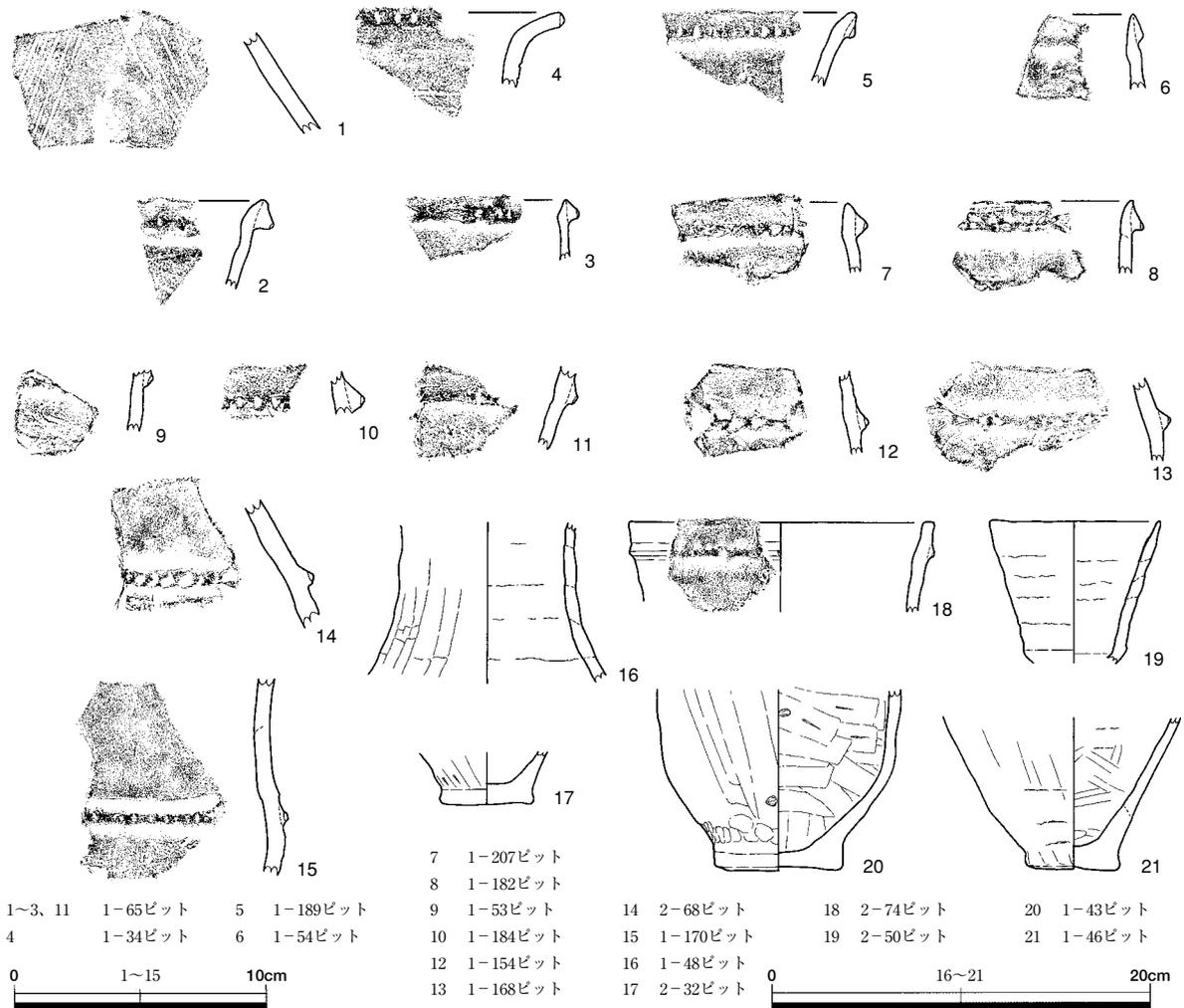
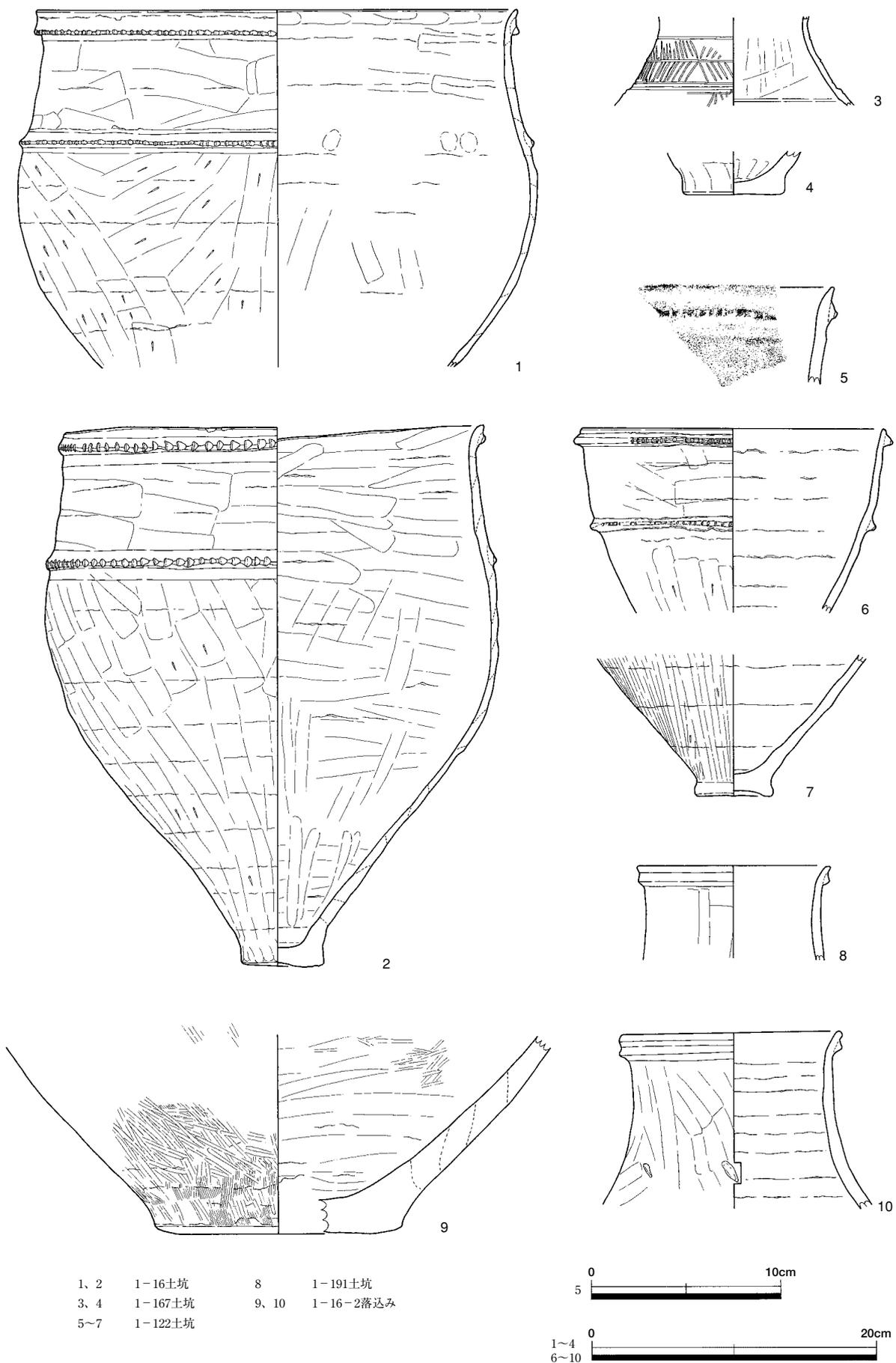


図80 第7面 ピット 出土遺物



- | | | | |
|------|---------|-------|-----------|
| 1, 2 | 1-16土坑 | 8 | 1-191土坑 |
| 3, 4 | 1-167土坑 | 9, 10 | 1-16-2落込み |
| 5~7 | 1-122土坑 | | |

図81 第7面 土坑 出土遺物 (1)

8は小さいO字を密に配する。

9～15は肩部である。掘立柱建物1を構成する1-53ピット、1調査区北側に位置する1-184ピット、1調査区中央に位置する1-154、168、170ピット、2調査区中央に位置する2-68ピットから出土した。突帯の刻み目は9、10、14はD字、13、15は小さいO字を密に配する。15は突帯の上下を強くなでており、突帯の幅は狭い。

16は1調査区北側に位置する1-48ピットから出土した。突帯文土器の壺頸部と考えられる。外面は縦方向に板ナデをし、内面には接合痕が明瞭に残る。

17は2調査区中央に位置する2-32ピットから出土した。突帯文土器の底部。平底を呈する。

18は2調査区中央に位置する2-74ピットから出土した。突帯文土器の深鉢である。口縁部はわずかに開き、端部には面をもつ。口縁部突帯は小さく、端部より下がった位置に貼り付ける。刻みは不鮮明でわずかに線状に確認でき、密に配している。灰色を呈し、生駒西麓産の胎土ではない。

19は2調査区中央2-50ピットから出土した。体部から口縁部が上外方にまっすぐ開き、端部は尖る。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。二次焼成を受け、変色している。

20は1調査区南側に位置する1-43ピットから出土した。突帯文土器深鉢の下半と考えられる。体部は丸みを帯びる。内外面とも調整は板ナデ。底部および体部内外面に非常に多くの粉殻痕がみられる(写真3)。底部内面や断面内でも確認できることから、粘土内に粉殻が混入したものと考えられる。圧痕は長さ6～7mmを測り、総数30点を超える。

21は1調査区北側に位置する1-46ピットから出土した。突帯文土器深鉢の底部である。平底で、底部側面が外方にわずかに張り出す。体部外面の調整は縦方向のケズリ、内面は板ナデである。

土坑出土遺物(図81、82)

図81-1、2は1-16土坑(土器棺墓)から出土した。突帯文土器の深鉢である。1は図74深鉢(B)、2は深鉢(A)である。1は直径33.6cm、残存高25.2cmを測る。口頸部は外反し、肩部突帯付近で丸みをもって屈曲する。口縁部突帯は端部よりやや下がった位置に貼り付ける。突帯上部は強くなでるが下部はそれに比べて弱い。そのため下向きの突帯となる。突帯の刻みは小さく、浅いD字を呈し、密に配する。肩部突帯も口縁部突帯と同様である。外面の調整は、頸部は横方向に板ナデ、胴部はケズリである。内面は板ナデである。

2は直径29.2cm、高さ38.3cm、底部は小さく直径5.8cmを測る。1より直径がやや小さい。今回唯一全体が分かる深鉢である。頸部は直線的で、口縁部は外反する。肩部付近で丸みをもち、胴部は小さい底部に向かってすぼまる。肩部の屈曲は1より弱い。最大径は肩部よりやや下がった位置にある。口縁部突帯は口縁端部よりわずかに下がり貼り付けるが、端部に接している部分もある。刻みはD字で1よりシャープである。肩部突帯は上部を強くなで、下部はそれに比して弱く、突帯は下向きを呈する。刻みは口縁部突帯と同様にD字状を呈する。外面の調整は、頸部は横方向に板ナデ、胴部はケズリである。内面は板ナデである。

図81-3、4は1-167土坑出土土器である。3は弥生時代前期壺。体部に段を有し、有軸羽状文と沈線を施す。段の下方にも、沈線がみられ、施文する。4は底部である。

図81-5～7は1-122土坑から出土した。5、6は突帯文土器の深鉢、7は同底部である。5は、口縁部がやや外反し尖る。突帯は口縁端部より下方に貼り付ける。刻みは小さいD字を密に配する。6は直径21cmを測る。全体に粗雑で、突帯も非常にいびつである。最大形は口縁部にあり、底部に向かっ

てすぼまる。口縁部突帯は端部よりわずかに下がって貼り付ける。口縁部、肩部突帯とも刻みは浅く、線状を呈する。7は上半が欠損している。体部は底部から直線的に広がる。底部外面は中央が窪む。

図81-8は1-191土坑から出土した。突帯文土器の壺である。小型の深鉢の可能性もあるが頸部の調整が縦方向であり、突帯に刻みもないことから壺と判断した。直径13.4cmを測る。口縁部は外反し、やや下がって突帯を貼り付ける。

図81-9、10は1-16-2落込み出土土器である。9は弥生時代前期大型壺底部で、1-16-2の(c)である。底部は直径17.4cmを測る。体部外面はハケメのちミガキ、内面はミガキを施す。粘土紐の継ぎ目で外れており、接合面にハケメが確認できる(図版28)。粘土紐を接合しやすくするものであろう。

10は突帯文土器の壺で、1-16-2の(a)である。口縁部は外反し開く。端部は丸く収める。口縁部突帯は端部よりやや下がって貼り付ける。刻みは施さない。頸部外面は縦方向に板ナデを施す。工具の当たりが器面によく残る。内面は粘土紐の継ぎ目、指頭圧痕が明瞭である。

図82-1~8は1-123土坑から出土した土器である。1は弥生時代前期の段を有する壺である。2~4は同じく前期の甕である。いずれも口縁端部に刻みを施す。4は外面に煤が厚く付着している。8は弥生時代前期甕底部と考えられる。平底を呈する。5~7は突帯文土器深鉢である。5は肩部突帯。刻みはD字を呈する。突帯の上部を強くなでる。6の口縁部突帯は端部に接して貼り付ける。刻みは浅く、線状を呈し、密に配する。外面には煤が厚く付着する。器壁は薄い。7は非生駒西麓産の胎土を有する。口縁部突帯は断面台形を呈し、大きい。口縁端部より下がって貼り付け、突帯の上下面を強くなでる。刻みは浅いO字を密に配する。

図82-9は1-26土坑から出土した弥生時代前期の段を有する壺である。

10は1-31土坑から出土した。弥生時代前期壺。縦位の沈線、あるいは山形文を施す。

11は1-18土坑から出土した。浮線文土器の浅鉢である。

図82-12~16は突帯文土器深鉢である。1-116、24、245、110土坑から出土した。12、13は口縁部である。突帯は、12は口縁端部に接して、13はわずかに下がって貼り付ける。刻みはD字で密に配する。14~16は肩部である。突帯の刻みは14、15は小さいO字、16は浅い線状の刻みを密に配する。15は突帯の幅が狭く低い。器壁は非常に薄く、小型の深鉢である。内面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。

図82-17、18は1-114、49土坑出土の底部である。

溝出土遺物(図82)

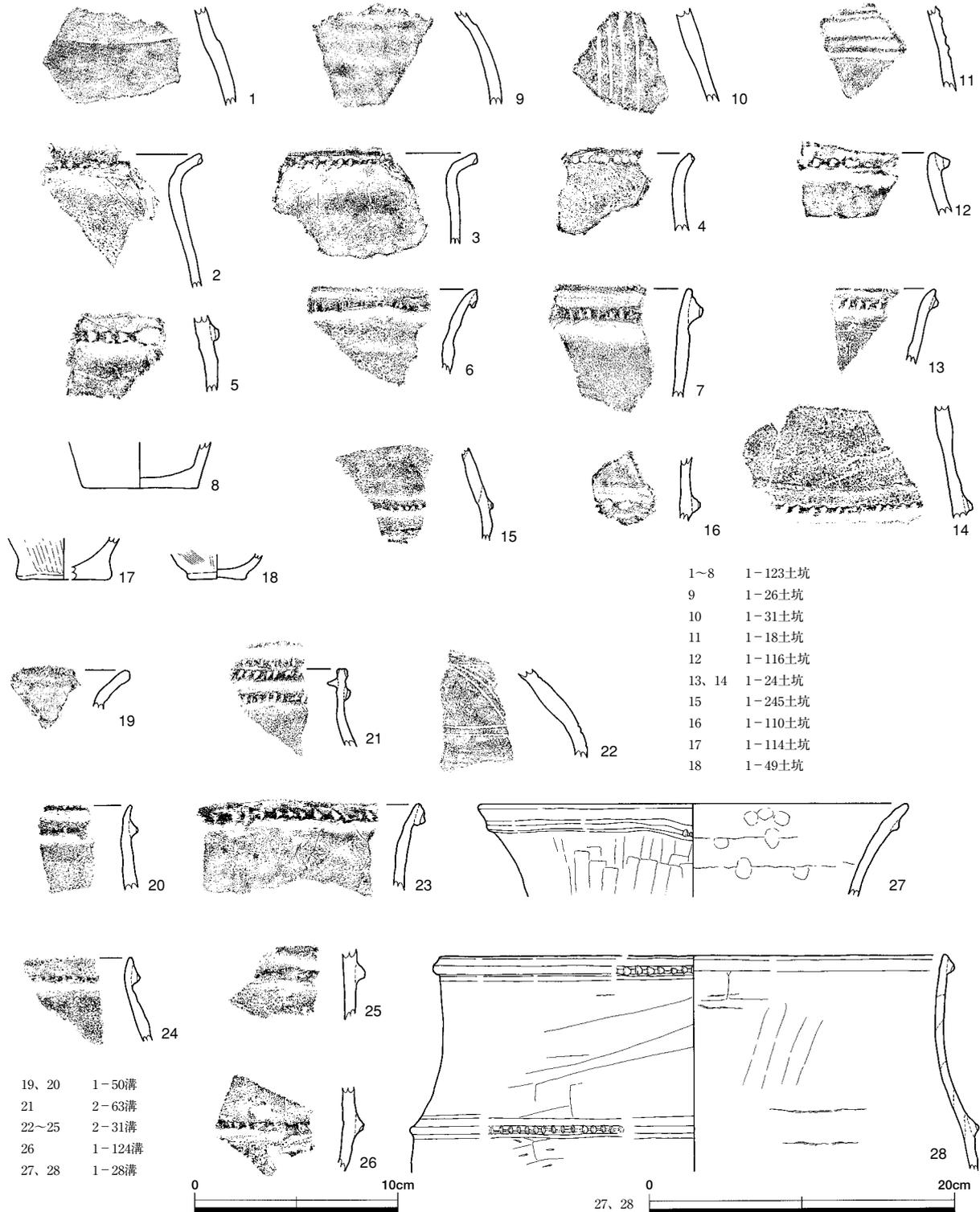
図82-19、20は1-50溝から出土した。19は弥生時代前期の壺、20は突帯文深鉢の口縁部である。20は口縁部が外反し、口縁部突帯は端部より下方に貼り付ける。刻みは小さく痕跡を残すのみである。器壁は薄い。

図82-21は2-63溝から出土した。突帯文土器深鉢である。口縁部に2条の突帯を貼り付け、内側にはかえり状の突起をもつ。突帯にはV字状の刻みを密に配する。また、口縁端部内側にも刻みを施し、上部の突帯の刻み目との境に沈線を施す。

図82-22~25は2-31溝から、26は1-124溝から、27、28は1-28溝から出土した。22は弥生時代前期の壺である。有文の体部で、段を有し、沈線と弧文による施文がみられる。

23~28は突帯文土器深鉢である。23、24の口縁部突帯は端部に接して貼り付ける。刻みは23がD字、24は不明瞭ではあるが小さいO字を呈する。25、26は肩部でともに突帯の刻みは不明瞭である。27は生駒西麓産の胎土ではない。長石、石英の粗粒子を多く含む。口頸部の外反度が高く、口縁端部は丸く

収める。口縁部突帯は端部から下がった位置に貼り付けるが、一部乱れる。刻みは施されているものの、磨滅しており、不明瞭である。頸部外面は縦方向に板ナデを施し、工具の痕跡が明瞭である。内面は横方向にナデ、粘土の継ぎ目が明瞭である。28は口縁部、肩部の両突帯が遺存している。口頸部は外反し、肩部付近で緩やかに屈曲する。口縁部突帯は端部に接して貼り付ける。刻みは口縁部、肩部突帯とも、小さいD字を呈し、密に配する。



- 1-8 1-123土坑
- 9 1-26土坑
- 10 1-31土坑
- 11 1-18土坑
- 12 1-116土坑
- 13、14 1-24土坑
- 15 1-245土坑
- 16 1-110土坑
- 17 1-114土坑
- 18 1-49土坑

- 19、20 1-50溝
- 21 2-63溝
- 22-25 2-31溝
- 26 1-124溝
- 27、28 1-28溝

図82 第7面 土坑 出土遺物 (2)、溝 出土遺物

第3章 調査の成果

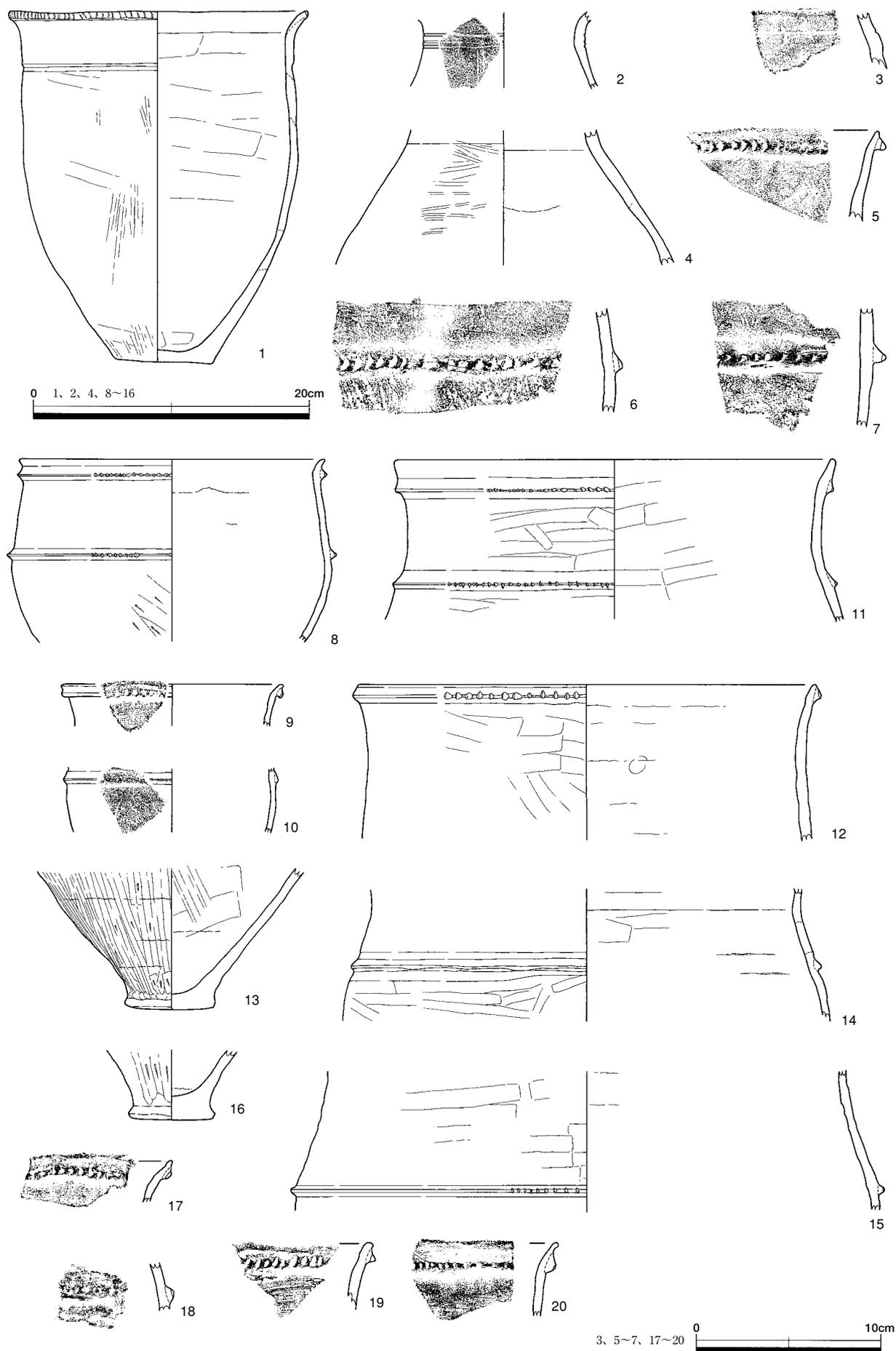


図83 第7面 出土遺物

第7面出土遺物（図83）

第7面（1～3、8、13～15）、および落込み部分（4～7；1-17落込み、16～18；1-29落込み）出土遺物である。なお、9～12、19、20は1調査区中央付近で集中して出土したもので、ここに掲載した。

1は弥生時代前期甕である。1は全形が分かる個体で、直径21.5cm、器高25.5cmを測る。胴部最大径は19.8cmで、口径がこれを上回る。短く外反した口縁部の端部に刻みを施し、頸部下端には段を有する。底部は平底である。調整は磨滅が著しく、不明瞭である。1-47土器である。

2～4は弥生時代前期壺である。2は有文の頸部で、段を有し、2条の沈線と縦位の沈線文を施す。3は沈線を伴う削り出し突帯を有する。4は無文。外面にミガキがみられる。

5～20は突帯文土器の深鉢である。

口径が復元できた9は直径16cmと小さく、8は直径22cm、11、12は直径31～33cmを測る。

8は頸部がやや内傾して上方へのび、口縁部は外反する。胴部は肩部突帯付近で緩やかに屈曲し、丸みを帯びる。口縁部突帯は端部より下に位置する。突帯の刻みは口縁部、肩部とも、小さく浅いD字、あるいはO字を密に配する。器壁はうすい。全体に磨滅しており、調整は不明瞭であるが、胴部外面はケズリを行う。9は口縁部が外反し、突帯は端部付近に貼り付ける。5、17、19も口縁部の突帯は同様である。突帯の刻みは、9、17は浅いD字を、5、19は深く細いD字を、いずれも密に配する。19は頸部外面の板ナデの痕跡が明瞭に残る。20は口縁端部より下に突帯を貼り付け、口縁部は外反。刻みは密で小さいO字状を呈する。

11は口頸部の外反が大きく、口縁端部は丸く収める。口縁部突帯は端部より下がって貼り付ける。肩部突帯は上部を強くなでるため、下向きで低い。口縁部、肩部突帯の刻みはいずれも、小さいD字、あるいは線状を呈し、密に配する。頸部は内外面とも横方向に板ナデを行い、胴部外面も板ナデ。灰黄色を呈し、胎土は生駒西麓産ではない。

12は口縁部から頸部にかけての外反が弱く、口縁端部に接し突帯を貼り付ける。突帯の刻みはD字を呈する。頸部は内外面とも板ナデである。

6、7、10、14、15、18は肩部突帯が遺存する。

14、15は1-111土器である。14は頸部が外反し、肩部突帯付近に丸みをもつ。突帯は上部を強くなで、下向きを呈する。刻みはない。調整は横方向の板ナデであるが、胴部外面の板ナデは幅が狭く、ナデというより、ミガキに近い。にぶい黄橙色を呈し、生駒西麓産の胎土ではない。15は頸部がやや外反する。突帯は、上部はなでて整えるが、下部は雑である。突帯の刻みは細く小さいD字～線状を呈する。頸部外面は横方向の板ナデ、内面はナデを行う。6、7はいずれも破片ではあるが、断面は直線的で肩部の屈曲はほとんどみられないと考えられる。突帯の刻みはD字で、密に配する。18は浅く、O字状の刻みを密に配する。10の肩部突帯は小さく、刻みは不明瞭で浅く線状を呈する。口頸部は欠損するが、9と同様、小型の深鉢である。

13、16は底部である。いずれも平底で、側面が外側に張り出す。13は1-112土器である。

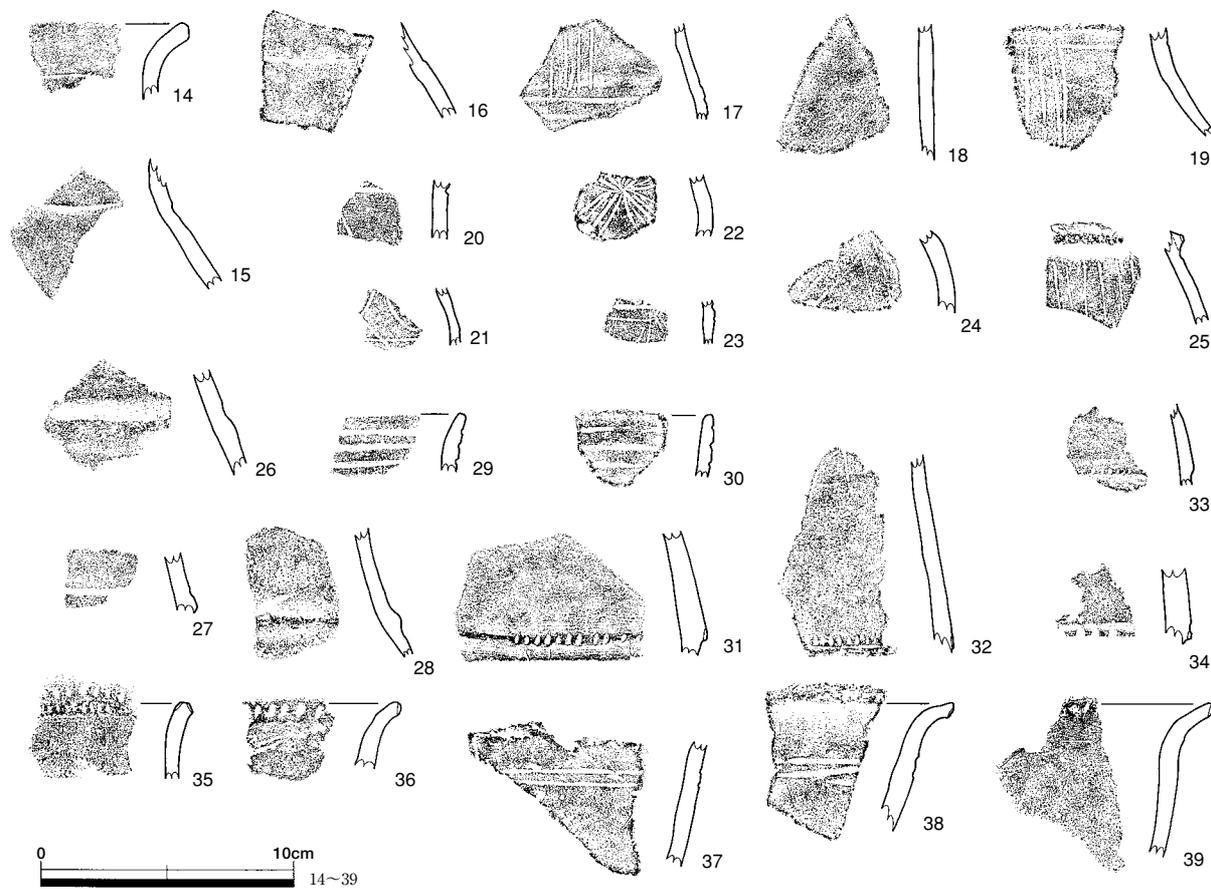
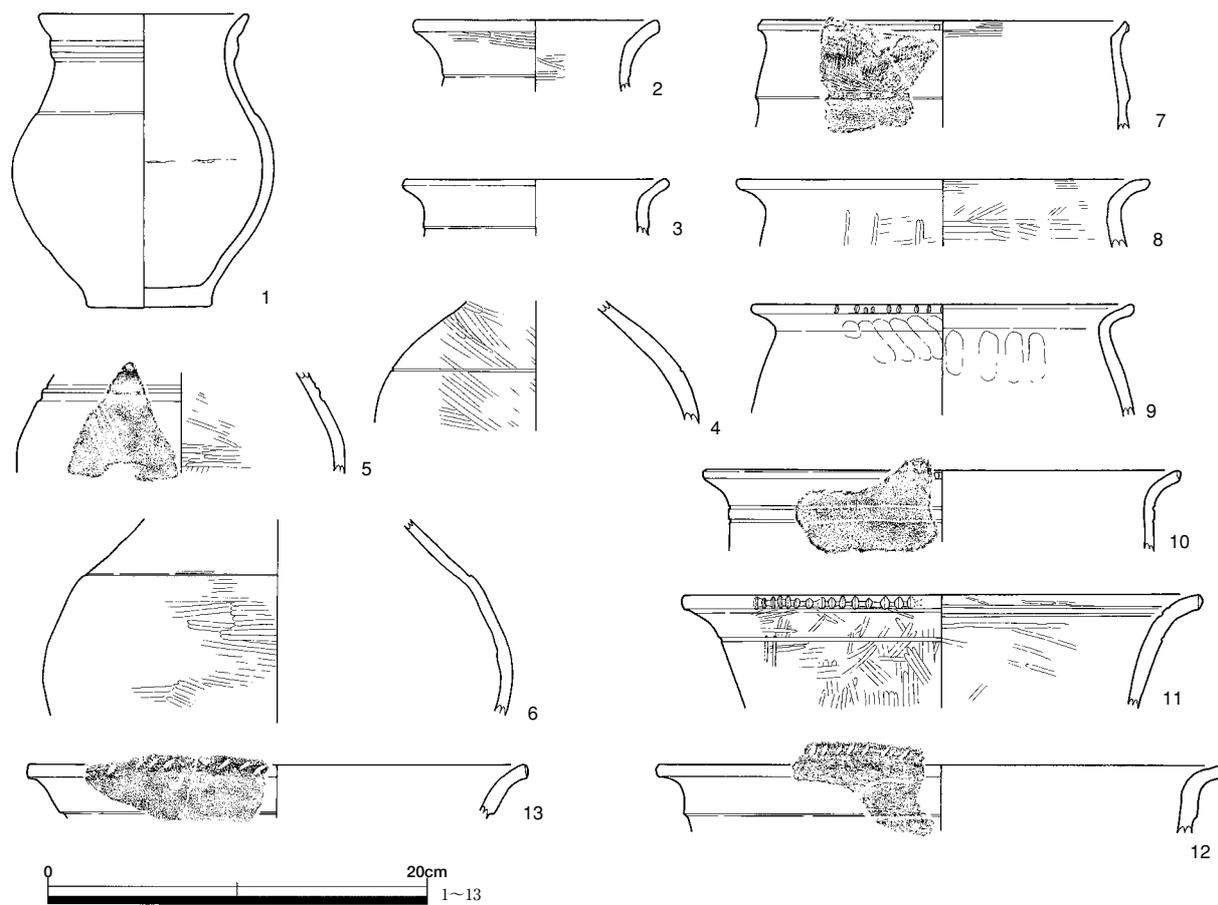


図84 8層 出土遺物 (1)

包含層出土遺物（図84～88）

1、2調査区の8層（8-1層、8-2層含む）出土遺物である。なお、側溝、断面内から出土した遺物についても、8層からの出土と推定できるものについてはここで掲載している。

図84-1～39は弥生時代前期の土器である。

1～6は壺である。1は小型の壺で、直径11.0cm、器高15.5cmを測る。全体に磨滅が著しく、不明瞭ではあるが、体部に削り出し突帯を伴う段を有している。2、3は段のある壺である。4は体部に沈線を施す。外面にミガキがみられる。5は削り出し突帯を有し、突帯下の文様帯に山形文を施す。6は段を有する。体部外面にミガキがみられる。

7～13は甕である。7は口縁部が短く外反し、端部に刻みを施す。胴部には段をもち、段より上方にはハケメがみられる。9～13は口縁端部に刻みを施す。10は頸部に2条の沈線を施す。11は頸部に1条の沈線を施し、その下部に縦位の沈線文がみられる。内面にも2条の沈線を施す。12、13は段を有する。

14～28は壺である。14～16は段をもつ壺である。17～25は有文の細片で17は下位に2条の沈線を伴う段を有し、縦位の沈線文を施す。18、24は山形文、19は沈線と縦位の沈線文、22は木葉文を施す。20、21は細片で、文様はよく分からないが、21は沈線と弧文か。23は段を有し、段の下部に沈線と山形文を施す。25は小さい刻みを持つ貼り付け突帯を有し、下部には縦位の沈線文がみられる。26～28は削り出し突帯を有し、27は沈線を伴う。

29、30は平行沈線が施された口縁部で、鉢か。29は口縁端部に面をもつ。

31～34は胴部に段を有する甕である。段にはいずれも刻みがみられ、34は上位に沈線を伴う。31は刻みが全周しない。

35～39は甕である。35、36、38、39は口縁端部に刻みを施す。35は端部の内側にも刻みを施す。37、38は2条の沈線を施す。

図85-1は浮線文土器、浅鉢である。1は、復元径は25.2cm、残存高4.7cmを測る。口縁端部には面をもつ。氷1式。2は細片であるが同じく、浮線文土器の浅鉢と考えられる。

図85-3は突帯文浅鉢である。口縁部から胴部が丸いボール状を呈している。口縁端部は尖る。突帯は口縁端部よりやや下がって貼り付け、刻みはO字とD字を呈する。

図85-4～8、10、11、13は突帯文土器の壺である。壺は口縁部が開く（4～7）と、口縁部はすぼまる（8、13）がみられる。5～7は突帯を口縁端部付近に貼り付け、4はやや下に位置する。4～6には刻みを施さない。7は小さく、浅い刻みを配する。8は小さいかまぼこ状の突帯を口縁端部に貼り付ける。13は突帯を口縁端部に貼り付ける。刻みは、指で押圧したような幅広のO字状を呈する。頸部外面は板ナデで、非常に砂粒の動きが大きい。内面の調整は縦方向の板ナデである。10、11は肩～胴部である。いずれも粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。

図85-12は壺か。粘土紐が明瞭に残る。

図85-9は頸部が外反し、口縁部が大きく開く。8と同様に小さいかまぼこ状の突帯を口縁端部に貼り付ける。器種は深鉢である。

図85-14は突帯文土器の深鉢の口縁部と考えられる。非生駒西麓産の胎土をもつ。口縁端部には刺突を施し、幅の狭い突帯を端部より下がって貼り付ける。刻みは小さいO字を密に配する。

図85-15は土製紡錘車である（図版18-7）。

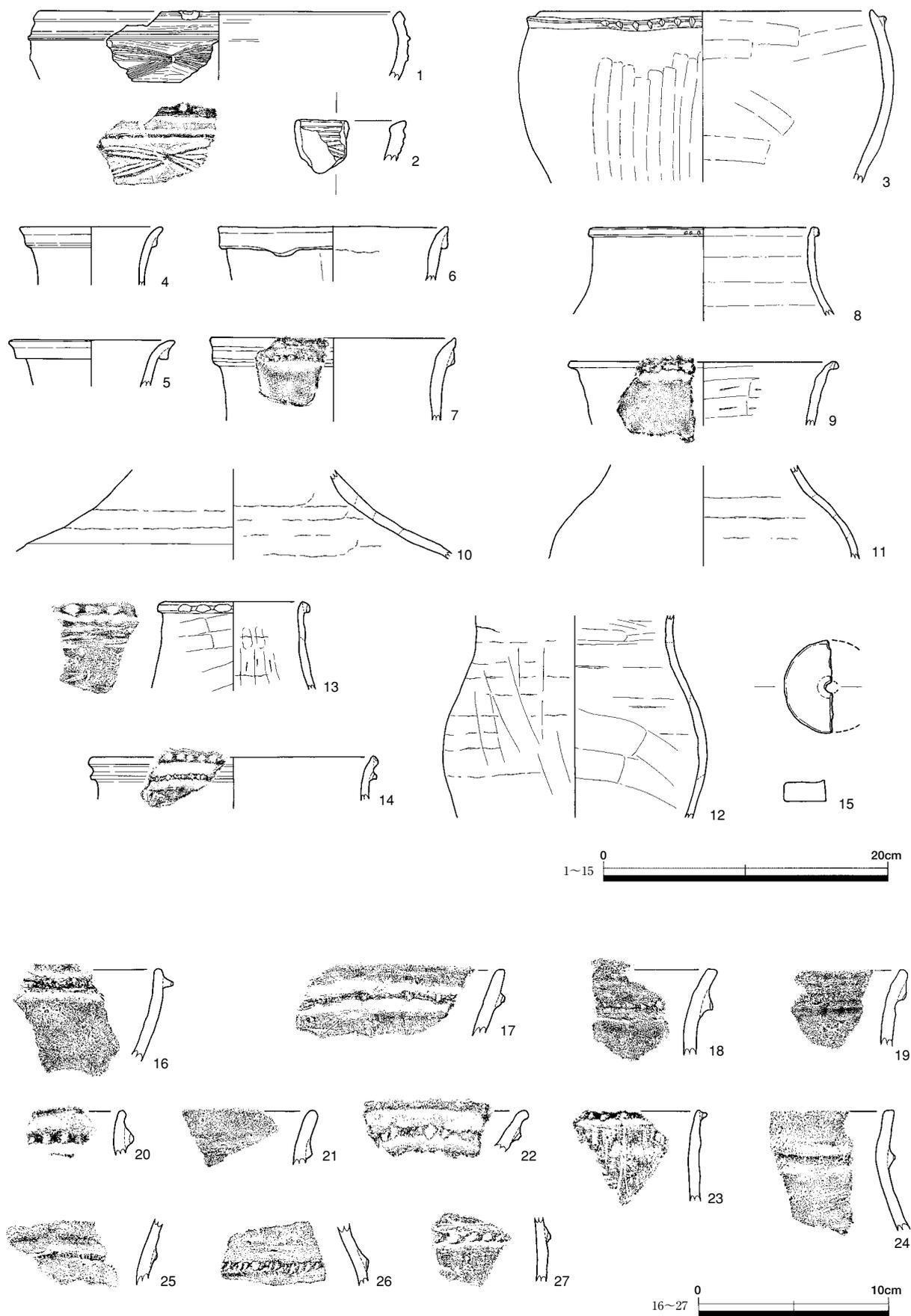


図85 8層 出土遺物(2)

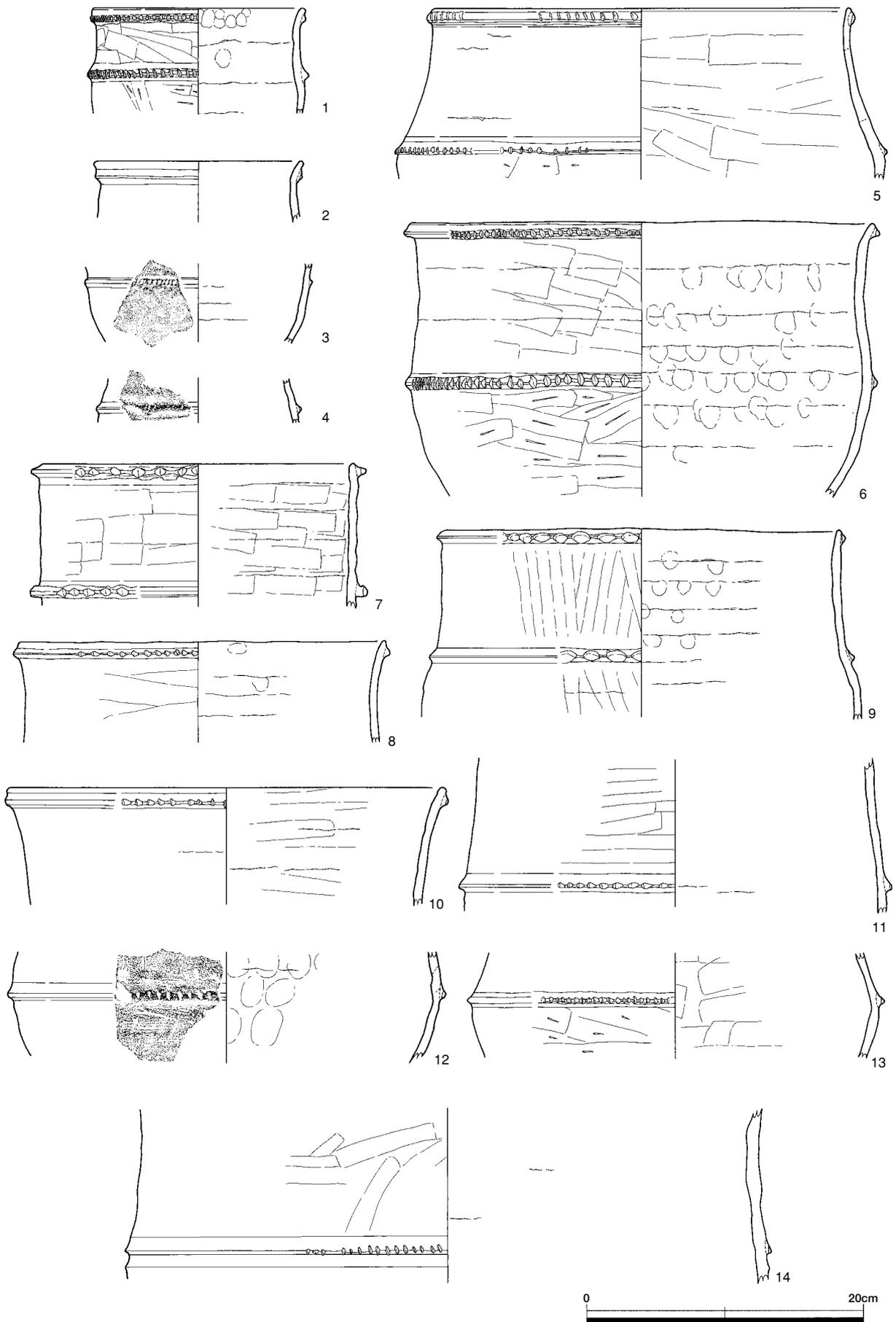


図86 8層 出土遺物 (3)

図85-16～27は非生駒西麓産の胎土をもつ突帯文土器である。

16は浅鉢である。器形は胴部が丸いボール状を呈すると考えられる。突帯は口縁端部より下がって貼り付ける。刻みは小さく、浅く、あたりが確認できるのみである。

17～24は深鉢の口縁部である。23以外の突帯は口縁端部より下がって貼り付ける。24は頸部が突帯付近で大きく屈曲し、口縁部が外反する。口縁端部は18、24は面をもち、20、22は端部が外側にわずかに肥厚する。他は丸く収める。19は突帯の下部を強くなでる。23は口縁端部に断面かまぼこ状の突帯を貼り付け、頸部の調整は縦方向の板ナデである。25～27は深鉢の肩部である。口縁部、肩部の突帯の刻みは浅く、あまいものを密に施すものがほとんどである。19、25は線状、20、22、27はD字、他は小さいDあるいはO字を呈する。

図86-1～88-12は突帯文土器深鉢である。いずれも角閃石を含み、生駒西麓産の胎土を有すると考えられる。図86-1、2、5～10は残存状況がよく、口径が復元できる。口径は15～33.2cmとその差は大きく、1、2は直径が15cm前後と小型、7、8は25cm前後と中型、他は30cm前後と大型である。3、4は、口縁部は残存しないが、1、2同様、小型のものである。

器形は口縁部から頸部が内傾するもの(5)、口頸部が外反するもの(1、2、6、8、10)、直線的にのびるもの(7、9)がみられる。口縁部突帯は口縁端部に貼り付けるが、1、2はやや下側に位置する。胴部は肩部付近で屈曲するもの(5、9、12、13)、肩部付近から緩やかに丸みを帯びるもの(1、3、6)がみられる。7、11、14は残存する部分では、肩部突帯付近の屈曲がみられない。

突帯の刻みはバラエティに富む。1、5、6、8、10、11はD字、小さいD字状を呈し、14は細長いD字、3、12はV字に近い。6は刻みが他と比べてシャープである。7は大きいO字を、9は横に広い押圧状のO字を呈する。2、4はあたりが弱く不鮮明である。6、7、9以外は刻みを密に配する。

器面調整は、頸部外面は横方向にナデ、板の痕跡が残るものも多い。ただし、9は縦方向の板ナデである。胴部外面はケズリであるが、3は丁寧になでる。内面は横方向になでるものが多いが、指頭圧痕や、粘土紐の継ぎ目が残る。12、13は肩部突帯より下方に厚く煤が付着している。

図87は口縁部の破片である。各土器の傾きは口縁部、および突帯が水平になるよう求めたが、全体の口径に対して、小さい破片が多く、もともとの口縁部、突帯がゆがんでいる個体も多いと考えられることから、その傾きには不安を残す。ここでは、突帯の特徴について主に記述する。

口縁部突帯は口縁端部に接して、あるいは端部付近に位置するもの(1～18)と口縁端部より下がって位置するもの(19～30)がある。後者は口縁部が突帯付近で外反するものがほとんどで、18、19は端部に面をもち、27は外側に肥厚するが、他は端部が尖り気味である。後者のほうが、器壁が薄い傾向がみられる。突帯は基本的には断面三角形を呈するが、上向きの三角形(3、17)や、下向きの三角形(12、13、16、18、24)、高さがなく、小さいもの(4、21)や高さのあるもの(5)などがある。

図88-1～12は肩部である。1～4は突帯付近で屈曲する。5～12は残存する範囲では屈曲はみられず、頸部から胴部に向かって緩やかなカーブを描くと考えられる。突帯は基本的には断面三角形を呈するが、突帯上部のナデが丁寧で強く、下部は整えておらず、下向きの突帯を呈するものが多い。

口縁部、肩部突帯の刻みはともにバラエティにとみ、図88-1、3のように大きく、シャープなD字、図87-28、30のように小さいD字、図88-9のように小さいO字を、図87-21のようにV字もしくは線状、図87-20のように、あたりが弱くD、O字の区別がつかない浅いものがみられる。図87-13は刻みがない。全体的には、小さいD、O字を密に配し、刻みが浅いものが多い傾向がある。

器面調整は基本的に、頸部外面は横方向のナデで板を用いるものが多く、胴部はケズリである。内面は横方向のナデを施すものが多い。5は板ナデの痕跡が明瞭である。

図88-13～22は底部である。13～16は弥生時代前期の土器底部と考えられる。17～22は突帯文土器の底部と考えられる。いずれも平底で、18～20は底部外面、中央がわずかに凹む。17は底部が厚い。

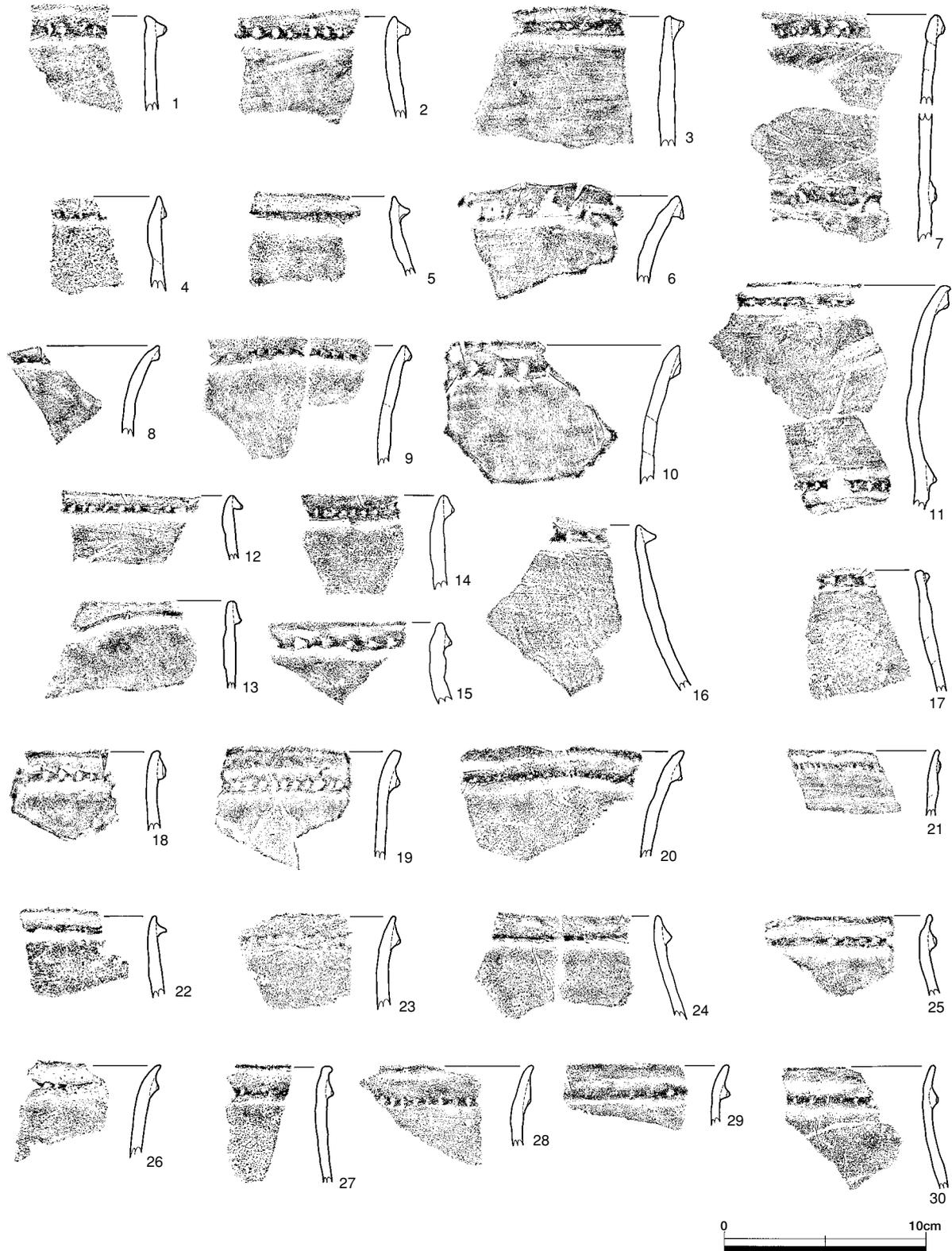


図87 8層 出土遺物 (4)

第5面遺構他出土遺物（図89、90）

図89、90は方形周溝墓など上面の遺構、あるいは上層から出土した縄文時代晩期末（突帯文）～弥生時代前期の土器である。一括してここにまとめた。

図89-1～7は弥生時代前期の土器である。1～4、6、7は壺である。1～3は段を有する。5は沈線が2条みられる。6、7は施文のある細片で、6は木葉文、7は段を有し、段の下部に、重弧文と沈線を施す。4は甕である。推定口径26.6cm、胴部最大径28.0cmで、胴部最大径が口径を上回る。口縁部は短く外反し、端部に刻みを施す。頸部下端に段を有する。

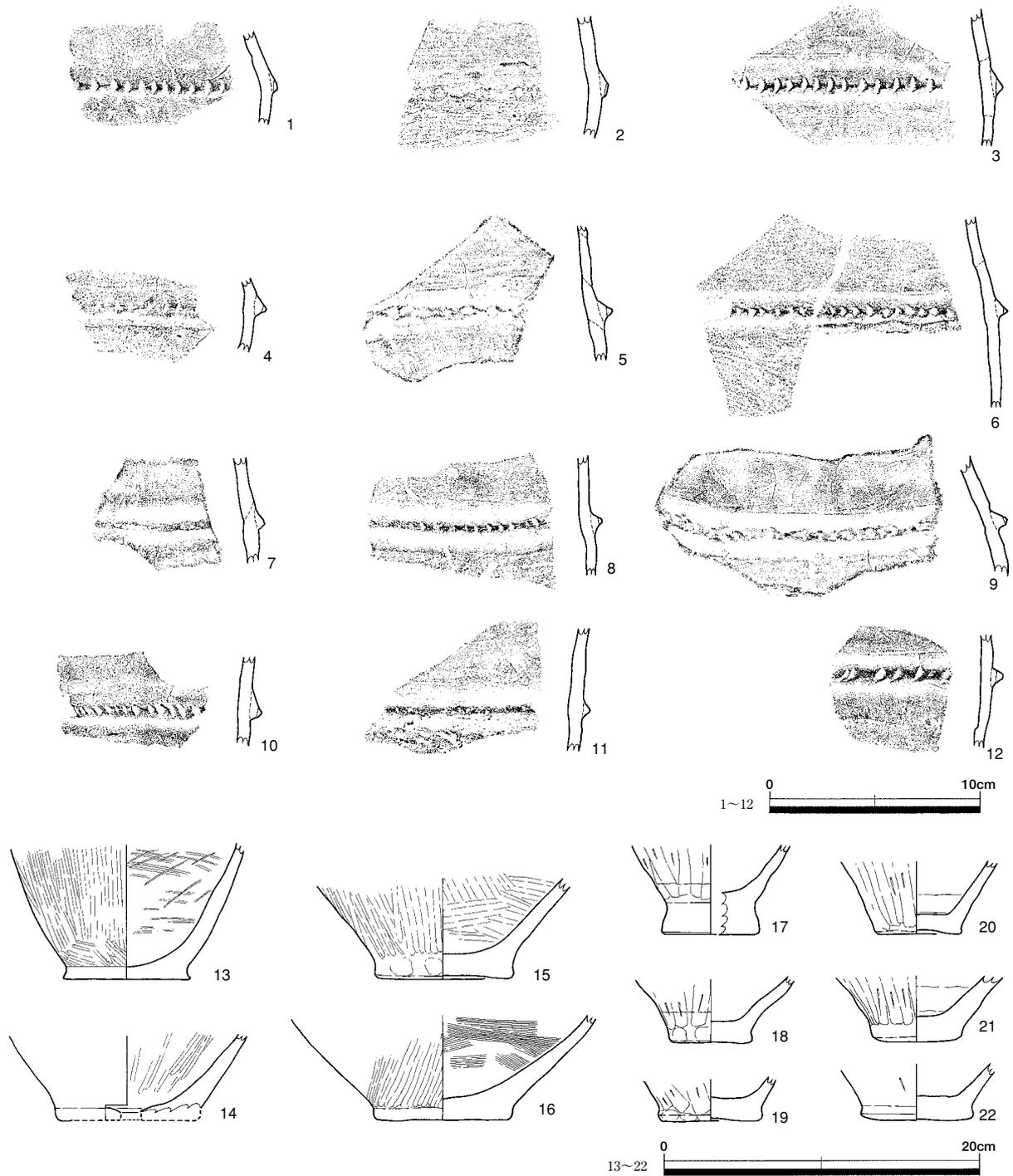


図88 8層 出土遺物（5）

図89-8は壺の口頸部である。内外面ともに丁寧なミガキを施し、口縁部付近に4条の沈線を施す。
 図89-9は器種不明。口縁端部は面をもち、外面に2条の沈線を施す。8、9とも所属時期は不明である。

図89-10、11は突帯文土器の壺である。10は非常に小さい突帯を口縁端部に接して張り付け、11は端部よりややさがって断面三角形の突帯を貼り付ける。いずれも、突帯に刻みはない。頸部外面は縦方向の板ナデを行う。

図89-12～17、図90-1～27は突帯文土器深鉢である。

図89-12、図90-1～12は非生駒西麓産の胎土を有する。図89-12、図90-1～6は口縁部突帯がいずれも端部より下に位置している。3、5は端部に面をもち、3は外側に肥厚する。6は口縁部が薄く、外反気味で、端部はわずかに肥厚する。7～12は肩部である。12は大きく屈曲する肩部に突帯を貼り付ける。

図89-14～17、図90-13～27は角閃石を含む生駒西麓産の胎土を有する深鉢である。

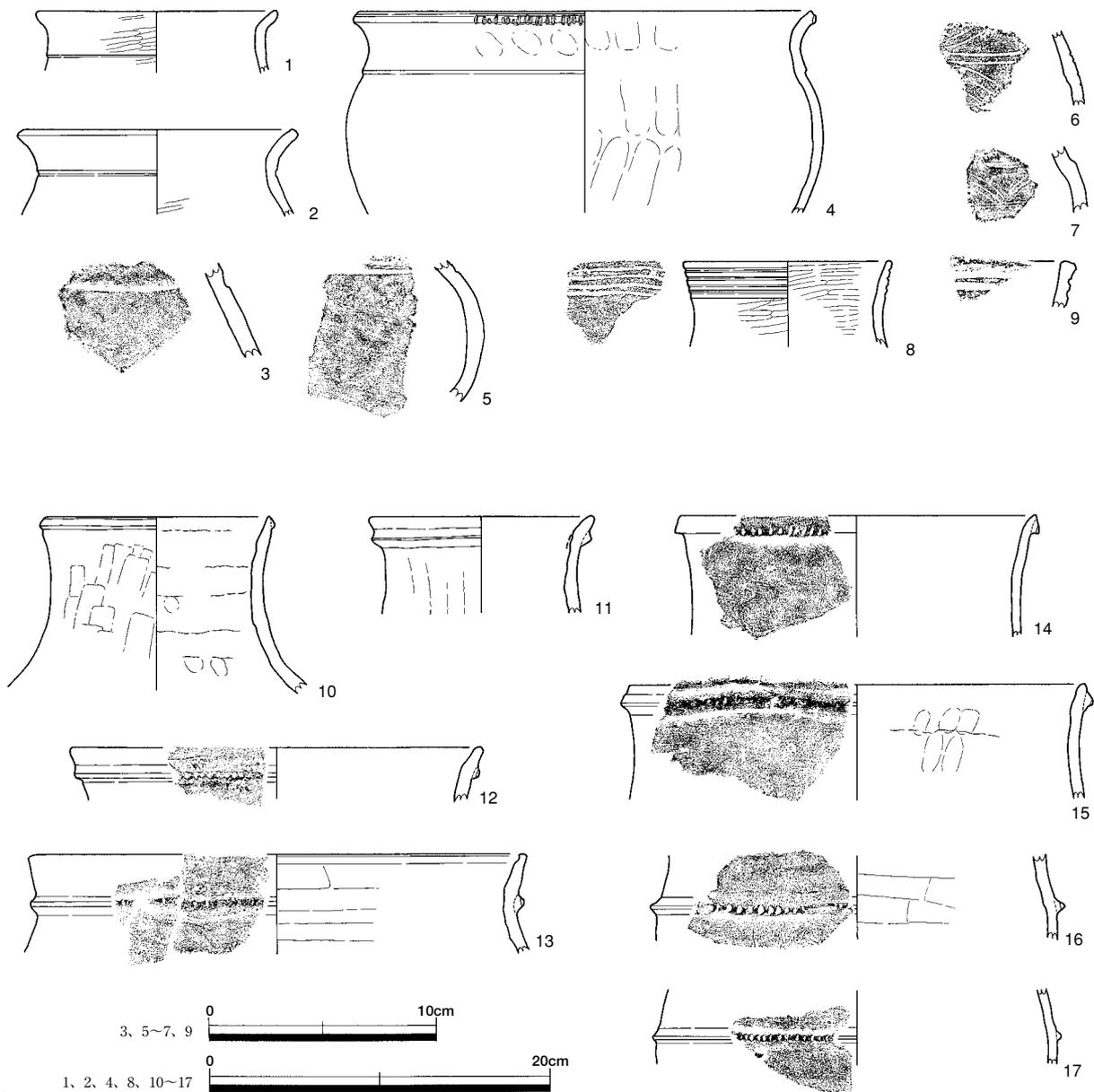


図89 第5面遺構他 出土縄文晩期・弥生前期遺物(1)

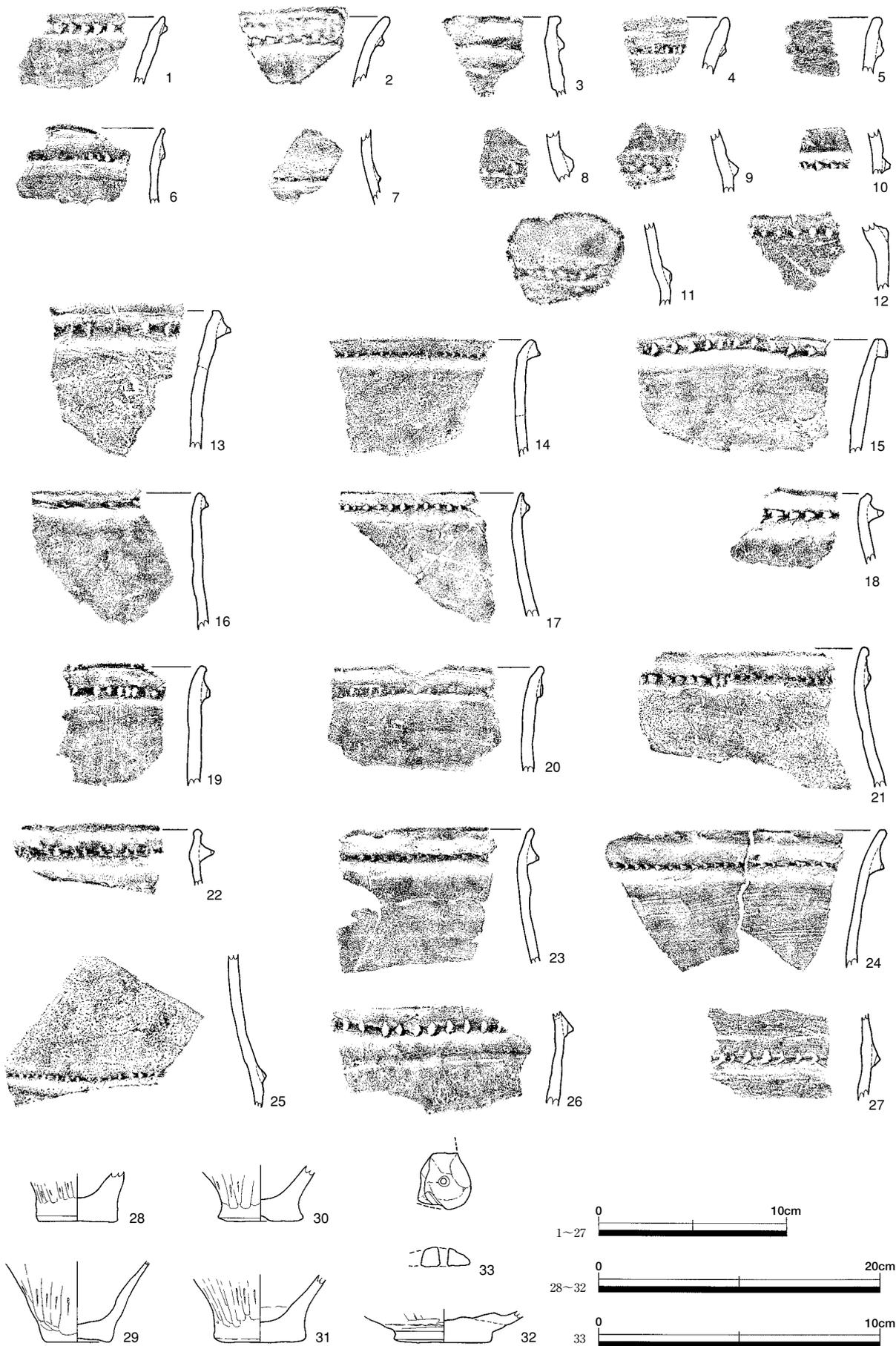


図90 第5面遺構他 出土縄文晩期・弥生前期遺物（2）

口縁部突帯は口縁端部に接して、あるいはわずかに下がって貼り付けるもの（図89-14、15 図90-13～17）と口縁端部より下がって貼り付けるもの（図90-18～24）がある。後者は口縁部が突帯付近で外反するものがほとんどで、18、19は端部に面をもち、27は外側に肥厚するが、他は端部が尖り気味である。また、後者のほうが、器壁が薄い傾向がみられる。突帯は基本的には断面三角形を呈するが、下向きの三角形（図89-14、図90-15、16、20、25、26）のものや、高さのあるもの（図90-18、22）などがある。突帯の刻みは図90-14、22のようなV字あるいは線状のもの、図90-15のようにD字のもの、図90-17、23のような小さなD字のもの、図90-25のように小さなDあるいはO字のものがある。全体に刻みは浅く、密に配するものが多い。器面の調整は頸部外面が横方向のナデで、板の痕跡が残るものが多い。内面はナデ、板ナデであるが指頭圧痕や粘土紐の継ぎ目が残る。17は頸部外面に縦方向の板ナデを行う。

図89-13は突帯が口縁端部より、かなり下がって位置し、突帯付近で口縁部が大きく外反する。口縁部内面はケズリのちナデで、端部の内側が段状になる。端部は面をもつ。突帯の刻みは浅く、不明瞭で細長いO字である。

図90-28～32は底部である。いずれも突帯文土器の底部と考えられる。いずれも平底であるが、28～30は底部外面中央が窪む。30は底部側面が外側に張り出す。32は底部から胴部が大きく開く。粘土紐の継ぎ目が明瞭である。いずれも、胴部外面はケズリ、内面はナデである。

図89-33は不明土製品である。小さな穴を穿つ。土偶の耳の部分である可能性が考えられる。

その他に、図示していないが、発泡土器が数点出土している。

以上、弓削ノ庄遺跡で出土した縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器について、長々と述べてきたが、ここで、出土した土器について、簡単にまとめてみたい。

弥生時代前期の土器は、全体的にその数は少なかったが、壺、甕の出土がみられた。これらは段を有するものが多く、削り出し突帯をもつものもある。また、沈線は二条のものがみられた。文様は、山形文、縦位の沈線文、弧文、木葉文などがみられた。ここで出土した土器はいずれも、古～中段階に含まれるものと考えられる。また、角閃石を含む生駒西麓産の胎土を有するものは少なく、図示したものでは、図82-9、22、図84-2、4、6、9、15、17の8点のみで、特に甕は1点のみであった。

突帯文土器は、深鉢が圧倒的に多く、その他、壺、浅鉢がみられた。深鉢は口縁部、および肩部に突帯を貼り付けるものが主流である。1例だけ口縁部に2条の突帯をもつものがあった（図82-21）。

今回、出土した深鉢で上下の突帯がどちらも残るものは少なく、多くは口頸部のみ、あるいは肩部のみの破片である。その中で、大きな違いとして認められたのは、口縁部突帯の位置、および口縁部の形状である。前にも述べたように、口縁部突帯は口縁端部に接して、あるいはその付近に位置するものと、口縁端部より下がって位置するものがあり、後者は突帯の上部と口縁内面をつまんでなでるため、口縁部は外反し、端部は細く、尖り気味になる。あるいは、図87-27のように端部が外側に張り出すものや、同19のように面をもつものもある。前者は「長原式」の特徴を有しており、後者それに後続するとされる「水走式」に相当するものと考えられる。また、図85-24、図89-13でみられる、突帯が口縁端部よりかなり下がって位置し、突帯付近で口縁部が大きく外反するものは、同様の器形が水走遺跡で出土しており、注目できる^(註2)。

器形が分かるものは多くないが、図81-1、2、図86-5、6に代表される、口頸部が外反し、肩

部突帯付近で屈曲するもの（1）、図86-7の口頸部が直立するもの（2）、図81-6の最大径が口縁部にあり、肩部での屈曲はもたず、底部に向かってすぼまるもの（3）がみられる。

いずれも、突帯が口縁端部に接するか、その付近に位置しており（1）は「長原式古層」に相当するものである。頸部の外反が弱く、屈曲もゆるい図86-1などはその中でも新しい特徴を有する。（2）は肩部付近の状況はよく分からないが、大きく屈曲するようなものではないと考えられ、「長原式新層」のものと考えられる。（3）は1点のみの出土ではあったが、「長原式新層」に相当する。図83-8は頸部の外反が弱いものの、肩部突帯付近で屈曲する（1）に近い器形であるが、口縁部の外反度が大きく、端部は細く尖り気味、口縁部突帯は端部より下がる特徴を有しており、「水走式」に相当すると考える。

深鉢は直径30cm前後の大型のもの、25cm前後の中型のもの、15cm前後の小型のものがみられた。法量の集中度合いは、出土遺物の計測作業を行っておらず、明らかにできなかったが、器種が限られている中で法量の違いが指摘できる点は使用の問題を考える上で、重要であると考えられる。

他に、他地域の深鉢やその影響を受けたと考えられる深鉢がある。調査では角閃石を含むいわゆる生駒西麓産の胎土とは異なる胎土を有するものが、一定量みられた。器形が分かるものでは、図83-11があり、先に述べた特徴は播磨系のものと共通する。同14も胴部外面の調整が横方向に板ナデであり14と共通する。図80-18、図85-18も播磨系の可能性が考えられる。図82-27、図85-17、22、図89-12は砂粒を多く含んだ良く似た胎土を有しており、外反する口縁の端部が丸く、端部より下がって突帯を貼り付ける点で共通する。図89-6は橙色を呈し他の非生駒西麓産の胎土とも大きく異なる。

図86-9は、胎土は角閃石を含む生駒西麓産のものと変わらないが、突帯の刻みが他とは異なり、指で押したような、横広のO字を呈する。また、頸部外面の調整が縦方向の板ナデである点でも特徴的である。こういった特徴は、摂津、山城、近江のものと類似しており、注目できる。

今回このような他地域産のものについて十分に検討できなかったが、そういったものが含まれている点は重要であり、特に周辺部の突帯文との比較が課題として残った。また、浮線文土器が出土している点も東日本とのかかわりを示唆しており、重要である。

深鉢の他に、壺も比較的多くみられた。図81-10のように口縁部が開くものと、図85-8のように口縁部がすぼまるものがみられたが、前者が多くみられた。

以上、今回出土した突帯文土器は、長原式～水走式に相当し、他地域の土器が一定量含まれる、ということが出来る。

突帯文土器と弥生時代前期土器の相伴関係に関しては、包含層資料が大部分を占め、遺構から一括して出土した状況がないため、即断できないものの、生駒西麓産突帯文土器を主体とし、少量の他地域突帯文土器と、同じく少量の前期土器（非生駒）を有する集落といえる。

（2）石器

調査区では8層（8-1、8-2層とも8層でまとめる）、第7面で多くの石器が出土した。ここでは剥片類も含めて扱うこととする。磨製石器には石棒、石斧がある。礫石器には叩き石や磨石がみられた。打製石器にはサヌカイト製の製品および、剥片石核類がある。なお、第5面方形周溝墓の盛土、周溝内からも多くのこれら石器が出土した。この中には弥生時代中期に所属するものもあると考えられるが、先に述べた土器と同様大部分は、8層、および第7面に本来は所属していたものと考えられる。各石器類はその所属時期を形態から判断することは難しく、ここでまとめて扱うこととした。出土地点については、文中に示すこととする。なお、石材の鑑定は砂岩以外のものについては、奥田尚氏に依頼した。

1. 磨製石器

石棒（図91、92）（図版38、39）

調査区からは、多くの石棒が出土した。ここで石棒としたものは、明らかに頭部に加工が施されたもの以外に、結晶片岩の断面円形のものも含めている。また、扁平な断面形状をする棒状の石も、他の用途が考えられないと判断されたものについても石棒に含めた。石棒は破損した状況で出土することが多い点はこれまでも指摘されており、今回も、その多くは破損品であり、端部の形状が分かるものは多くはない。使用された石はいわゆる結晶片岩であり、点紋片岩、絹雲母片岩、塩基性片岩（緑色片岩）、泥質片岩がある。その他に、泥岩ホルンフェルスによるものが1点出土している。

図91-1は出土品中最も大きい。欠損品が多い中で、遺存状況が良好な例といえる。残存長30.4cm、断面は6.9×4.9cmの楕円形を呈する。頭部は丸い。もう一方の頭部は欠損しており不明である。石材は点紋片岩である。2は一部が欠損しているが、2条の沈線によって頭部を表現している。同様の例は府内では長原遺跡、東奈良遺跡で出土している。残存長19.8cm、断面は4.4×2.4cmの楕円形を呈する。端部の片側は欠損しており、また裏面も剥離しており、断面は本来円形に近いと考えられる。石材は絹雲母片岩である。3は頭部を丸く仕上げる。平滑に仕上げられ、整っている。残存長は8.2cmを測る。裏面は欠損しており、本来断面は円形を呈すると推定される。石材は緑色片岩である。4は1-62ピットから出土した（図版17-2）。断面形は扁平で中央が窪んでいる。残存長16cm、幅7.3cm、厚さ2.7cmを測る。石材は泥岩ホルンフェルスである。5は先端が両側とも欠損している。残存長15.5cm、幅5.4cm、厚さ2.3cmの扁平な断面形を呈する。段上になっており、頭部の表現の一部と想定される。石材は絹雲母片岩である。4、5は断面形が非常に扁平で、特に4は石材が他と異なっており、石棒の類いに含められるものか、判断に迷う。ただし、他の用途も考えにくく、石棒と捉えた。

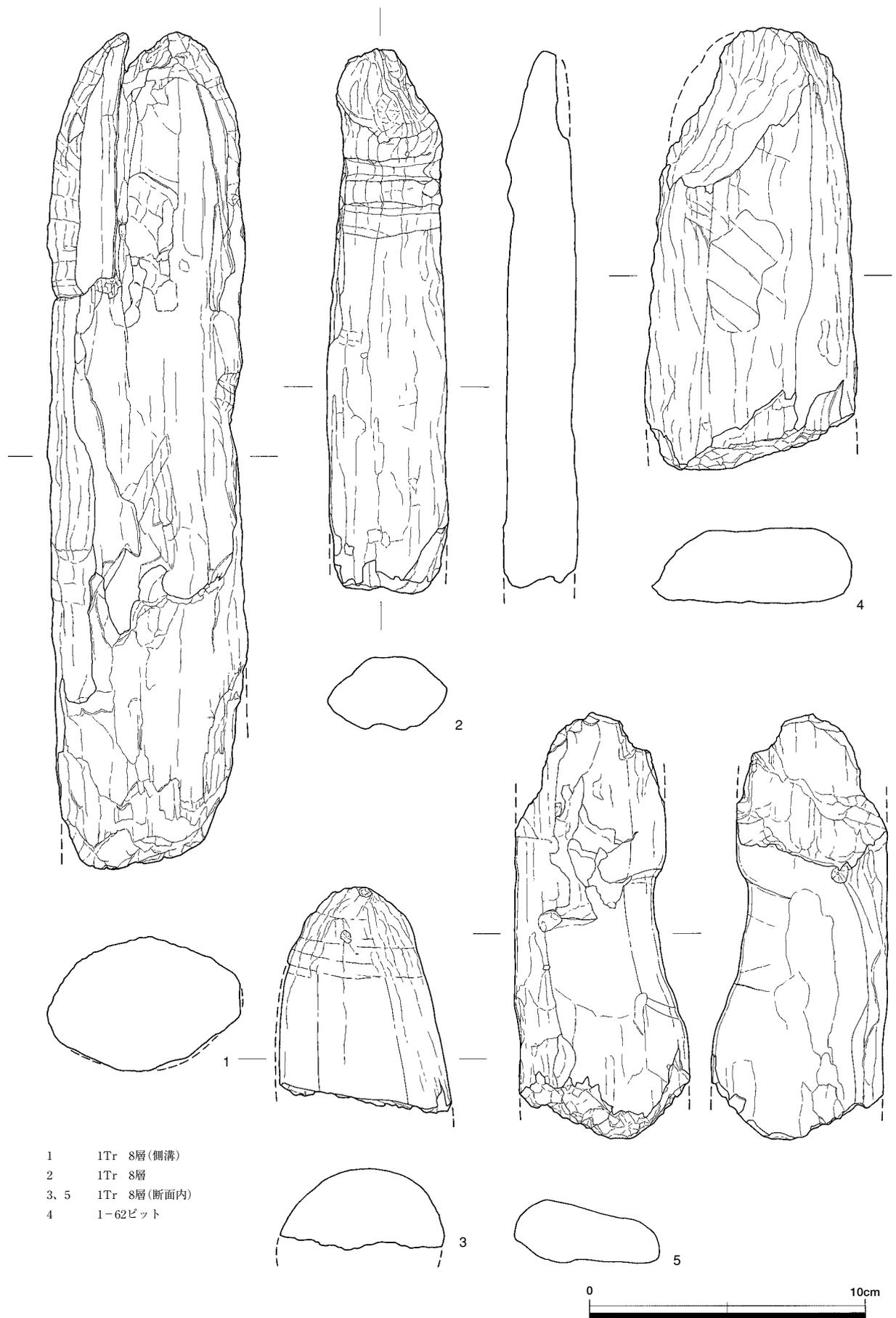
1～3、5は1調査区8層から出土した。

図92-1は1-245土坑から出土した。両端とも欠損しているが、上方は幅が狭まっており、そのまま頭部を丸く仕上げるものとみられる。残存長11.7cm、断面形は裏面の一部が欠損しているが、円形を呈すると考えられる。石材は点紋片岩である。2は頭部が両端とも欠損。残存長14.9cm、断面形は円形というより、角ばっており台形に近い。焼けた痕跡がみられる。石材は絹雲母片岩である。3は1-16-2落込み（b）である。断面は半円形で縦方向に欠損している可能性が高い。残存長12.8cmを測る。石材は泥質片岩である。4～6は両端とも欠損。ただし、5は上方の先端がやや狭まっており、頭部に近いと考えられる。4は大きく欠損しているが、5、6の断面は楕円形を呈する。4、5の石材は絹雲母片岩、6は点紋片岩。

2は2調査区8層から、4～6は2調査区第5面方形周溝墓盛土、および主体部周辺から出土した。

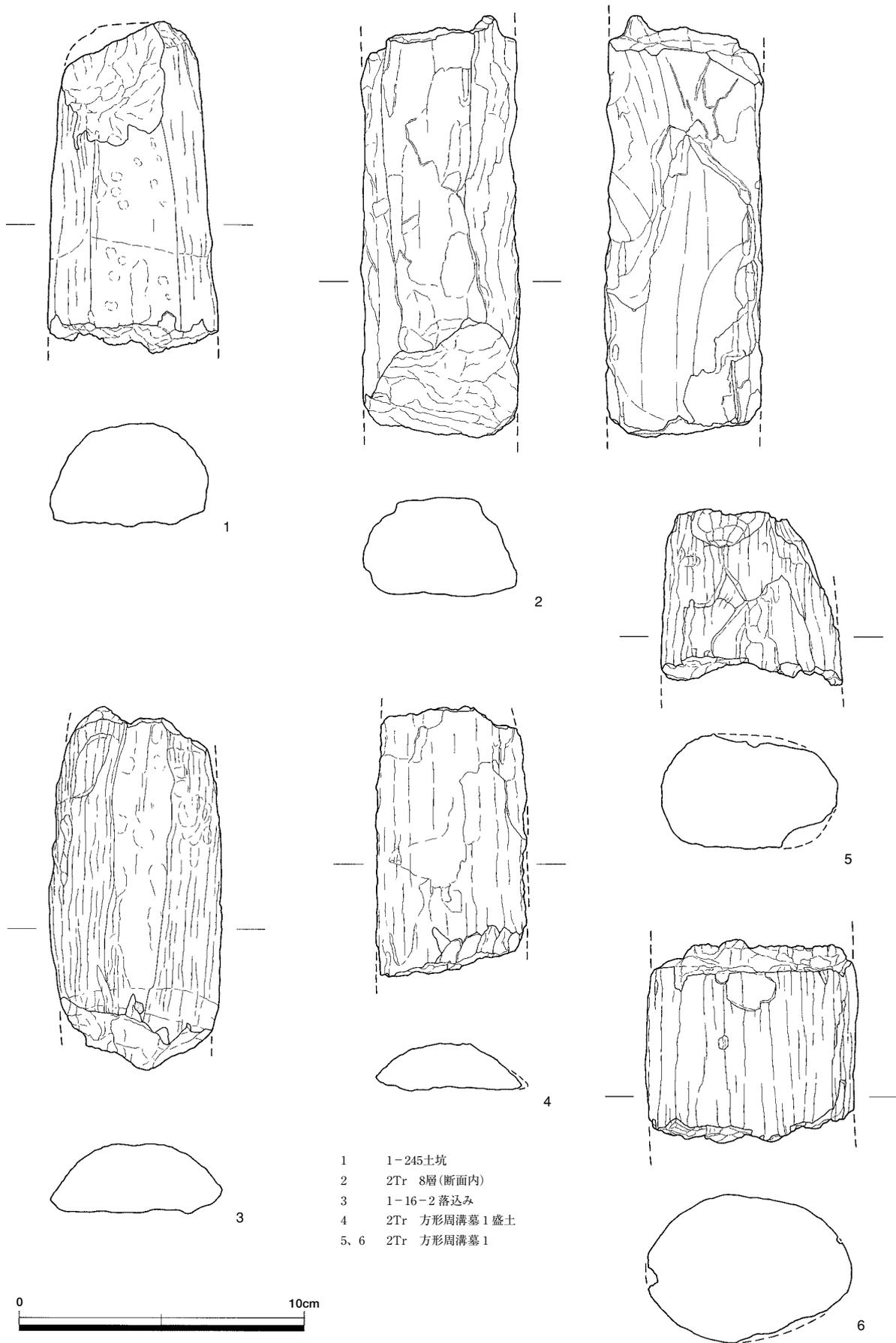
図示したもの以外に3点図版に掲載した（図版39上段a～c）。いずれも、両端は欠損している。石材は絹雲母片岩である。aは2調査区周溝墓盛土内、bは1調査区第5面、cは同第7面で出土した。

縄文時代晩期後半～弥生時代前期初頭の石棒の集成成果によれば、大阪府内で石棒を出土する遺跡は13遺跡である^{（註3）}。今回弓削ノ庄遺跡では、図化した11点、図版に掲載した3点の他に同様の結晶片岩が2点出土しており、その他に小剥片も出土している。調査区の面積を考えると実に多くの石棒が出土したといえる。最も多く出土している長原遺跡は総数22点を数えており、それに匹敵する出土状況である（ただし、方形周溝墓をはじめとする上面遺構の出土遺物も数に含めている）。また、頭部が丸いもの（図91-1、3）、沈線で表現するもの（図91-2）、段で表現している可能性があるもの（図



- 1 1Tr 8層(側溝)
- 2 1Tr 8層
- 3、5 1Tr 8層(断面内)
- 4 1-62ビット

図91 出土石棒 (1)



- 1 1-245土坑
- 2 2Tr 8層(断面内)
- 3 1-16-2 落込み
- 4 2Tr 方形周溝墓1 盛土
- 5, 6 2Tr 方形周溝墓1

図92 出土石棒 (2)

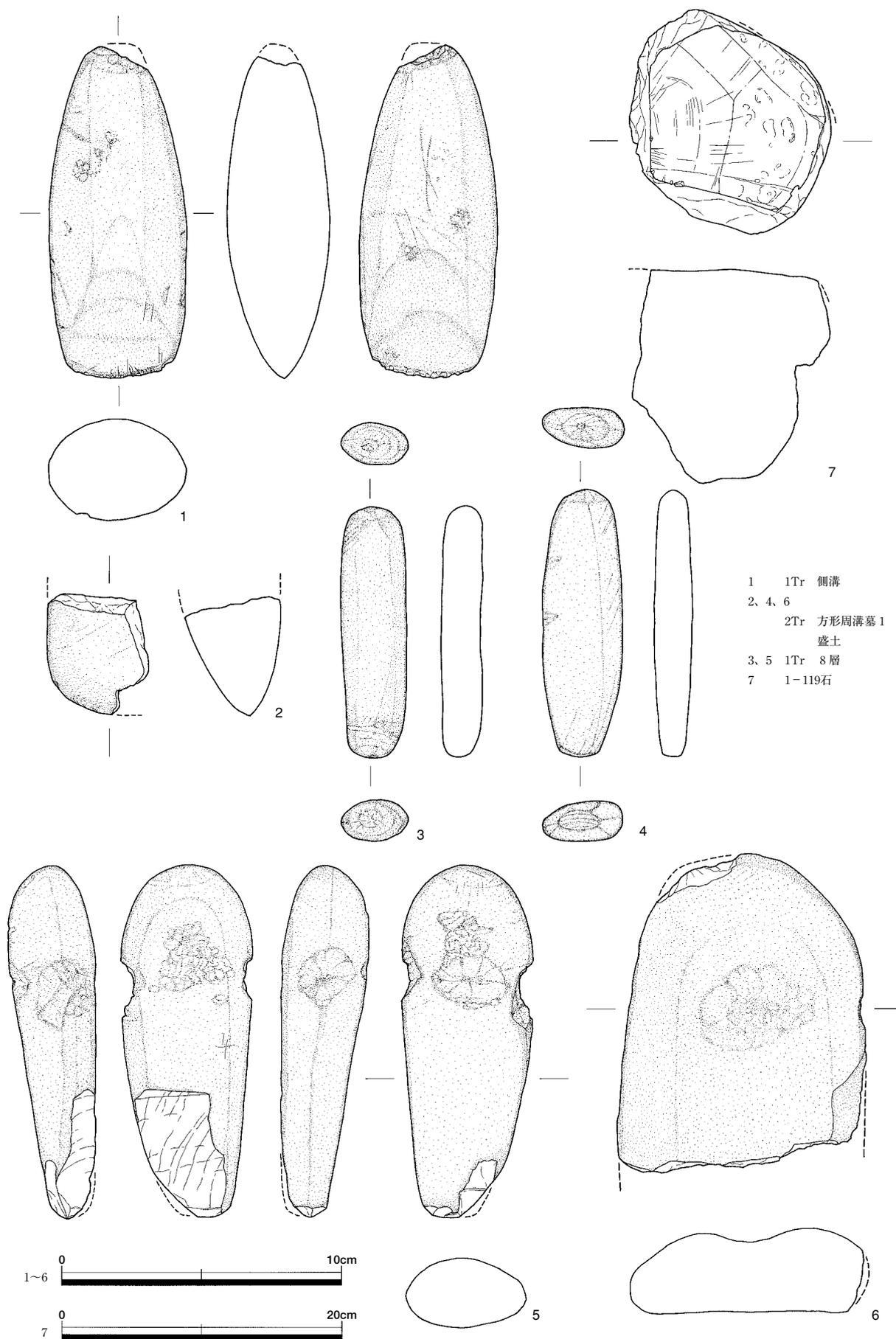


図93 出土石製品 (1)

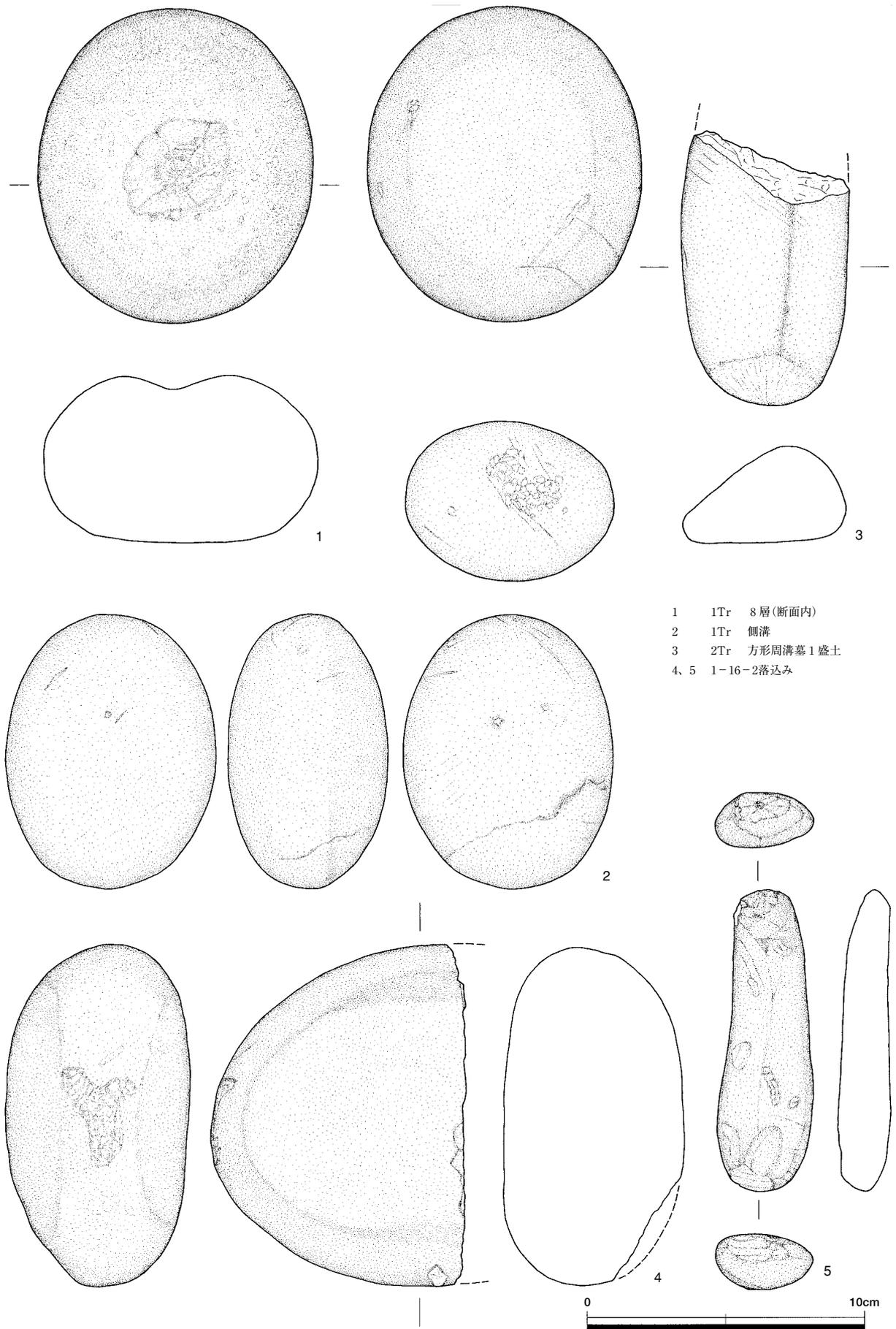


図94 出土石製品(2)

91-4) など頭部の形状は様々であり、断面が円形、扁平、四角形があり、種類の豊富さも特筆できよう。

磨製石斧 (図93-1、2) (図版39)

図93-1、2は太型蛤刃石斧である。1は基部がわずかに欠損しているが、長さ11.9cm、幅4.9cm、厚さ3.7cmを測る。よく研磨されており、整った形を呈する。中央に最大幅をもち、刃部幅はそれより若干狭い。刃先には刃こぼれがみられる。2は大きく欠損しており、刃部の一部のみ遺存している。石材はいずれも玄武岩である。1は1調査区側溝(8層相当)から出土、2は2調査区第5面方形周溝墓盛土から出土した。

2. 礫石器 (図93-3~図94) (図版39、40)

礫石器には敲打痕をもつもの、表面が滑らかで磨滅痕が認められるもの、端部がすり減って潰れているものなどがみられ、一つの石器に複数の痕跡が認められるものも多い。そこでここでは、敲打痕をもつものを叩き石としてまとめた。これにはいわゆる凹み石も含まれ、また、磨石として用いられたものも含まれる。また、端部がすり減って潰れる棒状のものが一定量みられたので、これを搗石として別にまとめた。

図93-3、4、図94-5は搗石である。長さは10cm前後、幅3cm前後の棒状を呈する。端部がすり減って潰れており、平らに近いものもある(図版40-図93-4)。搗粉木状の用途として使用されたと考えられる。図版40下段m、nも同様である。特に片方の端面(図および図版の下部)が著しく使用されている。図93-3は1調査区8層、4は2調査区方形周溝墓盛土内、図94-5は1-16-2落込み出土土器(d)の下から出土した。石材はいずれも砂岩である。

図93-5、6、図94-1~4は叩き石である。図93-5は表裏面、両側面の4面ともに、上端から1/3の位置に敲打痕がみられる。特に側面の敲打痕は深く、その結果、平面形はくびれたような状況を呈する。下部は一部欠損している。長さ12.6cmを測る。石材は砂岩である。

図93-6、図94-1は表面中央付近に大きく敲打痕がみられる。凹み石と分類される特徴を有するものである。6は下部が欠損しているが、平面形は、小判形を呈すると考えられる。断面形は扁平で幅8.3cm、厚さ3.0cmを測る。石材は砂岩である。1は平面形が直径約10cmの正円にちかい。断面は6より厚みがあり7.0cmを測る。裏面中央部は非常に滑らかで平坦になっており、磨石としての用途も同時にもつものである。石材は石英安山岩である。

図94-2は卵形で滑らかな整った形状をしている。上端にわずかに敲打痕がみられる。長軸9.9cm、短軸7.6cmを測る。石材は砂岩である。

図94-3は上部が欠損している、断面三角形を呈する。

図94-4は約半分が欠損している。側面に敲打痕を有する。表面中央部は滑らかな面を呈しており、磨石としての用途も同時にもつものである。1-16-2落込みの(e)である。先述の搗石(図94-5)と近接して出土しており、使用時のセット関係の可能性が高い。

図93-5、図94-1は1調査区8層から、図93-6、図94-3は2調査区方形周溝墓盛土内から、図94-2は1調査区側溝から出土した。

これら叩き石に類似するものは、図示した以外にも多く出土しており、図版40上段に掲載した(e、f、i)に敲打痕あり。他は表面に平滑な面をもつ。砂岩、斑レイ岩がある)。欠損品が多く、火を受けた痕跡があるものもある(d、f、j)。

図93-7は1-119石である。表面は平らで、滑らかな部分があり、擦痕が確認できる。台石として使用されたのであろうか。

3. 打製石器 (図版41～44)

調査区からは2ヶ所のサヌカイト集積遺構や包含層から多くのサヌカイトが出土した。製品は非常に少なく、多くは剥片であり、石核も出土している。

石錐 (図95-1、2)

図95-1、2は石錐である。1は先端が折損している。主要剥離面を残す。長さ3.5cmを測る。2は先端が断面六角形、基部は断面台形を呈する。先端は磨滅している。長さ3.6cmを測る。1は1調査区8層、2は2調査区第5面から出土した。

不定形刃器 (図95-3～6)

図95-3～6は1方の側縁に刃部の加工を施すもので、スクレーパー的な二次加工のある石器である。いずれも、主要剥離面をそのまま残し、3、6は背面が自然面、風化面である。刃部、および側縁部の他はほとんど加工がみられない。素材となる剥片に、刃部の加工、および背つぶしを行ったのみといえる。

3は刃部と向かい合う辺に潰れがみられ、背つぶしを行っている。4は主要剥離面の打点のある側に

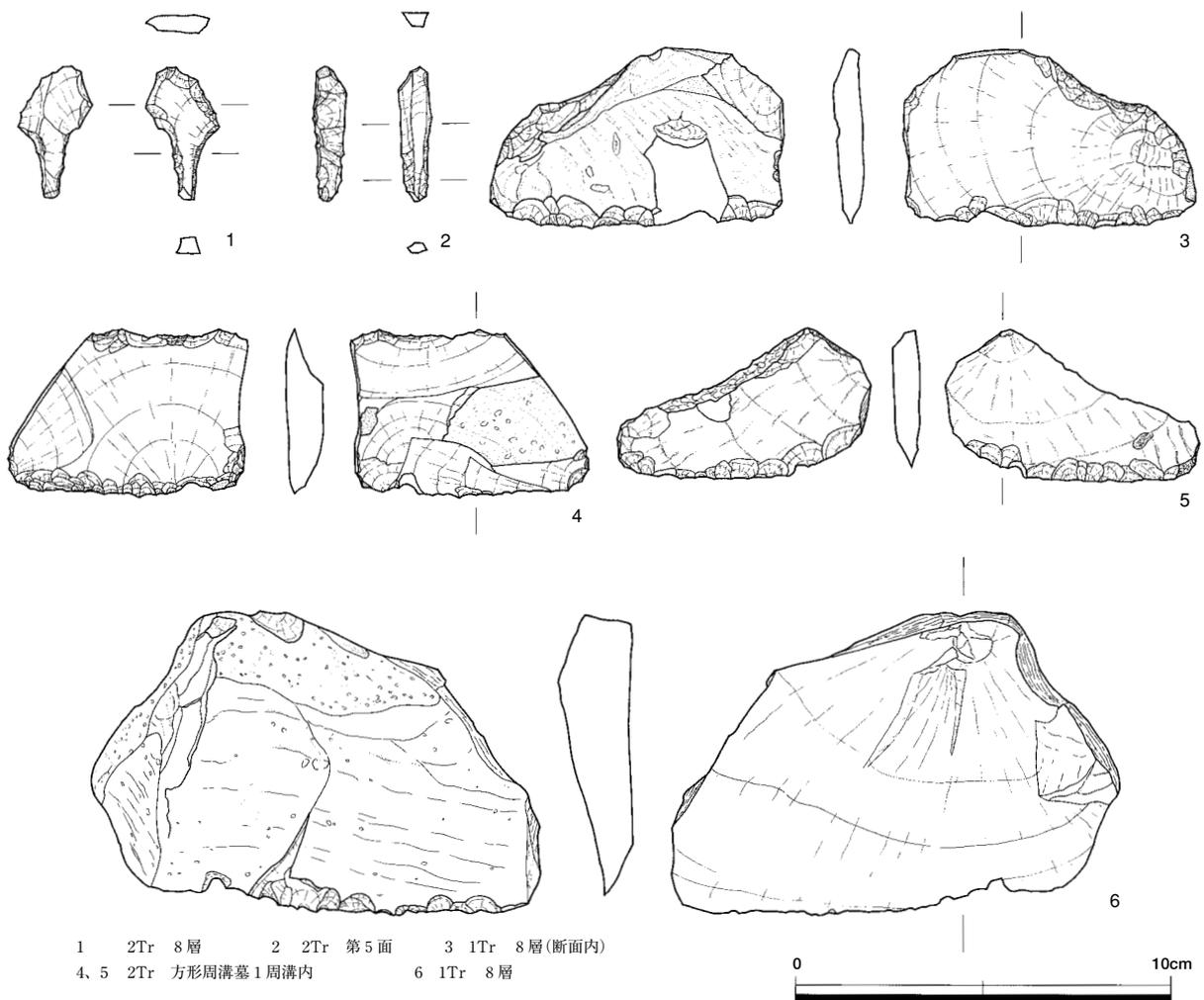


図95 出土サヌカイト (1)

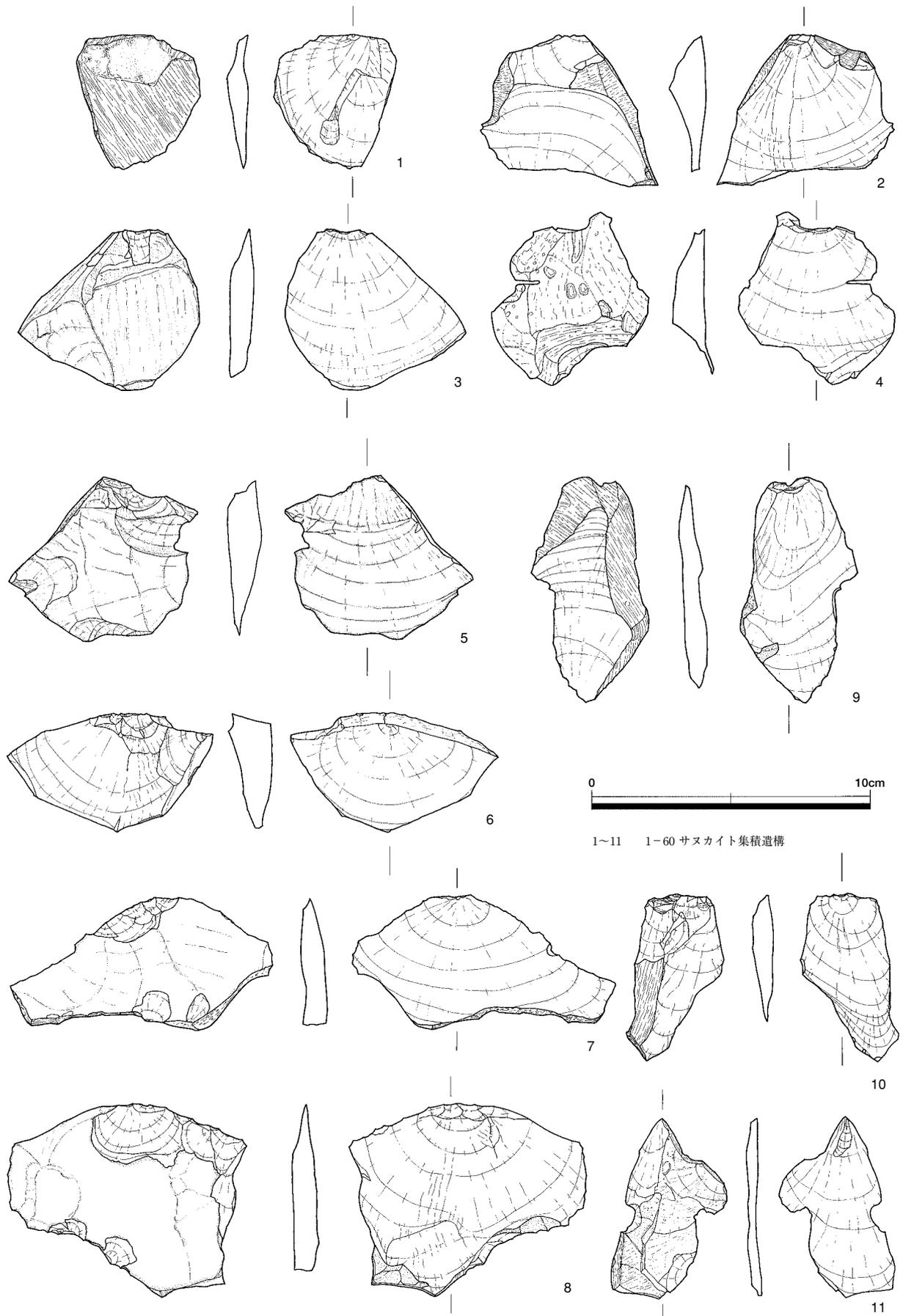


図96 出土サヌカイト (2)

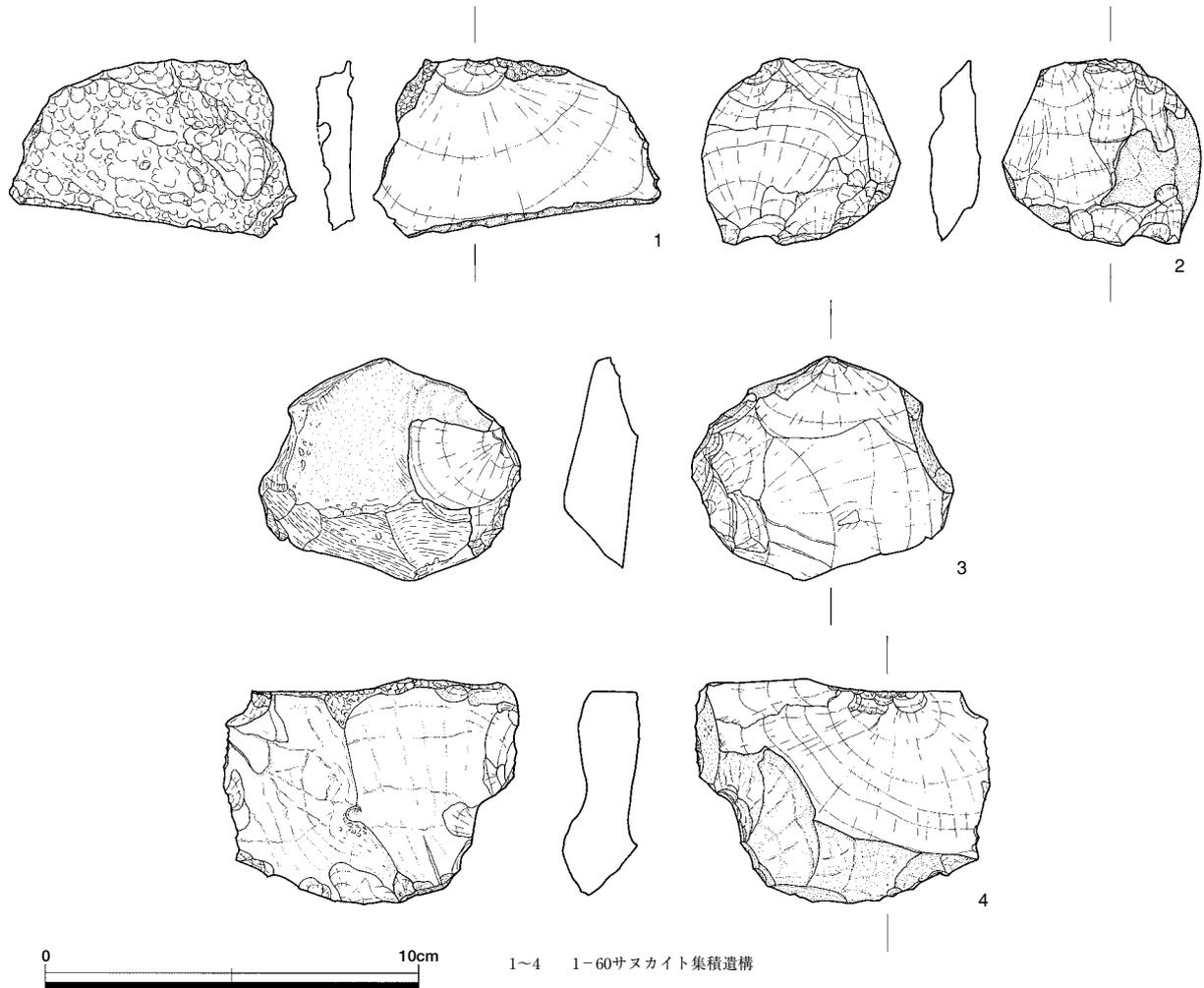


図97 出土サヌカイト (3)

刃部をつくる。背面には風化面を一部残す。5は主要剥離面の打点と向かい合う辺に刃部をつくる。打点は自然面である。背面も一枚の剥離面からなり、打点は主要剥離面の打点と直行する辺にある。5は他のサヌカイトと剥離面の風化の様相が異なっており、白っぽく、縞状の様相がみられる。産地が異なる可能性がある。6は最も大きく長さ8.1cm、幅12.0cmを測る。主要剥離面の打点と向かい合う辺に刃部をつくる。打点は自然面である。刃部の加工は、背面からのみであり、鋭さに欠ける。刃部以外の側面は自然面である。

3、6は1調査区8層、4、5は2調査区方形周溝墓内から出土した。

楔形石器 (図版41-o~s)

図化していないが、図版41-o~sは、対向する辺に潰れがみられるもので、楔形石器に分類される(以下、本文中の上下左右は図版上段による)。

o~qは側面や表面に自然面を多く残しており、本来の礫の大きさとさほど変わらないものと考えられる。4.5~6.0cmの小さなものである。oは自然面を残す側面以外の上、左右側縁に潰れが確認できる。1調査区8層出土。pは上下向かい合う2側縁に潰れが認められ、左右側面に自然面が残る。第5面1-6溝から出土。qは下および左側縁に明瞭な潰れが確認でき、上および右側面は自然面を残すものの敲打した痕跡が認められる。1-241ピット出土。rは左右の側縁の潰れが著しい。1調査区8層出土。1-60サヌカイト集積遺構近辺の出土である。sは表裏面ともに、複数の剥離面が認められる。自然面

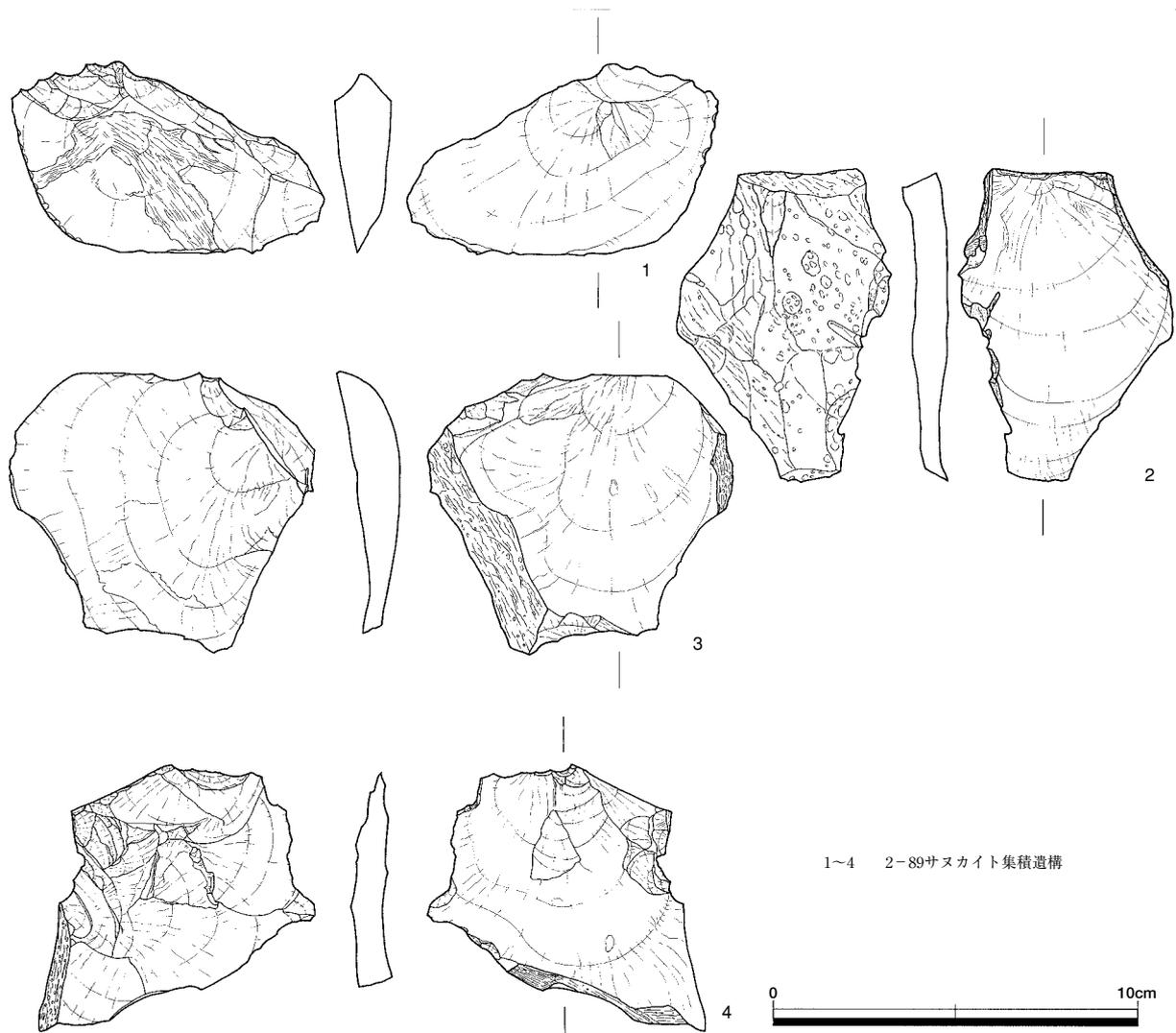


図98 出土サヌカイト (4)

は残らない。上下、左側縁の潰れが著しい。第5面1-11溝から出土。

剥片・石核 (図96～99)

図96、97は1-60サヌカイト集積遺構から出土した剥片および石核で、剥片11点、石核4点の総数15点が出土した。接合作業を行ったが、接合するものはない。また、周辺の包含層掘削の際にサヌカイトが出土しており (図版42-u、v、図版43-w) これに伴っていた可能性が高い。

図96は剥片である。最も小さい剥片は1で長さ4.8cm、幅4.3cmを測る。最も大きい剥片は8で長さ6.9cm、幅8.5cmを測る。剥片は縦横の長さがほとんどかわらない剥片 (1～5)、横に長い剥片 (6～8)、縦に長い剥片 (9～11) がある。また、自然面や風化面を残すものも多く、1、3、4、7、8、11は背面がほぼ自然面および風化面で占められる。また、2、6、9、10も側面に風化面を残す。5は全体が真白に風化しており、他のものより風化が進行している。図版43-wも同様の特徴を有している。主要剥離面の打面は、自然面、風化面 (1、3、4、6、7、9、11)、剥離面 (2、8、10) であるが、2、8、10にしても打面を調整したという状況はみられない。また、背面に剥離面があるもののうち (風化の度合いが著しく異なる剥離面は除く)、主要剥離面と対向するもの (9)、平行するもの (6、10)、

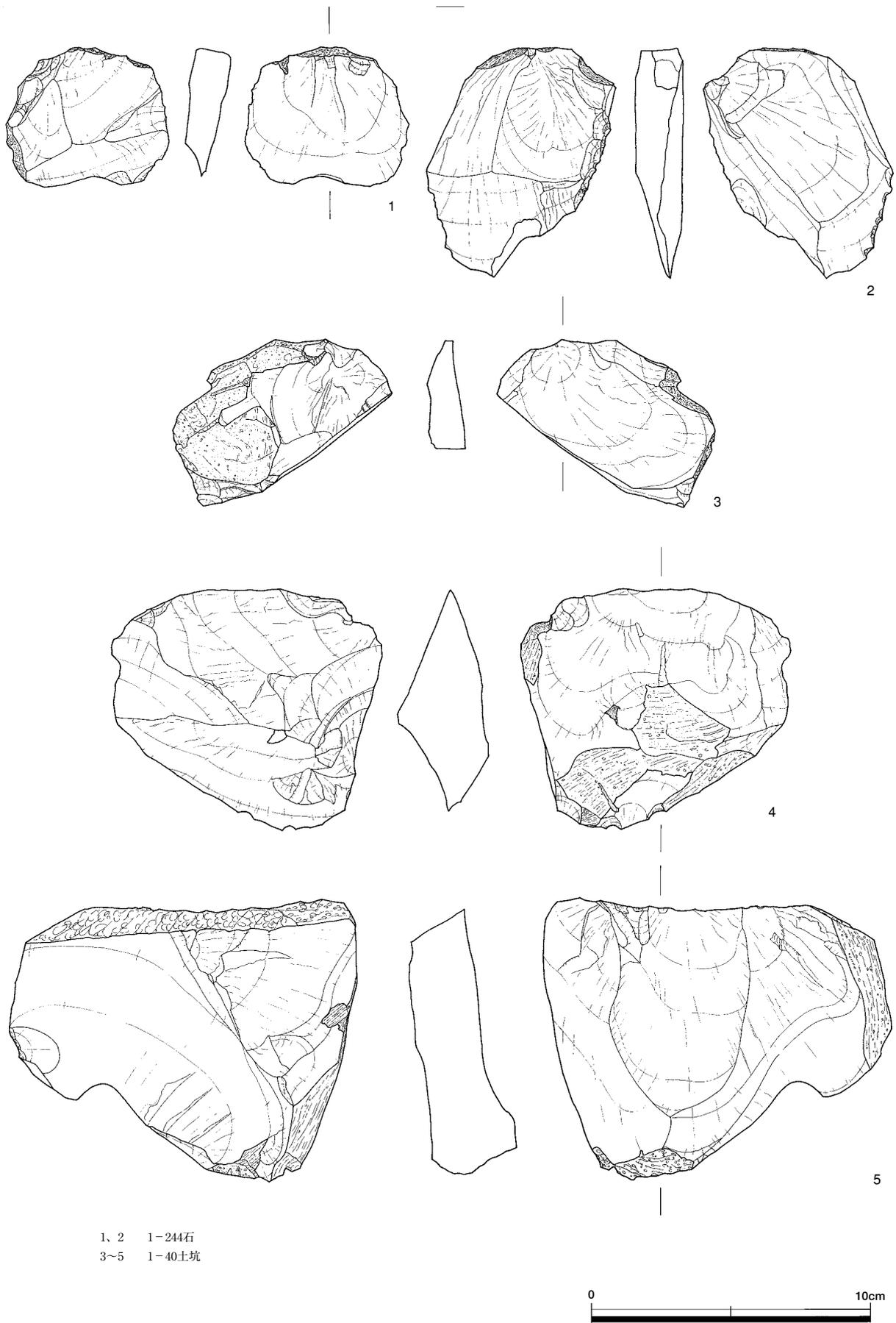


図99 出土サヌカイト (5)

第3章 調査の成果

その両方がみられるもの(2)があり、特に規則性はみいだされない。

図97は石核である。最も小さい石核は2で長さ5.0cm、幅5.3cmを測る。最も大きい石核は4で、長さ6.0cm、幅7.8cmを測る。1、3、4は片方の面がほぼ自然面、風化面である。2も片方の面の一部に風化面を残している。1、4は打点が自然面、3も打点が残るものは自然面にある。また、2は上下の側縁に潰れが認められる。

1-60から出土した剥片、石核は、大きさは10cmを超えるものではなく、5~8cm前後のものであり、自然面、風化面の占める割合が高いという共通点をもつ。また、剥片を割りとる際には、打面の調整は行っていない。大きさ、厚さから考えて、更に剥片をここから取り出すことは難しく、石器の素材になるものと考えられる。しかし、片面に大きく残る自然面、風化面を取り除くのは難しい厚さと考えられ、石器の素材として良好なものとは考えにくく、そういったものが集積されていた点については、今後検討課題としたい。

図98は2-89サヌカイト集積遺構から出土した剥片および石核で、4点が出土した。

1~3は剥片、4は石核である。1は横長の剥片で長さ5.3cm、幅8.6cmを測る。主要剥離面の打面は剥離面である。背面には自然面が一部残る。また、主要剥離面向かって右側縁に微細な剥離がみられる。2は縦長の剥片で長さ8.6cm、幅5.8cmを測る。主要剥離面以外は自然面であり、打面も自然面である。3は縦横ほぼ同じ大きさの剥片で、長さ7.8cm、幅8.3cmを測る。背面にも大きく1枚の剥離面がみられ、打点は主要剥離面とは異なる面にある。側縁に自然面を多く残す。4は長さ7.4cm、幅7.7cmを測る。側面に自然面を残す。

2-89も1-60サヌカイト集積遺構同様、10cmを超えるものはない。自然面、風化面の占める割合も、1-60ほどではないが高い傾向がみられる。

図99-1、2は1-244石。第7面で出土した。1は剥片で主要剥離面の打面は自然面である。2は二次加工のある剥片で縁辺に微細な加工がみられる。

図99-3~5は1-40土坑から出土した。3、4は剥片、5は石核である。3は背面に自然面を残し、4は側面、主要剥離面側に自然面を残す。5は石核で側面全体に自然面を残す。今回出土した中では大きな石核で、長さ10.2cm、幅12.5cmを測る。右の面には3枚の剥離面がみられ、同じ方向からの打撃によるものである。左の面には2枚の剥離面がみられ、ともに打点が欠損する。剥離方向が右の面と直交するものと、平行するものがある。

図版44-x、yは1-34土坑から出土した剥片である。zは2調査区8層で出土した剥片である。今回の調査区で出土した剥片のうち最も大きく、長さ、幅とも約12.0cmを測る。背面はすべて自然面である。図版41-tは左側面に、潰れが認められ、他の側面には自然面が残る。楔形石器とはいいがたく、石核に潰れがみられるものである。1-111土器周辺で出土した。

註

(1) (財) 大阪市文化財協会 1983 『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』

(2) 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1998 『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告』

報告書では甕とされているものである。また第5章文献(1)(6)では、遠賀川系の如意形口縁甕の影響を指摘されている資料である。

(3) 中村 豊 2001 「近畿・瀬戸内地域における石棒の終焉 - 縄文から弥生 -」『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』

第4節 東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査

第1項 基本層序・調査成果

GLから約1.4mは盛土で、機械による掘削を行った。

1層 近現代の耕作土である。

2層 ラミナがみられ、植物遺体を層状に含む。洪水堆積層と考えられる。

3層 耕作土である。

4層、5層 いずれも耕作土であり、作土と床土のセットが数枚みられる。4層と5層の間に砂層が確認でき、2層に分けた。各面では耕作に伴う溝を検出した。層内からは、須恵器、瓦器、瓦が出土しており、中世までの耕作土と考えられる。なお、銭貨（唐国通宝）が出土した。

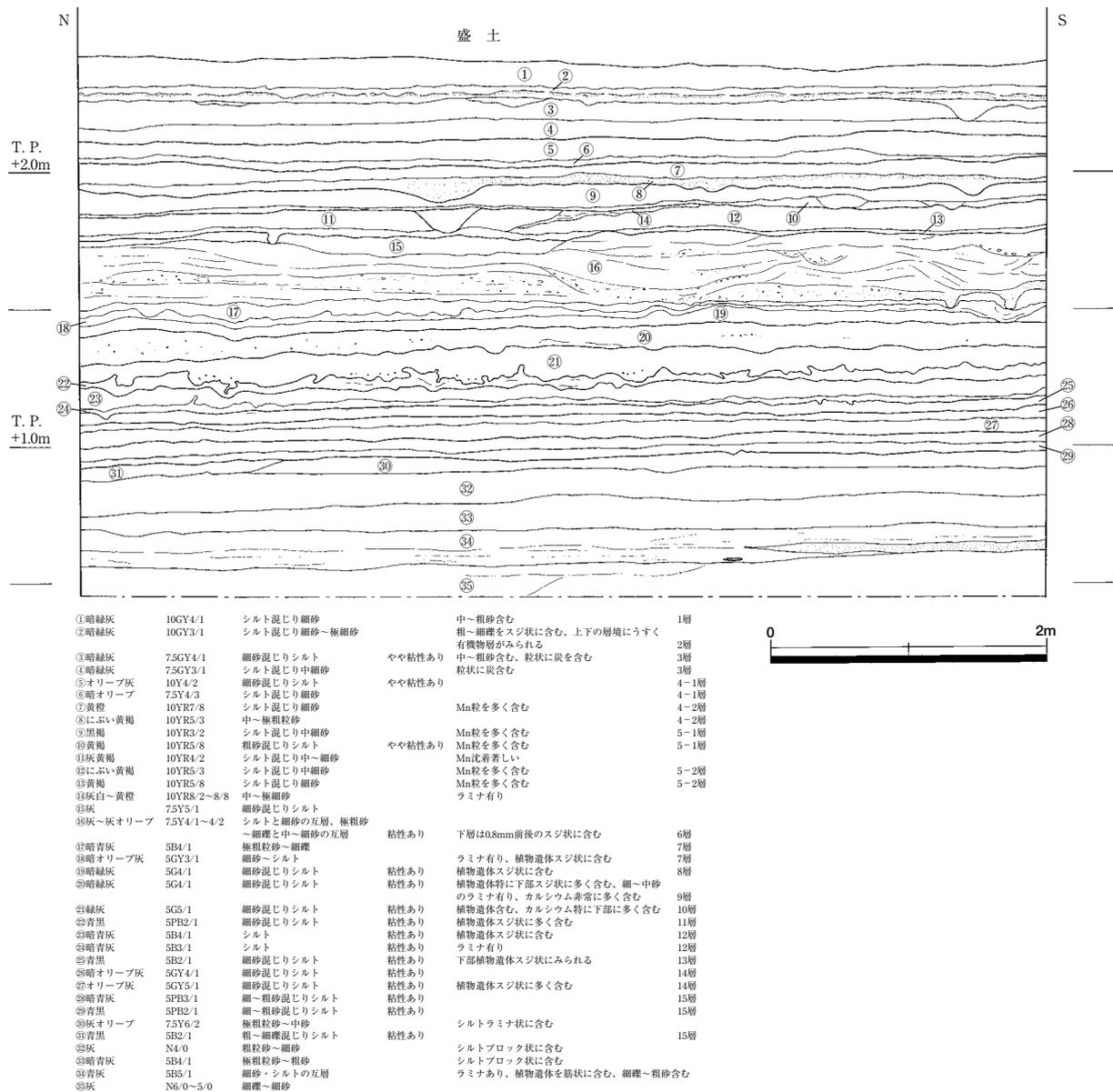


図100 東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査 土層断面図

第3章 調査の成果

6層 洪水堆積層で、層厚0.5mを測る。層内からは、土師器、須恵器の細片が出土しているが、ローリングを受けており、本層の所属時期を直接表すものではないと考えられる。上面（第5面）では耕作に伴う溝を3条検出した。

7層～12層 湿地状の堆積状況を示しており、植物遺体が筋状に確認できる。11層は上面、下面とも非常に乱れており、また、平面では渦巻状に上層を巻き込んでいる。地震の痕跡の可能性が考えられる。

12層上面（第10面）では地形の高まりが確認された。

13層 黒色土で、下部には筋状に植物遺体を多く含む。13層の上・下面（第11、12面）では南西側に地形の高まりが確認できる。

14層 オリーブ灰色の細砂混じりシルトである。

15層 暗青灰～青黒色の粗～細砂混じりシルトの土壤化層である。

16層 砂層である。16層上面の第14面では調査区の北東で黒色土を埋土とする落込みが確認された。なお、7層以下では遺物の出土はみられなかった。

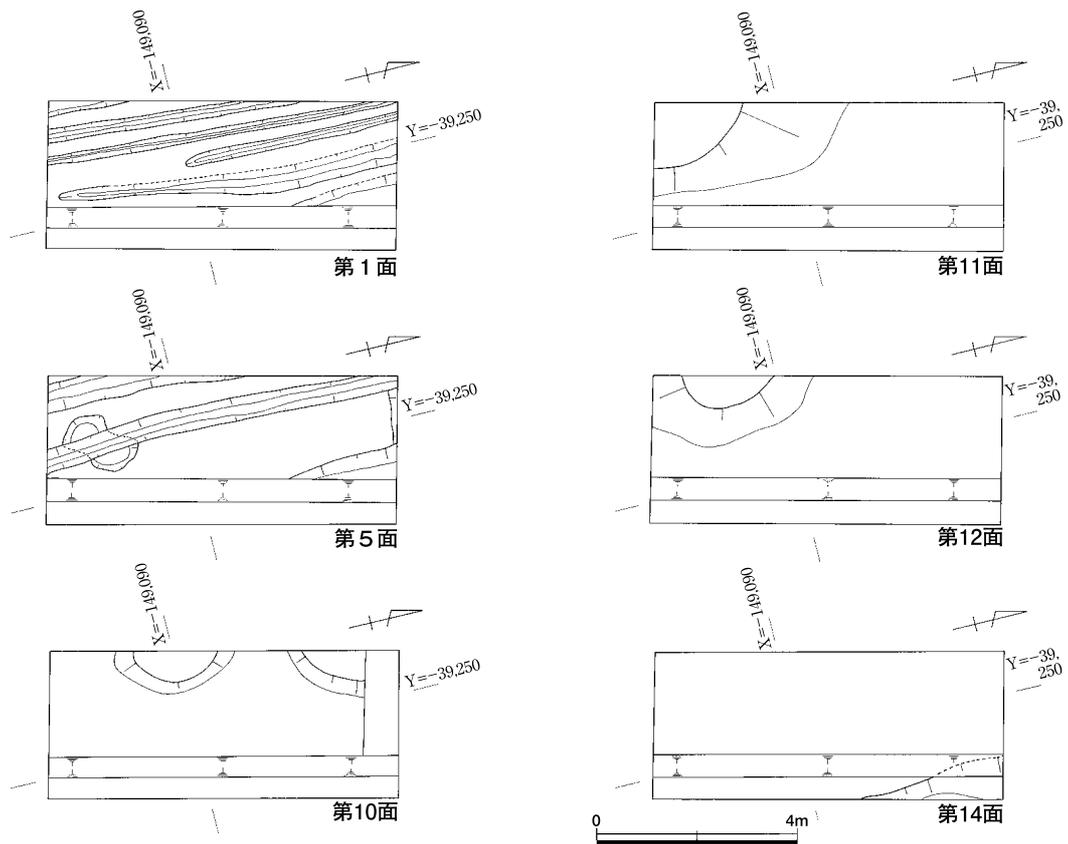


図101 東大阪市南西部遺跡群04-1確認調査 遺構分布図

第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査は、弓削ノ庄遺跡における縄文時代晩期以降の古環境に関する情報を得ることを目的として、調査区内の堆積物について珪藻分析および花粉分析を実施した。

1.層序概要

調査地点は、調査1区と2区で設定された3地点である。各地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図1に示す。各地点における層相について以下に記載する。調査区内の堆積層は1層～12層に区分されている。

(1) 04-4-1区1地点

本地点の堆積層は、1層から8-2層に区分される。各層の層相について以下に記載する。

1層：灰色を呈する細礫混じり極粗粒～粗粒砂からなる。トラフ型斜交層理・葉理をなす。河川の氾濫堆積物ないし流路充填堆積物と推定される。

2層：灰色を呈する粘土質シルトからなり、未分解植物遺体および炭化物の葉理を挟在する。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

4層：暗灰～黒灰色を呈する有機質に富むシルト質粘土からなる。葉理が発達し、植物遺体の葉層を挟在する。後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

5層：灰色を呈するシルト質粘土からなる。下位の6層との層界では下位に凸な形に変形した葉理からなるロード構造をなし、その上部では流線状ないし火焰状のパターンを示す。地震動による変形構造の可能性が高い。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

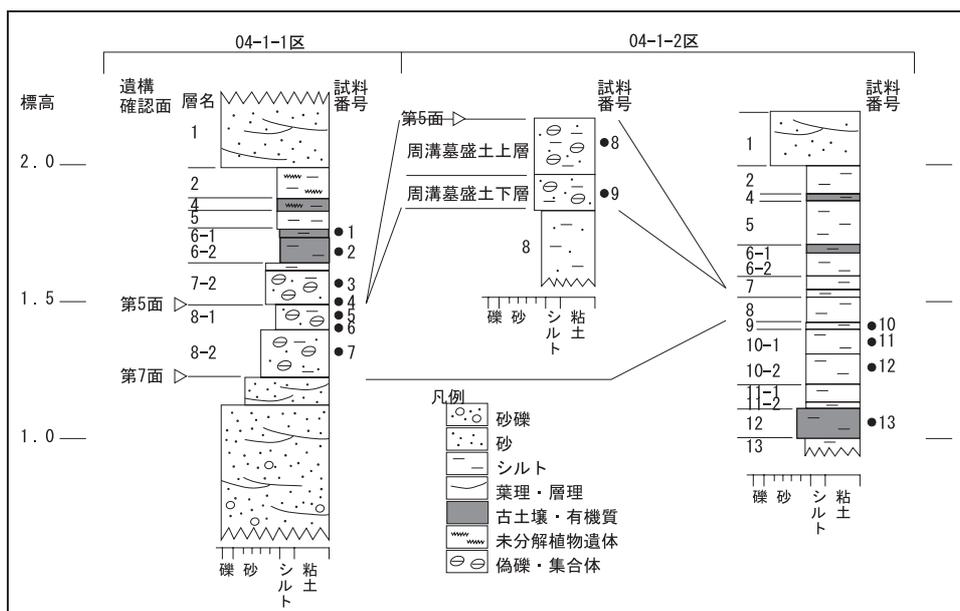


図1 調査地点の層序および試料採取層準

6層：黒褐色を呈する植物遺体混じり泥層からなる。葉理構造が確認され、5層との層理面は上記したように変形している。後背湿地の堆積環境が推定される。本層は、近隣遺跡との層序対比の結果、弥生時代後期頃に形成された堆積物であることが推定されている。

7-2層：灰色を呈する見かけ上塊状を呈する細礫混じり砂質シルト質粘土からなる。擾乱を受けており、2cm以下の偽礫（ブロック土）ないし集合体が確認される。

8層：灰色を呈する見かけ上塊状を呈する細礫混じり砂質シルトからなる。擾乱を受けており、2cm以下の偽礫ないし集合体が確認される。8-1層・8-2層に区分される。本層上面では弥生時代中期の遺構が確認されている。

8層下位層：トラフ型斜交葉理・層理をなす砂礫～砂質シルトからなる。流路充填堆積物と推定される。

(2) 04-1-2区

本調査区の堆積層は1層～13層に区分されている。

1層：灰色を呈する細礫混じり極粗粒～粗粒砂からなる。トラフ型斜交層理・葉理をなす。河川の氾濫堆積物ないし流路充填堆積物と推定される。

2層：灰色を呈する粘土質シルトからなり、未分解植物遺体および炭化物の葉理を挟在する。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

4層：暗灰～黒灰色を呈する有機質に富むシルト質粘土からなる。葉理が発達し、植物遺体の葉層を挟在する。後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

5層：灰色を呈する細粒砂混じりシルトからなる。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

6層：暗灰色を呈する細砂混じりシルトからなる。下位の7層との層界では下位に凸な形に変形した葉理からなるロード構造をなす。本層は氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

7層：灰色を呈する細粒砂混じりシルトからなる。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

8層：灰色を呈する細粒砂混じりシルトからなり、擾乱の影響を受ける。本層上面では方形周溝墓が確認されている。周溝墓の盛土は上層・下層に区分されている。下位層に由来するブロック土が密に確認される。これらの層の形成年代は出土遺物から縄文時代晩期以前と推定される。

9層：灰色を呈する細粒砂混じりシルトからなる。不明瞭な葉理が確認される。生物擾乱の影響を受ける。本層は、出土遺物から縄文時代晩期～弥生時代前期以前に形成されたことが推定されている。

10層：灰色を呈する細粒砂質混じりシルトないしシルトからなる。不明瞭な葉理が確認される。生物擾乱の影響を受ける。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

11層：暗灰～灰色を呈する細粒砂混じりシルトからなる。不明瞭な葉理が確認される。生物擾乱の影響を受ける。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

12層：暗灰色を呈する砂混じりシルトからなる。炭化物が混じる。不明瞭な葉理が確認される。生物擾乱の影響を受ける。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

13層：暗灰色シルトからなる。不明瞭な葉理が確認される。生物擾乱の影響を受ける。氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境下で形成された堆積物と推定される。

2. 試料

分析に用いた試料は、04-1-1地点より採取された試料番号1～7、および04-1-2地点より採取された試料番号8～13の、計13点である。試料採取層準を図1に示す。

3. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange - Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、Witkowski et al.（2000）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

4. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表1、図2に示す。04-1-1区試料番号2,1からは古環境を検討するのに十分な量の珪藻化石が産出したが、それ以外の11試料は珪藻化石の産出が少なかった。化石が産出した試料の完形殻の出現率は50%前後で、化石の保存状態も良好ではない。産出分類群数は、合計で30属87分類群である。

化石が産出した04-1-1区試料番号2,1は、淡水域に生育する水生珪藻と陸上のコケや土壌表面など

多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。主な産出種は2試料とも近似しており、水生珪藻では流水不定性の *Amphora affinis*、*Diploneis ovalis*、*Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Navicula elginensis* 等が産出した。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* が10～20%と多産し、陸域にも水域にも生育する陸生珪藻B群の *Eunotia praerupta* var. *bidens*、乾湿に対する適応度合いが不明な未区分陸生珪藻の *Pinnularia schroederii* 等が産出した。なお、陸生珪藻B群の *Eunotia praerupta* var. *bidens* は、沼沢湿地付着生種群でもある。沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることから、その環境を指標することができる種群とされている（安藤,1990）。

なお、珪藻化石の少なかった試料番号3～13は、これまで述べたような水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。

(2) 花粉分析

結果を表2、図3に示す。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

04-1-2区：試料番号13～10では類似した花粉化石群集を示し、いずれも木本花粉の占める割合が高い。検出種についてみると、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コウヤマキ属、モミ属などが多く産出し、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが多く認められ、わずかではあるがガマ属、コウホネ属、ミズワラビ属、サンショウモなどの水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。

同じく04-1-2地点の試料番号9,8からは、花粉化石がほとんど検出されなかった。木本花粉ではマツ属、ブナ属が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が1～3個体検出されるのみである。また、試料中には微細な炭化植物片が多く含まれる。

04-1-1地点の試料番号7～3も花粉化石の産出状況が悪く、保存状態も悪い。木本花粉ではモミ属、コウヤマキ属、アカガシ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属などがわずかに検出される。また、試料中には微細な炭化植物片が多く含まれる。

一方、試料番号2,1では、花粉化石が検出されるものの、保存状態は良好ではない。木本花粉ではスギ属、アカガシ亜属、コウヤマキ属などが多く産出し、マツ属、コナラ亜属、モミ属、ツガ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が多産し、

マメ科、ヨモギ属などを伴う。また、わずかではあるが、ガマ属、ミクリ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサなど、水湿地生植物に由来する花粉・胞子も認められる。

表 1 珪藻分析結果

種 類	生態性			環境 指標種	環境												
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Thalassiosira spp.	Euh				-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella striata-C. stylorum	Euh-Meh			B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
Achnanthes brevipes Agardh	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Achnanthes brevipes var. intermedia (Kuetz.)Cleve	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Caloneis westii (W.Smith) Hensley	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Navicula sp.-1	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Nitzschia cocconeiformis Grunow	Meh			E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
Opephora martyi Heribaud	Meh			D1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Synedra tabulata Agardh	Meh				-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Anomooneis sphaerophora (Kuetz.)Pfitzer	Ogh-Meh	al-bi	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L,S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula pusilla W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		4	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	-	1	-	-	-	-	2	-	5	1	2	1
Achnanthes inflata (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	9	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Aulacoseira crenulata (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		11	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-
Aulacoseira italica var. valida (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	2	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella subcuspidata Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	ac-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2	1	-	1	-	-	1	-	-	1
Diploneis ovalis (Hilsse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	14	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis parva Cleve	Ogh-ind	ind	ind		1	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1
Epithemia adnata (Kuetz.)Brebisson	Ogh-ind	al-bi	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia gracialis Meister	Ogh-hob	ind	l-bi		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia implicata Noepl & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	6	3	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O,T	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB,O	6	6	3	-	3	1	1	3	3	2	2	7	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
Fragilaria construens (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria parasitica (W.Smith)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Fragilaria virescens var. elliptica Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	12	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gyrosigma spencerii (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	18	22	5	3	2	3	-	1	1	-	-	-	1
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	7	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elgimensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	13	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elgimensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula elgimensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula ignota var. palustris (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	4	5	1	-	1	5	-	2	-	-	-	3	-
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula placenta fo. obtusa Meister	Ogh-ind	al-il	ind		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Neidium hercynicum A.Mayer	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	4	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Orthoseira roeseana (Rabh.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	2	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	9	12	6	1	-	-	-	-	-	-	-	8	5
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,U,RB	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	2	2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	2
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		3	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stauroneis lauenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
Synedra ulna (Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	U	1	1	-	1	1	1	-	1	-	2	1	2	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
海水生種					0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	2
淡水～汽水生種																	

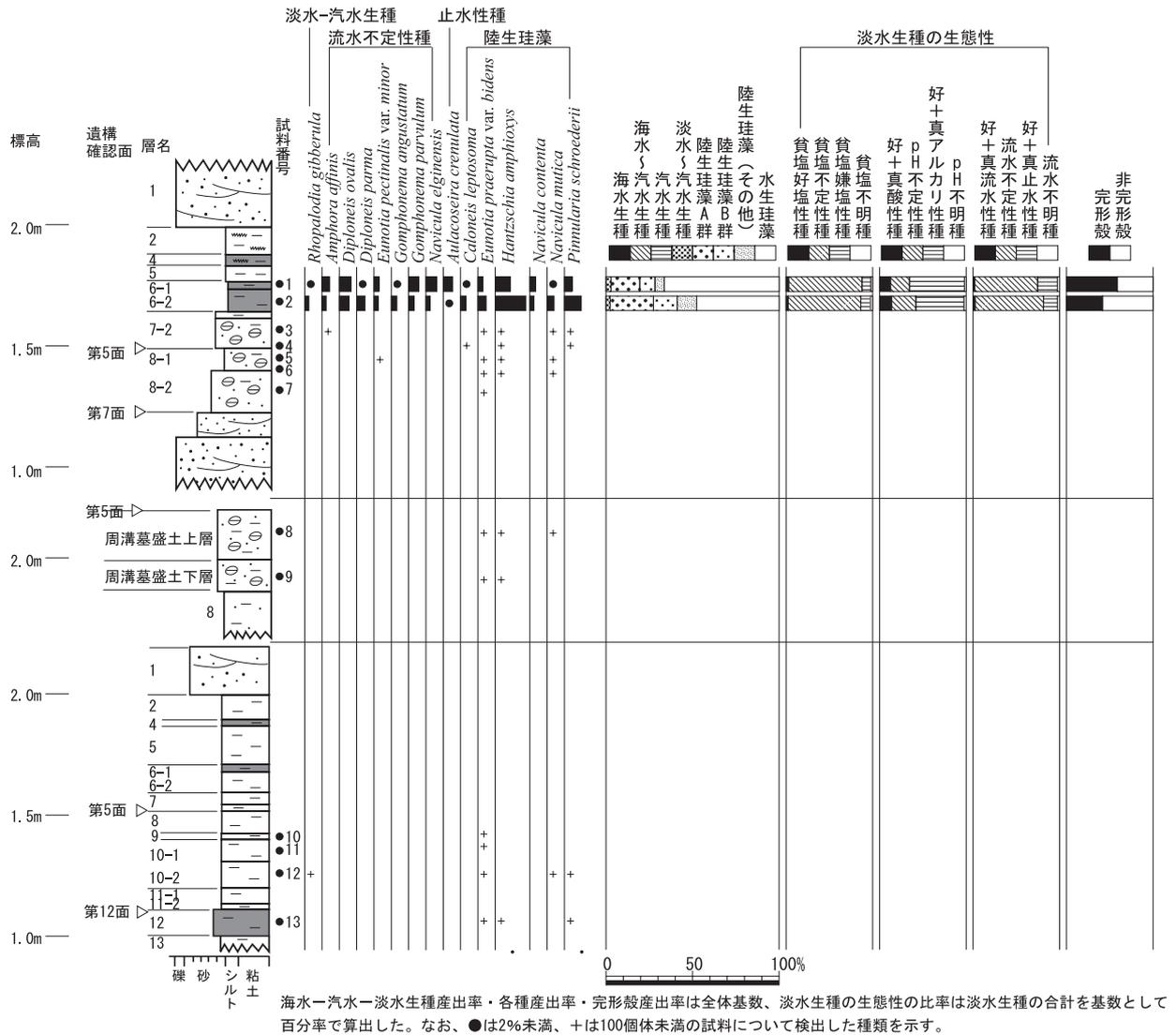


図2. 主要珪藻化石群集の層位分布

図2 主要珪藻化石群集の層位分布

5. 考察

珪藻化石からみた堆積環境

(1) 04-1-1区

本調査区の8-2層・8-1層・7-2層では珪藻化石の産出が少なく、僅かに確認される化石の保存状態は悪いものであった。検出された種類では、陸生珪藻の産出が目立つ。陸生珪藻とは、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群（小杉,1988）である。特に、本試料から産出した陸生珪藻は、離水した場所の中で乾燥に耐えうることのできる群集とされる（伊藤・堀内,1989,1991）。また、堆積物の分析を行った際、これらの種群が優占（70～80%以上）する結果が得られれば、その試料が堆積した場所は、水域以外の空気に曝されて乾いた環境であったことが推定できるとしている。一方、陸生珪藻以外の種群について

表2 花粉分析結果

種 類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
木本花粉														
マキ属		2	1	-	-	-	-	-	-	-	9	7	15	5
モミ属		11	6	-	2	-	-	-	-	-	58	15	43	24
ツガ属		15	6	-	1	-	-	-	-	-	19	11	9	20
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	1
マツ属複維管束亜属		6	7	-	-	-	-	-	-	-	5	1	2	5
マツ属(不明)		15	21	-	-	-	-	-	-	1	7	9	14	16
コウヤマキ属		38	23	5	-	-	-	1	-	-	53	59	62	49
スギ属		49	60	1	-	-	-	-	-	-	8	19	18	23
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		9	18	-	-	-	-	1	-	-	3	7	14	16
マオウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヤナギ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヤマモモ属		2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	1	1
クルミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	1	1	1
クマシデ属-アサダ属		5	4	-	-	-	-	-	-	-	1	2	3	6
カバノキ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
ハンノキ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	-
ブナ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	2	2
コナラ属コナラ亜属		16	22	2	1	-	-	-	2	-	13	11	11	13
コナラ属アカガシ亜属		34	35	8	2	1	1	3	-	-	67	58	81	102
クリ属		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
シイノキ属		5	11	-	-	-	-	-	-	-	-	4	2	2
ニレ属-ケヤキ属		3	1	-	-	-	-	-	-	-	7	4	3	11
エノキ属-ムクノキ属		1	1	-	-	-	-	-	-	-	2	3	3	-
サンショウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コクサギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キハダ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
シラキ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
トチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ウコギ科		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アオキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
エゴノキ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トネリコ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ガマズミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉														
ガマ属		9	7	-	-	-	-	-	-	-	3	-	3	8
ミクリ属		4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科		64	88	5	8	-	3	8	1	1	9	21	29	36
カヤツリグサ科		81	121	1	3	2	1	-	-	-	22	22	12	56
イボクサ属		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		8	1	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	3
タデ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科		1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科		-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コウホネ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キンボウゲ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
バラ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ソラマメ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マメ科		1	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科		1	4	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツムシソウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ゴキヅル属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属		3	14	-	4	6	9	17	3	3	3	25	22	17
キク亜科		1	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
タンポポ科		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉		9	15	-	-	-	-	-	1	1	3	5	2	4
シダ類孢子														
ヒカゲノカズラ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	4	11	5	-
ゼンマイ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-
イノモトソウ属		2	-	2	-	-	1	-	2	1	30	27	12	7
ミズワラビ属		-	2	2	1	-	-	-	-	-	-	1	1	1
サンショウモ		32	5	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
アカウキクサ属		14	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子		293	145	34	21	10	5	9	16	7	220	246	75	56
合 計														
木本花粉		215	222	16	6	1	1	6	2	1	266	220	291	302
草本花粉		175	257	8	16	9	14	27	4	4	43	70	66	120
不明花粉		9	15	0	0	0	0	0	1	1	3	5	2	4
シダ類孢子		341	153	39	22	11	6	9	18	8	255	286	94	64
総計(不明を除く)		731	632	63	44	21	21	42	24	13	564	576	451	486

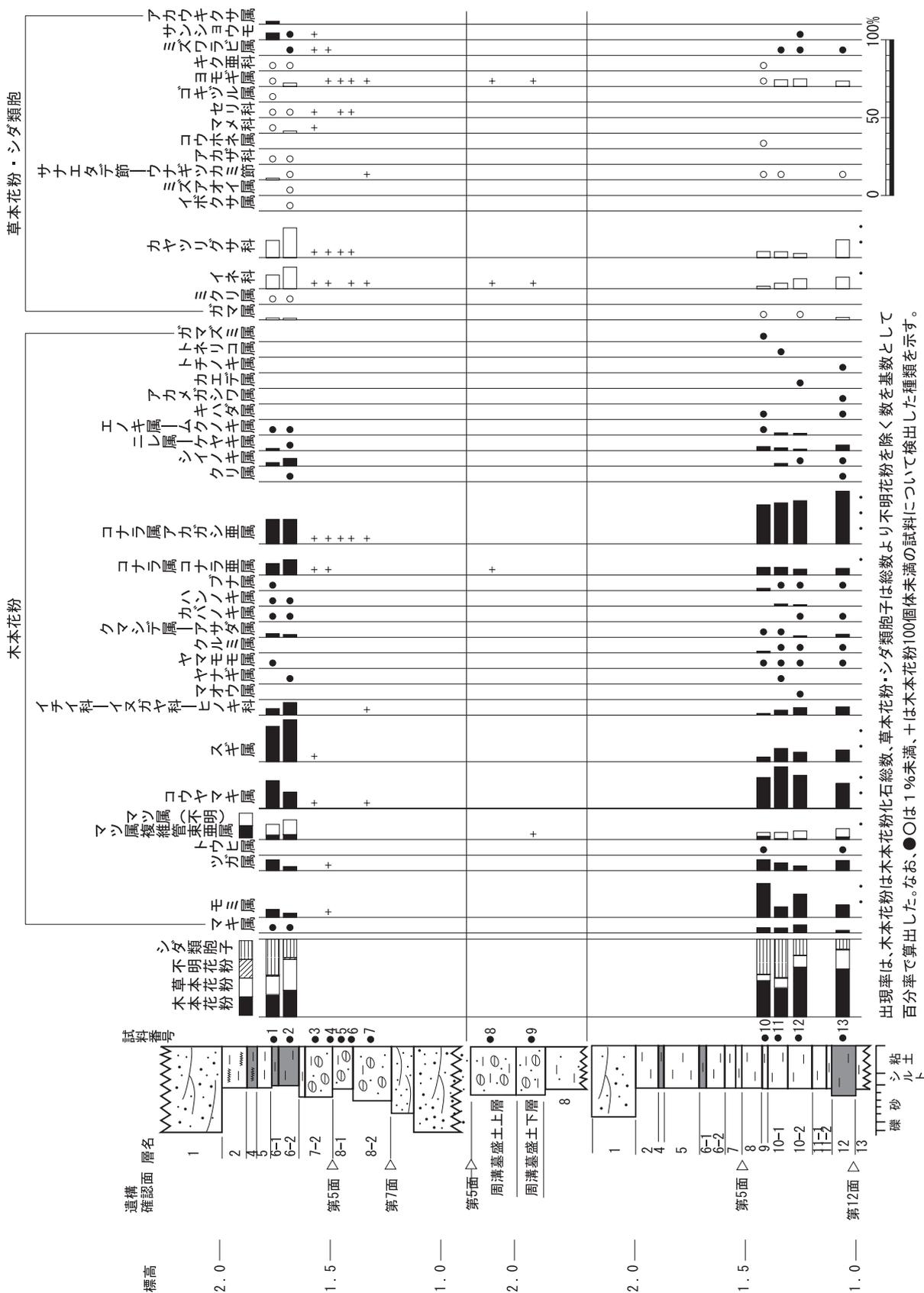


図3 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

図2. 主要花粉化石群集の層位分

見ると、止水性種や流水性種など、それぞれ生育環境が異なっており、共生しえない種群が認められる。化石の保存状態が悪いために、明確なことは言えないが、生育環境が異なる種群が共産することから考えれば、混合群集の可能性が高い。また、全体の傾向として、産出率が低いこと以外に、化石殻の保存状態が極めて不良である。以上のことから、本地点の環境としては、基本的に陸域の好気的な環境下にあったものと推定される。好気的な環境とは、水の影響が少なく、通常は大気に曝された環境である。

ただし、堆積時、すなわち堆積層を構成する堆積物は、混合群集を産出したことから考えると、周辺から洪水等によりもたらされたものである可能性が高い。8-2層・8-1層・7-2層の層相は、先述したように堆積構造は塊状をなし、擾乱を受けたブロック土などからなる土壤構造が確認されている。層相からは耕作土や盛土などの人為的擾乱の可能性が考えられる。珪藻分析結果は層相からみた堆積環境を追従する結果といえる。これらの層準の年代については、出土遺物などから弥生時代中期頃と推定されており、後述する04-1-2区においても人間活動の痕跡が確認されている。当時の調査区が人間活動が行える好気的な状況にあったことが推定される。

6-1層・6-2層では、珪藻化石が比較的多産するようになる。珪藻化石群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が優占し、陸生珪藻を伴うことが特徴である。珪藻群集からみた堆積環境は、しばしば乾くこともある沼沢～湿地のような湿潤な環境を示唆する。6-1層・6-2層の層相は、先述したように植物遺体の葉層を挟在する泥層からなり、氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境が推定される。層相と珪藻化石群集から推定される堆積環境は同調的である。

以上のことから調査区内は、8-2層・8-1層・7-2層形成期は好気的な条件にあったが、6層形成期になり、基準面などの上昇により調査区内の水位が上昇し、氾濫堆積物が累重する後背湿地の堆積環境に変化したことが推定される。年代的には、出土遺物および周辺遺跡の調査成果から、弥生時代後期頃におこっていることが推定される。なお、8-2層・8-1層・7-2層の土壤構造および6-1層～5層にかけて確認された変形構造については、土壤薄片や軟X線写真による堆積物微細形態学的検討を行い、その由来や成因などに関する検討することが今後の課題として残される。

(2) 04-1-2区

本調査区の弥生時代中期の周溝墓盛土上層・下層（試料番号8・9）も珪藻化石の産出が少なかった。検出された珪藻化石の種群の特徴は、上記した04-1-1区の8-2層・8-1層・7-2層と同様に陸生珪藻の種群が目立ち、相反する環境を指標する種群から構成されていることから、陸域の好気的な環境下にあったことが示唆される。ただし、盛土層中の珪藻化石群集であることから、盛土を構成するブロック土の堆積環境を示している可能性もある。

縄文時代晩期以前の12層～9層でも珪藻化石の産出が少なかった、珪藻化石群集の特徴は04-1-1区の8-2層・8-1層・7-2層と同様の特徴を示していることから、調査地点の堆積環境としては、基本的に陸域の好気的な環境下になる期間が存在したことが推定される。また、混合群集の特徴を有することから、氾濫堆積物に由来することが推定される。このような堆積環境は、層相から推定される堆積環境とも同調する結果である。また、上記した周溝墓盛土の珪藻群集の特徴とも類似することになるが、これは盛土が9層以下の堆積物に由来するブロック土からなることと調和的な結果といえる。

花粉化石からみた古植生

各地点の花粉化石の産出状況は、珪藻化石同様に全体的に良好でなく、保存状態の悪いものが多く

認められる。このことから、堆積物中に含まれる花粉化石は、酸化や微生物による分解の影響を受けていると考えられる。一般的に好氣的条件下では花粉・胞子が分解消失しやすいとされる。また、花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村,1967;徳永・山内,1971）。今回の結果を見ると、コウヤマキ属、モミ属、スギ属などの針葉樹期限の花粉が比較的多く認められており、シダ類胞子の割合も高めである。このことから、得られた花粉化石群集は、分解に強い花粉が選択的に残され相対的に多く検出されている可能性があり、当時の周辺植生を正確に反映していない可能性がある。このことを考慮した上で、以下に調査区ごとに考察を述べる。

(1) 04-1-1区

本調査区の6-2層、6-1層の木本花粉群集は、後述する04-1-2区の9層以下の花粉群と同様の種類から構成されているものの、各種類の出現頻度が層位的に変化していることが確認される。木本花粉では針葉樹のスギ属とマツ属（復維管束亜属を含む）が増加し、これとは逆にアカガシ亜属が減少傾向を示し、04-1-2区で確認されていたカエデ属・トチノキ属といった河畔林を構成する落葉広葉樹の種類がほとんど認められなくなる。また、草本花粉の頻度が高くなっており、各種類ではイネ科・カヤツリグサ科が増加する。このほか水生植物の種類構成も若干変化しており、下位層準で産出していた浮葉植物のコウホネ属が確認されなくなり、ミクリ属・イボクサ属・ミズアオイ属・サンショウモ・アカウキクサ属といった小型の抽水・浮葉植物の種類が検出されるようになる。

このような花粉化石群集に変化が起こった時期は、9層が縄文時代晩期以前、6-2・6-1層が弥生時代後期とされることから、縄文時代晩期以前から弥生時代後期の間の時期に起こっていることになる。本層が形成された弥生時代後期にはスギ属が分布域を拡大していたことが確認される。また、照葉樹林要素が減少すると同時に種類構成が単調となっていること、増加するマツ属が二次林を構成する代表的な樹種であることから、周辺の森林植生が二次林的性格の強い林分となっていた可能性がある。草本花粉の多くは周囲の河道や低湿地に生育していたものと思われる。ガマ属、ミクリ属、イボクサ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属、サンショウモ、アカウキクサ属など、水湿地生植物が分布していたものと思われる。

河内平野周辺に位置する考古遺跡の花粉分析結果では、弥生時代後期以降に針葉樹のマツ属が増加する地点が多い。生駒山西麓地域では、鬼虎川遺跡で弥生時代中期に漸増開始し、弥生時代後期の層準で比較的多産している。その北側に位置する北島遺跡では弥生時代後期に漸増し、古墳時代に入って多産するようになる。河内台地に位置する長原遺跡では、同じ遺跡内でも地点によって産状が異なり、弥生時代後期頃に増加する地点のほか、増加が顕著でない地点も確認される。マツ属は極端な陽樹で二次林の構成要素でもあるため、その分布拡大は人間活動や土地条件の変化を考える上で重要な種類であり、調査地区の地形発達およびそこでの人間活動、さらに各地点の植生史情報を総合的に捉え再評価するようになりたいと考える。

また、多産したスギ属については、河内平野およびその周辺に位置する考古遺跡の花粉分析結果では縄文時代晩期以降に増加する傾向が確認されている（パリノ・サーヴェイ,1996など）。本遺跡では後述する縄文時代晩期以前の9層形成期にはスギ属の顕著な増加が認められないことから、8層以降の時期に増加している可能性があり、基本的には周辺遺跡での傾向と矛盾するものではない。

(2) 04-1-2区

縄文時代晩期以前にかけて形成された12層～9層の花粉化石群集は、コナラ属アカガシ亜属、コウヤマキ属、モミ属などが多産し、ツガ属、マツ属、スギ属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う特徴を示す。このうち最も多く産出するアカガシ亜属は、シイノキ属などとともに暖温帯性常緑広葉樹林(いわゆる照葉樹林)の主要構成要素である。このことから、12層～9層が堆積した当時の遺跡周辺にはアカガシ亜属を主体とした照葉樹林が存在し、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などの温帯性針葉樹の林分を伴っていた可能性がある。

大阪平野における完新世の植生変遷は、大きくは7500-6000年前にナラ類からなる落葉広葉樹林から、シイ、カシなどの照葉樹林へと変遷し、6000年前以降照葉樹林の安定時代にはいる。そして、約3000-2000年前にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加する(古谷,1979;前田,1984;那須,1989など)。これらの針葉樹は、照葉樹林帯とそれより高い(あるいは北方の)山地にあるブナ帯の間を埋める温帯針葉樹林の構成要素であり、これらの要素が大阪平野の周辺山地に増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味しているとされる(那須,1989)。今回の分析結果でも、スギ属、コウヤマキ属などの温帯性針葉樹が多く認められており、時代観も既存の研究結果と大きく食い違わないことから、同様の植生変遷であったと思われる。

層相的に上位に相当する8-2層～7-2層では、花粉化石はほとんど検出されなかった。また、弥生時代中期頃の可能性が指摘される周溝墓盛土(試料番号9,8)からは、花粉化石がほとんど検出されなかった。これらは先述した堆積環境から、好氣的条件下における分解消失を反映しているものと推定される。また、盛土の母材自体は先述したように好氣的条件下で形成された堆積物を用いていると考えられるほか、本試料は人為的に盛られた盛土であることから、本層形成時に新たに取り込まれる花粉量も少なかったと推測される。

引用文献

- 安藤 一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.
- Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.
- 古谷 正和,1979,大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究,18,121-141.
- 原口 和夫・三友 清史・小林 弘,1998,埼玉の藻類 珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.
- 伊藤良永・堀内誠示,1989,古環境解析からみた陸生珪藻の検討-陸生珪藻の細分-.日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,p.17.
- 伊藤 良永・堀内 誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.
- 小杉 正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用.第四紀研究,27,1-20.
- 小杉 正人,1989,珪藻化石群集の形成過程と古生態解析.日本ベントス研究会誌,35/36,17-28.
- Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

第4章 自然科学分析

- Krammer, K. & Lange – Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.
- Krammer, K. & Lange – Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae,Bacillariaceae,Suirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.
- Krammer,K.&Lange – Bertalot,H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil:Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae.In:Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.
- Krammer, K. & Lange – Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnantheaceae,Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.
- 前田 保夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積 (更新) 世後期以降の植生変遷.宮脇 昭 (編著),日本植 生誌 近畿,至文堂,87 – 99.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 那須 孝悌,1989,活動の舞台:概論.永井 昌文・那須 孝悌・金 関恕・佐原 真 (編著),弥生文化の研究1 弥生人とその環境,雄山閣出版,119 – 130.
- 小倉 博之,2004,日本の地形6近畿・中国・四国. (7) 大阪平野の発達史と地盤環境,88 – 91.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1996) 珪藻化石・植物化石・樹種による古環境復元.「北島遺跡の耕作地跡と古環境 – 寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書-」, p.71 – 130., 財団法人 東大阪市文化財協会.
- 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50 – 73.
- 辻本 裕也・伊藤 良永・馬場 健司,1996,Ⅲ – 2.古環境.宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書 第二分冊,財団法人東大阪市文化財協会,27 – 55.

第5章 まとめ

今回の調査を行った亀田、弓削ノ庄遺跡では、いずれも大きな成果をあげることができた。ここでその成果を列記することでまとめにかえたい。

河内湖南東の地域ではこれまで多くの発掘調査がなされ、非常に多くの成果をあげている。一方、調査地のある南西の地域では、近年調査が進み、少しずつその実態が明らかになってはいるものの、南東に比して、遺跡数は極端に少なく、遺跡の空白地となっていた。今回、そういった地域で、縄文時代晩期末～古墳時代前期の遺構、遺物が確認されたことは非常に大きな成果といえる。また、今回の調査区は南北に長いトレンチ状を呈しており、周辺部に更に遺跡が広がっていることを示唆する結果となった。今後の周辺部での調査に期待される。

亀田遺跡でまず最初に人々の活動がみられたのは弥生時代後期後半である。2、3調査区を中心に、南北約50mの範囲で遺構、遺物の集中がみられた。調査区の幅が狭いこともあり建物を復元するには至らなかったが、当該期の集落の一部と考えることができ、集落は更に東西に広がっていたと推測できる。

この集落内からの遺物で注目できるものに広口長頸壺の頸部に「龍」を描いた絵画土器がある。壺は故意に、体部以下を打ち欠いた痕跡が確認でき、祭祀的な色合いを強くもつ。また、「龍」は中国で雨ごいの神とされる架空の動物であり、残念ながら今回の資料は、絵画の一部のみであり全体的な構図などは分からないものの、こういった題材を知り得たということは、集落の性格を考える上で興味深い。府内では船橋遺跡、恩智遺跡、池上・曾根遺跡、八尾南遺跡など数点の出土例があり、地域の中心的な集落から出土している。

次いで遺構、遺物がみられるのは古墳時代前期、布留式期である。遺構は溝などがわずかにみられるのみだが、ローリングの少ない土器が完形に近い状況で出土しており、周辺に集落が存在する可能性が高い。また、1調査区では水田が検出されており、生産域も近接して広がっていたものと考えられる。

これ以降、明確な遺構は検出されなかったが、7～8世紀には耕作地として利用され、その後、中世には一帯が湿地帯の様相を呈していたものと思われる。

弓削ノ庄遺跡ではまず、縄文時代晩期末～弥生時代前期前半の段階に集落がみられる。1調査区から2調査区北半にかけて、南北約80mの範囲で遺構、遺物が集中してみられた。1調査区北端は低くなり、おそらく、北側に大きく広がるものではなく、東西方向に広がるものと考えられる。

建物としては、竪穴住居の可能性のあるもの1棟（123土坑）、掘立柱建物4棟がある。ピットの密集度の高さから、複数回の立て直しが想定され、集落の存続期間は一定あるものと推測できる。

当該期の河内湾東・南縁部地域の居住域の構造と特徴について、集落域が100mに満たない規模であることや住居形態に竪穴住居、掘立柱建物の両者があること、竪穴住居の平面形態、規模が整った円形ではないこと、3～5m前後の比較的小型のものであること、壁の立ち上がりが浅く、不明瞭なものが多いことが指摘されている^(文献10)。当遺跡でも竪穴住居は、123土坑の中心部分がかく乱されてはいるものの、特徴がよく合致しており住居である可能性が高く、また、集落規模も同様のものと考えられる。

その他、注目できる遺構としては、1調査区南側で検出した「長原式」の突帯文土器をもつ土器棺墓が挙げられる。土器棺墓はこれ1基であったが、周辺では隅丸長方形の土坑がみられ、土坑墓の可能性

が考えられる。一方、調査区北半にはピットが集中しており、興味深い。ただ調査区が狭く、墓域、居住域と考えるには、尚早であろう。

次に遺物に注目すると、主体を占めるのは、生駒西麓産の胎土を有する突帯文土器で、「長原式」「水走式」の特徴を持つものが出土している。特に「水走式」は「長原式」に後続するものとして、近年注目されており、今回まとまって出土したことは非常に重要である。また、播磨系など他地域産と考えられる突帯文土器も複数みられた。当遺跡の北約2kmに位置する宮ノ下遺跡でも、播磨系突帯文深鉢が2点出土している^(文献7)。搬入品、あるいは他地域の類似品と考えられる土器について、今回十分に検討することができなかったが、周辺地域との交流や、その併行関係を考える上でも、重要である。一方、弥生時代前期の土器は少数ではあったが、出土しており、それらは生駒西麓産の胎土を有するものが少なく、突帯文土器とは反対の状況がみられる。他に東日本系の浮線文系土器が出土しており、近年、近畿での出土数が増加しており、それにたがわない^(文献9)。

石器にも多くの注目すべき点が見られた。1つには石棒が多数出土したことである。その種類の豊富さも指摘することができる。打製石器は製品こそ少なかったが、集積遺構をはじめ、多くのサヌカイトの剥片、石核類が出土した。全体に剥片、石核類は小さい傾向が見られた。周辺の弥生時代前期の古い段階の集落では金山産のサヌカイトが多く出土することが指摘されているが、今回出土したものは肉眼観察ではあるが、二上山産のものが大部分と推測できる。

次に遺構が見られるのは弥生時代中期後半(Ⅳ様式)である。2調査区で方形周溝墓が1基検出された。周溝墓が検出された部分は周辺に比べて、微高地状を呈しており、調査区外にもこの微高地にそって、同様の墓が検出される可能性が考えられる。また、当該期の集落は検出していないが、今後周辺部の調査に期待される。

これ以降、弓削ノ庄遺跡では明瞭な遺構は確認できなかったが、1層洪水砂から多くの庄内式期末から布留式期前葉の遺物が出土しており、当該期の集落もまた、存在しているものと考えられる。

以上、簡単ではあるが、調査成果をまとめた。本来ならば、これらをもとに遺跡の位置づけを行わなければならないが、筆者の力不足でかなわなかった。特に弓削ノ庄遺跡は縄文・弥生の移行期の状況を考える上でも重要な遺跡の一つであると考えられ、今後の課題としたい。

主要参考文献

- (1) 秋山浩三 1999 「近畿における弥生化の具体相」『論争 吉備』 考古学研究会岡山例会シンポジウム記録一 考古学研究会岡山例会委員会 考古学研究会
- (2) 秋山浩三 2004 「初期農耕集落としての瓜生堂遺跡」『瓜生堂遺跡1』第7章 (財)大阪府文化財センター
- (3) (財)大阪市文化財協会 1982 『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- (4) (財)大阪府文化財センター 2004 『八尾南遺跡の調査』八尾南遺跡現地説明会
- (5) 田中清美 2000 「河内潟周辺における弥生文化の着床過程」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- (6) 田端直彦 1997 「畿内第Ⅰ様式古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会
- (7) 中村健二 2000 「播磨系突帯文深鉢について」『突帯文と遠賀川』前掲
- (8) 禰宜田佳男 1998 「石器から鉄器へ」『古代国家はこうして生まれた』都出比呂志 角川書店
- (9) 三好孝一 1998 「西日本出土の浮線紋土器Ⅱ」『水遺跡発掘調査資料図譜第三冊』水遺跡発掘調査資料図譜刊行会
- (10) 三好孝一 2001 「河内湾東・南縁部における弥生文化の受容と定着」『みずほ』第35号 大和弥生文化の会
- (11) 家根祥多 1995 「近畿地方の突帯文土器出現期の様相」『第6回 中四国縄文研究会発表資料』

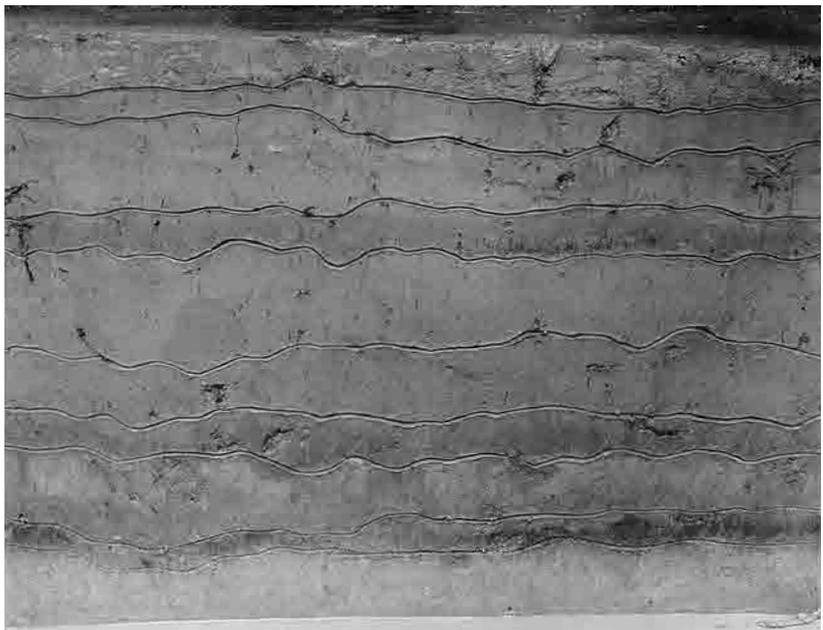
写真図版



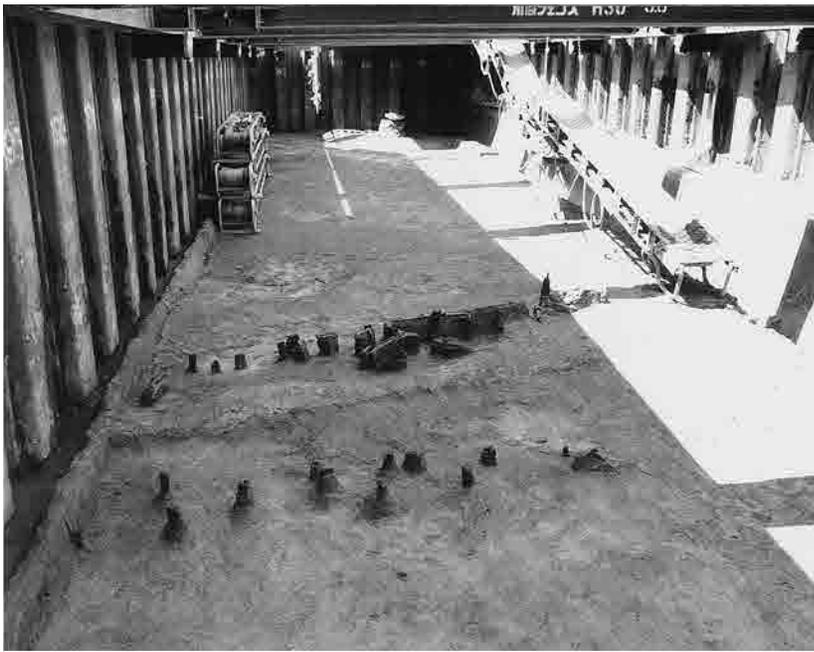
1. 2 調査区断面 4～10層（北東から）



2. 4 調査区断面 4～7層（東から）



3. 5 調査区断面 11～16層（東から）



1. 杭列2、3 検出状況（北から）



2. 杭列3 検出状況（南から）



3. 杭列1 検出状況（南から）



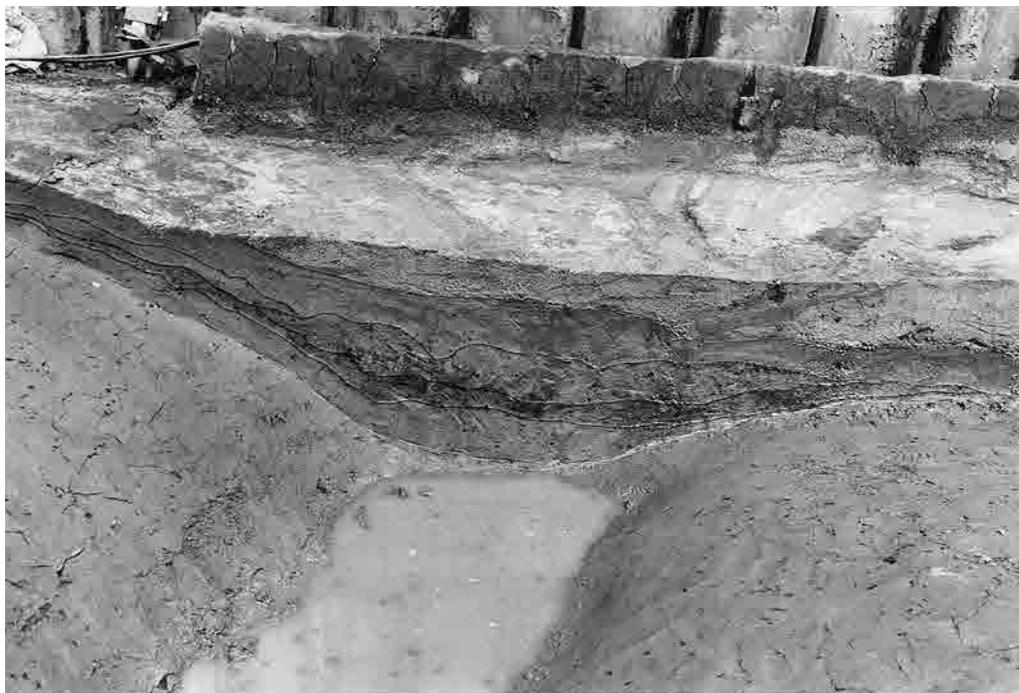
1.1 調査区 遺構検出状況（南から）



2.2 調査区 遺構検出状況（北から）



1. 遺構検出状況（北から）



2. 4-5溝 断面（西から）



3. 4-5溝 遺物出土状況（西から）



4. 4-6落込み 遺物出土状況（北西から）



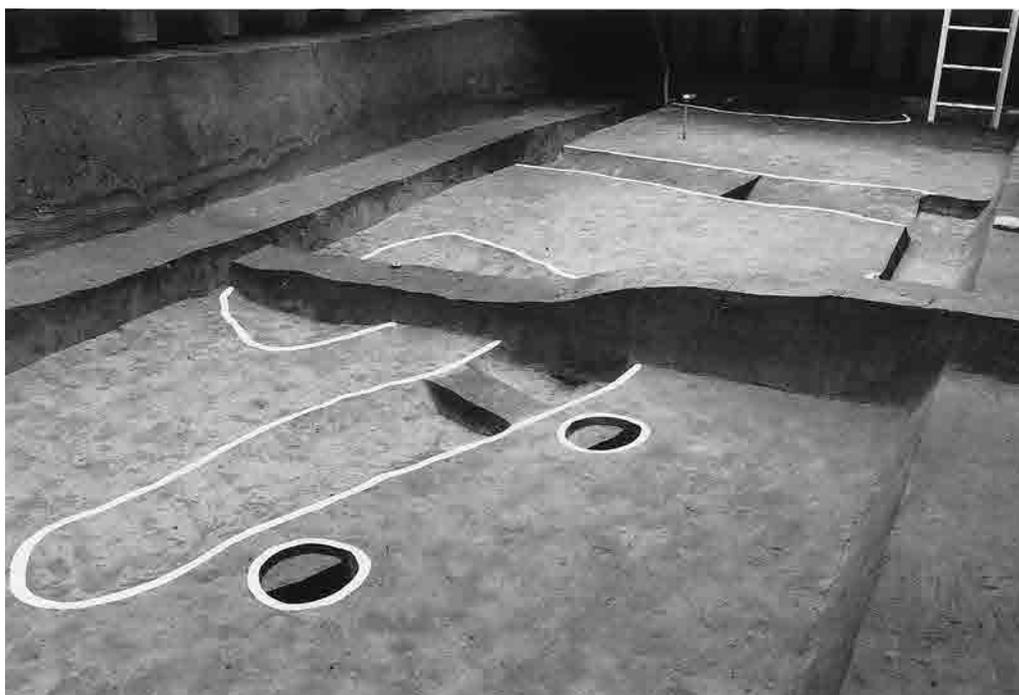
1. 遺構検出状況（南から）



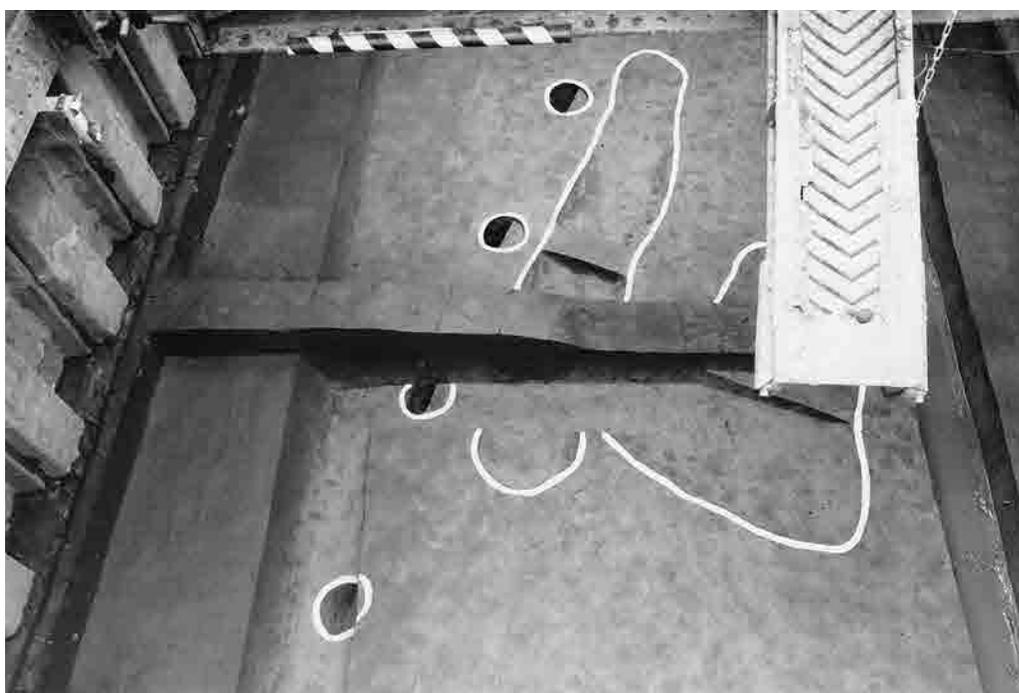
2. 5-5溝 検出状況（南から）



3. 5-5溝 遺物出土状況（西から）



1. 遺構検出状況（南から）



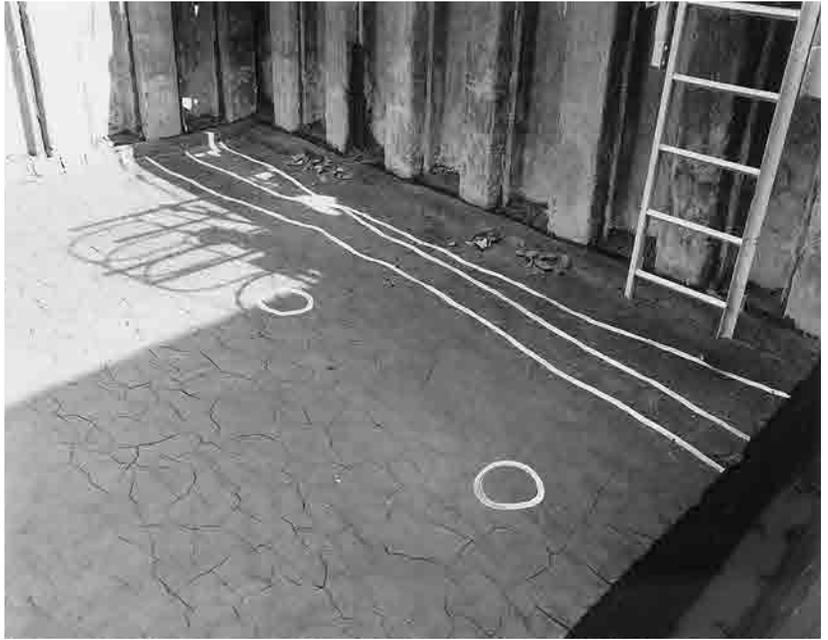
2. ピット列1 検出状況（北から）



3. 2-12ピット 断面（西から）



4. 2-6溝 断面（北東から）



1. 遺構検出状況（北から）



2. 3-18溝 遺物出土状況（北東から）



3. 3-9土坑 遺物出土状況（南西から）



1.3 調査区 第7面
遺構検出状況（北から）



2.4 調査区 第8面
遺構検出状況（南から）

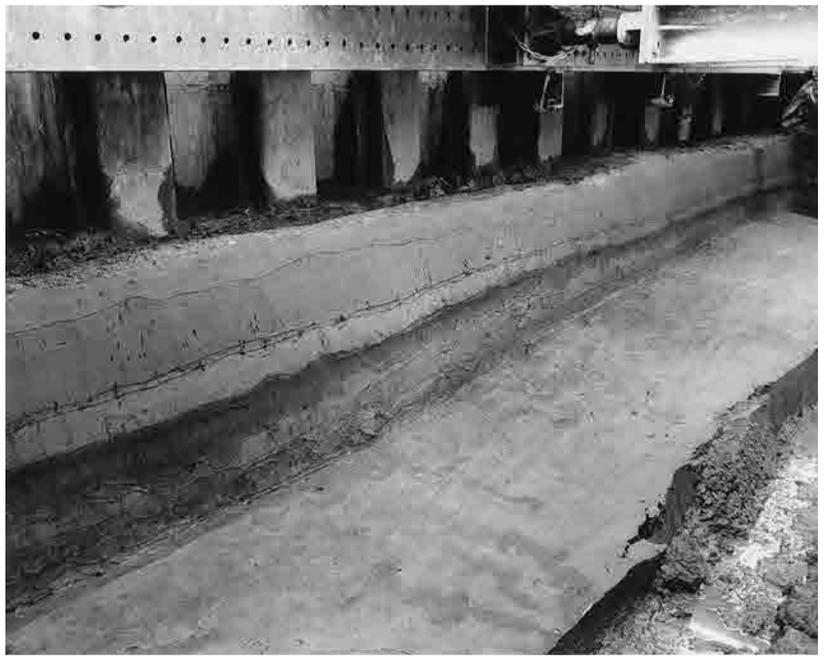


3.5 調査区 第8面
5-12流路 検出状況（西から）

1.1 調査区 断面（南東から）



2.2 調査区 断面（南東から）



3.2 調査区 断面（東から）





1. 第1面 2-1流路 検出状況(南から)



2. 第1面 2-1流路 断面(東から)



3. 第5面 木製品出土状況(東から)



1. 検出状況（北から）



3. 遺物B 出土状況（北東から）



2. 遺物出土状況（北東から）



4. 遺物D 出土状況（南西から）



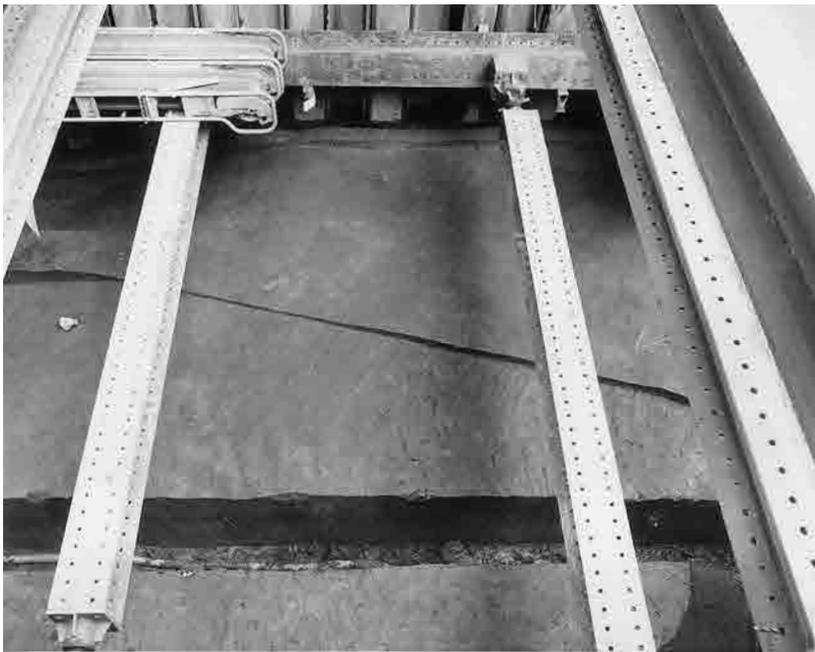
5. 遺物A 出土状況（北から）



6. 主体部1 検出状況（南から）



7. 主体部1 検出状況（南東から）



1. 主体部 検出状況 (北西から)



2. 主体部2 検出状況 (北西から)



3. 主体部3 検出状況 (南西から)



4. (主体部) 4 検出状況 (南西から)



5. 主体部3 断面 (南東から)



6. 主体部3 丸玉出土状況(北西から)



- 1.2調査区 方形周溝墓1
断面(北西から)
- 2.2調査区 方形周溝墓1北側周溝
断面(西から)
- 3.2調査区 方形周溝墓1南側周溝
断面(北西から)



4.1調査区 1-13溝 検出状況(南から)



5.1調査区 1-11溝 検出状況(南から)



6.1調査区 1-13溝 断面(南から)



7.1調査区 1-1溝 断面(西から)



1. 調査区北側 遺構検出状況(南から)



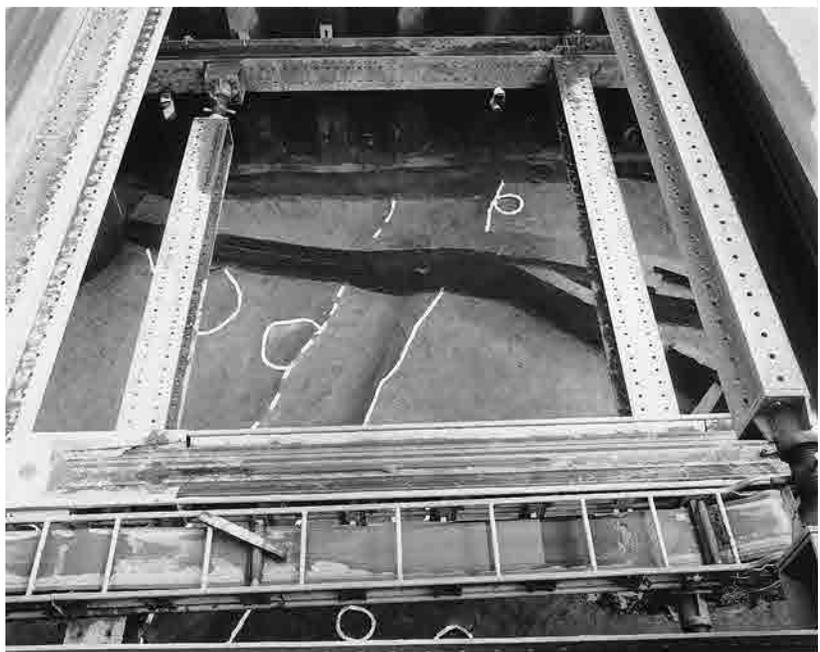
2. 調査区中央 遺構検出状況(南西から)



3. 調査区南側 遺構検出状況(南西から)



1. 調査区北側 遺構検出状況(南西から)



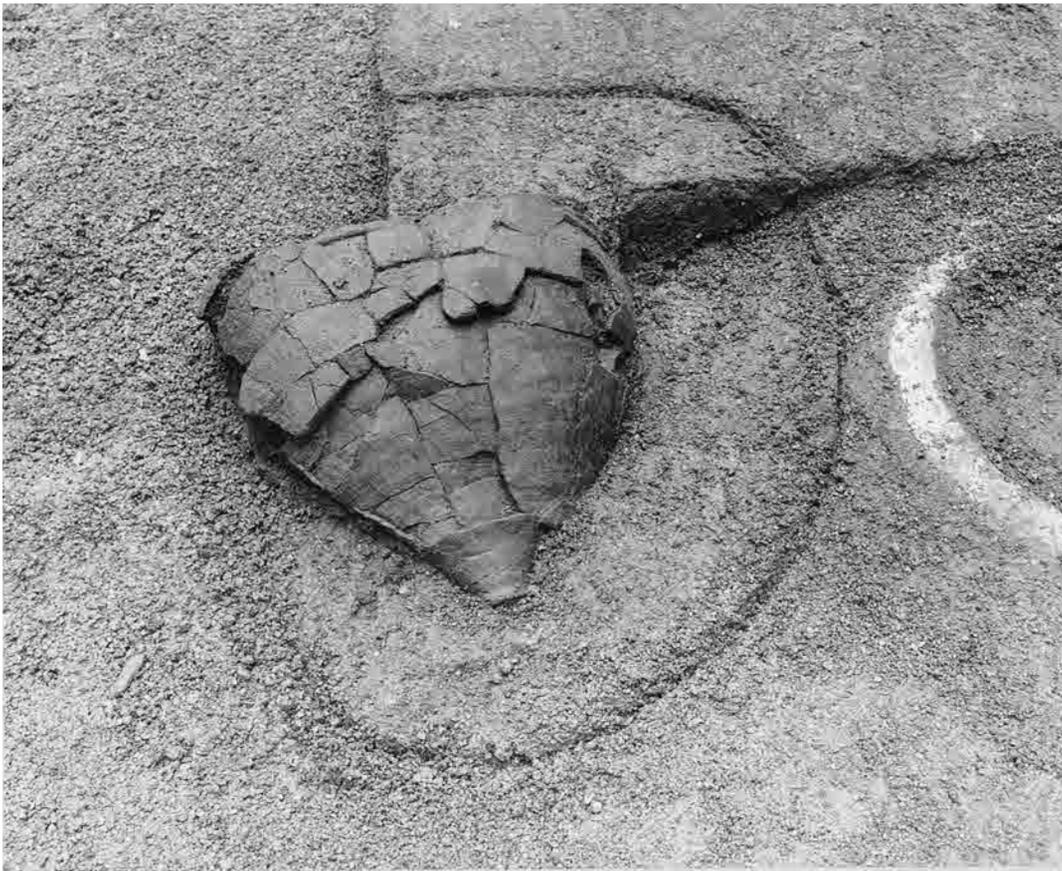
2. 調査区中央 遺構検出状況(西から)



3. 調査区中央 遺構検出状況(南西から)



1. 1-123土坑 検出状況（西から）
2. 1-123土坑 断面（西から）



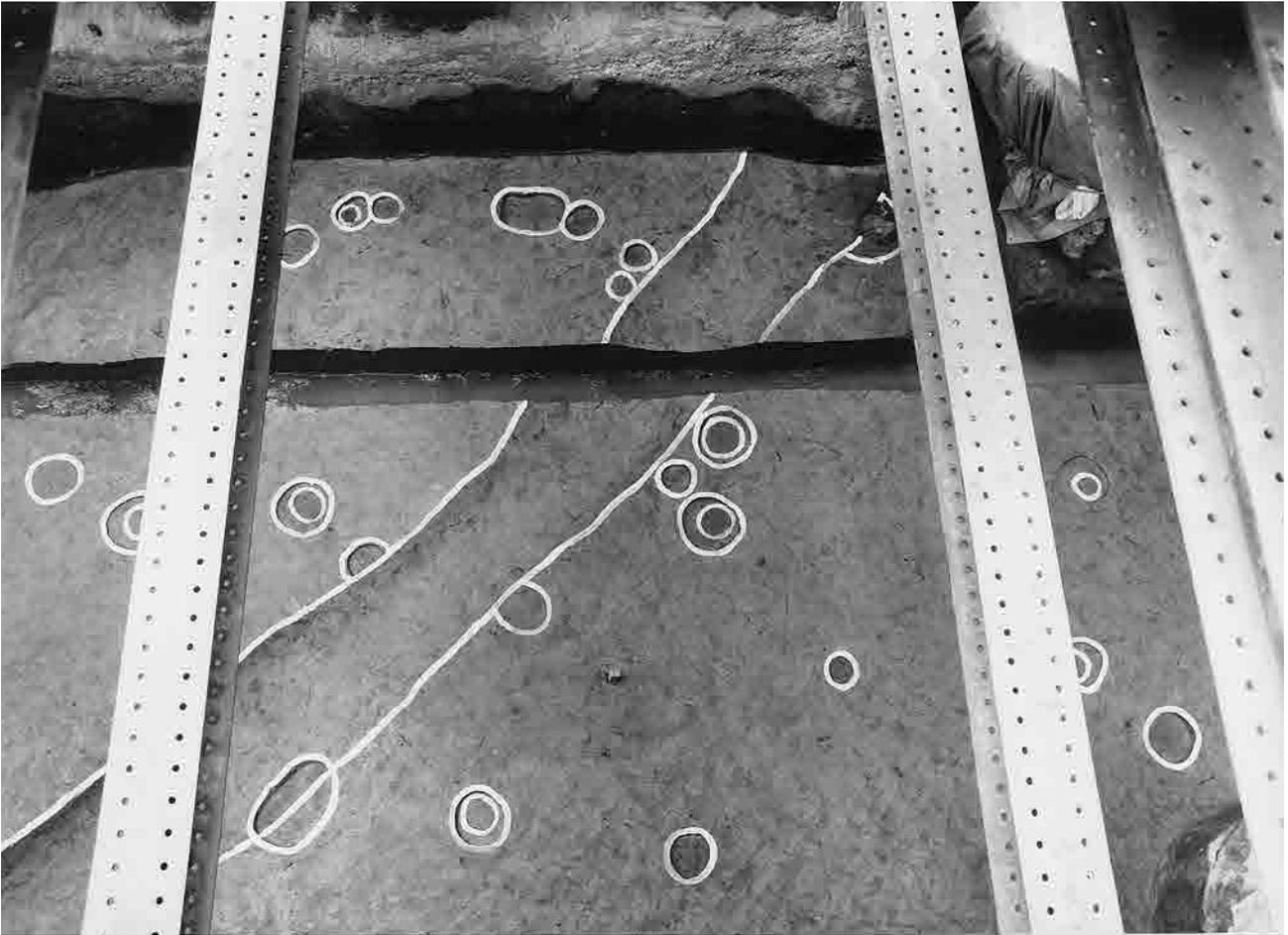
3. 1-16土坑（土器棺） 検出状況（南から）



4. 1-16土坑（土器棺） 検出状況
土器が被さった状況（北から）



5. 1-16土坑（土器棺） 上部土器除去後（南西から）



1. 掘立柱建物周辺ピット集中部 検出状況 (南東から)



2. 1-62ピット 石棒 出土状況 (北東から)



3. 1-70ピット 柱材 検出状況 (北から)



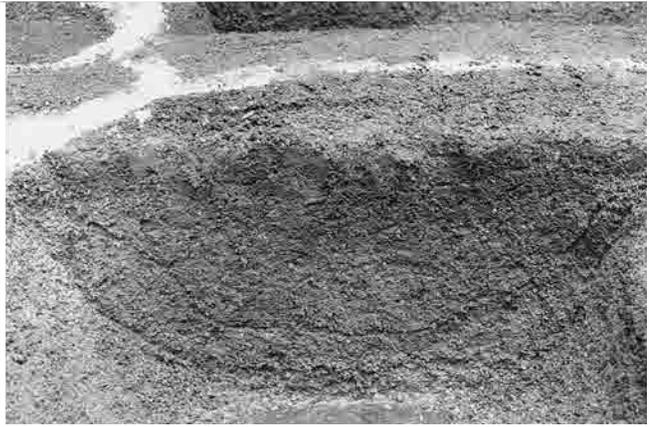
4. 1-92ピット 柱材 検出状況 (北東から)



5. 1-155ピット 柱材 検出状況 (北から)



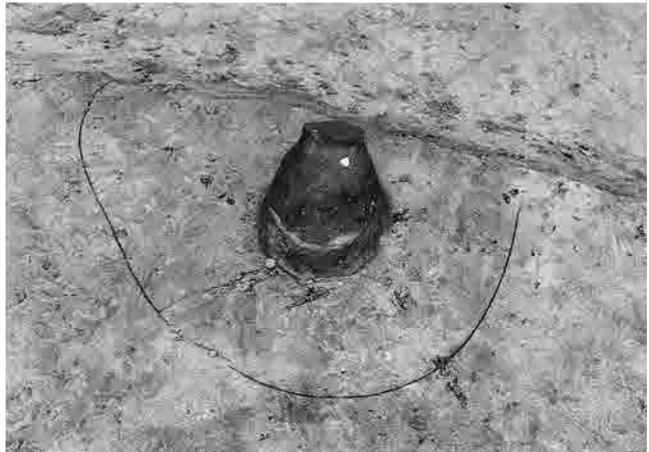
1.1 調査区 1-238ピット 根石検出状況 (北東から)



2.1 調査区 1-18土坑 断面 (北から)



3.1 調査区 1-47土器 出土状況 (南から)



4.1 調査区 1-46ピット 遺物出土状況 (南西から)



5.1 調査区 1-60サヌカイト集積遺構 検出状況 (南西から)



6.2 調査区 2-89サヌカイト集積遺構 検出状況 (南から)



7.1 調査区 土製紡錘車 出土状況 (南東から)



8.2 調査区 第12面 検出状況 (南から)

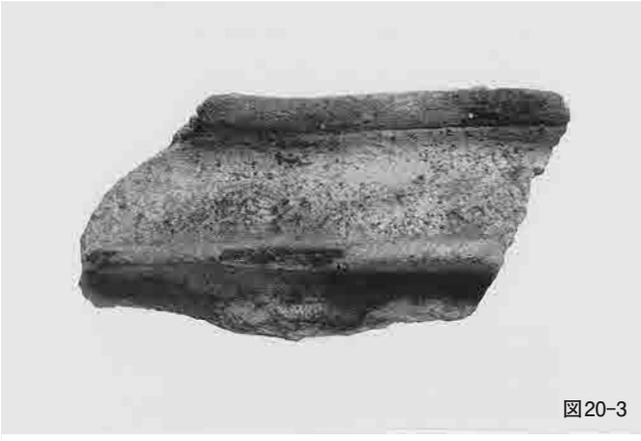


図20-3

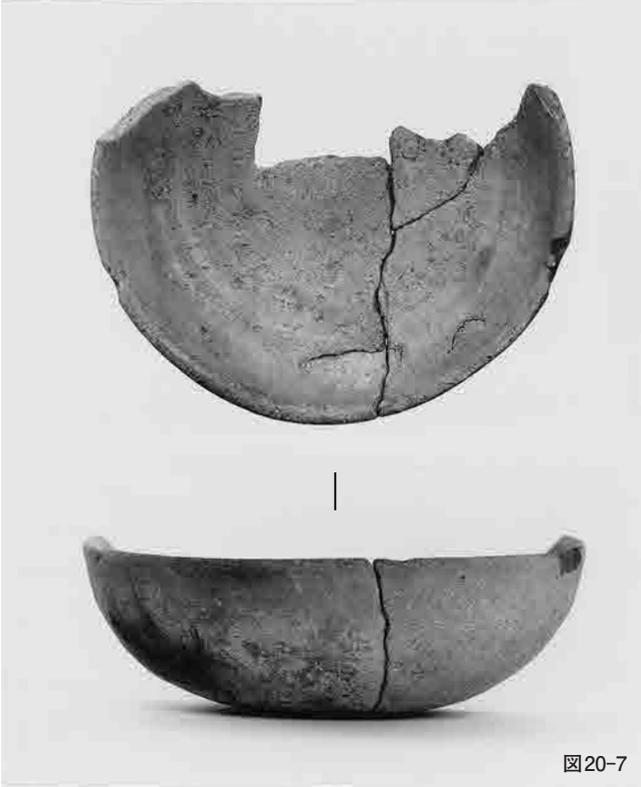


図20-7

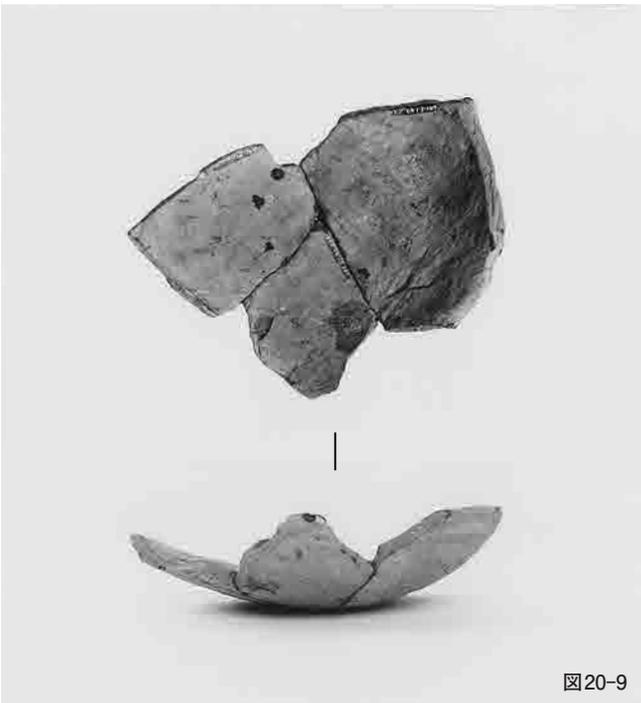


図20-9

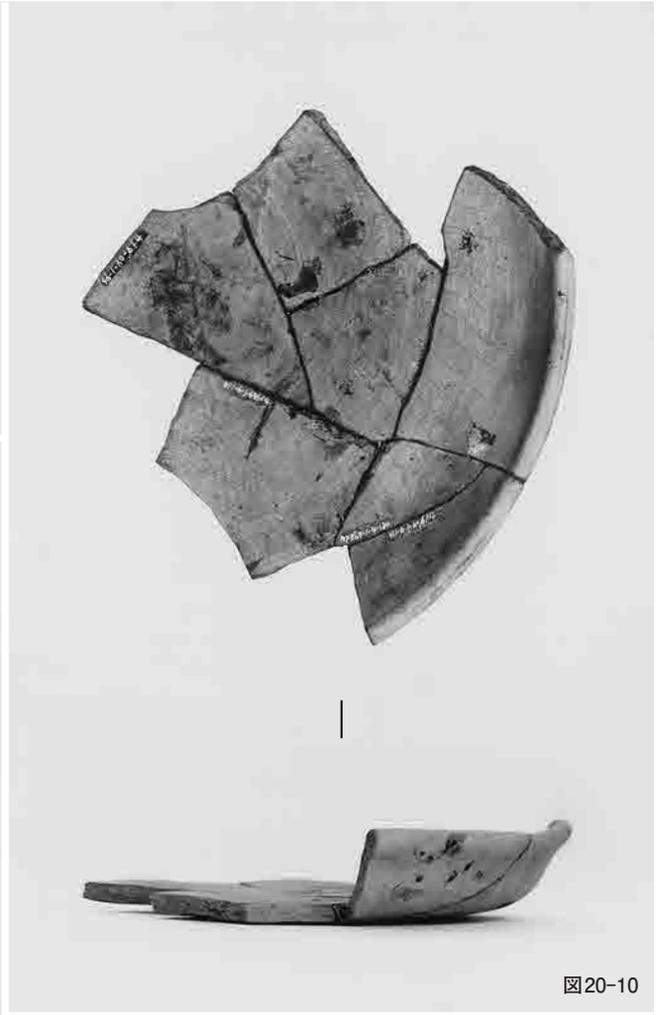


図20-10



図20-18

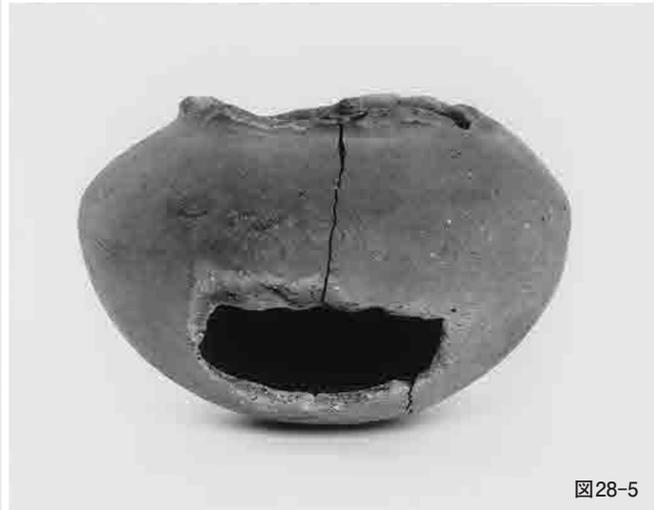


図28-5



図28-10



図28-1



図28-3



図44-18



図42-3



図42-2



図43-18



図43-17



図43-3



図43-6



図43-9



図43-6



図43-5



図43-8



図43-14



図43-11



図43-16



図43-12



図43-15



図43-13



図44-9



図44-10



図45-12



図44-8



図44-23



図44-13



図45-11

図版24 亀田遺跡出土遺物(6)



図45-7



図45-8



図45-7



図46-16



図46-22



図46-13



図46-10

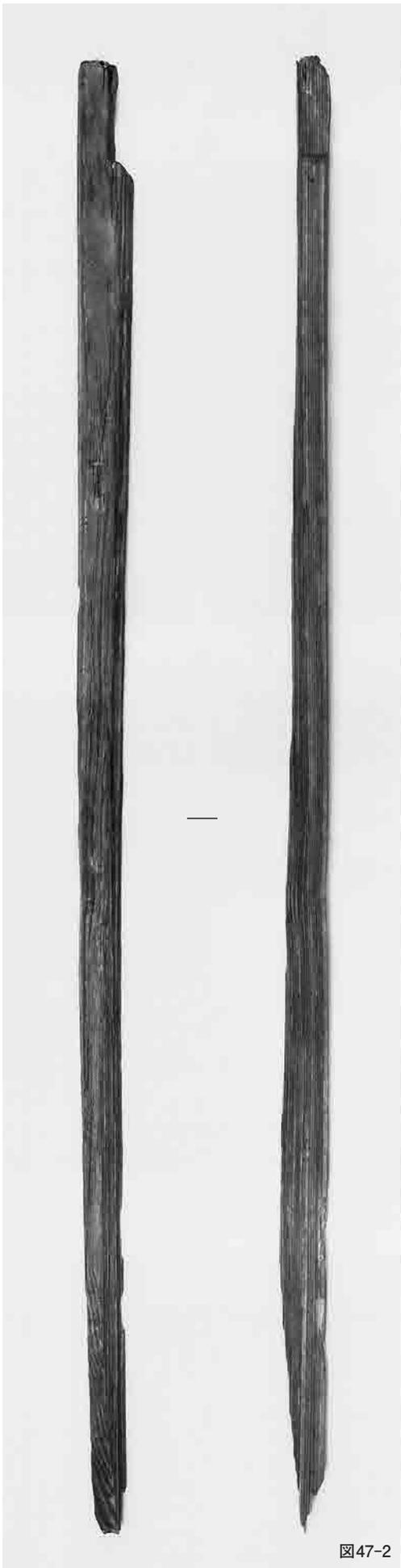


図47-2



図21-1



図21-2



図21-5



図21-7



図21-6



図52-2



図52-3



図52-1



図52-4



図52-7



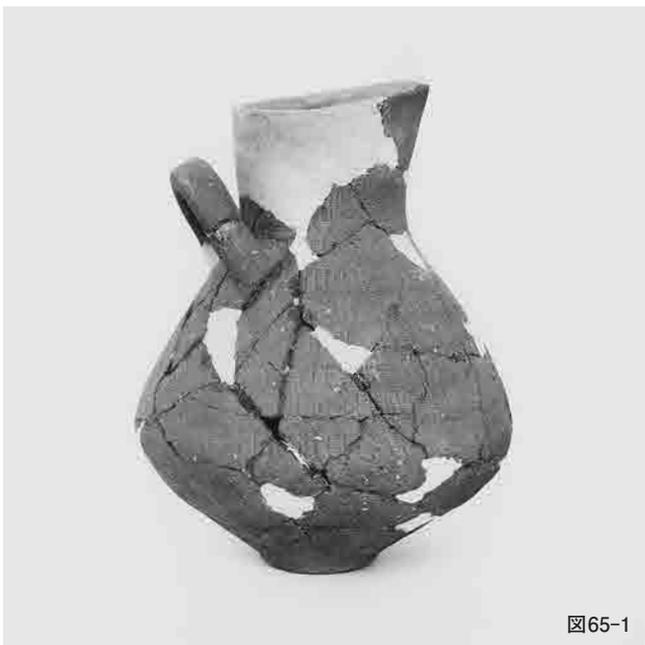
図52-21



図52-10



図52-19



図版28 弓削ノ庄遺跡出土遺物(3)



図84-1



図83-1



図81-9



図84-11



図81-9



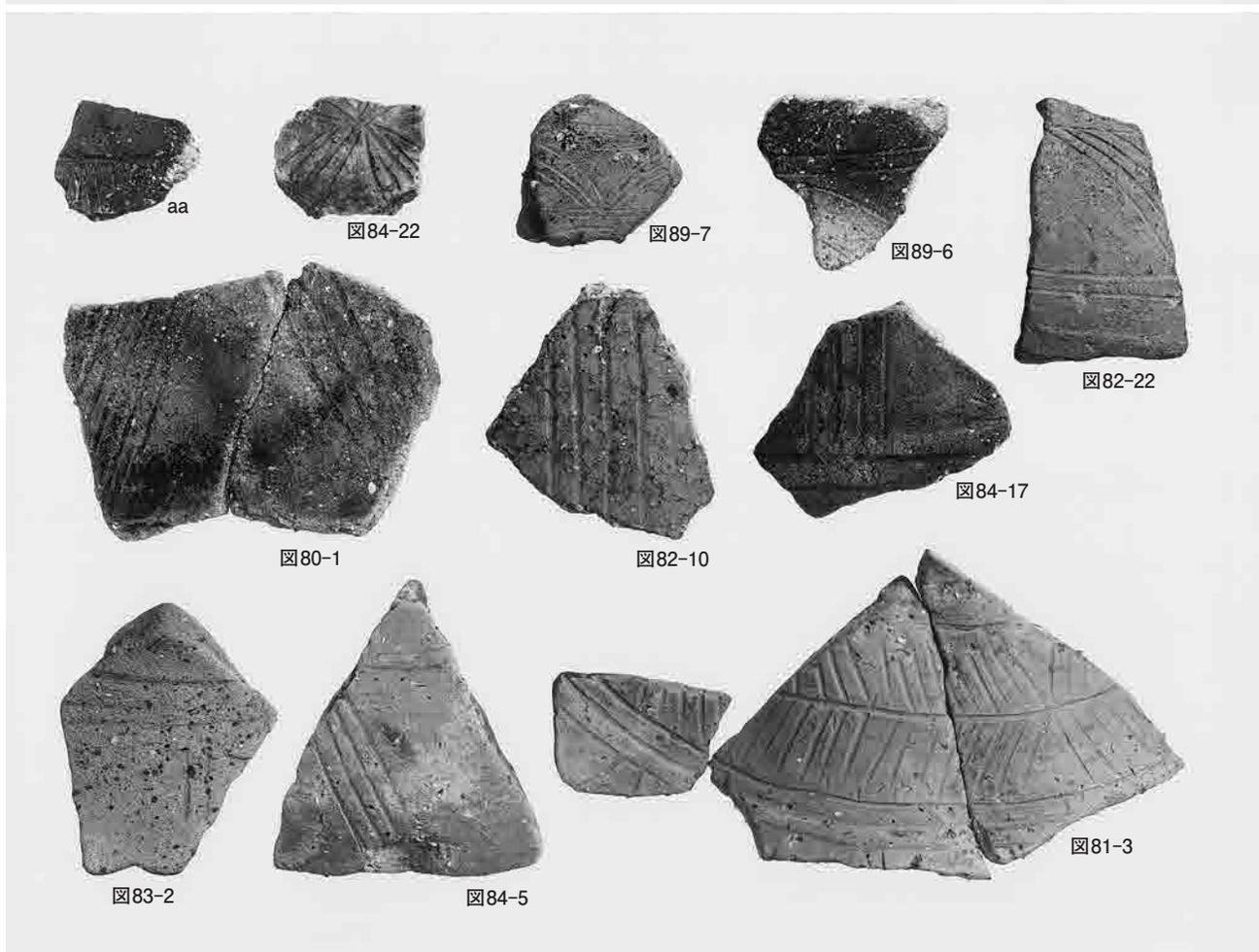
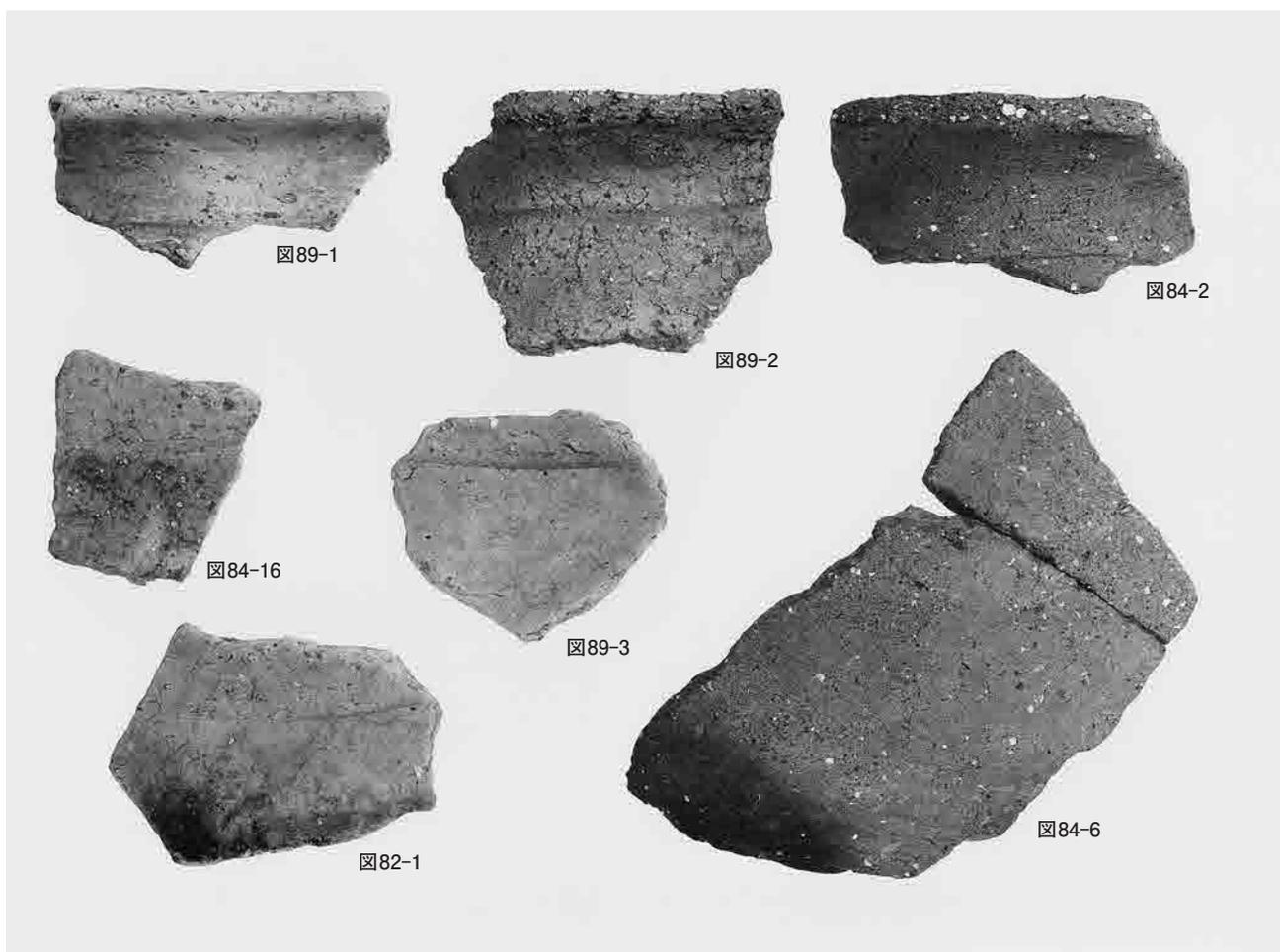
図89-4



図88-15



図85-15



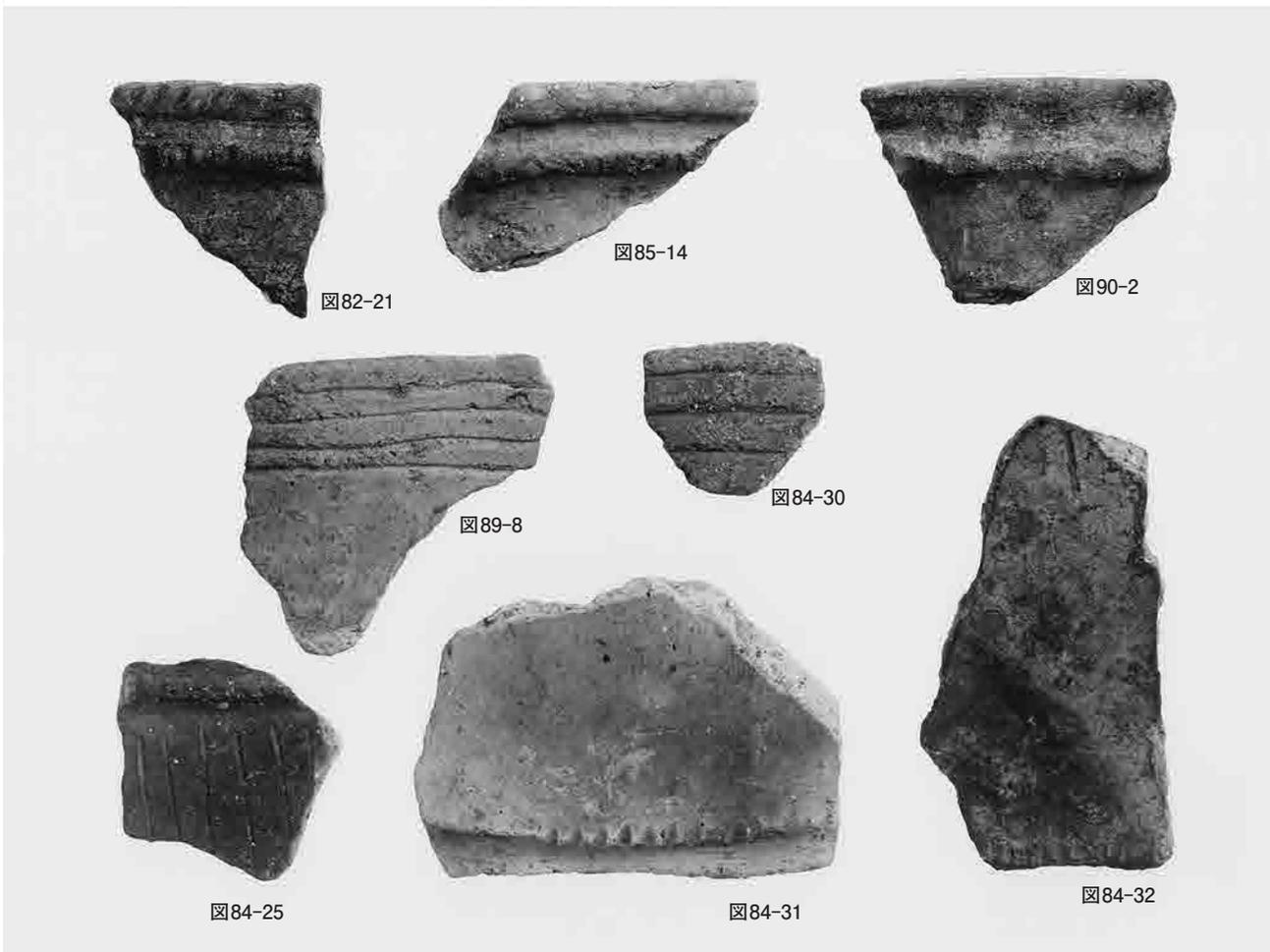
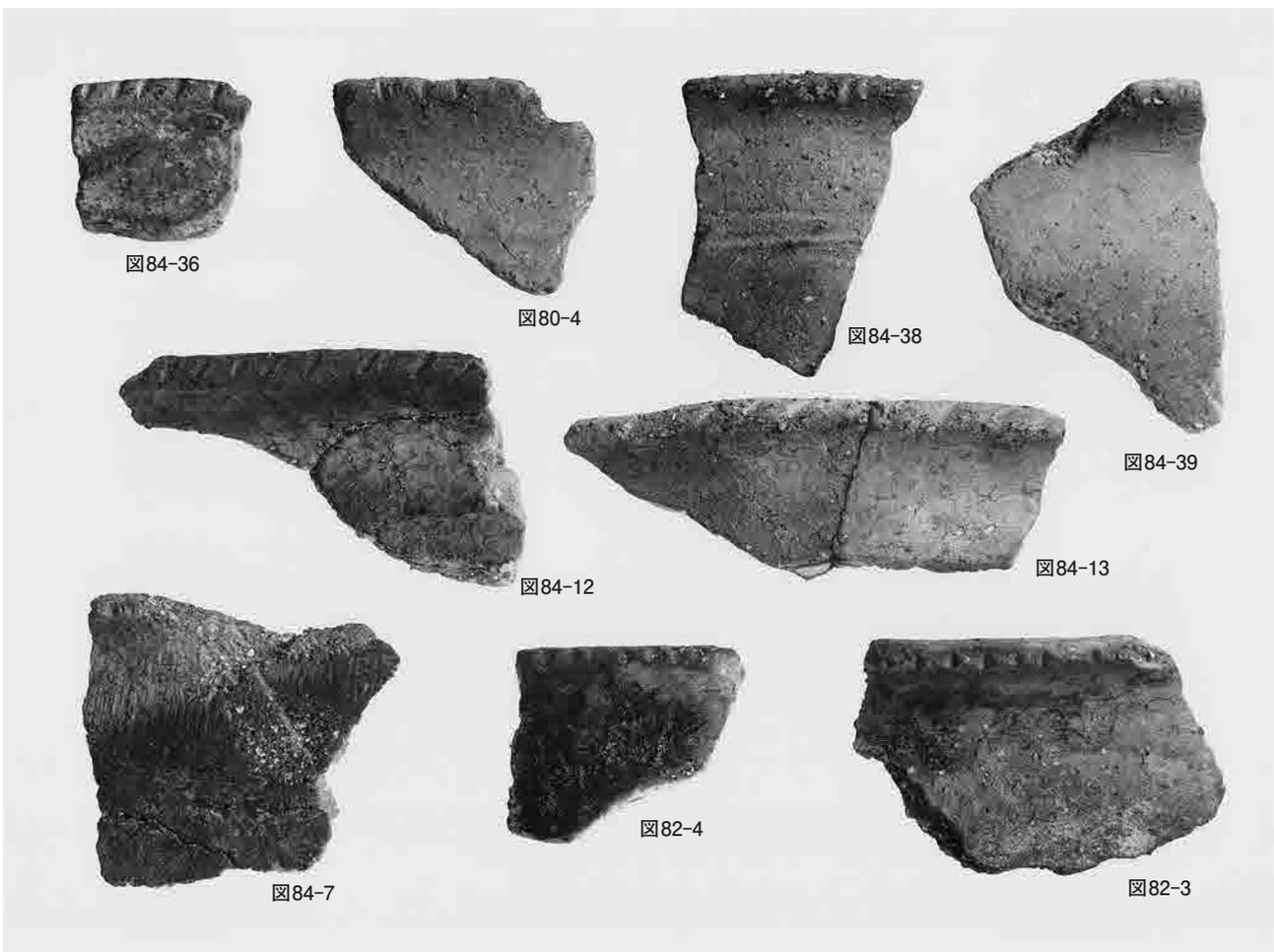




图81-2



图81-1



図81-10



図81-8



図81-6



図82-28



図81-7



図83-13



図80-21



図80-20



図86-1



図85-1



図83-12



図85-12

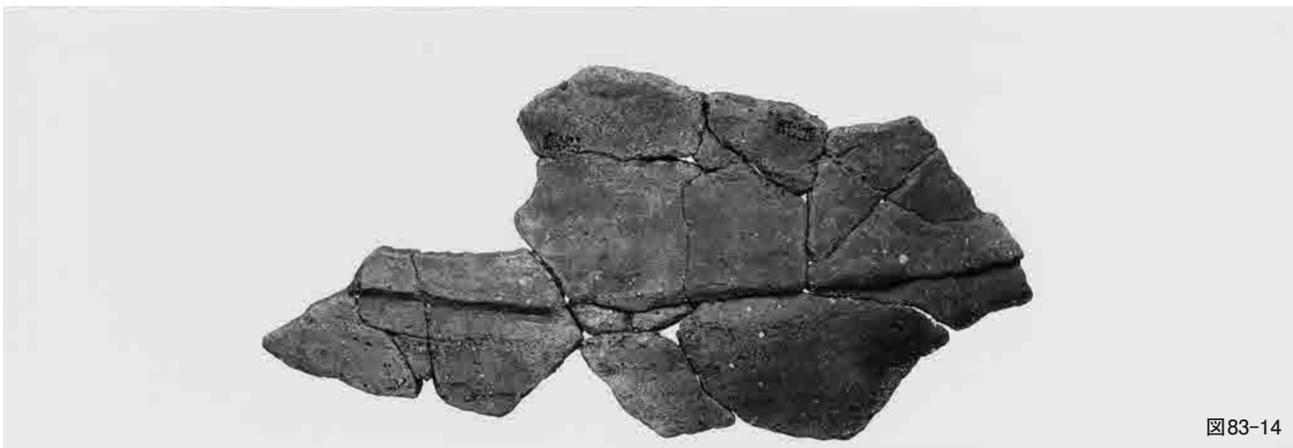


図83-14



図83-15



図86-6

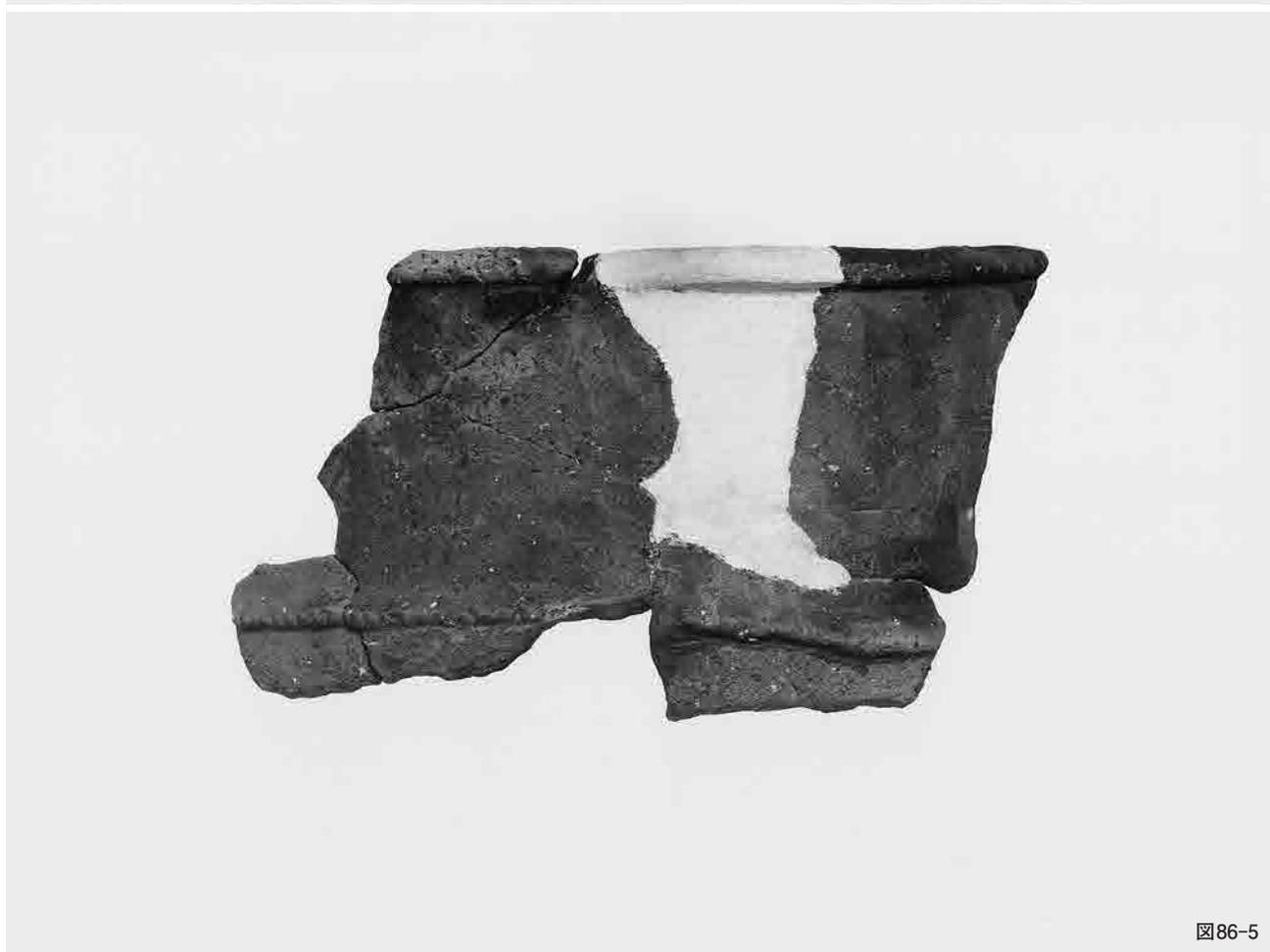


図86-5



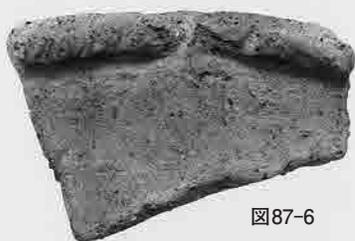


図87-6



図89-14



図90-13



図83-17



図87-13



図85-9



図87-10

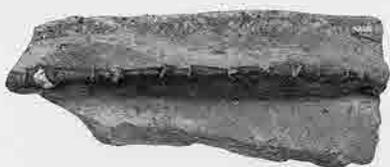


図90-22

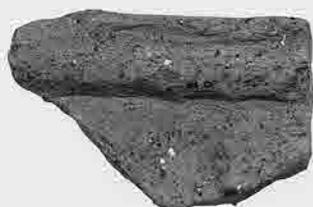


図87-25



図82-20



図87-27



図87-21



図83-20

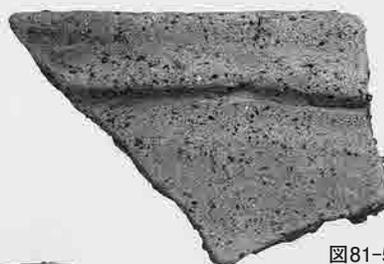


図81-5



図87-30



図87-19

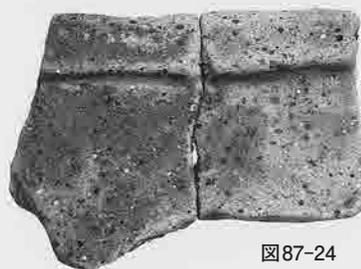


図87-24

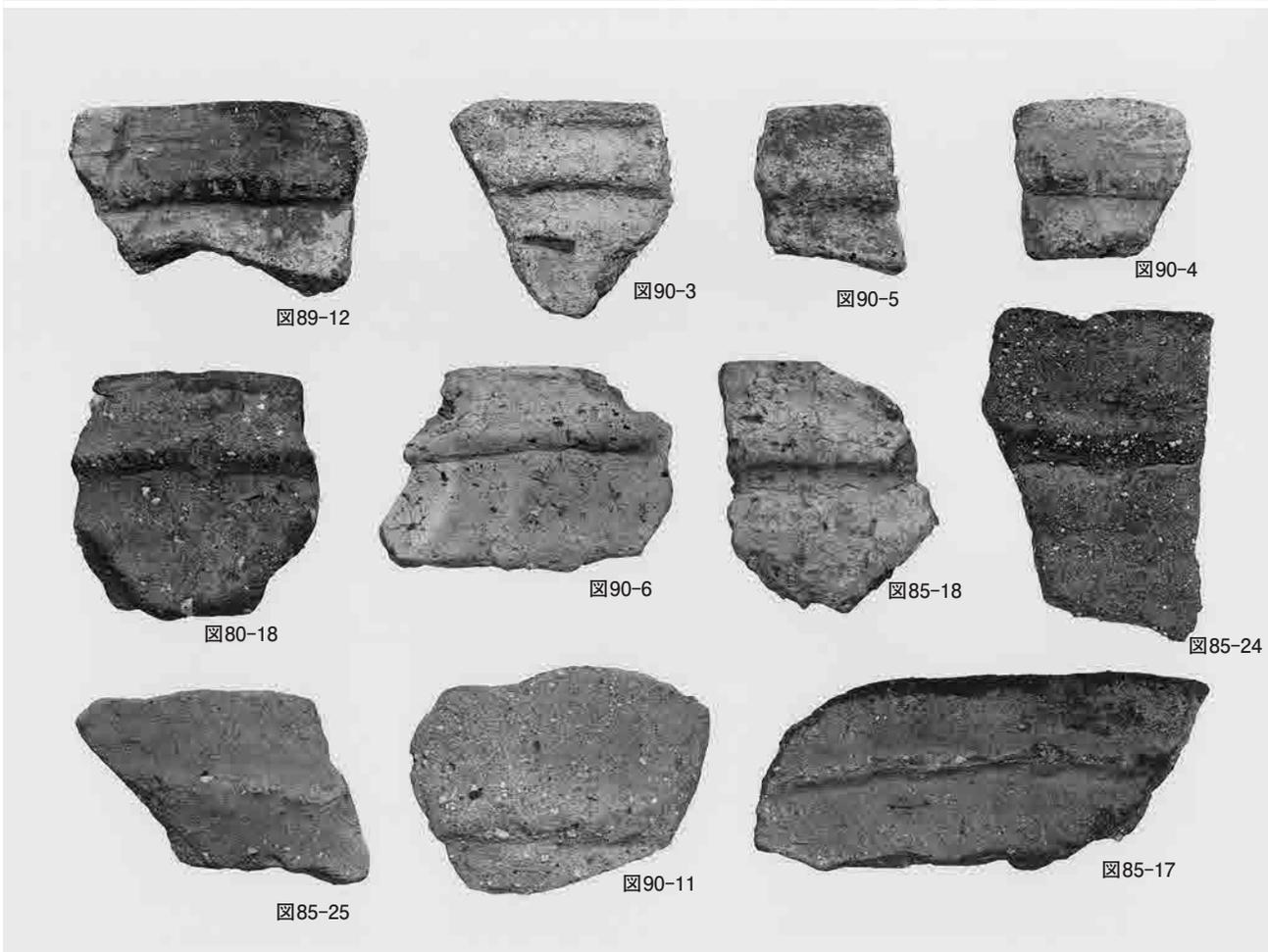
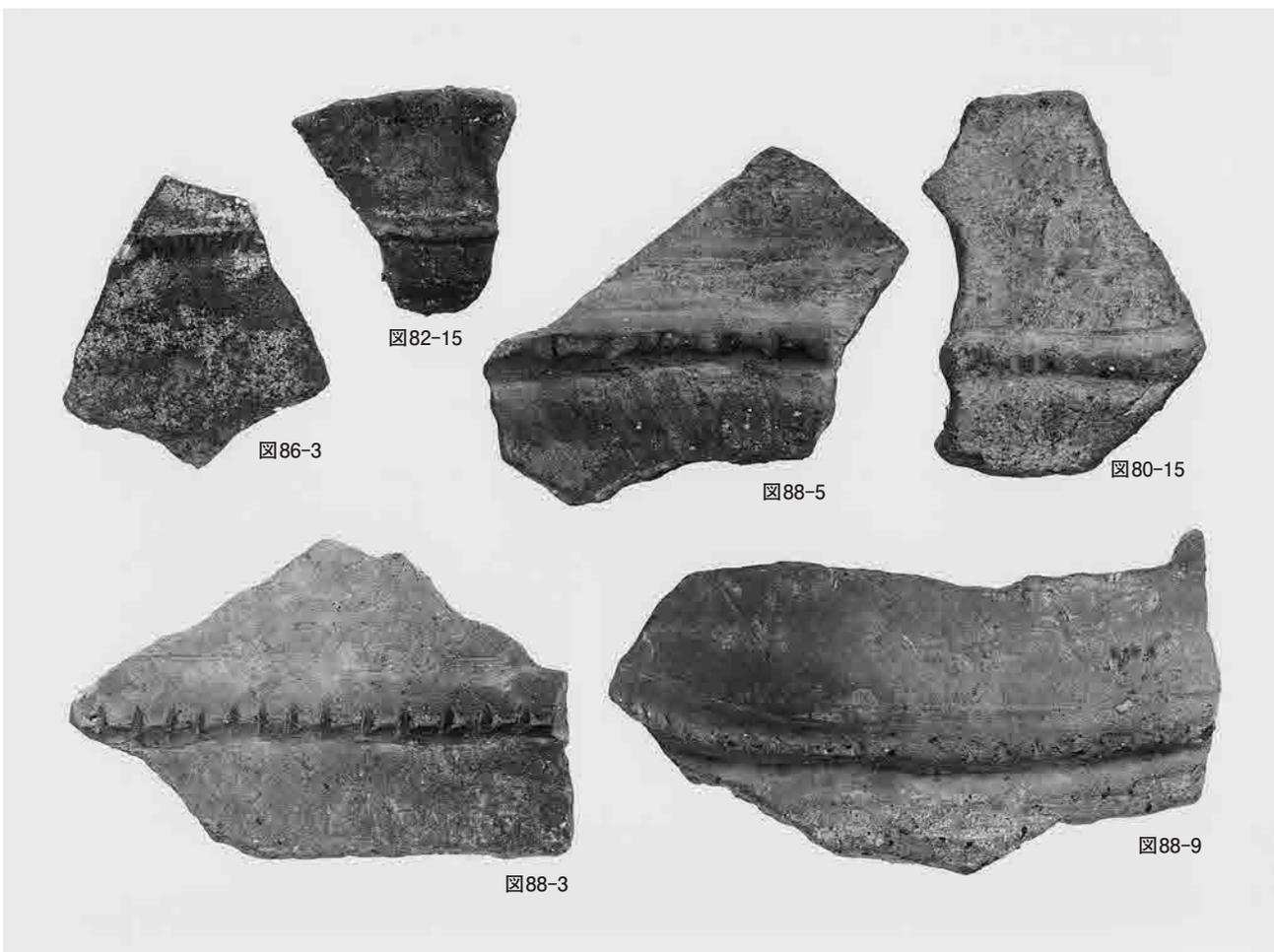




図91-3



図91-1



図91-2



図92-2

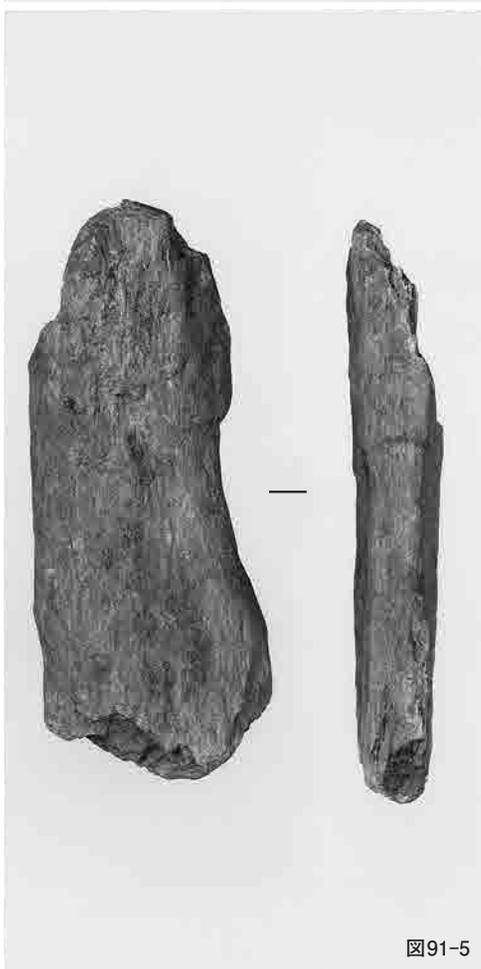
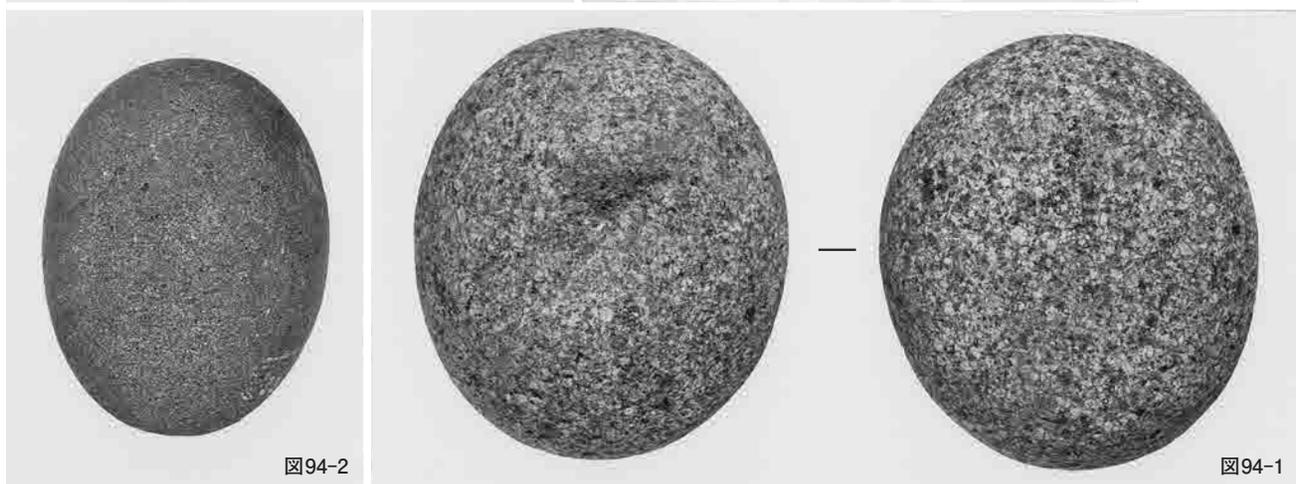
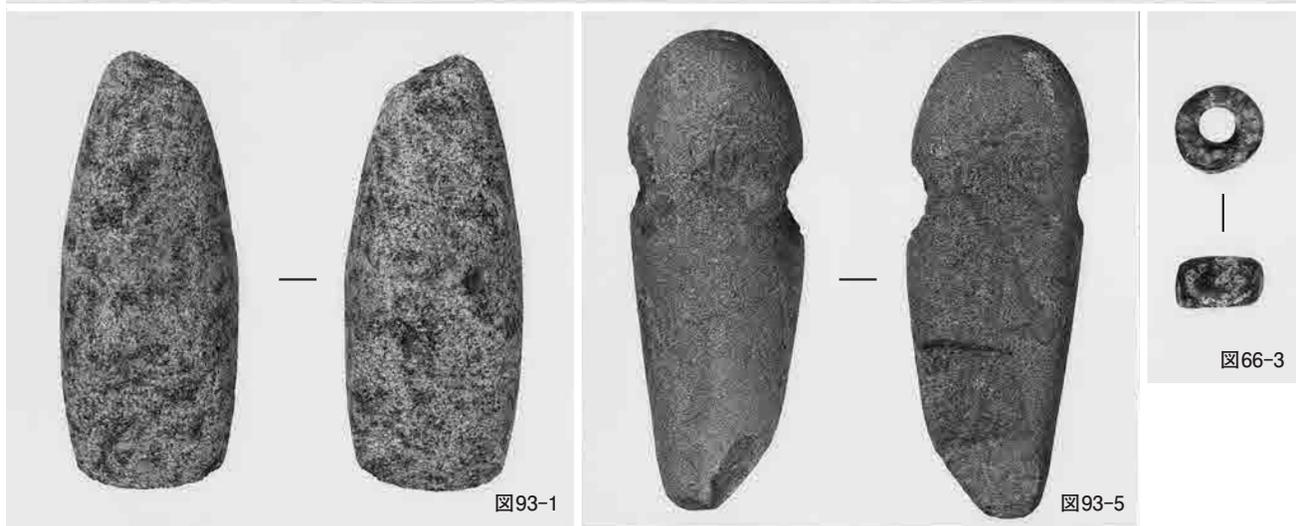
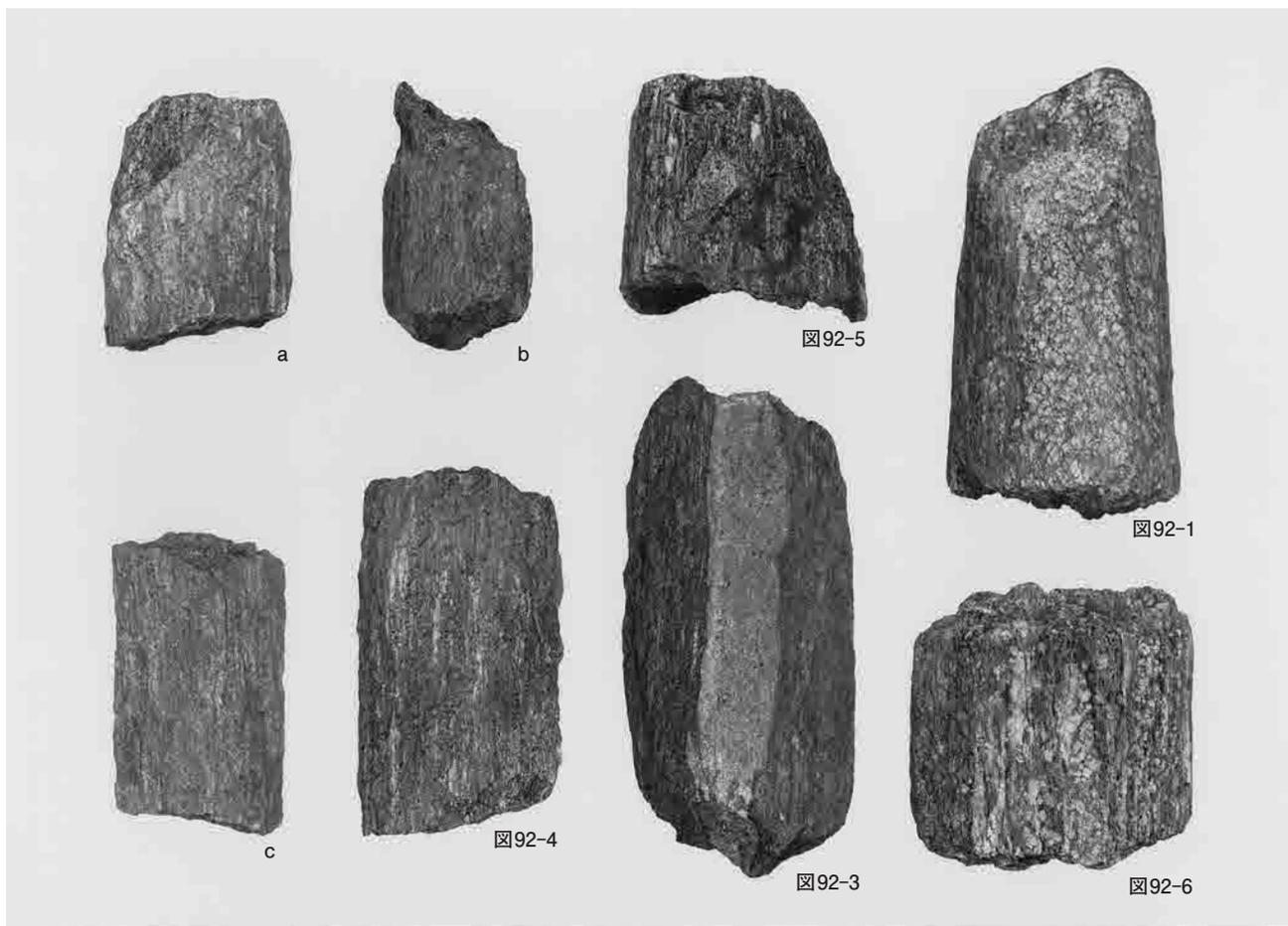
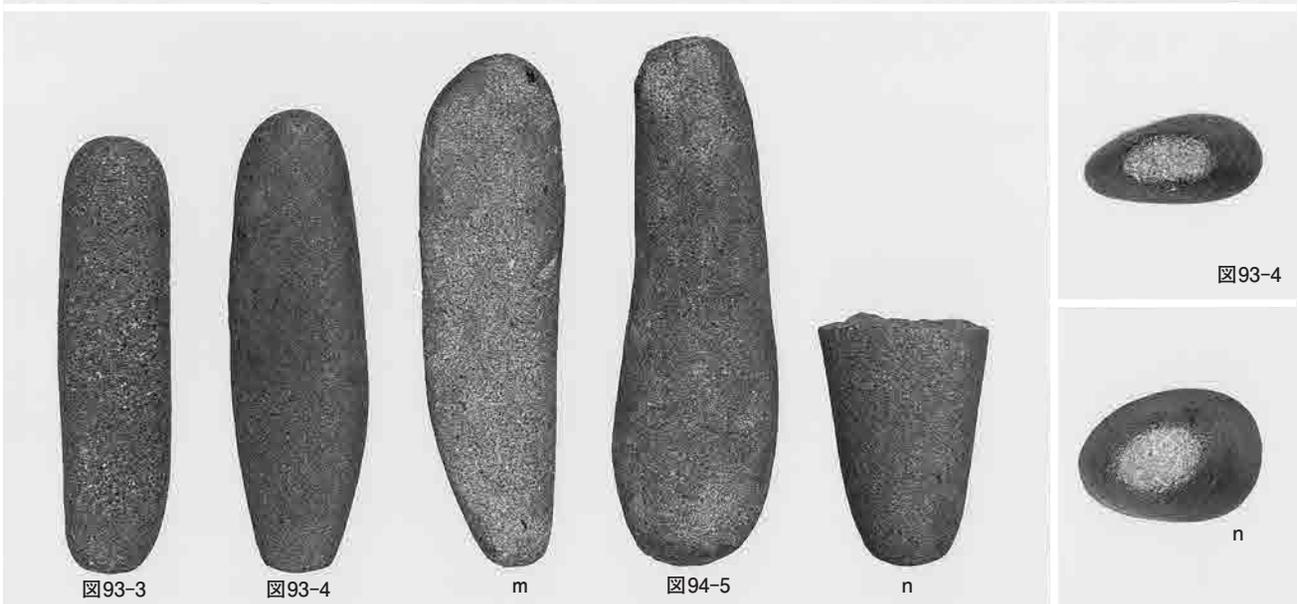
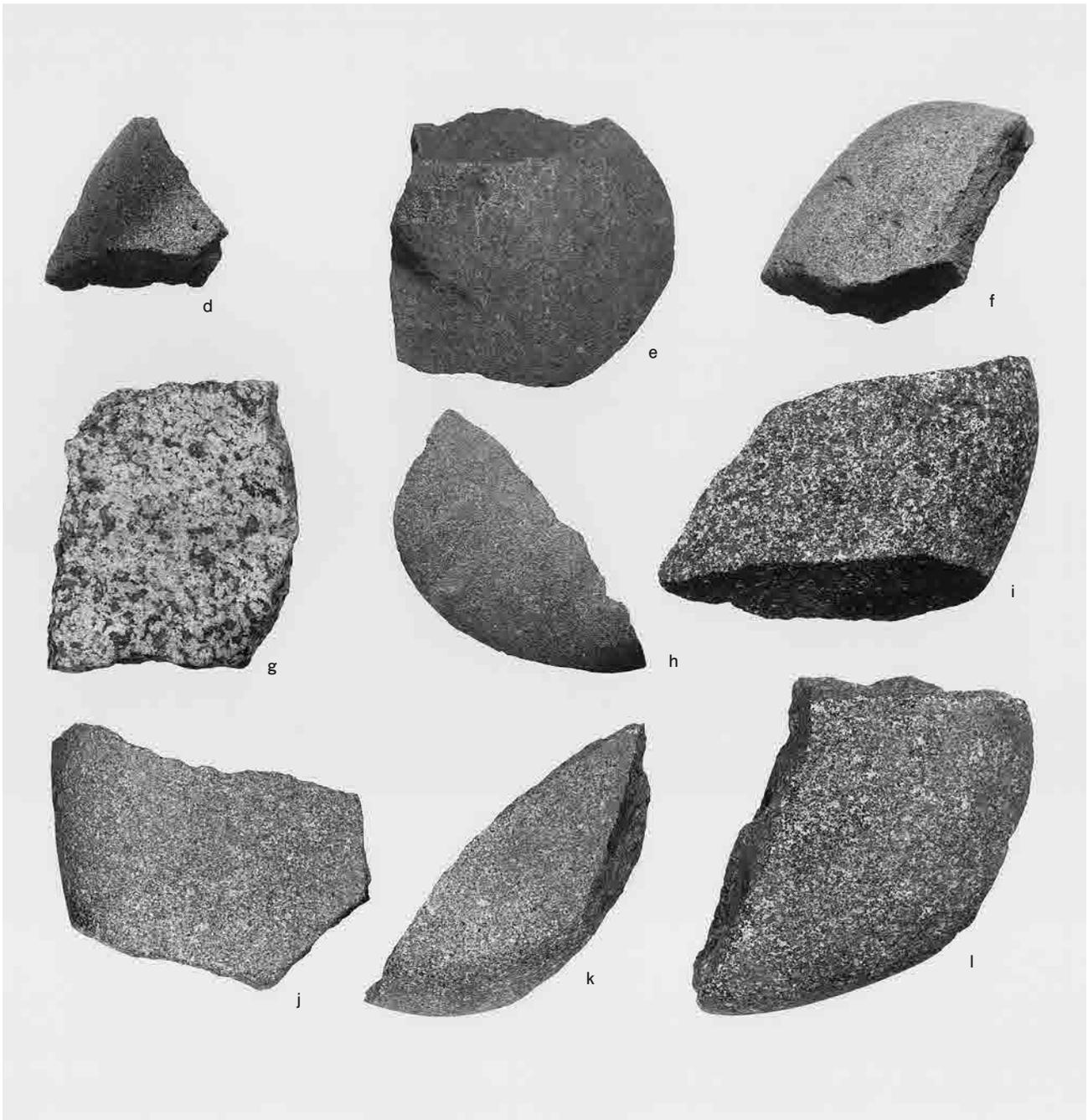


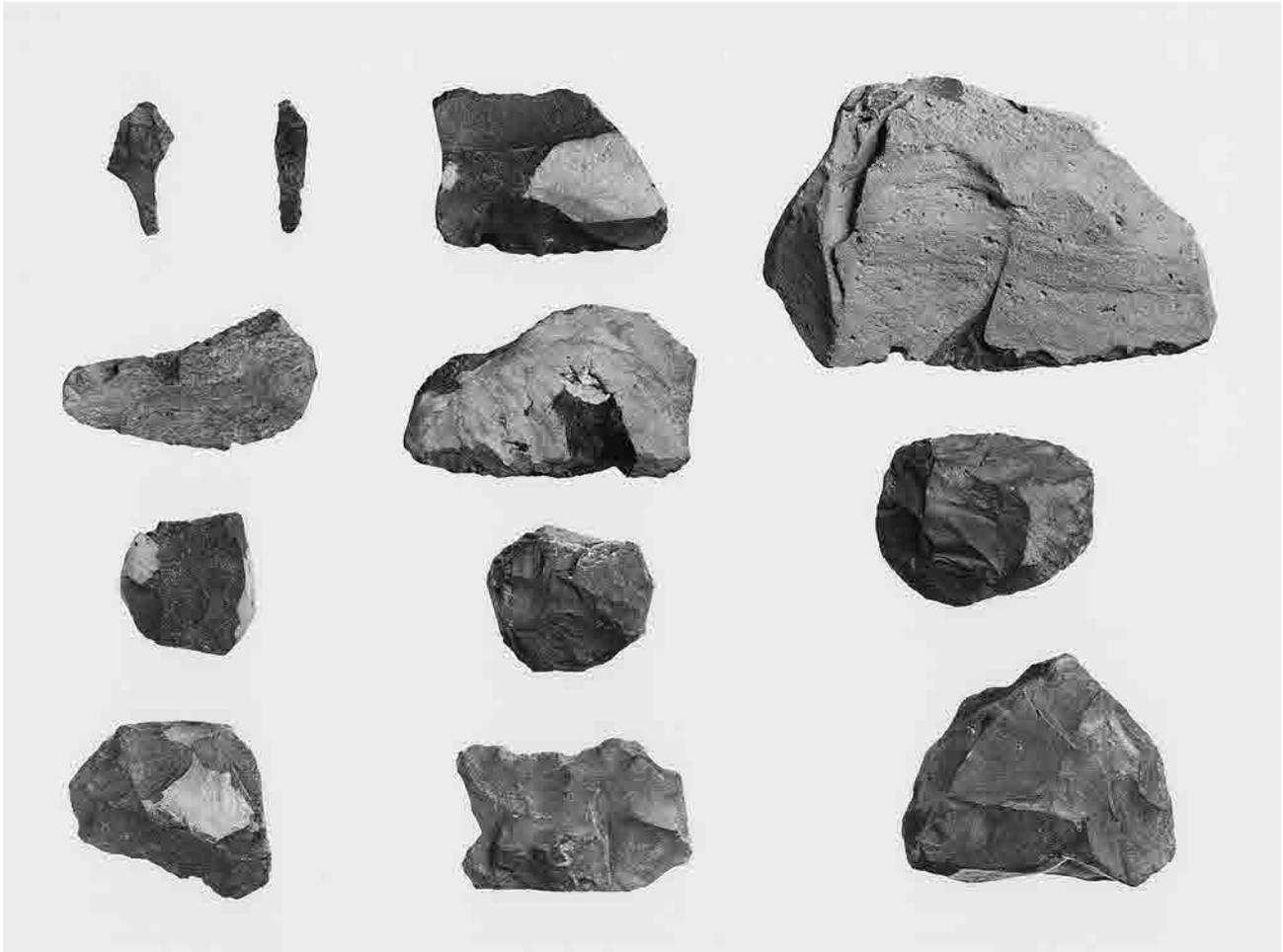
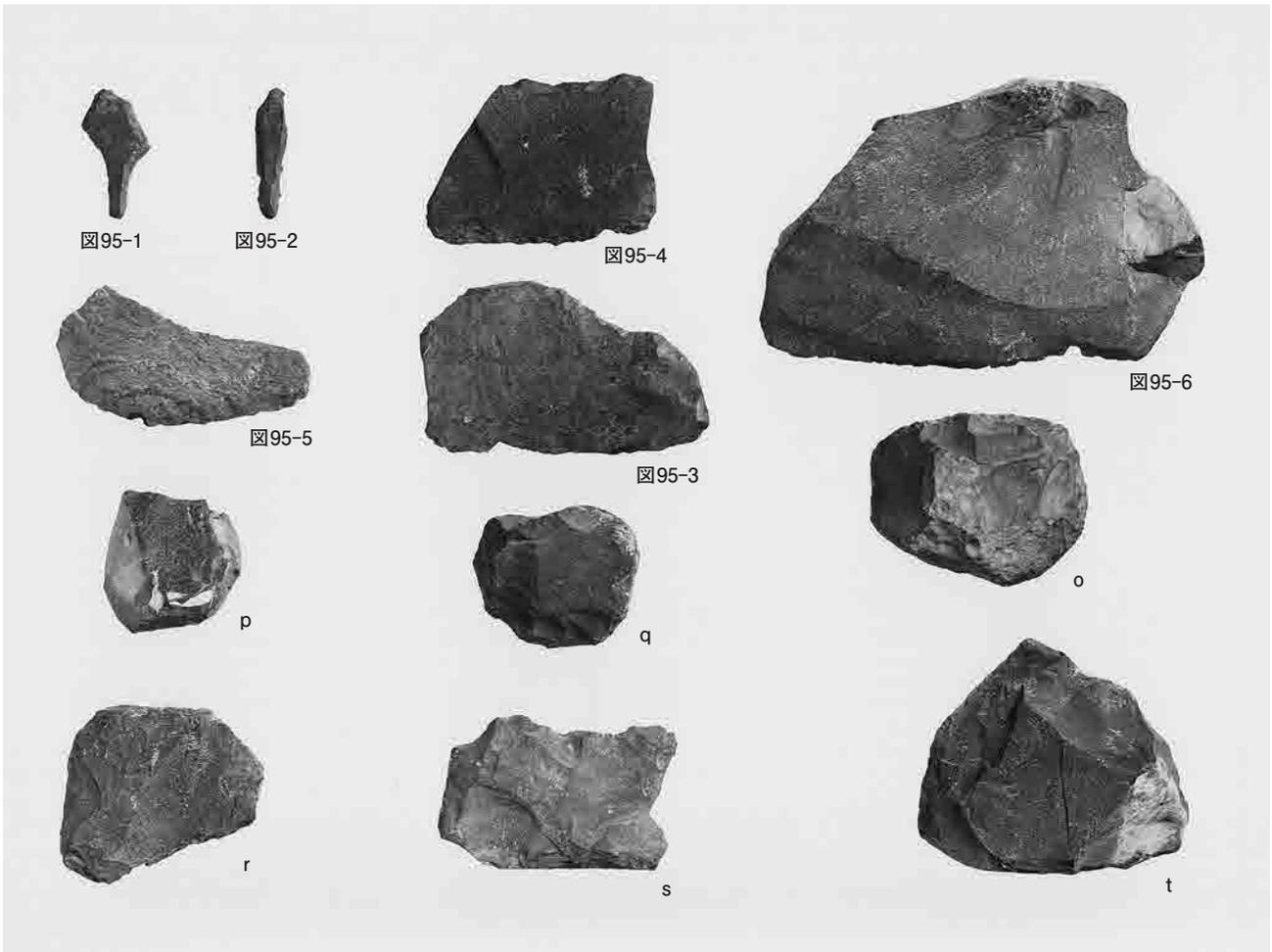
図91-5

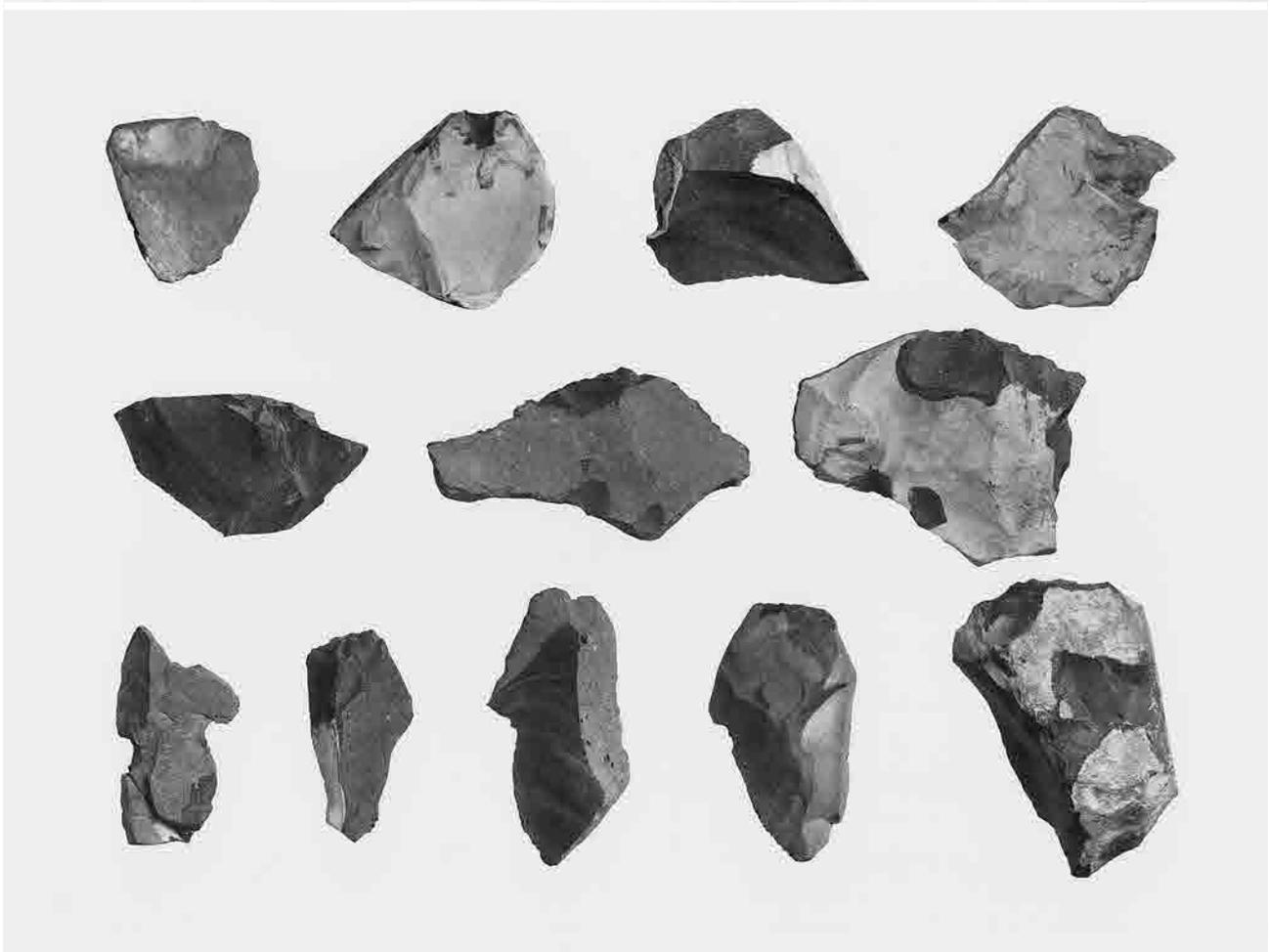
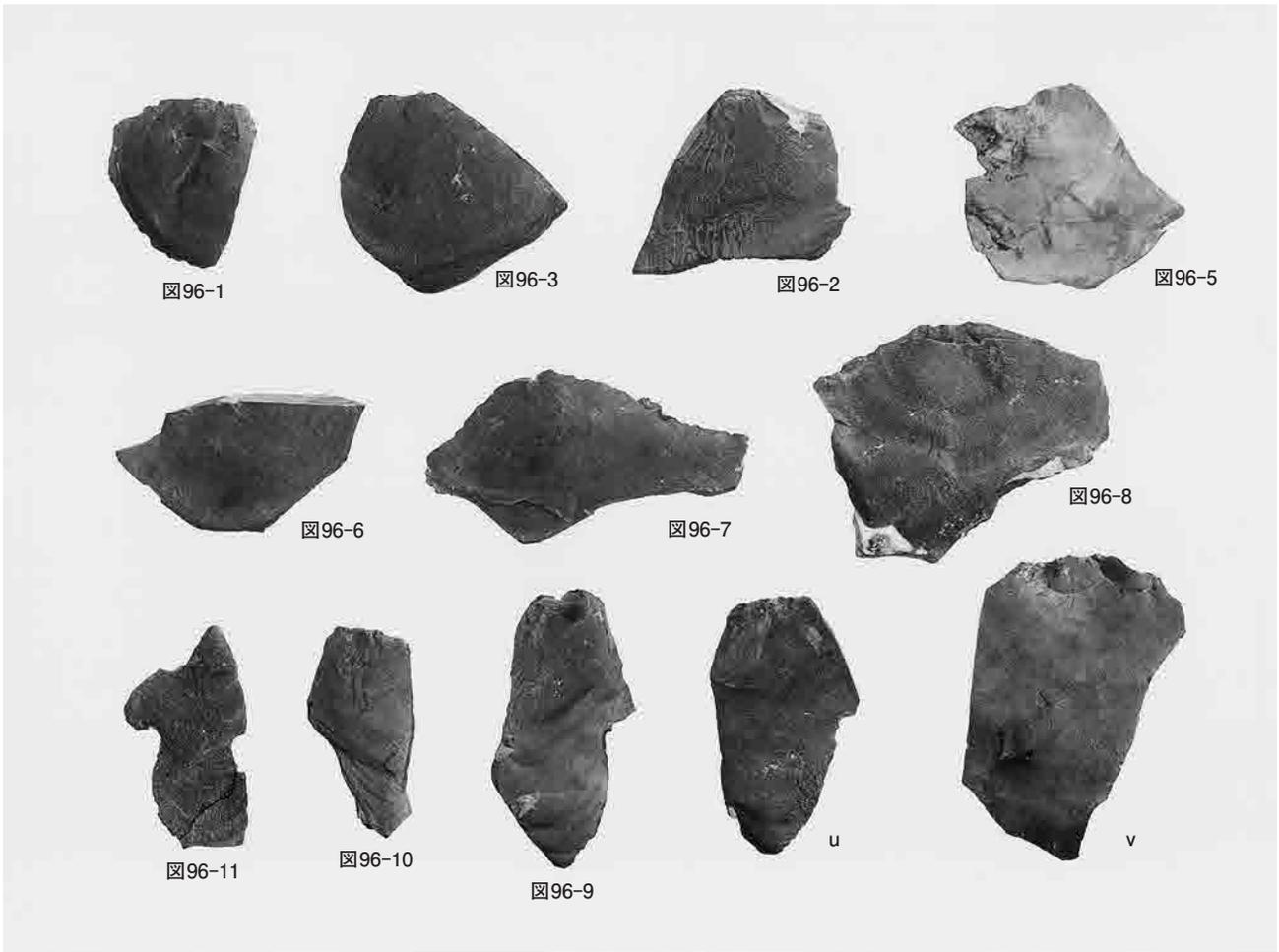


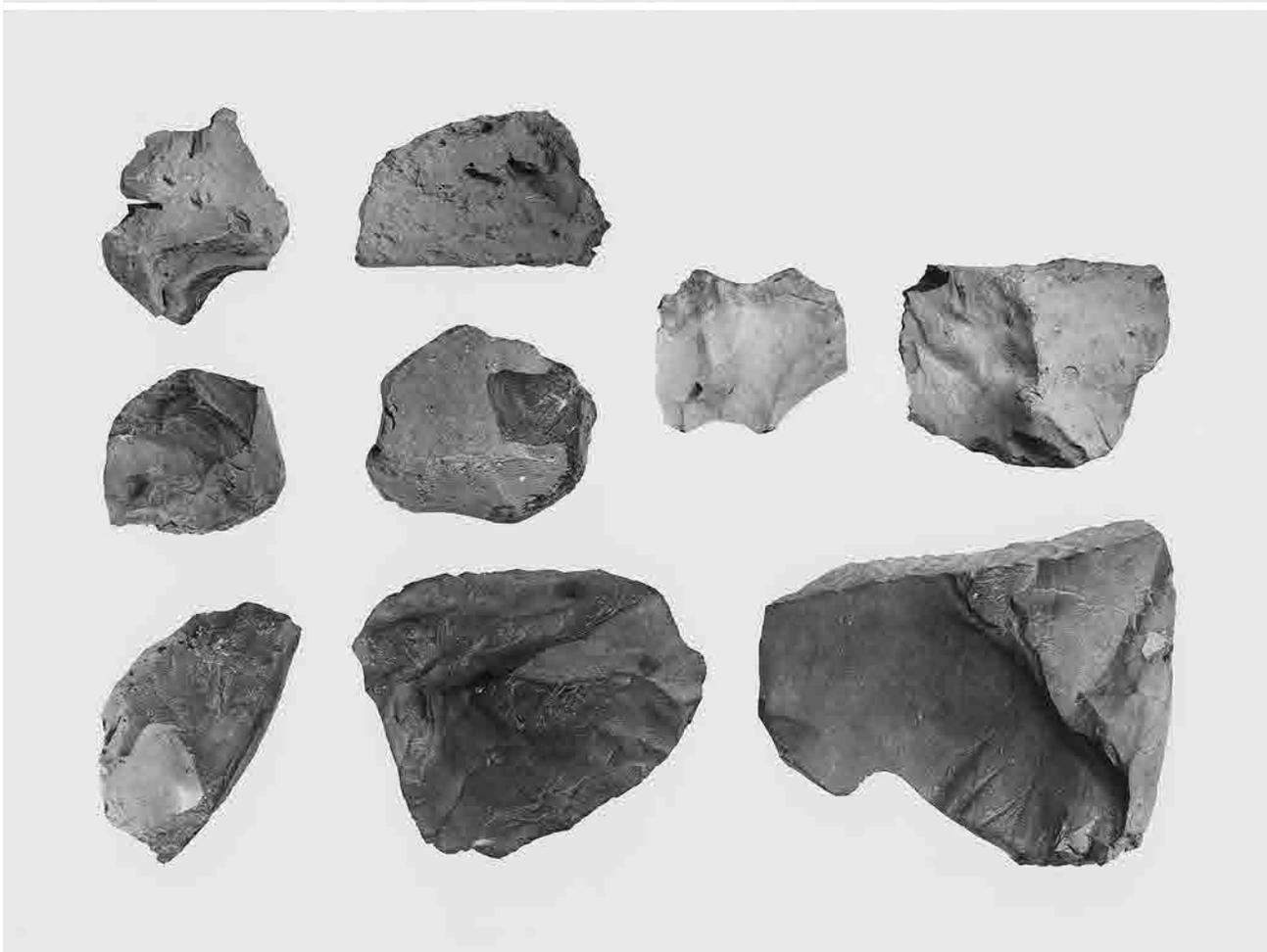
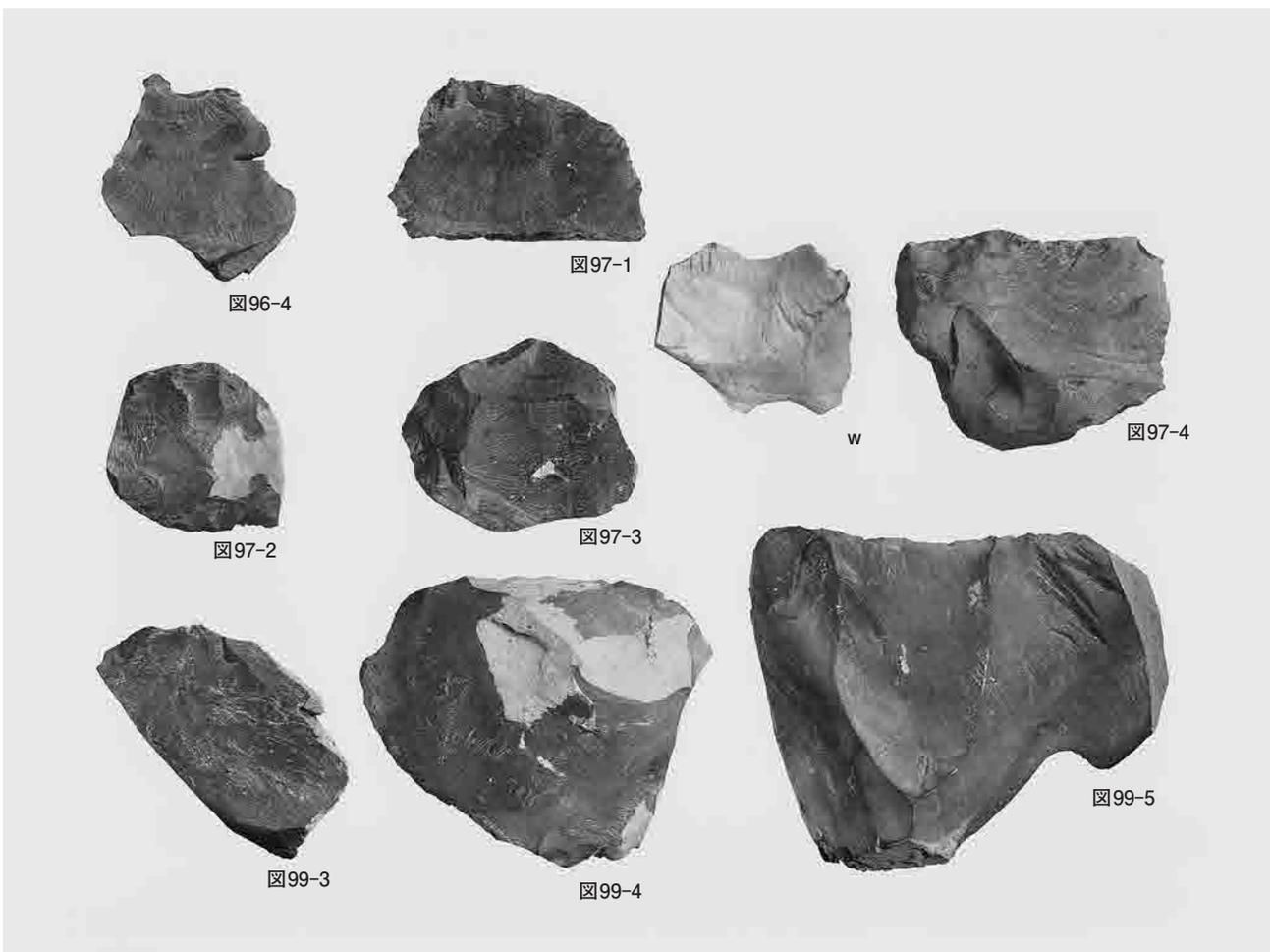
図91-4

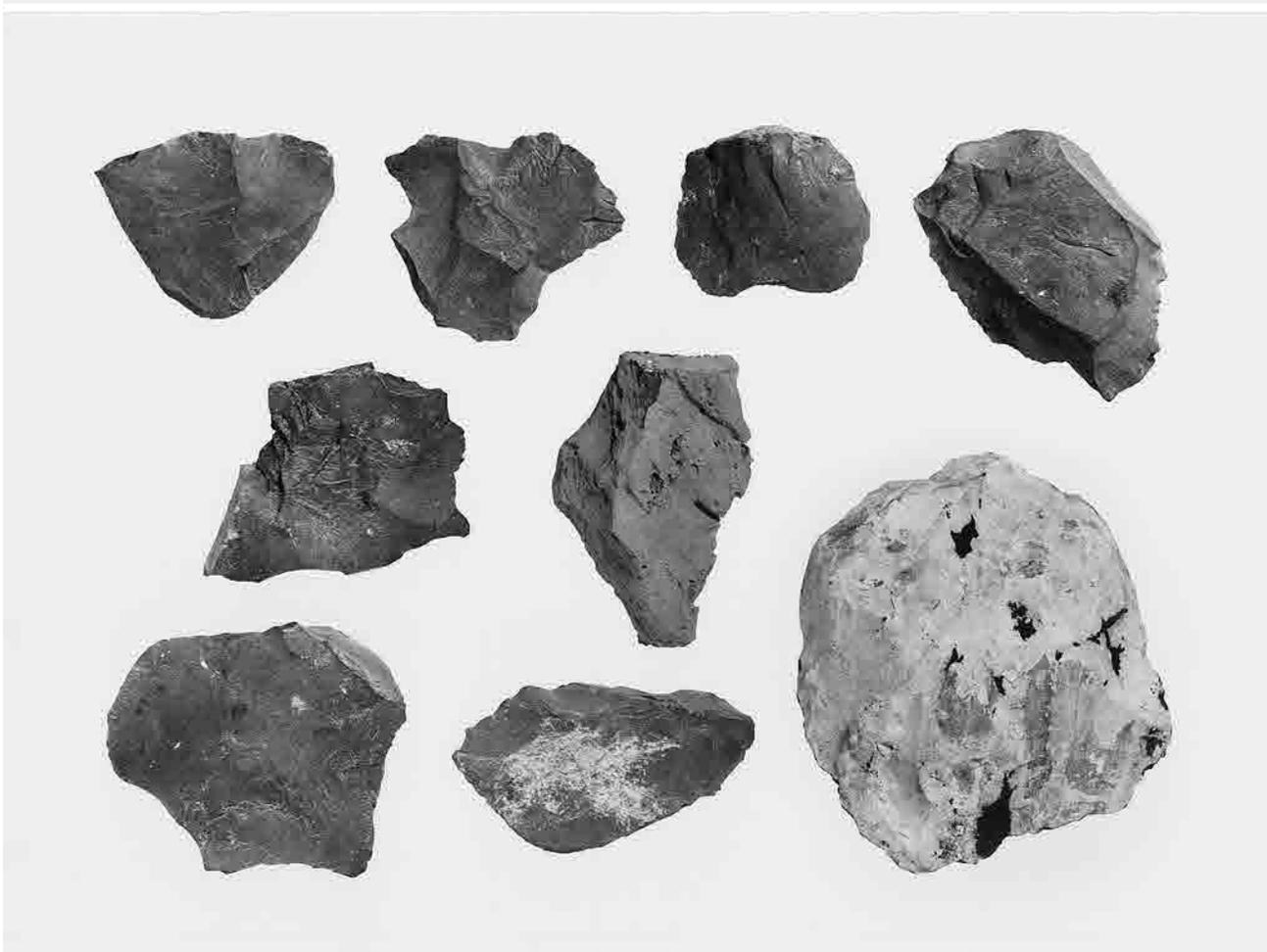
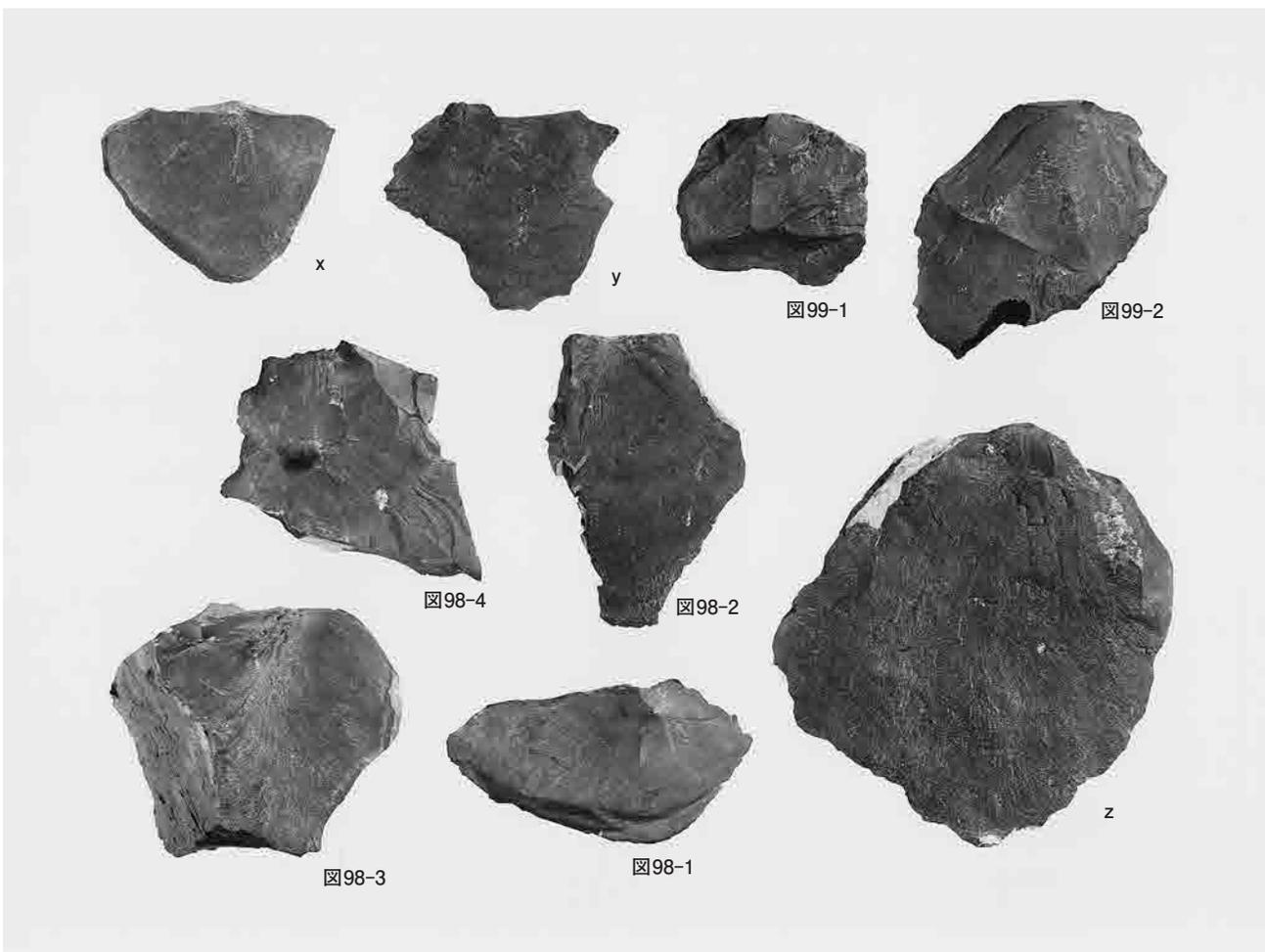












報告書抄録

ふりがな	ゆげのしょういせき ほか							
書名	弓削ノ庄遺跡他							
副書名	大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ名	第133集							
編著者名	田中龍男・島崎久恵・瀧口洋美・鬼頭 彰							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072-299-8791							
発行年月日	2005年8月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ゆげのしょういせき 弓削ノ庄遺跡	おおさか 大阪府 ひがしおおさか 東大阪市 かしだほんまち 柏田本町・	27227	164	34° 38' 43"	135° 34' 08"	2004.04.08	1877㎡	大阪外環状線 (東大阪市)連続 立体交差事業に 係わる弓削ノ庄 遺跡他発掘調査
かめだ いせき 亀田遺跡	かしだにし 柏田西3丁目 きずり 衣摺5・6丁目		165	34° 38' 23"	135° 34' 03"	2004.11.17		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な時代		主な遺物		特記事項
弓削ノ庄遺跡	集落	縄文時代晩期末～ 弥生時代前期		掘立柱建物、柱穴、 土坑、溝、土器棺		突帯文土器 弥生時代前期土器 石棒 サヌカイト剥片		浮線文土器の出土 土器棺墓
	墓	弥生時代中期後半		方形周溝墓 溝		弥生時代中期土器		
亀田遺跡	集落	弥生時代後期		柱穴、土坑、溝		弥生時代後期土器		『龍』の絵画土器
	生産	古墳時代前期		水田 溝		布留式土器		
要約	<p>亀田遺跡では弥生時代後期の集落を検出した。特に「龍」の絵画土器が出土しており、集落の性格を考える上でも注目できる。</p> <p>弓削ノ庄遺跡では縄文時代晩期末～弥生時代前期の集落を検出した。掘立柱建物やピット、土坑の他、「長原式」突帯文土器をもつ土器棺墓を検出した。集落から出土する土器は、生駒西麓産の胎土を有する「長原式」、「水走式」突帯文土器を主体とし、わずかに弥生時代前期の土器を含む。その他に、石棒、サヌカイト剥片等が出土している。</p> <p>また、弥生時代中期（IV様式）の方形周溝墓を1基検出した。</p> <p>今回の調査地周辺はこれまで、あまり調査がなされておらず、亀田、弓削ノ庄遺跡も新規に登録された遺跡である。今回の調査によって、周辺に更に遺跡が広がる可能性を指摘できた点でも、非常に重要な調査となった。</p>							

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第133集

弓削ノ庄遺跡他

大阪外環状線（東大阪市）連続立体交差事業に係わる
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2005年 8 月31日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464番地